OpenMX Ver. 3.9 ユーザーマニュアル



開発貢献者

尾崎泰助 (東京大学) 木野日織 (物質・材料研究機構) J. Yu (ソウル大学校) M.J. Han (KAIST) 大淵真理 (富士通研究所) 石井史之 (金沢大学) 澤田啓介 (金沢大学) 久保田雄士 (金沢大学) 水田耀ピエール (大阪大学) 小鷹浩毅 (京都大学) 山口直也 (金沢大学) 澤端日華瑠 (金沢大学) T.B. Prayitno (Univ. Negeri Jakarta) 大脇創(日産アーク) T.V.T Duy (アイシン精機) 宮田全展 (北陸先端科学技術大学院大学) G. Jiang (武漢科技大学) P.-H. Chang (George Mason Univ.)

寺澤麻子 (東京工業大学) 合田義弘 (東京工業大学) H. Weng (CAS) 椎原良典 (豊田工業大学) 豊田雅之 (東京工業大学) 奥野幸洋 (富士フイルム) R. Perez (UAM) P.P. Bell (UAM) M. Ellner (UAM) Yang Xiao (NUAA) 伊藤篤史 (核融合科学研究所) 大谷実 (産業技術総合研究所) 河村光晶 (東京大学) 吉見一慶 (東京大学) C.-C. Lee (Tamkang Univ.) Y.-T. Lee (Academia Sinica) 福田将大 (東京大学) S. Ryee (KAIST) 寺倉清之 (産業技術総合研究所)

December 9, 2022

Contents

1	OpenMX について 8				
2	関連文献 11				
3	 インストール 3.1 必須ライブラリ 3.2 シリアル版 3.3 MPI版 3.4 MPI/OpenMP 八イプリッド並列版 3.5 FFTW3 3.6 その他のオプション 3.6.1 -Dnosse 3.6.2 -Dkcomp 3.7 プラットフォーム 3.8 インストールの際のヒント 3.9 make に関するオプション 	 13 13 13 14 14 15 15 15 15 17 			
4	テスト計算	18			
5	自動実行のテスト	25			
6	大規模な系の自動実行テスト	28			
7	入力ファイル 7.1 例:メタン分子	30 30 31			
8	出力ファイル	46			
9	沉関数	49			
10	基底関数 10.1 概要	50 50 51 53 53 54			
11	擬ポテンシャル 11.1 従来型擬ポテンシャル	57 57 58 59			

12	カットオフエネルギー:数値積分のための計算グリッドの設定	60
	12.1 収束	60
	12.2 バルクのエネルギー曲線計算に関するヒント	61
	12.3 構造格子の相対位置の固定	61
13	SCF IV 中	63
10	13.1 概要	63
	13.1 協会 ···································	66
	13.3 SCF 版車パラメータの on-the-fly での調整	66
		00
14	再スタート	67
	14.1 概要	67
	14.2 MD および構造最適化中の外挿法	67
	14.3 再スタート計算用の入力ファイル	68
		0.0
15		69 69
		69 70
	15.2 LF、BFGS、KF、DHS 取週化 \dots	70
	15.3 RF 及び EF	71
	15.4 制約余件 100桶這最週化	72
	15.5 構造最週化の再入タート	73
16	セル可変構造最適化	74
	16.1 概要	74
	16.2 ストレステンソル	76
	16.3 格子ベクトルに対する拘束	76
	16.4 エンタルピーの最適化	77
17	分子動力学	79
	17.1 定エネルギーの分子動力学 (NVE)	79
	17.2 速度スケーリングによる NVT 分子動力学 (NVT_VS)	79
	17.3 Nose-Hoover 法による NVT 分子動力学 (NVT_NH)	80
	17.4 多重熱浴分子動力学 (NVT_VS)	82
	17.5 制約条件付き分子動力学	82
	17.6 初速度	82
	17.7 ユーザーによる原子の質量の定義	83
	17.8 ファイルフォーマットの変換: md2axsf	83
18	可視化	84
19	バンド分散	85
20	状態密度	88
20	201 通常の方法	88
	20.2 多数のk 占で計算する場合	90
		00

22 軌道の最適化

94

23	O(N)法 23.1 分割統治法 (DC法) 23.2 局在自然軌道による分割統治法 (DC-LNO) 23.3 O(N) Krylov 部分空間法 23.4 ユーザーによる FNAN+SNAN の定義	98 98 101 105 107
24	MPI 並列化 24.1 O(N) 計算 24.2 クラスター計算 24.3 バンド計算 24.4 完全な 3 次元並列化 24.5 使用可能な MPI プロセス数	 109 109 109 109 111 111
25	MPI/OpenMP ハイブリッド並列化	111
26	大規模計算 26.1 通常の固有値解法	112 112 112
27	電場	115
28	電荷ドーピング	116
29	分数核電荷を持つ仮想原子	117
30	LCAO 係数	118
31	分子軌道	119
32	電荷解析 32.1 Mulliken 電荷	121 121 122 122
33	自然電子密度解析	125
34	ノンコリニア DFT	127
35	相対論的効果 35.1 完全な相対論的扱い 35.2 スピン軌道相互作用のコントロール 35.3 半相対論的扱い	129 129 131 131

37	$\mathbf{DFT} + U$ 法	134
	37.1 標準設定	134
	37.1.1 DFT+U 法の選択: 単純化または一般化	134
	37.1.2 二重計算に対する補正項の選択	135
	37.1.3 軌道分極	138
	37.2 付加機能	139
	$37.2.1$ 二つのスレーター積分の比の調整 (F^4/F^2)	139
	$37.2.2$ 入力パラメタ U からの J と F^4/F^2 の見積もり \ldots	139
38	ノンコリニアスピン方位に対する制約条件付き DFT	141
39	第二変分法: 磁気異方エネルギー (Magnetic Anisotropy Energy: MAE)	143
40	Zeeman 項	146
	40.1 スピン磁気モーメントに対する Zeeman 項	146
	40.2 軌道磁気モーメントに対する Zeeman 項	146
41	Berry 位相による巨視的分極の計算	148
42	交換結合パラメータ	151
	42.1 概要	151
	42.2 Jx の計算	152
	42.3 OpenMX 計算による SCF 計算	152
	42.4 Jx の設定ファイルの準備	153
	42.5 Jx の実行と MPI 並列計算	154
	42.6 実例	155
43	電気伝導計算	159
	43.1 概要	159
	43.2 ステップ1:電極部分の計算	161
	43.3 ステップ 2:NEGF 計算	162
	43.4 ステップ 3: 透過率、電流 (密度) と固有チャネル	167
	43.4.1 透過率、電流、コンダクタンス	167
	43.4.2 実空間における電流/スピン流密度	170
	43.4.3 固有チャネル 解析	172
	43.5 ステップ3のみを再計算する方法	175
	43.6 ゼロバイアス下における周期系	177
	43.7 バイアス電圧効果の補間法	177
	43.8 NEGF の並列化	178
	43.9 ノンコリニア DFT 法に対する NEGF 法	178
	43.10実例	179
	43.11NEGF の自動実行テスト	180

44	最局在ワニエ関数	182
	44.1 生成方法	182
	44.2 解析	187
	44.3 スプレッド関数の最適化過程の確認	188
	44.4 MLWF の作成例	191
	44.5 出力ファイル	192
	44.6 MLWF の自動実行テスト	195
45	Wannier90 とのインターフェース	196
46	対角化のための数値的に厳密な低次スケーリング法	198
47	有効遮蔽媒質法(ESM 法)	200
	47.1 概要	200
	47.2 テスト計算例	202
48	仕事関数の計算	204
49	NEB (Nudged elastic band)法	207
	49.1 概要	207
	49.2 実行方法	207
	49.3 計算例と関連キーワード	208
	49.4 NEB 計算の再スタート	212
	49.5 ユーザー定義の初期経路	212
	49.6 NEB 計算における SCF の確認	213
	49.7 並列計算	213
	49.8 その他の注意	214
50	Tersoff-Hamann 法による STM イメージ	215
51	vdW 相互作用のための DFT-D2, DFT-D3 法	216
	51.1 DFT-D2 法	216
	51.2 DFT-D3 法	217
52	バンドアンフォールディング法	219
	52.1 バンド構造の解析	219
	52.2 バンド構造のアンフォールディング	223
	52.3 参照セルの原点	227
	52.4 アンフォールディングされたスペクトル重みの強度マップ	228
	52.5 ノンコリニア DFT 計算の場合	229
	52.6 入力ファイルの例	229
53	k 空間でのスピンテクスチャの解析	231
	53.1 概要	231
	53.2 FermiLoop: 一定エネルギー面での計算	233

53.3 GridCalc: k 点格子での計算	239
53.4 BandDispersion: バンド分散関係の計算	245
53.5 MulPOnly: 利用者指定の k 点での計算	251
53.6 MulPCalc: 原子ごとに分割された k 空間スピン密度行列	255
53.7 kSpin の MPI 並列計算	259
54 スピン螺旋計算	262
55 Fukui-Hatsugai-Suzukiの方法によるチャーン数とベリー曲率の計算	264
55.1 概要	264
55.2 実例	264
56 Fukui-Hatsugai の方法による Z。 不恋量の計算	268
	268
56.2 宝例	269
56.3 入力ファイル	273
57 内殻電子の絶対束縛エネルギー:XPS の内殻準位のエネルギー	274
57.1 概要	274
57.2 気体系	275
57.3 固体系	278
57.4 入力ファイルの例	281
58 孤立系のイオン化ポテンシャルと電子親和力	283
59 光伝導度と誘電関数	285
59.1 概要	285
59.2 Si の場合	285
59.3 関連するキーワード	286
59.4 ベンチマーク計算	289
59.5 コード	291
59.6 実例	292
59.7 自動動作テスト	292
60 BoltzTraP とのインターフェース	29 4
61 "格子定数 vs. エネルギー"曲線の計算	298
61.1 "格子定数 vs. エネルギー"曲線	298
61.2 デルタ因子	299
62 フェルミ西	200
04 / エアー 臣	500
63 2 つの Gaussian Cube ファイルの差の解析	301
64.2 つの幾何構造の差の解析	302

65	相互作用によって引き起こされる電荷密度の差の解析	304
66	セルサイズの自動決定	306
67	開発者のためのインターフェース	307
68	自動フォース・テスター	309
69	自動メモリーリーク・テスター	311
70	メモリ使用量の解析	313
71	大規模ファイルのバイナリ形式での出力	314
72	Gaussian cube 形式から周期的 XSF 形式への変換	315
73	入力ファイルの例	316
74	知られている問題点	318
75	OpenMX フォーラム	319
76	OpenMX に関するその他の情報源	320
77	他ツールへのリンク	321
78	その他	324

1 OpenMX について

OpenMX (Open source package for Material eXplorer)は密度汎関数理論(DFT)[1]、ノルム保存型擬 ポテンシャル [32, 33, 34, 35, 36] および擬原子基底関数 [41] に基づき、原子レベルから物質の第一原理シ ミュレーションを実行するためのソフトウェア・パッケージです。OpenMX で用いられている計算手法、ア ルゴリズム、またそのプログラム上での実装は並列コンピュータ上での MPI 並列や OpenMP/MPI ハイ ブリッド並列による大規模第一原理電子状態計算を実現するために、入念に設計されています。OpenMX において実現された DFT の効率的な実装により、固体、表面、界面、液体、そして低次元物質などの 幅広い物質の電子構造、磁気構造、また幾何構造を第一原理的に計算することが可能です。数百コアを 有する並列コンピュータを使用することにより、1000個の原子で構成される系を通常の対角化手法を用 いて扱うことができます。さらに数千 CPU のコアを有する並列コンピュータを使用すれば、一万個以 上の原子から構成される系の第一原理による電子状態計算さえも、OpenMX に実装されている O(N)法 を用いて実行可能です。多くの元素に対して最適化された擬ポテンシャルおよび基底関数がデータベー スとして整備されており、またその精度はベンチマーク計算によって検証されています。そのためユー ザは自分でこれらのデータを準備する必要がなく、速やかに各自のシミュレーションを開始することが できます。OpenMX には磁気特性、誘電特性、電気伝導特性、反応エネルギー障壁などの様々な物理 的・化学的特性を計算するための機能が実装されており、量子力学の第一原理からナノスケールの物質 群を深く理解するための強力なツールとして、幅広い活用が期待されます。これまでの応用計算の事例 は OpenMX の Web サイト (http://www.openmx.-square.org/) に記載されていますので、参考にして 下さい。OpenMX の開発は、2000 年に尾崎グループにより開始され、その後、本マニュアルの冒頭の リストに挙げられている数多くの開発者が本オープンソースパッケージの開発に貢献してきました。プ ログラム・パッケージとソースコードは GNU General Public License version 3 (GPLv3) [102] に準じ て配布されており、OpenMX の Web サイトからダウンロードすることができます。

OpenMX Ver. 3.9 の特徴と機能は以下のようになります。

- クラスタ計算法、バンド計算法、O(N)法、低次スケーリング法による全エネルギーと力の計算
- 交換相関エネルギーに対する局所密度近似(LDA, LSDA)[2, 3, 4] および一般化勾配近似(GGA)
 [5]
- DFT+*U* 法 [20]
- ノルム保存型擬ポテンシャル [2, 33, 34, 36]
- 変分的に最適化された擬原子基底関数 [41]
- 擬ポテンシャル法の枠組みでの完全および半相対論的取り扱い [12, 32, 16]
- ノンコリニア DFT 法 [8, 9, 10, 11]
- ノンコリニア DFT 法におけるスピン磁気モーメントおよび軌道磁気モーメントの方位制御 [13]
- Berry 位相法による巨視的分極率の計算 [15]
- O(N) 分割統治法 (DC法) [50]
- 局在化自然軌道による O(N) 分割統治法 (DC-LNO 法) [51]

- O(N)Krylov 部分空間法
- ELPA [39] による並列固有値ソルバ
- 単純混合法、RMM-DIIS 法 [58]、GR-Pulay 法 [57], Kerker 法 [59]、Kerker 因子による重み付き RMM-DIIS 法 [58] による電荷密度の混合、ハミルトニアン行列に対する RMM-DIIS 法による電 荷密度の混合 [58]
- 交換結合パラメータ [17, 18] の計算
- 有効遮蔽媒質法 (ESM) [125, 128]
- 走査型トンネル顕微鏡(STM)シミュレーション [71]
- DFT-D2、DFT-D3 法による Van der Waals 相互作用 [135, 136, 137]
- バンドアンフォールディング法 [142]
- Nudged Elastic Band 法(NEB法)[72]
- 固体中の内殻軌道の絶対束縛エネルギーの計算[88]
- 光伝導率と誘電関数 [98]
- 電荷ドーピング
- のこぎり波による均一電界の導入
- 完全および制限付き構造最適化
- 非平衡グリーン関数(NEGF)法による電気伝導計算[73]
- 最大局所化ワニエ関数の計算
- NVE アンサンブル分子動力学
- 速度スケーリング法 [30] および Nose-Hoover 法 [31] による NVT アンサンブル分子動力学
- マリケン (Mulliken) 法、ボロノイ (Voronoi) 法、ESP 法による電荷・スピン数の解析
- 自然軌道解析 [7]
- 波動関数および電子・スピン密度分布の解析
- バンド計算によるバンド分散の解析
- 状態密度(DOS)および射影 DOS の計算
- 柔軟なデータ書式 (flexible data format) による入力ファイル
- BoltzTrap へのインタフェース [100, 101]
- Wannier90 へのインタフェース [145]

- 電荷密度などを可視化するための XCrySDen へのインタフェース [105]
- 完全な動的メモリ割当て
- メッセージ・パッシング・インタフェース (MPI) による並列計算
- OpenMP による並列計算
- 開発者向けの利便性の高いユーザーインタフェース

コリニア DFT 法ではスカラー相対論的擬ポテンシャルが、またノンコリニア DFT 法では完全相対 論的擬ポテンシャルが利用可能です。またスピンおよび軌道磁気モーメントを制御するために制限ノン コリニア DFT 法が実装されています。これらの手法は複雑なノンコリニア磁気構造やスピン軌道相互作 用を調べるのに役に立ちます。通常の対角化による計算は、数千コアまでの並列化が実現できる ELPA に基づく並列固有値ソルバ [39] 及び ScaLAPACK によって行われます。この機能により、通常の対角化 法を用いて 1000 個の原子からなる系の計算が可能になります。この高並列化対角化手法によってクラス タ、分子、スラブおよび固体に対する大規模計算が可能ですが、線形スケーリング法および低次スケー リング法も固有値ソルバとして利用可能です。これらの低次スケーリング法に対しては計算精度と計算 効率に対して注意深い検討を行うことで、1 万原子を越える系をも取り扱うことが可能です。結晶格子 可変の構造最適化やバンドアンフォールディング法も有用な機能です。また OpenMX Ver. 3.9 の重要 な新機能として、分割統治法と局在自然軌道に基づく新しい O(N) 法と X 線光電子分光法 (XPS) で観 測される内殻電子束縛エネルギーの絶対値計算が挙げられます。OpenMX の開発は継続して行われてい ます。本オープンソースコードの発展に寄与して頂ける開発者の方のご参加を歓迎致します。

2 関連文献

OpenMX は GNU General Public License version 3 (GPLv3) [102] の条件のもとで配布されています。 今後の更なる OpenMX の発展のために、OpenMX を用いて論文を執筆する際には、用いた機能に応じ て以下の文献を引用して頂けますと幸いです。

• OpenMX 全般

T. Ozaki, Phys. Rev. B. 67, 155108, (2003); T. Ozaki and H. Kino, Phys. Rev. B 69, 195113 (2004); T. Ozaki and H. Kino, Phys. Rev. B 72, 045121 (2005); K. Lejaeghere et al., Science 351, aad3000 (2016).

• 大規模並列計算

T.V.T. Duy and T. Ozaki, Comput. Phys. Commun. **185**, 777 (2014); T.V.T. Duy and T. Ozaki, Comput. Phys. Commun. **185**, 153 (2014).

• O(N) 分割統治 局在自然軌道法

T. Ozaki, M. Fukuda, G. Jiang, Phys. Rev. B 98, 245137 (2018).

• O(N) Krylov 部分空間法

T. Ozaki, Phys. Rev. B **74**, 245101 (2006).

• 数値的に厳密な低次元スケーリング法

T. Ozaki, Phys. Rev. B 82, 075131 (2010).

• DFT+*U* 法

M.J. Han, T. Ozaki, and J. Yu, Phys. Rev. B **74**, 045110 (2006); S. Ryee and M.J. Han, J. Phys:Condens. Matter **30**, 275802 (2018). S. Ryee and M.J. Han, Scientific Reports **8**, 9559 (2018).

• 交換結合パラメータ

M.J. Han, T. Ozaki, and J. Yu, Phys. Rev. B **70**, 184421 (2004); A Terasawa, M Matsumoto, T Ozaki, and Y Gohda, J. Phys. Soc. Jpn. **88**, 114706 (2019).

非平衡グリーン関数(NEGF)法

T. Ozaki, K. Nishio, and H. Kino, Phys. Rev. **81**, 035116 (2010); T. Ozaki, Phys. Rev. B **75**, 035123 (2007).

• 有効遮蔽媒質 (ESM) 法

T. Ohwaki, M. Otani, T. Ikeshoji, and T. Ozaki, J. Chem. Phys. 136, 134101 (2012).

ワニエ関数の生成

H. Weng, T. Ozaki, and K. Terakura, Phys. Rev. B 79, 235118 (2009).

自然原子軌道の生成

T. Ohwaki, M. Otani, and T. Ozaki, J. Chem. Phys. 140, 244105 (2014).

バンドアンフォールディング法

C.-C. Lee, Y. Yamada-Takamura, and T. Ozaki, J. Phys.: Condens. Matter 25, 345501 (2013).

XPS 束縛エネルギー

T. Ozaki and C.-C. Lee, Phys. Rev. Lett. 118, 026401 (2017).

• BoltzTraP 計算

M. Miyata, T. Ozaki, T. Takeuchi, S. Nishino, M. Inukai, and M. Koyano, Journal of Electronic Materials 47, 3254 (2017).

フェルミ面

M. Kawamura, Comp. Phys. Comm. 239, 197 (2019).

• K 空間のスピンテクスチャ解析

H. Kotaka, F. Ishii, and M. Saito, Jpn. J. Appl. Phys. 52, 035204 (2013).; N. Yamaguchi and F. Ishii, Appl. Phys. Express 10, 123003 (2017).

スピンスパイラル計算

T.B. Prayitno and F. Ishii, J. Phys. Soc. Jpn. 87, 114709 (2018); T.B. Prayitno and F. Ishii, J. Phys. Soc. Jpn. 88, 054701 (2019).

• Z₂, チャーン数とベリー曲率

H. Sawahata, N. Yamaguchi, H. Kotaka, and F. Ishii, Jpn. J. Appl. Phys. 57, 030309 (2018).

• OpenMX Viewer

Y.-T Lee and T. Ozaki, Journal of Molecular Graphics and Modelling 89, 192 (2019).

3 インストール

3.1 必須ライブラリ

OpenMX は、以下の3つのライブラリがインストール済みの Linux 環境にインストールすることができます。

- ScaLAPACK (および BLACS) (http://www.netlib.org/)
- FFTW (http://www.fftw.org/)
- MPICH2 や OpenMPI などの MPI ライブラリ

これらのライブラリ・パッケージが対象コンピュータにインストールされていない場合、OpenMX をイ ンストールする前にこれらをインストールする必要があります。MPICH2 や OpenMPI などの MPI ラ イブラリは、OpenMX Ver. 3.9 のインストールに必須です。MPI ライブラリが利用可能できない場合、 OpenMX Ver. 3.9 をインストールする次のステップに進むことはできません。OpenMX Ver. 3.9 は ScaLAPACK と BLACS を必要とし、LAPACK と BLAS とによる OpenMX Ver. 3.9 のコンパイルは サポートされません。代替策として、Intel Math Kernel Library (MKL) が ScaLAPACK と BLACS の 代わりに利用できます。上記のライブラリ・パッケージがインストール済みの場合は、次のインストー ル手順に進んで下さい。openmx3.9.tar.gz をダウンロード後、以下のコマンドで解凍します。

% tar zxvf openmx3.9.tar.gz

解凍すると、「openmx3.9」ディレクトリの下に「source」、「work」、「DFT_DATA19」の3つのディレクトリが作成されます。これらのディレクトリにはそれぞれソースコード、入力ファイル、Ver. 2019の 擬原子基底関数および擬ポテンシャルのデータファイルが含まれます。

3.2 シリアル版

OpenMX Ver. 3.9 ではシリアル版のインストールはサポートされていません。

3.3 MPI版

MPI版の OpenMX をインストールするには、「source」ディレクトリに移動し、「makefile」を編集し、 CC、FC、LIB を設定することでコンパイラおよびライブラリを指定します。「makefile」のデフォル トの CC、FC、LIB 設定は以下の通りです。

```
MKLROOT = /opt/intel/mkl
CC = mpicc -03 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp -I/opt/intel/mkl/include/fftw
FC = mpif90 -03 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp
LIB= -L${MKLROOT}/lib/intel64 -lmkl_scalapack_lp64 -lmkl_intel_lp64 \
        -lmkl_intel_thread -lmkl_core -lmkl_blacs_open mpi_lp64 \
        -lmpi_usempif08 -lmpi_usempi_ignore_tkr \
        -lmpi_mpifh -liomp5 -lpthread -lm -ldl
```

CCとFCは、それぞれCとFORTRANのコンパイラを指定し、LIBはリンクするライブラリを指定 します。Ver. 3.6まではFCの指定は不要でしたが、ELPAに基づく並列固有値ソルバ [39]の導入に伴 い、Ver. 3.9ではこれが必要となります。OpenMPが利用不可の環境では「-Dnoomp」オプションを 指定して下さい。コンパイルとリンクが正しく行われ、十分に最適化された実行ファイルを作成するに は、実行環境に適したCC、FC、LIBの設定を行うことが必要です。これらのオプションの設定後、以 下のコマンドよりインストールを実行します。

% make install

コンパイルが正常に完了すると、「openmx」という実行ファイルが「work」ディレクトリの下に作成されます。OpenMXの実行効率を上げるために、必要に応じて実行環境に合わせてコンパイラやコンパイラオプションを変更することで、最適化された実行ファイルを生成することができます。「source」ディレクトリの「makefile」ファイル内には、CC、FC、LIBの設定例がいくつか用意されていますので参考にして下さい。

3.4 MPI/OpenMP ハイブリッド並列版

MPI/OpenMP ハイブリッド版を生成する場合には、「source」ディレクトリの「makefile」ファイル内の CC および FC に、OpenMP 並列化のコンパイラオプションを追加するだけです。MPI/OpenMP バー ジョンをインストールするには、「source」ディレクトリに移動し、「makefile」内の CC、FC、LIB を 以下の例のように指定します。

icc の場合

CC = mpicc -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp -I/opt/intel/mkl/include/fftw FC = mpif90 -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp

OpenMP のコンパイラオプションはコンパイラに依存します。特に Intel コンパイラ用の'-qopenmp' に 対応するオプションに注意してください。CC、FC、LIB を適切に指定した後、下記のコマンドでイン ストールを実行します。

% make install

コンパイルが正常に完了すると、「work」ディレクトリに「openmx」実行ファイルが生成されます。 OpenMXの実行効率を上げるために、必要に応じて実行環境に合わせてコンパイラやコンパイラオプ ションを変更することで、最適化された実行ファイルを生成することができます。

3.5 FFTW3

Ver. 3.6 までの旧バージョンは FFTW2 と FFTW3 の両方に対応していましたが、OpenMX Ver. 3.9 では FFTW3 のみが使用可能です。makefile 中で以下のように指定することで FFTW3 とリンクするこ とができます。

LIB = -lftw3

多くの利用者に対しては Intel MKL に含まれている FFTW3 の利用が推奨されます。

3.6 その他のオプション

3.6.1 -Dnosse

O(N) クリロフ (Krylov) 部分空間法のルーチン(Krylov.c) は、ストリーミング SIMD 拡張命令(SSE) を利用して最適化されています。デフォルトでは SSE を活用できるようソースコードがコンパイルされ ます。お使いのプロセッサが SSE に対応していない場合、-Dnosse オプションを CC に含めて下さい。

3.6.2 -Dkcomp

富士通 (株) の SPARC プロセッサをご利用の場合は、CC および FC コンパイラオプションに-Dkcomp を含めて下さい。

3.7 プラットフォーム

OpenMX Ver. 3.9 は、これまで以下のプラットフォームで正常に作動することが確認されています。

- Intel Xeon 搭載クラスタ
- AMD EPYC 搭載クラスタ
- CRAY-XC40
- 富士通 FX100

3.8 インストールの際のヒント

OpenMX のインストールにおける問題のほとんどは、ScaLAPACK、BLACS およびこれらの代替ライ ブラリへのリンク時のエラーが原因となっています。多くの場合において MKL をリンクすることをお 勧めします。これらのライブラリとリンクする例は「source」ディレクトリの「makefile」内に記載され ています。

いくつかのポピュラーなプラットフォーム上でのインストールに関するヒントを以下に記します。 OpenMXは、CとFORTRANのコンパイラ、およびScaLAPACK、BLACS、FFTW3ライブラリを必要 とします。更に、Cコンパイラはリンク時に使用されるため、ご使用のコンパイラに対応するFORTRANラ イブラリを明示的に指定しなければなりません。下記に一般的なコンパイラおよびScaLAPACK、BLACS ライブラリにおけるインストール設定例を記載します。ここで、FFT ライブラリは/usr/local/fftw3/に インストールされていると仮定しています。

 IntelのCおよびFORTRANコンパイラ(icc、ifort)、ScaLAPACKとBLACSにはMKLライブ ラリを使用

MKLROOT = /opt/intel/mkl

CC = mpicc -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp -I/usr/local/fftw3/include

FC = mpif90 - O3 - xHOST - ip - no-prec-div - qopenmp

 $LIB = -L/usr/local/fftw3/lib -lfftw3 \setminus$

-L\$MKLROOT/lib/intel64 -lmkl_scalapack_lp64 -lmkl_intel_lp64 \

-lmkl_intel_thread -lmkl_core -lmkl_blacs_open mpi_lp64 \backslash

-lmpi_usempif08 -lmpi_usempi_ignore_tkr $\$

-lmpi_mpifh -liomp5 -lpthread -lm -ldl

• GNU C および FORTRAN コンパイラ (gcc、g++、gfortran)、 ScaLAPACK と BLACS には MKL ライブラリを使用

MKLROOT = /opt/intel/mkl CC = mpicc -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp -I/usr/local/fftw3/include FC = mpif90 -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp LIB= -L/usr/local/fftw3/lib -lfftw3 \ -L\$MKLROOT/lib/intel64 -lmkl_scalapack_lp64 -lmkl_intel_lp64 \ -lmkl_intel_thread -lmkl_core -lmkl_blacs_open mpi_lp64 \ -lmpi_usempif08 -lmpi_usempi_ignore_tkr \ -lmpi_mpifh -liomp5 -lpthread -lm -ldl

 GNU C および FORTRAN コンパイラ (gcc、g++、gfortran) ScaLAPACK と BLACS を使用 CC = mpicc -O3 -ffast-math -fopenmp -Dkcomp -I/usr/local/include -I/home/ytl/openmpi-3.0.1/ompi/include FC = mpif90 -O3 -ffast-math -fopenmp -Dkcomp -I/home/ytl/openmpi-3.0.1/ompi/include LIB= -L/usr/local/lib -lfftw3 -L/home/ytl/openmpi-3.0.1/ompi -lmpi -lmpi_mpifh \ -L/home/ytl/Packages/lapack-3.7.0 -llapack -lrefblas -lgfortran

• FX100 計算機での FUJITSU コンパイラを使用

$$\begin{split} & \mathrm{CC} = \mathrm{mpifccpx}\ \text{-}\mathrm{Kfast}\ \text{-}\mathrm{Dnosse}\ \text{-}\mathrm{Dkcomp}\\ & \mathrm{FC} = \mathrm{mpifrtpx}\ \text{-}\mathrm{Kfast}\ \text{-}\mathrm{Dkcomp}\\ & \mathrm{LIB} = \text{-}\mathrm{lfftw3}\ \text{-}\mathrm{SCALAPACK}\ \text{-}\mathrm{SSL2BLAMP} \end{split}$$

その他のコンパイラと ScaLAPACK、BLACS ライブラリの組み合わせも同様に可能です。下記のコマ ンドを使用することで、MPI が利用するコンパイラ (Intel、PGI、GNU 等の)についての情報を表示 することができます。

%mpicc -compile-info (MPICHの場合) %mpicc -help (OpenMPIの場合)

C コンパイラが FORTRAN ライブラリの保存場所を見つけることができない場合、次のようなリンク エラーが生じることがあります。

Intel コンパイラの場合:

/usr/bin/ld: cannot find -lifcore

PGI コンパイラの場合:

/usr/bin/ld: cannot find -lpgf90

あるいは

```
-lpgf90_rpm1, -lpgf902, -lpgf90rtl, -lpgftnrtl
```

(-pgf90libs は、これらへのショートカットにすぎないため)

GNU コンパイラの場合:

/usr/bin/ld: cannot find -lgfortran

これらのリンクエラーに関する問題を解決するには、以下の手順で FORTRAN ライブラリを明示的に 指定する必要があります。まず FORTRAN コンパイラの保存場所は次のコマンドで確認することがで きます。

%which ifort (Intel コンパイラの場合) /opt/intel/fce/10.0.026/bin/ifort

%which pgf90 (PGI コンパイラの場合) /opt/pgi/linux86-64/7.0/bin/pgf90

%which gfortran (GNU コンパイラの場合) /usr/bin/gfortran

次に、FORTRAN ライブラリは通常、上記/bin ディレクトリの親ディレクトリの下にある/lib ディレクトリにあるため、次のように LIB を指定します。

LIB= ... -L/opt/intel/fce/10.0.026/lib -lifcore (Intel コンパイラの場合) LIB= ... -L/opt/pgi/linux86-64/7.0/lib -pgf90libs (PGI コンパイラの場合) LIB= ... -L/usr/lib -lgfortran (GNU コンパイラの場合)

Intel Math Kernel Library については以下のウェブサイト (Intel Math Kernel Library Link Line Advisor) を利用できます。

https://software.intel.com/en-us/articles/intel-mkl-link-line-advisor

この website を利用することで、使用環境に応じて、どの様にライブラリのリンクとコンパイルオプションを設定するべきかに関して詳細な情報が得られます。

3.9 *make* に関するオプション

すべてのオブジェクトファイル及び実行形式ファイルは以下のコマンドで削除できます。

% make clean

すべての実行形式ファイル(ポスト処理用コードも含む)は以下のコマンドでコンパイルされます。

% make all

4 テスト計算

インストールが正常に完了したら「work」ディレクトリに移動し、「Methane.dat」を入力ファイルとして下記のように「openmx」を実行して下さい。

% mpirun -np 1 openmx Methane.dat > met.std &

OpenMP/MPIハイブリッドバージョンをお使いの場合は下記のコマンドで実行します。

% mpirun -np 1 openmx Methane.dat -nt 1 > met.std &

計算で用いた「Methane.dat」は、メタン分子のSCF計算を実行するための入力ファイルです。構造最 適化は行いません。この計算は2.6 GHz Xeon 搭載マシンの単一コアで実行した場合、5 秒程度で終了し ますが、実際の実行時間はコンピュータ環境に依存します。計算が正常に終了すると、次の11 個のファ イルと1 個のディレクトリが「work」ディレクトリ内に作成されます。

met.std	SCF 計算の標準出力
met.out	入力ファイルと標準出力
met.xyz	最終的な幾何構造
met.ene	各 MD ステップにおける計算値
met.md	各 MD ステップにおける幾何構造
met.md2	最終 MD ステップにおける幾何構造
met.cif	Material Stuido 用の初期構造の cif ファイル
met.tden.cube	Gaussian cube 形式の全電子密度
met.v0.cube	Gaussian cube 形式の Kohn-Sham ポテンシャル
met.vhart.cube	Gaussian cube 形式の Hartree ポテンシャル
met.dden.cube	原子密度から計算した差電子密度
met_rst/	再スタートファイルを保存するディレクトリ

標準出力へ出力されるデータは「met.std」ファイルに格納されます。これは SCF 計算時の計算過程を 知るために役立ちます。「met.out」ファイルには、全エネルギー、力、Kohn-Sham 固有値、Mulliken 電荷、SCF 計算の収束履歴、および計算時間などの結果が記載されています。参考のために「met.out」 ファイルの一部を下記に抜粋します。14 回の SCF 反復でエネルギー固有値の変化が 1.0e-10 ハートリー (Hartree) 以下に収束していることが分かります。

SCF=	5	NormRD=	0.509921689399	Uele= -4.352426233337
SCF=	6	NormRD=	0.004026023243	Uele= -3.886371199720
SCF=	7	NormRD=	0.000838640096	Uele= -3.889312346884
SCF=	8	NormRD=	0.000420666755	Uele= -3.889396659132
SCF=	9	NormRD=	0.000241013350	Uele= -3.889362708861
SCF=	10	NormRD=	0.000573725679	Uele= -3.889427222948
SCF=	11	NormRD=	0.00000150516	Uele= -3.889316043314
SCF=	12	NormRD=	0.00000001917	Uele= -3.889316014533
SCF=	13	NormRD=	0.00000000005	Uele= -3.889316014156
SCF=	14	NormRD=	0.00000000001	Uele= -3.889316014146

また全エネルギー、化学ポテンシャル、Kohn-Sham 固有値、Mulliken 電荷、双極子モーメント、力、規格化座標、計算時間などが「met.out」ファイルに以下のように出力されます。

Total energy (Hartree) at MD = 1

Uele. -3.889316014146

Ukin.	5.533759381370
UHO.	-14.855519969177
UH1.	0.041396138425
Una.	-5.040606545149
Unl.	-0.134650846490
UxcO.	-1.564720263874
Uxc1.	-1.564720263874
Ucore.	9.551521413583
Uhub.	0.000000000000
Ucs.	0.000000000000
Uzs.	0.000000000000
Uzo.	0.000000000000
Uef.	0.000000000000
UvdW	0.000000000000
Uch	0.000000000000
Utot.	-8.033540955187

Note:

Utot = Ukin+UH0+UH1+Una+Un1+Uxc0+Uxc1+Ucore+Uhub+Ucs+Uzs+Uzo+Uef+UvdW

Uene: band energy Ukin: kinetic energy

UHO:	electric part of screened Coulomb energy
UH1:	difference electron-electron Coulomb energy
Una:	neutral atom potential energy
Unl:	non-local potential energy
Uxc0:	exchange-correlation energy for alpha spin
Uxc1:	exchange-correlation energy for beta spin
Ucore:	core-core Coulomb energy
Uhub:	DFT+U energy
Ucs:	constraint energy for spin orientation
Uzs:	Zeeman term for spin magnetic moment
Uzo:	Zeeman term for orbital magnetic moment
Uef:	electric energy by electric field
UvdW:	semi-empirical vdW energy

(see also PRB 72, 045121(2005) for the energy contributions)

0.00000000000

Chemical potential (Hartree)

```
Eigenvalues (Hartree) for SCF KS-eq.
*******
 Chemical Potential (Hartree) =
                    0.0000000000000
 Number of States
                    8.00000000000000
                 =
 HOMO = 4
 Eigenvalues
        Up-spin
                   Down-spin
     1 -0.69897506408475 -0.69897506408475
     2 -0.41523055776668 -0.41523055776668
     3 -0.41523055768741 -0.41523055768741
     4 -0.41522182758055 -0.41522182758055
     5 0.21221759603691
                  0.21221759603691
     6 0.21221759685634
                  0.21221759685634
     7 0.21230533059490
                  0.21230533059490
       0.24741918440773
                  0.24741918440773
     8
```

Mulliken populations

Total spin S = 0.00000000000

				Up s	pin	Dowr	n spin	Sum		Diff
	1	С		2.5097	48760	2.5097	48760	5.0194	97520	0.00000000
	2	Н		0.3725	62810	0.3725	62810	0.7451	25620	0.00000000
	3	Н		0.3725	62810	0.3725	62810	0.7451	25620	0.00000000
	4	Н		0.3725	62810	0.3725	62810	0.7451	25620	0.00000000
	5	Н		0.3725	62810	0.3725	62810	0.7451	25620	0.00000000
Sum	of	MulP:	up	=	4.000	00 dowr	ı	=	4.000	00
			tot	al=	8.000	00 idea	al(neutra	al)=	8.000	00

Decomposed Mulliken populations

1	С	Up spin		Down spin	Sum	Diff	
		multip	Le				
S		0	0.681737894	0.681737894	1.363475787	0.00000000	
sum	over	m	0.681737894	0.681737894	1.363475787	0.00000000	
sum	over	m+mul	0.681737894	0.681737894	1.363475787	0.00000000	
px		0	0.609352701	0.609352701	1.218705403	0.00000000	
ру		0	0.609305463	0.609305463	1.218610926	0.00000000	
pz		0	0.609352702	0.609352702	1.218705404	0.00000000	
sum	over	m	1.828010866	1.828010866	3.656021733	0.00000000	
sum	over	m+mul	1.828010866	1.828010866	3.656021733	0.00000000	

Η		Up spin	Down spin	Sum	Diff
	multip	le			
	0	0.372562810	0.372562810	0.745125620	0.00000000
over	m	0.372562810	0.372562810	0.745125620	0.00000000
over	m+mul	0.372562810	0.372562810	0.745125620	0.00000000
	H over over	H multip 0 over m over m+mul	H Up spin multiple 0 0.372562810 over m 0.372562810 over m+mul 0.372562810	H Up spin Down spin multiple 0 0.372562810 0.372562810 over m 0.372562810 0.372562810 0.372562810 over m+mul 0.372562810 0.372562810 0.372562810	HUp spinDown spinSummultiple00.3725628100.3725628100.745125620over m0.3725628100.3725628100.745125620over m+mul0.3725628100.3725628100.745125620

3	Н		Up spin	Down spin	Sum	Diff
		multip	le			
S		0	0.372562810	0.372562810	0.745125620	0.00000000
sum	over	m	0.372562810	0.372562810	0.745125620	0.00000000
sum	over	m+mul	0.372562810	0.372562810	0.745125620	0.00000000
4	Η		Up spin	Down spin	Sum	Diff

multiple 0 s 0.372562810 0.372562810 0.745125620 0.00000000 0.372562810 0.372562810 0.745125620 0.00000000 sum over m sum over m+mul 0.372562810 0.372562810 0.745125620 0.00000000 5 Diff Η Up spin Down spin Sum multiple 0 0.372562810 0.372562810 0.745125620 0.00000000 s sum over m 0.372562810 0.372562810 0.745125620 0.00000000 0.372562810 0.372562810 0.745125620 0.00000000 sum over m+mul Dipole moment (Debye) Absolute D 0.0000000 Dx Dy Dz Total 0.0000000 0.0000000 -0.0000000 0.0000000 Core 0.0000000 0.0000000 Electron 0.0000000 0.0000000 -0.0000000 Back ground -0.0000000 -0.0000000 -0.0000000 xyz-coordinates (Ang) and forces (Hartree/Bohr) <coordinates.forces 5 1 С 0.00000 0.00000 0.00000 0.0000000000 0.00... 2 Η -0.88998 -0.62931 0.00000 -0.064890985127 -0.04... 3 Η 0.00000 0.62931 -0.88998 0.00000000002 0.04... 0.00000000002 0.04... 4 Η 0.00000 0.62931 0.88998 5 -0.629310.064890985122 -0.04... Η 0.88998 0.00000 coordinates.forces>

1	С	0.0000000000000000000000000000000000000	0.0000000000000000000000000000000000000	0.0000000000000000000000000000000000000
2	Н	0.91100190000000	0.93706880000000	0.0000000000000000000000000000000000000
3	Н	0.0000000000000000000000000000000000000	0.06293120000000	0.91100190000000
4	Н	0.0000000000000000000000000000000000000	0.06293120000000	0.0889981000000
5	Н	0.08899810000000	0.93706880000000	0.0000000000000000000000000000000000000

Elapsed.Time. 4.600

		Min_ID	Min_Time	Max_ID	Max_Time
Total Computational	Time =	0	4.600	0	4.600
readfile	=	0	2.578	0	2.578
truncation	=	0	0.146	0	0.146
MD_pac	=	0	0.000	0	0.000
OutData	=	0	0.283	0	0.283
DFT	=	0	1.591	0	1.591

*** In DFT ***

Set_OLP_Kin	=	0	0.052	0	0.052
Set_Nonlocal	=	0	0.039	0	0.039
Set_ProExpn_VNA	=	0	0.156	0	0.156
Set_Hamiltonian	=	0	0.663	0	0.663
Poisson	=	0	0.214	0	0.214
Diagonalization	=	0	0.005	0	0.005
Mixing_DM	=	0	0.000	0	0.000
Force	=	0	0.039	0	0.039
Total_Energy	=	0	0.256	0	0.256
Set_Aden_Grid	=	0	0.019	0	0.019
Set_Orbitals_Grid	=	0	0.015	0	0.015
Set_Density_Grid	=	0	0.124	0	0.124
RestartFileDFT	=	0	0.004	0	0.004
Mulliken_Charge	=	0	0.000	0	0.000
FFT(2D)_Density	=	0	0.000	0	0.000

Others

出力ファイル「met.tden.cube」、「met.v0.cube」、「met.vhart.cube」、および「met.dden.cube」には、 それぞれ全電子密度、Kohn-Sham ポテンシャル、Hartree ポテンシャル、および構成孤立原子の電子密 度の重ね合わせを基準とした差電子密度が Gaussian cube 形式で書き出されています。Gaussian cube 形式は広く使われているグリッド形式であるため、VESTA [103] や Molekel [104]、XCrySDen [105] な どの無料の分子モデリングソフトウェアを用いて可視化することができます。後述の章にて可視化の例 を示します。

5 自動実行のテスト

「テスト計算」の章で説明した計算に加え、OpenMXの主な機能が正常にインストールされているか確認したい場合には、自動実行のテストを実施することをお薦めします。この自動実行テストを行うには、 以下のコマンドにより OpenMX を実行します。

MPI 並列化の場合:

% mpirun -np 8 openmx -runtest

MPI/OpenMP 並列化の場合:

% mpirun -np 8 openmx -runtest -nt 2

並列計算の実行の際に mpirun の他のオプションを指定することもできます。このテストにおいて、 OpenMX は 14 個の入力テストファイルを計算し、結果を「work/input_example」に格納されている 参照データと比較します。比較結果(全エネルギーおよび力の差の絶対値)は「work」ディレクトリの 「runtest.result」というファイルに格納されます。参照データは 2.6 GHz Xeon シングルプロセッサのコ ンピュータで計算されたものです。絶対差分が小数点以下 7 桁以内であればインストールは正常に行わ れたと判断できます。自動実行テストの結果、生成された「runtest.result」の例を以下に示します。

尾崎研究室のクラスタ計算機 mx17 (Intel(R) Xeon(R) CPU E5-2690 v4 @ 2.60GHz),

icc version 16.0.2, compiler option -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp 20 processes (MPI) x 1 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 3.09	diff Utot = 0.00000000021	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 8.71	diff Utot= 0.000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
3	$input_example/CO.dat$	Elapsed time(s) = 6.77	diff Utot= 0.000000000000	diff Force= 0.000000000004
4	$input_example/Cr2.dat$	Elapsed time(s) = 7.15	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.000000000001
5	$input_example/Crys-MnO.dat$	Elapsed time(s) = 20.16	diff Utot= 0.00000000003	diff Force= 0.00000000047
6	$input_example/GaAs.dat$	Elapsed time(s) = 27.89	diff Utot= 0.000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
7	input_example/Glycine.dat	Elapsed time(s) = 3.45	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
8	$input_example/Graphite4.dat$	Elapsed time(s) = 3.75	diff Utot= 0.00000000004	diff Force= 0.00000000152
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s) = 2.93	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s) = 2.80	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
11	$input_example/HMn.dat$	Elapsed time(s) = 8.84	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
12	$input_example/Methane.dat$	Elapsed time(s) = 2.38	diff Utot= 0.00000000013	diff Force= 0.000000000001
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s) = 6.05	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
14	$input_example/Ndia2.dat$	Elapsed time(s) = 4.98	diff Utot= 0.000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$

Total elapsed time (s) 108.96

この比較は参照用の計算で用いた同一のXeonクラスタ上で20MPIプロセスを用いて実行されました。浮動小数点の演算はコンピュータ環境だけでなく並列計算で用いたプロセッサ数にも依存するため、上記の例では、同じコンピュータを使用したにも関わらず差が現れているのが分かります。各ジョブの経過時間も出力されているため、環境によって計算スピードの差を比較することも可能です。「work/input_example」ディレクトリには、複数のプラットフォームで生成された「runtest.result」ファイルがあります。

参照データファイルを御自身で作成する場合には、以下のコマンドによって OpenMX を実行して下さい。

% ./openmx -maketest

これにより OpenMX は「work/input_example」ディレクトリにある「*.dat」入力ファイルに対して、 対応する「*.out」ファイルを同ディレクトリに生成します。新しい入力 dat ファイルを追加することで 次回の自動実行テスト時に、対応する「*.out」を利用することができますが、この手続きにより以前の 「work/input_example」にある出力ファイルは上書きされてしまうことに注意して下さい。開発者やへ ビーユーザがコードの信頼性を確認したい場合には「自動フォース・テスター」および「自動メモリリー ク・テスター」の章もご参照下さい。

参考までにいくつかの計算機による 'runtest' の結果を以下に示します。

東京大学物性研究所 System B (sekirei) (Intel Xeon E5-2680v3 12core 2.5GHz)

icc version 18.0.5, compiler option: -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp -Dkcomp -fp-model precise 6 processes (MPI) x 4 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 3.69	diff Utot= 0.00000000034	diff Force= 0.00000000005
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 11.54	diff Utot= 0.000000000005	diff Force= 0.000000000006
3	input_example/CO.dat	Elapsed time(s) = 6.14	diff Utot= 0.00000000106	diff Force= 0.00000001979
4	$input_example/Cr2.dat$	Elapsed time(s) = 5.80	diff Utot= 0.00000000364	diff Force= 0.00000000033
5	$input_example/Crys-MnO.dat$	Elapsed time(s)= 58.73	diff Utot= 0.00000000003	diff Force= 0.000000000005
6	input_example/GaAs.dat	Elapsed time(s) = 48.60	diff Utot= 0.000000000010	diff Force= 0.00000000002
7	input_example/Glycine.dat	Elapsed time(s) = 3.39	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
8	$input_example/Graphite4.dat$	Elapsed time(s) = 9.05	diff Utot= 0.00000000016	diff Force= 0.000000000019
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s) = 3.04	diff Utot= 0.000000000002	diff Force= 0.000000000001
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s) = 2.69	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.00000000019
11	input_example/HMn.dat	Elapsed time(s) = 10.50	diff Utot= 0.00000000085	diff Force= 0.00000000022
12	$input_example/Methane.dat$	Elapsed time(s) = 2.05	diff Utot= 0.00000000003	diff Force= 0.00000000002
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s)= 6.41	diff Utot= 0.000000000617	diff Force= 0.00000000018
14	input_example/Ndia2.dat	Elapsed time(s) = 5.59	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$

Total elapsed time (s) 177.21

東京大学物性研究所 System C (enaga) (Intel Xeon 6148 20core 2.4GHz) icc version 18.0.5, compiler option: -O3 -xHOST -ip -no-prec-div -qopenmp -Dkcomp -fp-model precise 5 processes (MPI) x 4 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 2.92	diff Utot= 0.00000000025	diff Force= 0.00000000002
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 9.47	diff Utot= 0.000000000005	diff Force= 0.000000000003
3	input_example/CO.dat	Elapsed time(s) = 5.71	diff Utot= 0.00000000072	diff Force= 0.00000001573
4	input_example/Cr2.dat	Elapsed time(s) = 5.46	diff Utot= 0.00000000845	diff Force= 0.00000000111
5	input_example/Crys-MnO.dat	Elapsed time(s) = 40.05	diff Utot= 0.00000000002	diff Force= 0.00000000066
6	input_example/GaAs.dat	Elapsed time(s)= 37.81	diff Utot= 0.000000000009	diff Force= 0.000000000001
$\overline{7}$	input_example/Glycine.dat	Elapsed time(s) = 2.96	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.000000000001
8	$input_example/Graphite4.dat$	Elapsed time(s) = 5.76	diff Utot= 0.00000000002	diff Force= 0.00000000140
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s) = 2.44	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s) = 2.39	diff Utot= 0.00000000002	diff Force= 0.00000003224
11	input_example/HMn.dat	Elapsed time(s) = 10.08	diff Utot= 0.00000000129	diff Force= 0.000000000020
12	$input_example/Methane.dat$	Elapsed time(s) = 1.88	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s) = 6.09	diff Utot= 0.00000000272	diff Force= 0.00000000150
14	input_example/Ndia2.dat	Elapsed time(s) = 4.02	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.000000000001

Total elapsed time (s) 137.06

北陸先端科学技術大学 hster (Intel(R) Xeon(R) CPU E5-2640 0 @ 2.50GHz) icc compiler Ver. 14.0.2.144, compiler option: -openmp -O3 -xAVX -ip -no-prec-div 20 processes (MPI) x 1 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 5.30	diff Utot= 0.00000000038	diff Force= 0.000000000003
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 12.53	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.00000000002
3	input_example/CO.dat	Elapsed time(s) = 10.55	diff Utot= 0.00000000047	diff Force= 0.00000007948
4	input_example/Cr2.dat	Elapsed time(s) = 10.74	diff Utot= 0.00000000381	diff Force= 0.00000000102
5	$input_example/Crys-MnO.dat$	Elapsed time(s) = 27.48	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.00000000035
6	input_example/GaAs.dat	Elapsed time(s)= 38.56	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.000000000001
7	input_example/Glycine.dat	Elapsed time(s) = 5.76	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
8	input_example/Graphite4.dat	Elapsed time(s) = 6.73	diff Utot= 0.00000000003	diff Force= 0.00000000073
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s) = 5.00	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.000000000001
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s) = 4.86	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.00000000020
11	input_example/HMn.dat	Elapsed time(s) = 13.97	diff Utot= 0.00000000118	diff Force= 0.000000000001
12	input_example/Methane.dat	Elapsed time(s) = 4.36	diff Utot= 0.000000000006	diff Force= 0.00000000002
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s) = 9.83	diff Utot= 0.00000000144	diff Force= 0.00000000079
14	input_example/Ndia2.dat	Elapsed time(s) = 8.39	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.000000000001

Total elapsed time (s) 164.04

北陸先端科学技術大学院大学 CRAY-XC40 (Intel Xeon E5-2695v4 2.1GHz) icc version 17.0.7, compiler option: -Dxt3 -O3 -axCOMMON-AVX512,CORE-AVX512,CORE-AVX2,CORE-AVX2,SSE4.2,SSE4.1,SSE3,SSE2.qopenmp

18 processes (MPI) x 2 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 4.23	diff Utot= 0.00000000040	diff Force= 0.00000000002
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 12.40	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.000000000001
3	$input_example/CO.dat$	Elapsed time(s) = 9.09	diff Utot= 0.00000000150	diff Force= 0.00000009551
4	$input_example/Cr2.dat$	Elapsed time(s) = 8.56	diff Utot= 0.00000000462	diff Force= 0.000000000004
5	$input_example/Crys-MnO.dat$	Elapsed time(s) = 20.81	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.00000000014
6	input_example/GaAs.dat	Elapsed time(s) = 31.99	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.000000000001
7	$input_example/Glycine.dat$	Elapsed time(s)= 4.71	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.00000000002
8	$input_example/Graphite4.dat$	Elapsed time(s) = 4.89	diff Utot= 0.00000000032	diff Force= 0.000000000004
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s) = 4.03	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.00000000002
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s) = 3.83	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.00000001042
11	$input_example/HMn.dat$	Elapsed time(s) = 12.73	diff Utot= 0.00000000064	diff Force= 0.00000000029
12	$input_example/Methane.dat$	Elapsed time(s) = 3.24	diff Utot= 0.00000000004	diff Force= 0.000000000001
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s) = 8.32	diff Utot= 0.00000000576	diff Force= 0.00000000032
14	$input_example/Ndia2.dat$	Elapsed time(s)= 6.12	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.00000000001

Total elapsed time (s) 134.96

名古屋大学 FX100 (PRIMEHPC FX100, SPARC64b XIfx, 2.2Gz) mpifccpx, compiler option: -Kfast -Kopenmp -Dnosse -Dkcomp 16 processes (MPI) x 2 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 12.29	diff Utot= 0.00000000003	diff Force= 0.000000000005
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 29.15	diff Utot= 0.00000000158	diff Force= 0.000000000050
3	$input_example/CO.dat$	Elapsed time(s)= 38.71	diff Utot= 0.00000000125	diff Force= 0.00000003104
4	$input_example/Cr2.dat$	Elapsed time(s) = 25.43	diff Utot= 0.00000001020	diff Force= 0.000000000007
5	$input_example/Crys-MnO.dat$	Elapsed time(s) = 84.38	diff Utot= 0.00000006058	diff Force= 0.00000073199
6	$input_example/GaAs.dat$	Elapsed time(s)= 80.54	diff Utot= 0.00000000011	diff Force= 0.00000015689
7	$input_example/Glycine.dat$	Elapsed time(s) = 14.78	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
8	$input_example/Graphite4.dat$	Elapsed time(s) = 14.52	diff Utot= 0.00000000016	diff Force= 0.000000000001
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s)= 12.78	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.000000000001
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s)= 13.07	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.00000000023
11	$input_example/HMn.dat$	Elapsed time(s)= 37.63	diff Utot= 0.00000000153	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$
12	$input_example/Methane.dat$	Elapsed time(s)= 9.82	diff Utot= 0.000000000007	diff Force= 0.00000000002
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s) = 26.48	diff Utot= 0.00000000209	diff Force= 0.00000000058
14	input_example/Ndia2.dat	Elapsed time(s) = 19.74	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.000000000001

Total elapsed time (s) 419.32

尾崎研究室 pauli (AMD EPYC 7351P, 2.4GHz)

gcc version 7.4.0, compiler option: -D
kcomp -O3 -march=znver1 -mtune=znver1 -mfma -mavx2 -m3dnow - fomit-frame-pointer -f
openmp

12 processes (MPI) x 1 thread (OpenMP)

1	input_example/Benzene.dat	Elapsed time(s) = 3.32	diff Utot= 0.00000000039	diff Force= 0.00000000002
2	$input_example/C60.dat$	Elapsed time(s) = 13.49	diff Utot= 0.00000000013	diff Force= 0.000000000006
3	input_example/CO.dat	Elapsed time(s) = 9.13	diff Utot= 0.00000000064	diff Force= 0.00000000934
4	input_example/Cr2.dat	Elapsed time(s) = 8.43	diff Utot= 0.00000002324	diff Force= 0.00000000157
5	$input_example/Crys-MnO.dat$	Elapsed time(s) = 25.40	diff Utot= 0.00000000003	diff Force= 0.000000000070
6	input_example/GaAs.dat	Elapsed time(s)= 38.09	diff Utot= 0.00000000002	diff Force= 0.000000000001
7	input_example/Glycine.dat	Elapsed time(s) = 4.41	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.000000000003
8	$input_example/Graphite4.dat$	Elapsed time(s) = 4.83	diff Utot= 0.00000000015	diff Force= 0.00000000011
9	$input_example/H2O-EF.dat$	Elapsed time(s) = 3.55	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= 0.000000000001
10	$input_example/H2O.dat$	Elapsed time(s) = 2.95	diff Utot= 0.00000000001	diff Force= 0.00000000806
11	input_example/HMn.dat	Elapsed time(s) = 11.85	diff Utot= 0.00000000113	diff Force= 0.000000000001
12	$input_example/Methane.dat$	Elapsed time(s) = 2.72	diff Utot= 0.000000000006	diff Force= 0.000000000001
13	$input_example/Mol_MnO.dat$	Elapsed time(s) = 8.01	diff Utot= 0.00000000326	diff Force= 0.000000000050
14	$input_example/Ndia2.dat$	Elapsed time(s) = 5.93	diff Utot= 0.0000000000000	diff Force= $0.00000000000000000000000000000000000$

Total elapsed time (s) 142.11

6 大規模な系の自動実行テスト

より大規模な系のベンチマーク計算によって計算機性能を知りたい場合、以下のコマンドによってテスト計算を自動実行して下さい。

MPI 並列化の場合:

% mpirun -np 112 openmx -runtestL

MPI/OpenMP 並列化の場合:

% mpirun -np 112 openmx -runtestL -nt 2

これらのコマンドを実行すると、OpenMX は 16 個のテスト入力ファイルを実行し、その結果を 「work/large_example」内にある参照データと比較します。比較結果(全エネルギーおよび力の絶対差 分)は、「work」ディレクトリの「runtestL.result」ファイルに格納されます。参照データは、2.6 GHz Xeon クラスタマシン上で 28 個の MPI プロセスを使用して計算されたものです。絶対差分が小数点以 下 7 桁以内であればインストールは正常に行われたと判断できます。例として、自動実行テストで生成 された「runtestL.result」を以下に示します。

1	$large_example/5_5_13COb2.dat$	Elapsed time(s) = 52.78	diff Utot= 0.00000000020	diff Force= 0.00000000004
2	$large_example/B2C62_Band.dat$	Elapsed time(s) = 403.51	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.00000063810
3	$large_example/CG15c\text{-}DC\text{-}LNO.dat$	Elapsed time(s) = 103.31	diff Utot= 0.00000000269	diff Force= 0.00000000551
4	$large_example/DIA512-1.dat$	Elapsed time(s) = 49.35	diff Utot= 0.00000027379	diff Force= 0.00000031436
5	$large_example/FeBCC.dat$	Elapsed time(s) = 80.54	diff Utot= 0.00000000016	diff Force= 0.000000000001
6	$large_example/GEL.dat$	Elapsed time(s) = 44.95	diff Utot= 0.000000000009	diff Force= 0.000000000004
7	$large_example/GFRAG.dat$	Elapsed time(s) = 27.68	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.000000000001
8	$large_example/GGFF.dat$	Elapsed time(s) = 643.36	diff Utot= 0.00000000037	diff Force= 0.00000000809
9	$large_example/MCCN.dat$	Elapsed time(s) = 82.04	diff Utot= 0.00000005885	diff Force= 0.00000003486
10	$large_example/Mn12_148_F.dat$	Elapsed time(s) = 74.25	diff Utot= 0.00000000015	diff Force= 0.00000000010
11	$large_example/N1C999.dat$	Elapsed time(s) = 1212.42	diff Utot= 0.00000000035	diff Force= 0.00000000390
12	$large_example/Ni63-O64.dat$	Elapsed time(s)= 70.90	diff Utot= 0.00000000211	diff Force= 0.00000000008
13	$large_example/Pt63.dat$	Elapsed time(s) = 58.76	diff Utot= 0.00000001297	diff Force= 0.00000000242
14	$large_example/SialicAcid.dat$	Elapsed time(s) = 16.75	diff Utot= 0.000000000001	diff Force= 0.000000000001
15	$large_example/ZrB2_2x2.dat$	Elapsed time(s) = 133.10	diff Utot= 0.00000000044	diff Force= 0.00000000020
16	$large_example/nsV4Bz5.dat$	Elapsed time(s)= 99.37	diff Utot= 0.00000004771	diff Force= 0.00000003167

Total elapsed time (s) 3153.08

この結果は 112 個の MPI プロセスを用いて Xeon クラスタ計算機で計算したものです。この自動実行 テストは大量のメモリを必要とするため、少数の使用コア数で実行した際にはメモリの領域侵害を起こ す場合があります。また上記の例では 112 コアを使用しても約 53 分の時間を要することが分かります。 「大規模計算」の章にも別の大規模ベンチマーク計算の例の説明がありますので、参照して下さい。

7 入力ファイル

7.1 例:メタン分子

「work」ディレクトリにある「Methane.dat」入力ファイルを例として下記に示します。入力ファイルは 柔軟なデータ書式 (flexible data format) で記述されます。この形式ではキーワードの後に対応するパラ メータを指定します。キーワードを記載する順番は自由であり、また空白行やコメントも自由に使用で きます。下記の例では特定の様式で書かれていますが、キーワードやオプション (パラメータ)は、大 文字、小文字の区別をしておらず、ユーザーの好みに応じて、大文字、小文字、あるいは大文字小文字 混在で指定することができます。

```
#
# File Name
#
System.CurrrentDirectory
                               ./ # default=./
System.Name
                               met
                                1
level.of.stdout
                                     # default=1 (1-3)
level.of.fileout
                                     # default=1 (0-2)
                                1
#
# Definition of Atomic Species
#
Species.Number
                   2
<Definition.of.Atomic.Species
H H5.0-s1
                    H PBE19
                    C_PBE19
С
    C5.0-s1p1
Definition.of.Atomic.Species>
#
# Atoms
#
Atoms.Number
                   5
Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit
                               Ang # Ang|AU
<Atoms.SpeciesAndCoordinates
1 C
          0.000000
                    0.000000
                                 0.000000
                                             2.0 2.0
                                 0.000000
                   -0.629312
2 H
         -0.889981
                                             0.5 0.5
3 H
         0.000000
                   0.629312 -0.889981
                                             0.5 0.5
4 H
          0.000000
                    0.629312
                                 0.889981
                                             0.5 0.5
                   -0.629312
                                 0.000000
5 H
          0.889981
                                             0.5 0.5
Atoms.SpeciesAndCoordinates>
Atoms.UnitVectors.Unit
                                 Ang # Ang|AU
<Atoms.UnitVectors
 10.0 0.0
             0.0
  0.0 10.0 0.0
  0.0 0.0 10.0
```

Atoms.UnitVectors>

```
#
# SCF or Electronic System
#
```

```
scf.XcType
                         GGA-PBE
                                    # LDA|LSDA-CA|LSDA-PW|GGA-PBE
scf.SpinPolarization
                          off
                                    # On|Off|NC
scf.ElectronicTemperature 300.0
                                  # default=300 (K)
                                    # default=150 (Ry)
scf.energycutoff
                        120.0
                                    # default=40
scf.maxIter
                         100
scf.EigenvalueSolver
                        cluster # DC|Cluster|Band
                                    # means n1 x n2 x n3
scf.Kgrid
                        1 1 1
                                    # Simple|Rmm-Diis|Gr-Pulay|Kerker|Rmm-Diisk
scf.Mixing.Type
                      rmm-diis
scf.Init.Mixing.Weight
                        0.30
                                    # default=0.30
scf.Min.Mixing.Weight
                        0.001
                                    # default=0.001
scf.Max.Mixing.Weight
                         0.400
                                    # default=0.40
scf.Mixing.History
                         7
                                    # default=5
scf.Mixing.StartPulay
                        5
                                    # default=6
scf.criterion
                        1.0e-10
                                    # default=1.0e-6 (Hartree)
#
# MD or Geometry Optimization
#
                                    # Nomd|Opt|NVE|NVT_VS|NVT_NH
MD.Type
                          nomd
                                  # Constraint_Opt|DIIS
MD.maxIter
                                    # default=1
                           1
MD.TimeStep
                                    # default=0.5 (fs)
                          1.0
```

7.2 キーワード

MD.Opt.criterion

各キーワードについて下記に説明していきます。この章ではOpenMXのすべてのキーワードは網羅しておらず、また各キーワードについては対応する章で更に詳しく説明しています。本マニュアルの最後に記載されているインデックスをご参照頂ければ、各キーワードに関連したページ番号が分かります。

default=1.0e-4 (Hartree/Bohr)

ファイル名

System.CurrrentDir このキーワードにより、出力ファイルの出力ディレクトを指定します。デフォルト値は「./」です。

System.Name このキーワードで出力ファイルのファイル名を指定します。

1.0e-4

DATA.PATH

VPS および PAO ディレクトリへのパスを下記のように指定します。

DATA.PATH ../DFT_DATA19 # default=../DFT_DATA19

絶対パス、相対パスとも指定可能です。デフォルト値は「../DFT_DATA19」です。

level.of.stdout

このキーワードにより、標準出力への出力情報のレベルを制御します。「level.of.stdout=0」を指定した 場合、最小限の情報が出力されます。「level.of.stdout=1」の場合、最小限の出力に加えて追加の情報が 出力されます。「level.of.stdout=2」は開発者向けのオプションです。デフォルト値は1です。

level.of.fileout

このキーワードにより、出力ファイルへの出力情報のレベルを制御します。「level.of.fileout=0」を指定 した場合、最小限の情報が出力されます(Gaussian cube ファイルおよびグリッドファイルの出力無し)。 「level.of.fileout=1」は標準的な出力レベルです。「level.of.fileout=2」の場合、標準の出力に加えて追加 の情報が出力されます。デフォルト値は1です。

原子種の定義

Species.Number

このキーワードにより、系に含まれる原子種の数を指定します。

Definition.of.Atomic.Species

擬原子基底関数と擬ポテンシャルの両方のファイル名を明記することにより、原子種を指定して下さい。 これらのファイルはそれぞれ「DFT_DATA19/PAO」および「DFT_DATA19/VPS」ディレクトリに置 かなければなりません。例えば以下のように指定します。

<Definition.of.Atomic.Species
H H5.0-s1>1p1>1 H_CA19
C C5.0-s1>1p1>1 C_CA19
Definition.of.Atomic.Species>

原子種の指定は「<Definition.of.Atomic.Species」で始め、「Definition.of.Atomic.Species>」で終わらな ければなりません。1番目の列では任意の原子種の名前を指定します。この名前は、後述する 「Atoms.SpeciesAndCoordinates」キーワードにて原子座標を指定するのに使います。2番目の列では擬 原子基底関数の拡張子無しのファイル名と、プリミティブ基底関数の数および縮約された基底関数の数を 指定します。例では基底関数は「H4.0-s1>1p1>1」となっていますが、H4.0 が「DFT_DATA19/PAO」 ディレクトリにある擬原子基底関数の拡張子無しのファイル名を示し、s1>1 は、1 つの s 軌道のプリミ ティブ軌道から 1 つの最適化された軌道が作られていることに対応します。つまり縮約は行わないこと を意味します。縮約が無い場合、「s1>1」と記述する代わりに「s1」という簡単な記法を使用できます。 つまり、「H4.0-s1p1」は「H4.0-s1>1p1>1」と同等ということです。3番目の列では擬ポテンシャルの 拡張無しのファイル名を指定します。このファイルは「DFT_DATA19/VPS」ディレクトリ内に存在し なければなりません。同一元素に対して異なる基底関数と擬ポテンシャルを割り当てることで、異なる 原子種を定義することもできます。例えば複数の原子種を以下のように指定できます。

<Definition.of.Atomic.Species

H1	H5.0-s1p1	H_CA19		
H2	H5.0-s2p2d1	H_CA19		
C1	C5.0-s2p2	C_CA19		
C2	C5.0-s2p2d2	C_CA19		
Definition.of.Atomic.Species>				

この柔軟性の高い記述法を活用し、系の特性を決定している領域に属する原子には高精度の基底関数を 割り当て、不活性な領域に属する原子には低精度の基底関数を割り当てることも可能であり、計算量の 削減には有効な手段です。

原子

Atoms.Number

系の合計原子数を「Atoms.Number」キーワードで指定します。

${\bf Atoms. Species And Coordinates. Unit}$

原子座標の単位を「Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit」キーワードで指定します。オングストロームの場合は「Ang」、原子単位の場合は「AU」を指定します。「FRAC」と記述することで、規格化座標を指定することも可能です。規格化座標の場合には、後述する「Atoms.UnitVectors」のキーワードで与えられた a、b、c ベクトルを基底として、座標を指定します。その際には 0.0 ~ 1.0 の範囲で座標が設定可能で、この範囲を超える座標は入力ファイルの読み込み後に自動的に調整されます。

Atoms.SpeciesAndCoordinates

原子座標および各スピン毎の電子数を「Atoms.SpeciesAndCoordinates」キーワードで以下の例のよう に指定します。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

1	С	0.00000	0.000000	0.000000	2.0	2.0
2	Н	-0.889981	-0.629312	0.000000	0.5	0.5
3	Н	0.00000	0.629312	-0.889981	0.5	0.5
4	Н	0.00000	0.629312	0.889981	0.5	0.5
5	Н	0.889981	-0.629312	0.000000	0.5	0.5

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

記述は「<Atoms.SpeciesAndCoordinates」で始まり、「Atoms.SpeciesAndCoordinates>」で終わりま す。1列目には原子を特定する連番を記述します。2列目には事前に「Definition.of.Atomic.Species」の 1列目で定義した原子種を指定します。3~5列目には、それぞれ*x、y、z*座標を指定します。

「Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit」キーワードで「FRAC」を指定している場合は 3~5 列目はそ れぞれ a、b、c 軸の規格化座標になり、値は 0.0~1.0 の範囲で指定します。この範囲を外れる数値は入 カファイルが読み込まれる段階で自動的に調整されます。6および7列目には、各原子のアップスピン とダウンスピン状態のそれぞれの初期電子数を設定します。アップスピン電子数とダウンスピン電子数 の合計は原子の価電子の数に等しくなるようにします。原子の価電子数は表1と表2に記載されていま す.「LSDA-CA」、「LSDA-PW」、あるいは「GGA-PBE」を使用してスピン分極系を計算する場合、6 および7列目の指定によって各原子に初期スピンを指定することができます。これにより強磁性状態や 反強磁性状態などの計算が可能です。またSCFの収束を加速するためには、この初期スピン配置は基底 状態に近い配置からスタートすることが重要です。

Atoms.UnitVectors.Unit

単位胞 (ユニットセル) におけるベクトルの単位を「Atoms.Unit Vectors.Unit」キーワードで指定します。 オングストロームの場合は「Ang」、原子単位の場合は「AU」を指定します。

Atoms.UnitVectors

単位胞のベクトル a、b、c を Atoms. Unit Vectors キーワードで以下の様に指定します。

<Atoms.UnitVectors
 10.0 0.0 0.0
 0.0 10.0 0.0
 0.0 0.0 10.0
Atoms.UnitVectors>

記述は「<Atoms.UnitVectors」で始まり、「Atoms.UnitVectors>」で終わります。第1~3行はそれぞ れ単位胞のベクトルa、b、cに対応します。クラスタ計算の際にこのキーワードが指定されないと周期 的に配置された孤立系の間で基底関数が重ならないように、単位胞の大きさが自動的に決定されます。 詳細に関しては「セルサイズの自動決定」の章もご参照下さい。

SCF または電子系

scf.XcType

交換相関ポテンシャルを「scf.XcType」キーワードで指定します。OpenMX Ver. 3.9 においては「LDA」、「LSDA-CA」、「LSDA-PW」、「GGA-PBE」から選択できます。ここで「LSDA-CA」はCeperley-Alder [2] の局所スピン密度関数、「LSDA-PW」は、そのGGA 形式において密度勾配をゼロとした Perdew-Wang 局所スピン密度関数 [4] です。「GGA-PBE」はPerdewらが提案する GGA 汎関数 [5] です。

scf.SpinPolarization

電子系の非スピン分極あるいはスピン分極は「scf.SpinPolarization」キーワードで指定します。スピン 分極の計算を行う場合は「ON」を指定し、非スピン分極の計算を行う場合は「OFF」を指定します。 「scf.XcType」キーワードで「LDA」を使用する場合は「scf.SpinPolarization」を「OFF」に設定して 下さい。前述の2つのオプションの他、ノンコリニアDFT計算を行う場合には「NC」というオプショ ンを指定して下さい。この計算については「ノンコリニアDFT」の章もご参照下さい。

scf.partialCoreCorrection

交換相関エネルギーおよびそのポテンシャルの計算において部分内殻補正 (Partial Core Correction、 PCC)を行う場合には、「scf.partialCoreCorrection」キーワードを指定します。これを「ON」に指定す るとPCCを行い、「OFF」の場合にはPCCを行いません。通常は、このフラグは「ON」にするべきで す。何故ならば、PCC擬ポテンシャルを使用する場合にはPCCを行うべきであり、また非PCC擬ポテ ンシャルの場合でもPCC電荷がゼロなので結果には影響を及ぼさないからです。デフォルトは「ON」 です。

scf.Hubbard.U

LDA+U およびGGA+U 計算の場合、「scf.Hubbard.U」キーワードを「ON」に設定して下さい(ON|OFF)。 デフォルトでは「OFF」に設定されています。

scf.Hubbard.Occupation

LDA+U 法では、「scf.Hubbard.Occupation」キーワードを指定することで、「onsite」、「full」および 「dual」の3つの占有数演算子から選択することができます。

Hubbard.U.values

下記のキーワードにより各原子種の軌道に対する実効的な U の値を定義します。

<Hubbard.U.values # eV Ni 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 4.0 2d 0.0 O 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 0.0 Hubbard.U.values>

記述は「<Hubbard.U.values」で始まり、「Hubbard.U.values>」で終わります。

「Definition.of.Atomic.Species」で指定した全ての基底軌道に対して、上記の形式にて実効的な U の値を設定しなければなりません。「1s」や「2s」はそれぞれ割り当てられた最初と二番目の s軌道を示し、「1s」の後にくる数字が最初の s軌道に対する実効的な U 値 (eV) です。同様の規則が、p および d軌道にも当てはまります。

scf.Constraint.NC.Spin

スピン磁気モーメントのノンコリニア方位を制御する制約条件付DFT計算を行う場合には「scf.Constraint.NC.Spin」 キーワードを「ON」に設定して下さい。このキーワードは「ON」か「OFF」に設定することができま す。

scf.Constraint.NC.Spin.v

スピン磁気モーメントのノンコリニア方位を制御する制約条件付 DFT 計算を行う場合には、 「scf.Constraint.NC.Spin.v」キーワードによってペナルティ関数の前因子(eV)を指定します。

${\it scf. Electronic Temperature}$

「scf.ElectronicTemperature」キーワードにて電子温度(K)を設定します。デフォルトでは300(K) に設定されています。

scf.energycutoff

「scf.energycutoff」キーワードで積分グリッド間隔を決定するカットオフエネルギーを指定します。この積分グリッドは差電子クーロンポテンシャルと交換相関ポテンシャルに対する行列要素の計算および 高速フーリエ変換(FFT)を用いた Poisson 方程式の解法のために使用されます。デフォルトでは 150 (Ryd)に設定されています。

scf.Ngrid
「scf.Ngrid」キーワードによって a、b、c 軸を離散化させる際のグリッド数を指定します。 通常は「scf.energycutoff」で指定した値を使って実空間の離散化を行いますが、「scf.Ngrid」でグリッド 数を指定した場合には、「scf.energycutoff」ではなくこちらが優先されます。

scf.maxIter

SCFの最大反復回数を「scf.maxIter」キーワードで設定します。SCF反復ループは、収束条件が満たされない場合でもこのキーワードで指定した回数で終了します。デフォルト値は40です。

scf.EigenvalueSolver

固有値問題の計算手法を「scf.EigenvalueSolver」で指定します。O(N)分割統治法は「DC」、局在自然 軌道による O(N)分割統治法は「DC-LNO」、O(N)クリロフ部分空間法は「Krylov」、数値厳密な低次 スケーリング法は「ON2」、クラスタ計算は「Cluster」、バンド計算は「Band」を指定します。

scf.Kgrid

OpenMX では等間隔メッシュにより k 空間の第1ブリルアンゾーンを離散します。「scf.EigenvalueSolver」 キーワードにより「Band」を指定した場合、k 空間の第1ブリルアンゾーンを離散化するための格子の 数(n1, n2, n3)を「scf.Kgrid」キーワードで指定しなければなりません。k 空間の逆格子ベクトル ã、 \tilde{b} 、 \tilde{c} を離散化するために「n1 n2 n3」のように指定して下さい。

scf.ProExpn.VNA

中性原子ポテンシャル VNA を射影演算子で展開する場合 [42] には、「scf.ProExpn.VNA」キーワード を「ON」に設定し、それ以外の場合は「OFF」を設定して下さい。デフォルトでは「ON」になってい ます。

scf.ProExpn.VNA ON # ON|OFF, default = ON

「scf.ProExpn.VNA=OFF」と設定されている場合、VNAポテンシャルの行列要素は実空間の離散グリッドを用いて計算されます。

scf.Mixing.Type

「scf.Mixing.Type」キーワードによって、SCF 計算の次の反復ステップに入力される電子密度(もし くは密度行列)を生成するための電子密度混合法を指定します。単純混合法(Simple)、GR-Pulay法 (Guaranteed-Reduction Pulay)[57]、RMM-DIIS法 [58]、Kerker法[59]、RMM-DIISK法 [58]、RMM-DIISV法 [58] あるいはRMM-DIISH法 [58] のいずれかを指定することができます。OpenMXの単純混 合法は収束の速度を上げるために収束履歴を参照するように改良されています。「GR-Pulay」、「RMM-DIIS」、「Kerker」、「RMM-DIISK」、「RMM-DIISV」あるいは「RMM-DIISH」を使用する際には、以 下の点に注意することで SCF 計算の高速化が可能です。

- Pulay 法に準拠する方法で混合を開始する前には、ある程度の SCF 収束が達成されている必要があり ます。そのため、やや大きめの「scf.Mixing.StartPulay」の値を使用します。「scf.Mixing.StartPulay」の適切な値は 10~30 です。
- 金属系の場合は「scf.ElectronicTemperature」で高温の電子温度を指定します。「scf.ElectronicTemperature」 があまりに低いと数値的に不安定な挙動がよく見られます。
- 「scf.Mixing.History」の値を大きくします。ほとんどの場合、「scf.Mixing.History=30」が妥当な 値です。

前述した混合法のうち、多くの系に対して最もロバスト性が高い手法は「RMM-DIISK」です。

scf.Init.Mixing.Weight

単純混合法、GR-Pulay法, RMM-DIIS法、Kerker法、RMM-DIISK法、RMM-DIISV法、およびRMM-DIISH法で使用する初期の混合比を「scf.Init.Mixing.Weight」キーワードで指定します。有効な範囲は 0 < scf.Init.Mixing.Weight<1で、デフォルト値は0.3です。

scf.Min.Mixing.Weight

単純混合法および Kerker 混合法における混合比の下限を「scf.Min.Mixing.Weight」で指定します。デフォルトでは 0.001 に設定されています。

scf.Max.Mixing.Weight

単純混合法および Kerker 混合法における混合比の上限を「scf.Max.Mixing.Weight」で指定します。デフォルトでは 0.4 に設定されています。

scf.Kerker.factor

Kerker および RMM-DIISK 混合法における Kerker 因子を指定します。このキーワードが指定されない 場合、適切な値が自動的に設定されます。詳しくは「SCF 収束」の章を参照して下さい。

scf.Mixing.History

GR-Pulay 法 [57]、 RMM-DIIS 法 [58]、 RMM-DIISK 法 [58]、 RMM-DIISV 法 [58] 及び RMM-DIISH 法 [58] では、SCF の次の反復ステップにおける入力電子密度(ハミルトニアン)を、過去の SCF 反復の 電子密度(ハミルトニアン)に基づき推定します。「scf.Mixing.History」キーワードは、この推定に使 用する過去の SCF 反復ステップ数を指定します。例えば、「scf.Mixing.History」を 3 に設定した場合、 6 回目の SCF 反復では過去の第 5、4、3 ステップの電子密度(ハミルトニアン)が考慮されます。30 程 度が適切な選択値です。

scf.Mixing.StartPulay

GR-Pulay 法、RMM-DIIS 法、Kerker 法、RMM-DIISK 法、RMM-DIISV 法および RMM-DIISH 法を 開始する SCF ステップを「scf.Mixing.StartPulay」で指定します。これらの方法を開始するまでの SCF ステップでは単純混合法あるいは Kerker 混合法が使用されます。デフォルトでは 6 に設定されていま す。

scf.Mixing.EveryPulay

Pulay タイプの混合法における残差ベクトルは、SCF ステップが進むに従い、相互に線形従属になる傾向にあり、このため収束が困難になります。線形従属を避ける方法のひとつは、Kerker 混合の合間に時々Pulay タイプの混合を挿入するというものです。この方法における Pulay タイプ混合の使用頻度を、「scf.Mixing.EveryPulay」キーワードで指定します。例えば「scf.Mixing.EveryPulay=5」と設定した場合、SCF 反復 5 回につき 1 回の Pulay 混合が実施され、その他の反復では Kerker 法が使用されます。「scf.Mixing.EveryPulay=1」は従来の Pulay タイプ混合と同じものになります。このキーワード「scf.Mixing.EveryPulay」は、「RMM-DIISK」でのみサポートされており、デフォルト値は 1 です。

scf.criterion

SCF 計算の収束条件を「scf.criterion」キーワードで指定します(Hartree 単位)。SCF 反復は、 dUele<scf.criterion という条件が満たされると終了します。ここで dUele とは、現在の SCF 反復とひと つ前の反復とのバンドエネルギーの絶対差です。デフォルト値は 1.0e-6 (Hartree 単位)です。 scf.Electric.Field

「scf.Electric.Field」キーワードによって、のこぎり波形で表される外部均一電場を導入することが可能です。例えば、a軸に沿って 1.0 GV/m (10⁹ V/m)の電場を適用するには、次のように指定します。

scf.Electric.Field 1.0 0.0 0.0 # default=0.0 0.0 0.0 (GV/m)

電場の符号は電子に作用するものとして定義されています。デフォルト値は「0.0 0.0 0.0」です。

scf.system.charge

電子および正孔のドーピングの量を「scf.system.charge」キーワードで指定します。プラス・マイナス 符号はそれぞれ正孔と電子のドーピングを表します。デフォルト値は0です。

scf.SpinOrbit.Coupling

スピン軌道相互作用を有効にする場合にはこのキーワードを「ON」に設定し、それ以外では「OFF」に 設定して下さい。スピン軌道相互作用を使用する場合、ノンコリニア DFT 法の枠組みにおいて j 依存擬 ポテンシャルを使用しなければなりません。これについては「相対論的効果」の章も参照して下さい。

1D FFT

1DFFT.EnergyCutoff

局在擬原子軌道と非局所ポテンシャルのプロジェクタの動径関数をフーリエ変換するエネルギー領域を「1DFFT.EnergyCutoff」キーワードで指定します。このエネルギー領域はフーリエ空間における動径 方向の最大値となります。デフォルト値は3600(Ryd)です。

1DFFT.NumGridK

0から 1DFFT.EnergyCutoff までのエネルギー領域は「1DFFT.NumGridK」キーワードで指定される グリット数で離散化されます。局在擬原子軌道および非局所ポテンシャルのプロジェクタの動径関数の フーリエ変換された値は、k空間上の動径方向の関数として、0から 1DFFT.EnergyCutoff までの範囲 で、このグリット上で保持されています。デフォルト値は 900 です。

1DFFT.NumGridR

実空間上の動径グリット数を「1DFFT.NumGridR」キーワードで指定します。この値は局在擬原子軌 道および非局所ポテンシャルのプロジェクタの動径関数をフーリエ変換する際の数値積分に使用されま す。デフォルト値は 900 です。

軌道最適化

orbital Opt. Method

軌道最適化の方法を「orbitalOpt.Method」キーワードで指定します。軌道最適化を行わない場合はこの 値を「OFF」に設定して下さい。軌道最適化を行う場合は、次のオプションから選択します。「atoms」 を指定した場合、各原子単位の基底関数が最適化されます。「species」を指定した場合、各原子種の基底 関数が最適化されます。「atom」および「species」のどちらの場合でも、動径波動関数 R は磁気量子数 には依存しないという条件のもとで最適化されます。これにより最適化基底関数を用いた計算において、 全エネルギーの回転不変性が保証されます。「atom」を指定した場合には最適化された基底関数は化学 的環境に依存するため、同一原子種であっても原子毎に異なります。一方、「species」を指定した場合に は「Definition.of.Atomic.Species」で定義した同一名の原子種の基底関数は同一の軌道に最適化されま す。ほぼ同様の化学的環境を持つ原子に対して同一の最適化基底を生成したい場合に、有用な方法です。

orbital Opt.scf.maxIter

軌道最適化における SCF 反復の最大回数を「orbitalOpt.scf.maxIter」キーワードで指定します。

orbitalOpt.Opt.maxIter

軌道最適化の反復の最大回数を「orbitalOpt.Opt.maxIter」キーワードで指定します。軌道最適化の反 復は、収束条件が達成しなかった場合でも、同キーワードで設定した回数で終了します。

orbitalOpt.Opt.Method

軌道最適化の収束方法として、2つの手法がサポートされています。「EF」は固有ベクトル追跡法、「DIIS」 は反復部分空間における直接反転法です。それぞれのアルゴリズムは構造最適化のそれと同じです。 「orbitalOpt.Opt.Method」キーワードでは「EF」あるいは「DIIS」を指定して下さい。

orbital Opt. Start Pulay

「orbitalOpt.StartPulay」キーワードで指定した最適化ステップから、準ニュートン法である「EF」または「DIIS」法を開始します。

orbitalOpt.HistoryPulay

準ニュートン法である「EF」および「DIIS」法において、次ステップでの縮約係数を推定するために参照する過去のステップ数を「orbitalOpt.HistoryPulay」キーワードで指定します。

orbitalOpt.SD.step

準ニュートン法である「EF」および「DIIS」法を開始するまでの最適化ステップは最急降下法が適用されます。最急降下法で使用する前因子は「orbitalOpt.SD.step」キーワードで指定します。多くのケースにおいて、「orbitalOpt.SD.step」の適切な値は 0.001 程度となります。

orbitalOpt.criterion

軌道最適化の収束条件((Hartree/bohr)²)を「orbitalOpt.criterion」キーワードで指定します。「微分のノルム <orbitalOpt.criterion」という条件が満たされた時に反復ループが終了します。

CntOrb.fileout

最適化動径関数をファイルに出力したい場合は、「CntOrb.fileout」キーワードを「ON」にする必要があります。

Num.CntOrb.Atoms 最適化動径関数をファイルに出力する際の原子数を「Num.CntOrb.Atoms」キーワードで指定します。

Atoms.Cont.Orbitals

「Atoms.SpeciesAndCoordinates」キーワードの第1列で定義した原子の通し番号を用いて、最適化基 底を出力する原子を「Atoms.Cont.Orbitals」キーワードで次のように指定します。

```
<Atoms.Cont.Orbitals
1
2
Atoms.Cont.Orbitals>
```

記述は「<Atoms.Cont.Orbitals」で始め、「Atoms.Cont.Orbitals>」で終わります。行の数は、 「Atoms.Cont.Orbitals」で記述する数字と整合性がなければなりません。例えば、最適化擬原子軌道が 「C_1.pao」と「H_2.pao」などとして保存された場合、その原子種名はキーワード

「Definition.of.Atomic.Species」の設定における第一列の記号に対応し、記号の後の数字はキーワード 「Atoms.SpeciesAndCoordinates」の設定における第一列の数値を意味します。これらの出力ファイル 「C_1.pao」と「H_2.pao」は基底関数の入力データとして使用可能です。

O(N) SCF 計算

order N. Hopping Ranges

各原子を中心とする球の半径 (Å)を「orderN.HoppingRanges」キーワードで定義します。DC 法、DC-LNO 法および O(N) クリロフ部分空間法では、この球内に含まれる原子を選択することで切り取られた クラスタが構成されます。

orderN.KrylovH.order

切り取られた各クラスタのハミルトニアンに対し、クリロフ部分空間の次元を「orderN.KrylovH.order」 キーワードで指定します。

orderN.KrylovS.order

後述のキーワードで「orderN.Exact.Inverse.S=off」に設定した場合、重なり積分の逆行列はクリロフ部分 空間法を用いて近似されます。この時、切り取られた各クラスタに対する重なり行列のクリロフ部分空間法 の次元を「orderN.KrylovS.order」キーワードで指定します。デフォルト値は、「orderN.KrylovH.order」 で設定した値の4倍です。

order N. Exact. Inverse. S

キーワード「orderN.Exact.Inverse.S」を「on」に設定すると、切り取られた各クラスタの重なり行列の 逆行列は厳密に評価されます。offに設定する場合は前述のキーワード「orderN.KrylovS.order」の項を 参照して下さい。デフォルトでは「on」に設定されています。

orderN.Recalc.Buffer

キーワード「orderN.Recalc.Buffer」を「on」に設定すると、バッファ行列は各 SCF 反復毎に再計算されます。「off」の場合にはバッファ行列は初回の SCF ステップで計算され、その後の SCF 反復では固定されます。デフォルトでは「on」に設定されています。

orderN.Expand.Core

キーワード「orderN.Expand.Core」を「on」に設定すると、コア領域は半径 $1.2 \times r_{\min}$ の球の中にある 原子から構成されます。ここで r_{\min} は、中心原子と最隣接原子間の距離です。このコア領域はクリロフ 部分空間を生成するときの第 1 ステップで使用されるベクトル群を定義します。「orderN.Expand.Core」 が「off」の場合、中心の原子がコア領域と見なされます。デフォルトでは「on」に設定されています。

MD(分子動力学)あるいは構造最適化

MD.Type

分子動力学計算あるいは構造最適化のタイプを指定します。現在使用できるオプションは以下の通りで す。MD 無し(「Nomd」)、NVE アンサンブル MD(「NVE」)、速度スケーリング法による NVT アンサ ンブル MD(「NVT_VS」)[30]、Nose-Hoover 法による NVT アンサンブル MD(「NVT_NH」)[31]、複 数熱浴付き MD(「NVT_VS2」あるいは「NVT_VS4」)、最急降下法による構造最適化(「SD」)、DIIS 最適化法(「DIIS」)、固有値ベクトル追跡法(「EF」)[63]、及び合理的関数法(「RF」)[64] です。そ の他にセル最適化のためのオプション(OptC1、OptC2、OptC3、OptC4、OptC5、OptC6、OptC7、 RFC5、RFC6、RFC7)も利用可能です。詳細は「構造最適化」、「セル可変構造最適化」および「分子 動力学」の章を参照して下さい。

MD.Fixed.XYZ

次のキーワードを指定することで、構造最適化および分子動力学シミュレーションの際に任意の原子座 標を初期座標に固定することができます。各原子の*x、y、z*座標に対して、以下のように設定します。

<MD.Fixed.XYZ

 $\begin{array}{ccccccc} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 2 & 1 & 0 & 0 \end{array}$

MD.Fixed.XYZ>

上記の例は2つの原子から構成される系の場合です。系にN 個の原子がある場合、N 個分の指定が必要 です。第1列は「Atoms.SpeciesAndCoordinates」で個々の原子を特定するのに使用した連番です。第 2~4列は、それぞれx、y、z座標のフラグです。フラグが「1」だと座標は固定、「0」だと緩和されま す。上記の例では、原子1のx、y、z座標は固定、原子2はx座標のみ固定されています。デフォルト では全ての座標が緩和される指定になっています。このキーワードによる原子座標の固定は、すべての 構造最適化および分子動力学の方法において有効です。

MD.maxIter

MD 計算や構造最適化計算における最大の反復回数を「MD.maxIter」キーワードで指定します。

MD.TimeStep

時間ステップ(fs)を「MD.TimeStep」キーワードで指定します。

MD.Opt.criterion

「MD.Type」キーワードによって構造最適化の方法を選択している場合には、「MD.Opt.criterion」キー ワードでその収束条件(Hartree/Bohr)を設定します。原子にかかる力の最大絶対値が「MD.Opt.criterion」 で指定した値より小さくなった場合に、構造最適化は終了します。

MD.Opt.DIIS.History

「DIIS」、「EF」、「RF」による構造最適化を行う場合、「MD.Opt.DIIS.History」キーワードは構造最適 化のために参照する過去のステップ数を指定します。デフォルト値は3です。

MD.Opt.StartDIIS

「DIIS」、「EF」、「RF」による構造最適化を開始するステップを「MD.Opt.StartDIIS」キーワードで指定します。DIIS タイプの構造最適化を開始する以前のステップでは最急降下法が使用されます。デフォルト値は5です。

MD.TempControl

キーワード「MD.TempControl」により NVT アンサンブルの分子動力学計算における原子運動の温度 を指定します。「NVT_VS」を選択した場合、原子運動の温度を下記の例のように制御できます。

<MD.TempControl

3				
100	2	1000.0	0.0	
400	10	700.0	0.4	
700	40	500.0	0.7	
MD.TempControl>				

記述は「<MD.TempControl」で開始し、「MD.TempControl>」で終わります。最初の数字「3」は、続 く温度指定の行数を指定します。例では3行あります。後続する行の第1列はMDステップ数を意味し、 第2列は速度スケーリングを行うMDステップの間隔を指定します。例では、100ステップ目までは2 ステップ毎に、100~400ステップ間は10ステップ毎に、400~700ステップ間は40ステップ毎に速度 スケーリングを行います。第3、4列はそれぞれ温度(K)とスケーリングパラメータ α を指定します。 詳細は「分子動力学」の章を参照して下さい。一方、NVT_NHの場合、以下の記述で原子運動の温度を 制御できます。

<MD.TempControl

4 1 1000.0 100 1000.0 400 700.0 700 600.0 MD.TempControl>

記述は「<MD.TempControl」で開始し、「MD.TempControl>」で終わります。最初の数字「4」は、続く温度指定の行数を指定します。この例では4行あります。後続する行の第1、2列は、それぞれ MD ステップ数と原子運動の温度を指定します。指定された MD ステップ間の温度は線形補完されます。

NH.Mass.HeatBath

キーワード「MD.Type」によって「NVT_NH」を選択した場合、このキーワードで熱浴の質量を設定し ます。デフォルト値は 20 です。次元は長さ² × 質量です。この表記では長さにはボーア半径、質量に統 一原子質量単位(炭素原子の主同位体の質量を 12.0 とする単位)を用います。

MD.Init.Velocity 分子動力学のシミュレーションでは、下記の記述により各原子に初期速度を与えることができます。

<MD.Init.Velocity 1 3000.000 0.0 0.0 2 -3000.000 0.0 0.0 MD.Init.Velocity> これは 2 つの原子からなる系の例です。N 個の原子がある場合、同様にN 行の記述が必要です。第 1 列 は「Atoms.SpeciesAndCoordinates」キーワードで指定した原子の連番と同じです。第 2、3、4 列は、各 原子の速度のx、y、z成分で、単位はm/sです。「MD.Init.Velocity」キーワードは、「MD.Fixed.XYZ」 キーワードと併用できます。

バンド分散

Band.dispersion バンド分散を評価する場合は「Band.dispersion」キーワードを「ON」に設定して下さい。

Band.KPath.UnitCell

「Band.KPath.UnitCell」キーワードによって、下記の例のようにバンド分散の計算で使用する単位胞 ベクトルを指定します。

<Band.KPath.UnitCell 3.56 0.0 0.0 0.0 3.56 0.0 0.0 0.0 3.56 Band.KPath.UnitCell>

記述は「<Band.KPath.UnitCell」で開始し、「Band.KPath.UnitCell>」で終了します。

「Band.KPath.UnitCell」キーワードの記述がある場合、同キーワードで指定した単位胞ベクトルからバンド分散の計算に使用する逆格子ベクトルを算出します。「Band.KPath.UnitCell」を指定しない場合には、「Atoms.UnitVectors」キーワードで指定した単位胞ベクトルから計算した逆格子ベクトルが使用されます。面心立方格子構造(fcc)や体心立方格子構造(bcc)の場合には「Band.KPath.UnitCell」キーワードで逆格子ベクトルを再定義した方が、特殊 k 点の指定が容易です。

Band.Nkpath

バンド分散の計算における経路の数を「Band.Nkpath」で指定します。

Band.kpath

バンド分散の経路を「Band.kpath」キーワードで下記のように指定します。

```
<Band.kpath

15 0.0 0.0 0.0 1.0 0.0 0.0 g X

15 1.0 0.0 0.0 1.0 0.5 0.0 X W

15 1.0 0.5 0.0 0.5 0.5 0.5 W L

15 0.5 0.5 0.5 0.0 0.0 0.0 L g

15 0.0 0.0 0.0 1.0 0.0 0.0 g X

Band.kpath>
```

記述は「<Band.kpath」で始まり、「Band.kpath>」で終わります。行数は「Band.Nkpath」で指定した数と同じでなくてはなりません。第1列には経路上で固有値を計算する格子の数を指定します。続く

(n1, n2, n3) および (n1', n2', n3') は、逆格子ベクトルを基底とする第 1 ブリルアンゾーンの経路の開始 および終了の k 点を指定します。「Band.KPath.UnitCell」キーワードを指定している場合、バンド分散 を計算するための逆格子ベクトルは「Band.KPath.UnitCell」で設定した単位胞ベクトルを用いて計算 されます。「Band.KPath.UnitCell」の定義が無い場合は「Atoms.UnitVectors」で指定した単位胞ベク トルを用いて逆格子ベクトルを計算します。最後の 2 つの英文字は経路の開始および終了の k 点の名前 を指定します。

再スタート

$\mathbf{scf.restart}$

過去の計算で生成されたリスタートファイル「 $System.Name_rst/*$ 」を用いて SCF 計算を再スタートさせる場合には、このキーワード「scf.restart」を「ON」に設定して下さい。

分子軌道(MO)の出力

MO.fileout

分子軌道をファイルに出力したい場合は、キーワード「MO.fileout」を「ON」に設定して下さい。

num.HOMOs

出力する最高被占分子軌道(HOMO)の数を「num.HOMOs」キーワードで指定します。

num.LUMOs

出力する最低空分子軌道(LUMOS)の数を「num.LUMOs」キーワードで指定します。

MO.Nkpoint

「MO.fileout=ON」および「scf.EigenvalueSolver=Band」を設定している場合、「MO.Nkpoint」キー ワードで MO を出力する k 点の数を指定します。

MO.kpoint

MOを出力する k 点を「MO.kpoint」キーワードで以下のように指定します。

<MO.kpoint 0.0 0.0 0.0 MO.kpoint>

記述は「<MO.kpoint」で開始し、「MO.kpoint>」で終わります。k 点は逆格子ベクトルを基底して (n1, n2, n3) の 3 つの数字で指定します。ここで、逆格子ベクトルは「Band.kpath」の場合と同様な方法で 生成されたものが使用されます。

DOSとPDOS

Dos.fileout

全状態密度(DOS)および射影した部分状態密度(PDOS)を評価する場合は「Dos.fileout」キーワー

ドを「ON」に設定して下さい。

Dos.Erange

DOS 計算におけるエネルギー範囲を「Dos.Erange」キーワードで下記のように指定します。

Dos.Erange -10.0 10.0

ここで2つの値はそれぞれエネルギー範囲の下限と上限(eV)です。

Dos.Kgrid

DOS 計算を行う上で、第1ブルリアンゾーンを離散化するために (n1, n2, n3) の格子点を「Dos.Kgrid」 キーワードで指定します。

開発者向けインタフェース

HS.fileout

後処理計算において、Kohn-Sham ハミルトニアン行列、重なり行列、密度行列を利用する場合には 「HS.fileout」キーワードを「ON」に設定して下さい。これによりバイナリ形式のデータが「*System.Name*.scfout」 に格納されます。ここで、「*System.Name*」はキーワード「System.Name」で設定したファイル名です。 このデータの利用に関しては「開発者向けインタフェース」の章で詳しく説明します。

Voronoi 電荷

Voronoi.charge

Voronoi 電荷を計算する場合には「Voronoi.charge」キーワードを「ON」に設定して下さい。計算結果 は「*System.Name*.out」ファイルに保存されます。ここで「*System.Name*」は「System.Name」で設定 したファイル名です。

8 出力ファイル

「level.of.fileout=0」と設定した場合、以下のファイルが生成されます。ここで、「*System.Name*」はキー ワード「System.Name」で設定されたファイル名です。

• System.Name.out

SCF 計算の履歴、構造最適化の履歴、Mulliken 電荷、全エネルギー、および双極子モーメントが保存されます。

• System.Name.xyz

MD または構造最適化により得られた最終的な幾何学的構造が保存されます。このファイルは OpenMX Viewer [152, 151] や XCrySDen [105] で可視化できます。

• System.Name.bulk.xyz

「scf.EigenvalueSolver=Band」の場合、コピーされたセルの原子を含む原子座標が出力されます。 このファイルは OpenMX Viewer [152, 151] や XCrySDen [105] で可視化できます。

• System.Name_rst/

再スタートを行うための一連のファイルを保管しているディレクトリです。

• System.Name.md

各 MD ステップごとの原子座標が保存されます。このファイルは OpenMX Viewer [152, 151] で 可視化できます。

• System.Name.md2

最終 MD ステップにおける原子座標が保存されます。指定した原子種記号を用いて原子が指定されています。

- System.Name.cif
 cif 形式の初期原子座標が保存されます。
- System.Name.ene

MD ステップごとの計算値が保存されます。保存されている各数値の内容は「iterout_md.c」ルーチン中で確認できます。

「level.of.fileout=1」と指定した場合、「level.of.fileout=0」で生成されるファイルに加え、以下の Gaussian cube 形式のファイルが生成されます。ここで、「*System.Name*」はキーワード「System.Name」 により指定されたファイル名です。

• System.Name.tden.cube

Gaussian cube 形式で全電子密度が保存されています。

• *System.Name*.sden.cube

「LSDA-CA」、「LSDA-PW」、「GGA-PBE」を使用したスピン分極計算が実行された場合に、ス ピン電子密度が Gaussian cube 形式で保存されています。 • *System.Name*.dden.cube

構成原子の孤立原子状態の電子密度の重ね合わせを基準として計算された差電子密度が Gaussian cube 形式で保存されています。

• *System.Name*.v0.cube

アップスピンの非局所ポテンシャルを除く Kohn-Sham ポテンシャルが Gaussian cube 形式で保存されています。「scf.ProExpn.VNA」で射影展開法がオンの場合は中性原子ポテンシャル VNA も除かれます。http://www.openmx-square.org/tech_notes/tech_notes.html にある技術ノートの「全エネルギーと力」も参照ください。

• System.Name.v1.cube

スピン分極計算における、ダウンスピンの非局所ポテンシャルを除く Kohn-Sham ポテンシャルが Gaussian cube 形式で保存されています。「scf.ProExpn.VNA」で射影展開法がオンの場合は中性原 子ポテンシャル VNA も除かれます。http://www.openmx-square.org/tech_notes/tech_notes.html にある技術ノートの「全エネルギーと力」も参照ください。

• System.Name.vhart.cube

差電子密度から生じる差電子 Hartree ポテンシャルが Gaussian cube 形式で保存されています。 http://www.openmx-square.org/tech_notes/tech_notes.html にある技術ノートの「全エネルギー と力」も参照ください。

「level.of.fileout=2」の場合、「level.of.fileout=1」の場合に生成されるファイルに加え、以下のファ イルが生成されます。ここで、「*System.Name*」はキーワード「System.Name」で指定されたファイル 名です。

- System.Name.vxc0.cube
 アップスピンの交換相関ポテンシャルが Gaussian cube 形式で保存されています。
- System.Name.vxc1.cube

ダウンスピンの交換相関ポテンシャルが Gaussian cube 形式で保存されています。

• System.Name.grid

数値積分およびポアソン方程式の解に使用される実空間格子が保存されています。

「MO.fileout=ON」および「scf.EigenvalueSolver=Cluster」の場合、以下のファイルも生成されます。

• System.Name.homo0_0.cube, System.Name.homo0_1.cube, ...

Gaussian cube 形式で最高占有軌道 (HOMO) から順番に占有軌道を出力したファイルです。「homo」 に続く最初の数字はスピン状態を意味します (up=0, down=1)。また 2 番目の数字は固有状態を表 し、0、1、2 はそれぞれ HOMO、HOMO-1、HOMO-2 に対応します。

• System.Name.lumo0_0.cube, System.Name.lumo0_1.cube, ...

Gaussian cube 形式で最低非占有軌道 (LUMO) から順番に非占有軌道を出力したファイルです。 「lumo」に続く最初の数字はスピン状態を意味します (up=0, down=1)。また2番目の数字は固有 状態を表し、0、1、2はそれぞれ LUMO、LUMO+1、LUMO+2に対応します。 「MO.fileout=ON」および「scf.EigenvalueSolver=Band」の場合、以下のファイルが生成されます。

• System.Name.homo0_0_0_r.cube, System.Name.homo1_0_1_r.cube, ... System.Name.homo0_0_0_i.cube, System.Name.homo1_0_1_i.cube, ...

Gaussian cube 形式で最高占有軌道 (HOMO) から順番に占有軌道を出力したファイルです。「homo」 に続く最初の数字は、キーワード「MO.kpoint」により指定される k 点の番号を意味します。また 2 番目の数字はスピン状態です (up=0, down=1)。3 番目の数字は固有状態を表し、0、1、2 はそ れぞれ HOMO、HOMO-1、HOMO-2 に対応します。「r」および「i」は波動関数の実数および虚 数部を意味します。

• System.Name.lumo0_0_0_r.cube, System.Name.lumo1_0_1_r.cube, ... System.Name.lumo0_0_0_i.cube, System.Name.lumo1_0_1_i.cube, ...

Gaussian cube 形式で最低非占有軌道 (LUMO) から順番に非占有軌道を出力したファイルです。 「lumo」 に続く最初の数字は、キーワード「MO.kpoint」により指定される k 点の番号を意味し ます。また 2 番目の数字はスピン状態です (up=0, down=1)。3 番目の数字は固有状態を表し、0、 1、2 はそれぞれ LUMO、LUMO+1、LUMO+2 に対応します。「r」および「i」は波動関数の実 数および虚数部を意味します。

「Band.Nkpath」が0以上で、かつ「scf.EigenvalueSolver=Band」の場合、以下のファイルも生成 されます。

• System.Name.Band

バンド分散のデータファイルが保存されています。

「Dos.fileout=ON」の時、以下のファイルも生成されます。

• System.Name.Dos.val

状態密度を計算するための固有値のデータファイル。

• System.Name.Dos.vec

状態密度を計算するための固有ベクトルのデータファイル。

「scf.SpinPolarization=NC」および「level.of.fileout=1もしくは2」の場合、以下のファイルも生成 されます。

• System.Name.nco.xsf

Mulliken 解析により各原子に射影されたノンコリニア軌道磁気モーメントが保存されたベクトル ファイル。XCrySDenの「Display→Forces」を用いて可視化が可能です。

• System.Name.nc.xsf

Mulliken 解析により各原子に射影されたノンコリニアスピン磁気モーメントが保存されたベクト ルファイル。XCrySDenの「Display→Forces」を用いて可視化が可能です。

• System.Name.ncsden.xsf

実空間格子上のノンコリニアスピン磁気モーメントが保存されたベクトルファイル。 XCrySDenの「Display→Forces」を用いて可視化が可能です。

 OpenMX において、交換相関汎関数は局所密度近似 (LDA, LSDA) [2, 3, 4] もしくは一般化勾配近似 (GGA) [5] と呼ばれる近似手法によって取り扱われます。キーワード「scf.XcType」で、交換相関汎関 数に対する近似の一つが選択できます。

scf.XcType LDA # LDA|LSDA-CA|LSDA-PW|GGA-PBE

現在、「LDA」、「LSDA-CA」、「LSDA-PW」、「GGA-PBE」が使用可能です。ここで、「LDA」と「LSDA-CA」はCeperley-Alderの局所密度汎関数とそのスピン密度版であり[2]、「LSDA-PW」はPerdew-Wang によるGGAの表現形式で密度勾配がゼロに設定された局所スピン密度汎関数です[4]。「GGA-PBE」は Perdew、Burke、Ernzerhofにより提案された一般化勾配近似(GGA)です[5]。このGGAは実空間 での一次有限差分法を用いて実装されています。さらに、LDA+U(またはGGA+U)汎関数も使用可能 です。詳細は「LDA+U」の章を参照して下さい。スピン(非)分極およびノンコリニア計算を指定する 関連キーワードは「scf.SpinPolarization」です。

scf.SpinPolarization off # On|Off|NC

スピン分極計算を実行する場合、「ON」に設定して下さい。非スピン分極計算を実行する場合には「OFF」に設定して下さい。キーワード「scf.XcType」に対して「LDA」を使用する場合には、キーワード「scf.SpinPolarization」はOFFにして下さい。これらのオプションの他に、ノンコリニア DFT 計算を実行する場合は「NC」に設定して下さい。この計算に関しては「ノンコリニア DFT」の章も参照して下さい。

10 基底関数

10.1 概要

OpenMX は一粒子 Kohn-Sham 波動関数を展開するために数値擬原子軌道 (PAOs) χ を基底関数として 使用します。PAO 関数は動径関数 R と実球面調和関数 Y との積として次式で与えられます。

$$\chi(\mathbf{r}) = R(r)Y(\hat{\mathbf{r}}),$$

この動径関数 R は数値の表として与えられ、実空間のカットオフ半径内で有限な関数です。つまり関数 R は所定のカットオフ半径を超えるとゼロになります。ADPACK により計算された PAO 関数はプリミ ティブ関数と呼ばれます。このプリミティブ PAO 関数を出発点として、OpenMX の軌道最適化法を用 いて最適化された PAO 関数を得ることが可能です [41]。これらの基底関数に関するデータはファイル拡 張子「pao」を持ったファイルに保存されています。OpenMX の計算が実行される際には、これらのファ イルに保存されている数値データが読み込まれています。任意の動径距離 r に対する PAO 関数の値は 補間法により得られます。ファイル拡張子「pao」を持ったファイルは、例えば「DFT_DATA19/PAO」 などのディレクトリに保存して下さい。このディレクトリは以下のキーワードにより指定します。ただ しディレクトリ名中に「PAO」を含める必要はありません。

DATA.PATH ../DFT_DATA19 # default=../DFT_DATA19

絶対および相対パスの指定が可能であり、デフォルトは「../DFT_DATA19」となっています。OpenMX の入力ファイルにおいて、基底関数は以下のように「Definition.of.Atomic.Species」キーワードにより 指定されます。

<Definition.of.Atomic.Species

H H5.0-s2p1 H_PBE19

C C5.0-s2p1 C_PBE19

Definition.of.Atomic.Species>

ここで基底関数の略語記号、H5.0-s2p1を導入します。H5.0 は PAO 関数の拡張子なしのファイル名を表 します。このファイルはキーワード「DATA.PATH」により指定された「DFT_DATA19/PAO」などの ディレクトリに存在しなければなりません。5.0 は PAO 関数のカットオフ半径を意味します。また s2p1 は指定されたファイル中での二つの動径関数と一つの動径関数が *s*-軌道、*p*-軌道にそれぞれ割り当てら れることを意味します。この場合、合計 5 つの PAO 基底関数 (2×1+1×3=5) が「H」に対して割り当て られます。

OpenMXのWebサイト(http://www.openmx-square.org/)では最適化基底関数のデータベースVer. 2019が無償公開されています。従って一般のユーザーはこれらの最適化された基底関数を使用することが推奨されます。しかし上級者のために、プリミティブおよび最適化 PAO 関数について、続く節で説明します。

10.2 プリミティブ基底関数

閉じ込め擬ポテンシャル下で擬原子の基底状態および励起状態を計算することで、プリミティブ動径関数が生成されます [41]。この計算は ADPACK を用いて実行可能です。一例として炭素擬原子の s-軌道



Figure 1: 閉じ込め擬ポテンシャル下で生成された炭素擬原子の s-軌道のプリミティブ動径関数。

のプリミティブ動径関数を図1に示します。これらの関数は数値の表として、ファイル拡張子「pao」を 持つファイルに保存されています。図1から、基底状態はノードを持たず、第一励起状態は一つのノー ドを持っていることが分かります。より高い励起状態ではノード数は一つずつ増加しています。プリミ ティブ動径関数と実球面調和関数の積からプリミティブ基底関数が構成されます。さらに、このプリミ ティブ基底関数の線型結合によって一粒子 Kohn-Sham 波動関数が記述されます。計算の精度と効率は 二つのパラメータ:カットオフ半径と基底関数の数により制御されます。一般的に図2に示すように、 カットオフ半径を基底関数の数を増加させることで、収束解が得られます。しかしながら、大きなカッ トオフ半径を持ち、かつ多数の基底関数を使用する場合には、メモリー量や計算時間などの多大な計算 リソースが必要となることに注意が必要です。各元素毎に適切なカットオフ半径と基底関数の数を決定 する一般的な指針に関しては、参考文献[41]で議論されています。この議論によれば、周期表の右側に ある F や Cl などの元素に対して、十分な収束性を達成するためには高い角運動量をもつ基底関数が必 要であり、周期表の左側にある Li や Na などの元素に対しては大きなカットオフ半径を使用すべきであ るということが分かります。OpenMX の Web サイト (http://www.openmx-square.org/) では最適化基 底関数のデータベース Ver. 2019 が無償公開されています。従って一般のユーザーはこれらの最適化さ れた基底関数を使用することが推奨されます。

10.3 データベース Ver. 2019 により提供される最適化基底関数

最適化 PAO 関数はデータベース Ver. 2019 として、OpenMX の web サイト (http://www.openmxsquare.org/) で一般公開されています。公開されている基底関数は軌道最適化法により生成され [41]、 また一連のベンチマーク計算により十分にテストされていることから、一般ユーザーの最初の選択肢と して、このデータベースの使用を推奨します。データベース Ver. 2019 内のほとんどの元素に対して、 化学環境のトレーニングセットとして 3 種の系が選択され、選択された系に対して軌道最適化法により



Figure 2: 炭素二量体の (a) 全エネルギーおよび (b) 平衡結合距離のカットオフ半径・基底関数の数に対する収 束特性。

PAO 関数が変分原理に基づき最適化されています [41]。これらの最適化基底関数のセットは部分空間回転とグラム・シュミット直交化法の組み合わせ手法を用いて統合されており、一つの PAO ファイルに保存されています。最適化 PAO 関数はいくつかの異なる化学環境セットに対して最適化されているため、最適 PAO 関数の可搬性は高いと考えられます。実際、データベースのウェブサイト上にある一連のベンチマーク計算では、対応する全電子計算の結果とよく一致しています。これらベンチマーク計算を参考に、各元素に対しての適切な基底関数の選択 (カットオフ半径と基底関数の数) が可能でしょう。ベンチマーク計算に使われた入力ファイルもウェブサイトから入手することができますので、それらはOpenMX の計算に慣れるために有用だと思われます。

データベース Ver. 2019 の精度はデルタ因子により検証されています [40]。71 元素の平均デルタ因 子は 1.774 meV/atom、標準偏差は 1.702 meV/atom となっており、これはデータベース Ver. 2019 の 高い精度を示しています。従って一般のユーザーはこれらの最適化された基底関数を使用することが推 奨されます。デルタ因子の計算に関しては、「"格子定数 vs. エネルギー"」の章も参照して下さい。

利用者の利便性のため、表1と2に基底関数の適切な選択方法が提供されています。この表には各擬 ポテンシャルについて、三つの選択肢 *Quick、Standard* と *Precise* が用意されています。*Quick* は高速 な計算ですが妥当な精度の計算が可能です。*Standard* はほとんどの利用者に適切な選択肢となり、精度



Figure 3: Cl サイト空孔を持った NaCl の最高占有状態の等値面 (Γ 点)。この等値面は Cl 空孔をもつ NaCl の F 中心を示している。等値面は XCrySDen を使用して、0.042 の等値 (isovalue) で描画 [105]。系の電荷を-1 として、 キーワード「scf.system.charge」を使用して計算。水色および銀色はそれぞれナトリウムおよび塩素原子を表し、 黄緑色の小丸は空原子の位置を示す。

と効率がバランスします。*Precise*はほとんどの場合で収束する結果に到達します。この表は基底関数の 選択の指標を与えますが、当然ながら、基底関数は目的に応じて適切に選択されるべきです。

10.4 ユーザーによる PAO の最適化

変分最適化法を用いれば、ユーザー自身で変分原理に基づき動径関数の形状を最適化することができます。詳細は「軌道の最適化」の章を参照して下さい。

10.5 空原子の配置

プリミティブ関数および最適化 PAO 関数は通常、原子に割り当てられます。さらに、空原子を使って 空孔領域に基底関数を割り当てることも可能です。データベースのウェブサイト (http://www.openmxsquare.org/) には空原子「E」の項目があります。空原子「E」の擬ポテンシャルはフラットなゼロポテ ンシャルですが、この空原子「E」の擬ポテンシャルを使用することで、原子位置とは独立に、空間上 の任意の場所に基底関数を配置することができます。それを行うために、空原子を以下のように定義し ます。

<Definition.of.Atomic.Species H H5.0-s2p1 H_PBE19 C C5.0-s2p1 C_PBE19 EH H5.0-s2p1 E EC C5.0-s2p1 E Definition.of.Atomic.Species>

この例では、2種の空原子が「EH」および「EC」として定義されており、それぞれは「H5.0-s2p1」および 「C5.0-s2p1」で指定される基底関数が割て当てられています。従って空原子に対して、任意の基底関数が 使用可能であり、また空原子の定義も空原子に対する擬ポテンシャルとして「E.vps」を使用するだけで、 簡単に行うことができます。そして「EH」および「EC」はキーワード「Atoms.SpeciesAndCoordinates」 によって、任意の場所に配置することができ、そこでは空原子に対する擬ポテンシャルはゼロであり、 また空原子から系に供給される電子数もゼロとなります。空原子の配置により、counterpoise 法 (CP) 法 [46, 47] を使って基底関数重なり誤差を推測できるだけでなく、線形結合擬原子軌道 (LCPAO) 法の範囲 内で空孔状態や金属表面上の自由電子的状態を取り扱うこともできます。例として、CI 空孔をもつ NaCl の F 中心の計算を図 3 に示します。 Γ 点での最高占有状態がこの F 中心の状態であることがわかりま す。この計算は「work」ディレクトリ内の「NaCl_FC.dat」を使用して再現できます。

10.6 PAO および VPS ファイルを保存するディレクトリの指定

PAO および VPS ディレクトリへのパスは、以下のキーワードを使用して入力ファイル内で指定することができます。

DATA.PATH ../DFT_DATA19 # default=../DFT_DATA19

絶対および相対パスの指定が可能です。基底関数と擬ポテンシャルのデータベースは複数のバージョン が公開されておりますが、いくつかの元素に対しては擬ポテンシャル中のセミコアの状態数がバージョ ン間で同一ではありません。従って、これらのデータを使用する際には、同一バージョンの PAO および VPS を使用することが推奨されます。こうした理由から、PAO および VPS ファイルの各バージョンは 異なったディレクトリに保存するのが良いでしょう。その際に、このキーワードが有用になります。

Table 1: E から Kr までの PAO 基底関数の推奨される選択肢

VPS	Valence electrons	Quick	Standard	Precise
Е	0.0	Kr10.0-s1p1	Kr10.0-s2p1d1	Kr10.0-s2p2d1f1
H_PBE19	1.0	H5.0-s2	H6.0-s2p1	H7.0-s2p2d1
He_PBE19	2.0	He8.0-s1p1	He8.0-s2p1	He10.0-s2p2d1
Li_PBE19	3.0	Li8.0-s3p1	Li8.0-s3p2	Li8.0-s3p2d1
Be_PBE19	2.0	Be7.0-s2p1	Be7.0-s2p2	Be7.0-s3p2d1
B_PBE19	3.0	B7.0-s2p2	B7.0-s2p2d1	B7.0-s3p2d2
C_PBE19	4.0	C6.0-s2p2	C6.0-s2p2d1	C6.0-s3p2d2
N_PBE19	5.0	N6.0-s2p2	N6.0-s2p2d1	N6.0-s3p2d2
O_PBE19	6.0	O6.0-s2p2	O6.0-s2p2d1	O6.0-s3p2d2
F_PBE19	7.0	F6.0-s2p2	F6.0-s2p2d1	F6.0-s3p3d2f1
Ne_PBE19	8.0	Ne9.0-s2p2	Ne9.0-s2p2d1	Ne9.0-s3p2d2
Na_PBE19	9.0	Na9.0-s3p2	Na9.0-s3p2d1	Na9.0-s3p2d2
Mg_PBE19	8.0	Mg9.0-s2p2	Mg9.0-s3p2d1	Mg9.0-s3p2d2
Al_PBE19	3.0	Al7.0-s2p1d1	Al7.0-s2p2d1	Al7.0-s3p2d2
Si_PBE19	4.0	Si7.0-s2p1d1	Si7.0-s2p2d1	Si7.0-s3p3d2
P_PBE19	5.0	P7.0-s2p2d1	P7.0-s2p2d1f1	P7.0-s3p2d2f1
S_PBE19	6.0	S7.0-s2p2d1	S7.0-s2p2d1f1	S7.0-s3p2d2f1
Cl_PBE19	7.0	Cl7.0-s2p2d1	Cl7.0-s2p2d1f1	Cl7.0-s3p2d2f1
Ar_PBE19	8.0	Ar9.0-s2p2d1	Ar9.0-s2p2d1f1	Ar9.0-s3p2d2f1
K_PBE19	9.0	K10.0-s3p2	K10.0-s3p2d1	K10.0-s3p2d2
Ca_PBE19	10.0	Ca9.0-s3p2	Ca9.0-s3p2d1	Ca9.0-s3p2d2
Sc_PBE19	11.0	Sc9.0-s2p2d1	Sc9.0-s3p2d1	Sc9.0-s3p2d2
Ti_PBE19	12.0	Ti7.0-s2p2d1	Ti7.0-s3p2d1	Ti7.0-s3p2d2f1
V_PBE19	13.0	V6.0-s2p2d1	V6.0-s3p2d1	V6.0-s3p2d2f1
Cr_PBE19	14.0	Cr6.0-s2p2d1	Cr6.0-s3p2d1	Cr6.0-s3p2d2f1
Mn_PBE19	15.0	Mn6.0-s2p2d1	Mn6.0-s3p2d1	Mn6.0-s3p2d2f1
Fe_PBE19H	16.0	Fe5.5H-s2p2d1	Fe5.5H-s3p2d1	Fe5.5H-s3p2d2f1
Fe_PBE19S	14.0	Fe6.0S-s2p2d1	Fe6.0S-s3p2d1	Fe6.0S-s3p2d2f1
Co_PBE19H	17.0	Co6.0H-s2p2d1	Co6.0H-s3p2d1	Co6.0H-s3p2d2f1
Co_PBE19S	15.0	Co6.0S-s2p2d1	Co6.0S-s3p2d1	Co6.0S-s3p2d2f1
Ni_PBE19H	18.0	Ni6.0H-s2p2d1	Ni6.0H-s3p2d1	Ni6.0H-s3p2d2f1
Ni_PBE19S	16.0	Ni6.0S-s2p2d1	Ni6.0S-s3p2d1	Ni6.0S-s3p2d2f1
Cu_PBE19H	19.0	Cu6.0H-s2p2d1	Cu6.0H-s3p2d1	Cu6.0H-s3p2d2f1
Cu_PBE19S	11.0	Cu6.0S-s2p1d1	Cu6.0S-s3p2d1	Cu6.0S-s3p2d2f1
Zn_PBE19H	20.0	Zn6.0H-s2p2d1	Zn6.0H-s3p2d1	Zn6.0H-s3p2d2f1
Zn_PBE19S	12.0	Zn6.0S-s2p1d1	Zn6.0S-s3p2d1	Zn6.0S-s3p2d2f1
Ga_PBE19	13.0	Ga7.0-s2p2d1	Ga7.0-s3p2d2	Ga7.0-s3p2d2f1
Ge_PBE19	4.0	Ge7.0-s2p1d1	Ge7.0-s3p2d2	Ge7.0-s3p2d2f1
As_PBE19	15.0	As7.0-s3p2d1	As7.0-s3p2d2	As7.0-s3p2d2f1
Se_PBE19	6.0	Se7.0-s3p2d1	Se7.0-s3p2d2	Se7.0-s3p2d2f1
Br_PBE19	7.0	Br7.0-s3p2d1	Br7.0-s3p2d2	Br7.0-s3p2d2f1
Kr_PBE19	8.0	Kr10.0-s2p2d1	Kr10.0-s3p2d2	Kr10.0-s3p2d2f1

Table 2: Rb から Bi までの PAO 基底関数の推奨される選択肢

VPS	Valence electrons	Quick	Standard	Precise
Rb_PBE19	9.0	Rb11.0-s2p2d1	Rb11.0-s3p2d2	Rb11.0-s3p2d2f1
Sr_PBE19	10.0	Sr10.0-s2p2d1	Sr10.0-s3p2d2	Sr10.0-s3p3d2f1
Y_PBE19	11.0	Y10.0-s3p2d1	Y10.0-s3p2d2	Y10.0-s3p3d2f1
Zr_PBE19	12.0	Zr7.0-s3p2d1	Zr7.0-s3p2d2	Zr7.0-s3p2d2f1
Nb_PBE19	13.0	Nb7.0-s3p2d1	Nb7.0-s3p2d2	Nb7.0-s3p2d2f1
Mo_PBE19	14.0	Mo7.0-s $3p2d1$	Mo7.0-s3p2d2	Mo7.0-s3p2d2f1
Tc_PBE19	15.0	Tc7.0-s3p2d1	Tc7.0-s3p2d2	Tc7.0-s3p2d2f1
Ru_PBE19	14.0	Ru7.0-s3p2d1	Ru7.0-s3p2d2	Ru7.0-s3p2d2f1
Rh_PBE19	15.0	Rh7.0-s3p2d1	Rh7.0-s3p2d2	Rh7.0-s3p2d2f1
Pd_PBE19	16.0	Pd7.0-s3p2d1	Pd7.0-s3p2d2	Pd7.0-s3p2d2f1
Ag_PBE19	17.0	Ag7.0-s3p2d1	Ag7.0-s3p2d2	Ag7.0-s3p2d2f1
Cd_PBE19	12.0	Cd7.0-s3p2d1	Cd7.0-s3p2d2	Cd7.0-s3p2d2f1
In_PBE19	13.0	In7.0-s3p2d1	In7.0-s3p2d2	In7.0-s3p2d2f1
Sn_PBE19	14.0	Sn7.0-s3p2d1	Sn7.0-s3p2d2	Sn7.0-s3p2d2f1
Sb_PBE19	15.0	Sb7.0-s3p2d1	Sb7.0-s3p2d2	Sb7.0-s3p2d2f1
Te_PBE19	16.0	Te7.0-s3p2d2	Te7.0-s3p2d2f1	Te7.0-s3p3d2f1
I_PBE19	7.0	I7.0-s3p2d2	I7.0-s3p2d2f1	I7.0-s3p3d2f1
Xe_PBE19	8.0	Xe11.0-s3p2d1	Xe11.0-s3p2d2	Xe11.0-s3p2d2f1
Cs_PBE19	9.0	Cs12.0-s3p2d1	Cs12.0-s3p2d2	Cs12.0-s3p2d2f1
Ba_PBE19	10.0	Ba10.0-s3p2d1	Ba10.0-s3p2d2	Ba10.0-s3p2d2f1
La_PBE19	11.0	La8.0-s3p2d1f1	La8.0-s3p2d2f1	La8.0-s3p3d2f1
Ce_PBE19	12.0	Ce8.0-s3p2d1f1	Ce8.0-s3p2d2f1	Ce8.0-s3p3d2f1
Pr_PBE19	13.0	Pr8.0-s3p2d1f1	Pr8.0-s3p2d2f1	Pr8.0-s3p3d2f1
Nd_PBE19	14.0	Nd8.0-s3p2d1f1	Nd8.0-s3p2d2f1	Nd8.0-s3p3d2f1
Pm_PBE19	15.0	Pm8.0-s3p2d1f1	Pm8.0-s3p2d2f1	Pm8.0-s3p3d2f1
Sm_PBE19	16.0	Sm8.0-s3p2d1f1	Sm8.0-s3p2d2f1	Sm8.0-s3p3d2f1
Dy_PBE19	20.0	Dy8.0-s3p2d1f1	Dy8.0-s3p2d2f1	Dy8.0-s3p3d2f1
Ho_PBE19	21.0	Ho8.0-s3p2d1f1	Ho8.0-s3p2d2f1	Ho8.0-s3p3d2f1
Lu_PBE19	11.0	Lu8.0-s3p2d2	Lu8.0-s3p2d2f1	Lu8.0-s3p3d2f1
Hf_PBE19	12.0	Hf9.0-s3p2d2	Hf9.0-s3p2d2f1	Hf9.0-s3p3d2f1
Ta_PBE19	13.0	Ta7.0-s3p2d2	Ta7.0-s3p2d2f1	Ta7.0-s3p3d2f1
W_PBE19	12.0	W7.0-s3p2d2	W7.0-s3p2d2f1	W7.0-s3p3d2f1
Re_PBE19	15.0	Re7.0-s3p2d2	Re7.0-s3p2d2f1	Re7.0-s3p3d2f1
Os_PBE19	14.0	Os7.0-s3p2d2	Os7.0-s3p2d2f1	Os7.0-s3p3d2f1
Ir_PBE19	15.0	Ir7.0-s3p2d2	Ir7.0-s3p2d2f1	Ir7.0-s3p3d2f1
Pt_PBE19	16.0	Pt7.0-s3p2d2	Pt7.0-s3p2d2f1	Pt7.0-s3p3d2f1
Au_PBE19	17.0	Au7.0-s3p2d2	Au7.0-s3p2d2f1	Au7.0-s3p3d2f1
Hg_PBE19	18.0	Hg8.0-s3p2d2	Hg8.0-s3p2d2f1	Hg8.0-s3p3d2f1
Tl_PBE19	19.0	Tl8.0-s3p2d2	Tl8.0-s3p2d2f1	Tl8.0-s3p3d2f1
Pb_PBE19	14.0	Pb8.0-s3p2d2	Pb8.0-s3p2d2f1	Pb8.0-s3p3d2f1
Bi_PBE19	15.0	Bi8.0-s3p2d2	Bi8.0-s3p2d2f1	Bi8.0-s3p3d2f1

11 擬ポテンシャル

11.1 従来型擬ポテンシャル

OpenMX では、原子核のクーロンポテンシャルは、Morrison、Bylander、Kleinman により提案された ノルム保存擬ポテンシャル [36] で置き換えられます。これは Vanderbilt によるウルトラソフト擬ポテン シャル [37] のノルム保存型となっています。擬ポテンシャルは、ADPACK を使用して生成できますが、 ユーザーの利便性のために、擬ポテンシャルのデータベース Ver. 2019 が OpenMX の web サイトで公開 されています (ADPACK は原子の密度関数計算を行うためプログラムパッケージであり、OpenMX の web サイトで入手可能です)。データベースに保存されている擬ポテンシャルを使用する場合には、それ らをディレクトリ「openmx3.9/DFT_DATA19/VPS/」にコピーして下さい。ただし、ほとんどのデー タは既に OpenMX Ver. 3.9. の配布パッケージ内にコピー済みです。これらのデータは自由に利用するこ とが可能ですが、利用に伴う損害・不利益等については一切責任を負いかねますので、あらかじめご了承 下さい。擬ポテンシャルの指定は、基底関数の指定と同様にキーワード「Definition.of.Atomic.Species」 で行います。例えば次の様にして指定できます。

<Definition.of.Atomic.Species

H H6.0-s2p1 H_CA19

C C6.0-s2p2 C_CA19

Definition.of.Atomic.Species>

擬ポテンシャルのファイルは第3列で指定され、またそのファイルはディレクトリ「DFT_DATA19/VPS」 に存在する必要があります。さらに原子座標の指定の際、各原子のアップおよびダウンスピン状態に対 する電子数の指定を以下のように行うことが必要です。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

1	С	0.00000	0.00000	0.00000	2.0	2.0
2	Η	-0.889981	-0.629312	0.000000	0.5	0.5
3	Η	0.000000	0.629312	-0.889981	0.5	0.5
4	Η	0.000000	0.629312	0.889981	0.5	0.5
5	Η	0.889981	-0.629312	0.000000	0.5	0.5

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

ここで第6、7列は各原子のそれぞれアップおよびダウンスピン状態に対する初期電子数を与えます。原 子に対するアップおよびダウン電子数の合計は、擬ポテンシャルの生成時に考慮される価電子の数と等 価でなければなりません。それぞれの擬ポテンシャルに含まれている荷電子数は擬ポテンシャルファイ ル「*.vps」の中から見つけることができます。例えば、データベース Ver. 2019 内の炭素原子のファイ ル「C_PBE19.vps」の中に次の行があります。

valence.electron 4.0

数字「4.0」は擬ポテンシャルの生成で考慮される電子数です。従って上記の例では、アップスピン電子数 (2.0) およびダウンスピン電子数 (2.0) の合計は「Atoms.SpeciesAndCoordinates」で指定する「C」に対して 4.0 となります。表 1 と 2 にはデータベース Ver. 2019 内で提供される擬ポテンシャルの価電子数も示されていますので、参考にして下さい。

ユーザー自身で ADPACK を使用して擬ポテンシャルを作成する場合には、以下の点に注意する必要があります。

- 非物理的なゴースト状態が生じていないかを確認すること。擬ポテンシャルの分離形式を使用しているため、ゴースト状態が生じる可能性があります。目的とする系の計算を行う前に、単純な系に対してベンチマーク計算を行い、擬ポテンシャルが適切かどうかを確認するべきです。
- 部分内殻補正のために滑らかな内殻電子密度を作成すること。さもないと数値積分の積分グリッド
 に対して高いカットオフエネルギーが必要となり、計算コストが増大します。

さらなる詳細はプログラムパッケージ「ADPACK」のマニュアルを参照して下さい。ただし、高精度な 擬ポテンシャルを作成するには、最初に考える以上に多くの経験が必要になることを明記しておきます。

11.2 オープンコア型擬ポテンシャル

ランタノイドの 4f 電子は多くの場合にスピン分極しており、多数 (majority) スピン状態がフェルミエ ネルギーより数 eV 低くなります。しかし、LDA や GGA ではこれらのバンド構造の特徴を再現するこ とができません。4f 電子に対してオンサイトクーロン反発を導入する plus U 法を用いた計算によって この問題を解決することも可能ですが、OpenMX ではより簡便な方法として 4f 電子のスピン分極を組 み込んだオープンコア型擬ポテンシャルが利用可能です(ただし、2019 年版のデータベースでは一部の 原子のみに対応しています)。ランタノイドに対するオープンコア型擬ポテンシャルでは、4f 電子を内 殻状態の一部として扱います。また部分内殻補正電荷は内殻状態として扱われている 4f 電子の電荷分布 をよく再現するように生成されています。2019 年版データベースに収められている Nd_CA13_OC.vps と Nd_PBE19_OC.vps がこの方法で作成されたものです。

図4は、オープンコア擬ポテンシャルを用いた CaCu₅型構造の NdCo₅の計算結果を示しています。 これを見ると、オープンコア擬ポテンシャルを用いることで、LDA+U 法を用いた場合と定性的に同じ 結果が得られていることが分かります。OpenMX でオープンコア擬ポテンシャルを用いる場合には、以



Figure 4: (a) CaCu₅ 構造を持つ NdCo₅ の格子定数に対する全エネルギー変化。LDA 計算、4f 状態に 対して 4eV を使用した LDA+U 計算、オープンコア擬ポテンシャルを用いた計算の三つの場合を比較。 (b) (a) と同じ系におけるスピン磁気モーメント(化学式あたりの値を表示)。計算に用いた入力ファイル は、「work」ディレクトリの「NdCo5_4f.dat」、「NdCo5_4f+U.dat」、「NdCo5_OC.dat」を参照のこと。

下のキーワードにより部分内殻補正電荷をスピン分極させることができます。

<scf.pcc.opencore
 Nd 1
 Co 0
scf.pcc.opencore>

これは NdCo₅ に対する例であり、1 列目は「Definition.of.Atomic.Species」キーワードにて定義した原 子種名、2 列目はスピン方向を指定するフラグとなっています。部分内殻補正電荷は、z軸に沿って「1」 の場合には上向きに、「-1」の場合には下向きにスピン分極します。スピン分極させない場合には「0」を 指定します。このキーワードを用いることで、サイトごとに 4f 電子の開殻状態のスピン方向を制御す ることが可能です。オープンコア擬ポテンシャルは、隣接原子間で 4f 状態と軌道が重なっていない場 合に有効です。また化合物中での 4f 電子の占有状態が擬ポテンシャル生成時と大きく異なる場合には、 オープンコア擬ポテンシャルの適用は正当化されません。

11.3 内殻準位励起のための擬ポテンシャル

内殻準位を含んだ完全な相対論的擬ポテンシャル (VPS) と擬原子軌道 (PAO) のデータベースがデータ ベース Ver 2019 として利用可能です。この擬ポテンシャルと擬原子軌道は内殻励起スペクトルの計算に 対して使用されるものです。データベース Ver 2019 は以下のウェブサイトで利用できます。

https://t-ozaki.issp.u-tokyo.ac.jp/vps_pao_core2019/

B, C, N, O, Si, S, Ge 元素のデータが利用できます。固体や気体の内殻準位の絶対束縛エネルギーを計 算する際にはこれらの VPS と PAS のデータを使用しなければなりません。この計算で得られた絶対束 縛エネルギーは X 線光電子分光 (XPS) で測定される束縛エネルギーと直接に比較できます。本計算に 関しては内殻準位の絶対束縛エネルギー: XPS 内殻準位エネルギーの章も参照してください。

12 カットオフエネルギー:数値積分のための計算グリッドの設定

12.1 収束

計算精度と計算量は、数値積分およびポアソン方程式の解法で用いられるカットオフエネルギーにも依存します [42]。カットオフエネルギーはキーワード「scf.energycutoff」により制御されます。図5にカットオフエネルギーに対するメタン分子の全エネルギーの収束の様子を示します。ここで入力ファイルは「入力ファイル」の章で用いた「Methane.dat」です。カットオフエネルギーは基底関数に対してではなく、数値積分に対するものであることから、平面波基底系のようにカットオフエネルギーに応じて全エネルギーが高エネルギー領域から収束していくわけではありません。ほとんどの場合、150から200 Rydのカットオフエネルギーが最適な選択となります。しかしながら、300 Ryd以上のカットオフエネルギーを必要とする微妙な問題があることにも注意すべきです。極小点付近で非常に平坦なポテンシャル形状を計算する場合や、異なるスピン秩序間の小さなエネルギー差の計算がそのような微妙な問題となる可能性があります。

表 3 に水分子の構造パラメータと双極子モーメントのカットオフエネルギーへの依存性を示しま す。入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「H2O.dat」です。およそ 90 Ryd で収束した結果が得 られています。必要なカットオフエネルギー値は元素に依存しますが、多くの場合に 200 Ryd 程度で 収束解が得られるでしょう。しかしながら御自身の計算対象の系の物理的特性が、どの様にカットオ フエネルギーに依存しているのかチェックされることを推奨します。もう一方のカットオフエネルギー 「1DFFT.EnergyCutoff」に対しては、通常、デフォルト値として 3600 (Ryd)を使用しており、この値 で十分に収束しています。またその計算量も他の部分の計算と比較し、小さなものです。



Figure 5: カットオフエネルギーに対するメタン分子の全エネルギーの収束性。

Table 3: カットオフエネルギーに対する水分子の構造パラメータと双極子モーメントの収束性。入力ファ イルは「work」ディレクトリ内の「H2O.dat」。

Ecut(Ryd)	r(H-O) (Å)	\angle (H-O-H) (deg)	Dipole moment (Debye)
60	0.970	103.4	1.838
90	0.971	103.7	1.829
120	0.971	103.7	1.832
150	0.971	103.6	1.829
180	0.971	103.6	1.833
Exp.	0.957	104.5	1.85

12.2 バルクのエネルギー曲線計算に関するヒント

格子定数の関数としてバルク系のエネルギー曲線を計算する際には、エネルギー曲線に不連続性が現れ る場合があります。一般に、この不連続性は格子定数の変化に伴い積分に用いられている実空間グリッ ドのグリッド数が変化することによるものです。例として、図 6 に bcc-Fe のエネルギー曲線を示しま すが、カットオフエネルギーが固定であるとき (200 および 290 (Ryd)の場合)、エネルギー曲線が不連 続 (それほど顕著ではありませんが)になっていることが分かります。不連続なエネルギーの飛びは計算 グリッド数が変化する格子定数において発生しています。エネルギー曲線上の不連続性を避けるために、 キーワード「scf.Ngrid」が利用可能です。

scf.Ngrid 32 32 32 # n1, n2, and n3 for a-, b-, and c-axes

このキーワードによって実空間グリッド数が明示的に指定された場合には、キーワード「scf.energycutoff」 で指定したカットオフを参照することなしに、ここで与えたグリッド数で各単位胞ベクトルが離散化さ れます。図 6 から分かるように、32 × 32 × 32 に固定されたグリッドでの計算では滑らかな曲線が得ら れています。

12.3 構造格子の相対位置の固定

OpenMX Ver. 3.9 では、キーワード「scf.energycutoff」もしくは「scf.Ngrid」で生成された実空間の積 分グリッドは、一部のハミルトニアン行列要素の算出とポアソン方程式の解法に用いられています。ここ で一部のハミルトニアン行列要素とは、差電子密度から生じる Hartree ポテンシャルと交換相関ポテン シャルに対する行列要素のことです。従って全エネルギーは原子座標とグリッド間の相対位置に依存し ます。原子座標の関数として相互作用エネルギーやエネルギー曲線を計算する場合には、それらの一連 の計算に必要な全ての計算において、この相対位置を保持することが、誤差を軽減するために重要です。 相対位置を保持するためには、グリッド生成のための原点のx、y、z成分を全ての計算において共通にす る必要があります。標準出力には、次の様なグリッド生成時の原点となるx、y、z成分が「Grid_Origin」 として出力されています。

Grid_Origin xxx yyy zzz

ー連の計算を行う際にある一つの計算からこの値「xxx yyy zzz」を取得した後には、その他の全ての計算において同一の値を使用しなければなりません。「Grid_Origin」を明示的に指定するためには、次の キーワード「scf.fixed.grid」によって「xxx yyy zzz」を指定して下さい。



Figure 6: 格子定数の関数としての bcc 鉄の全エネルギー(実験による平衡格子定数 a₀ は 2.87Å)。2 原子を含む 立方単位胞により計算。入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「Febcc2.dat」。

scf.fixed.grid xxx yyy zzz

この手続きにより、原子座標とグリッドとの相対位置をほぼ保持することが可能となり、積分グリッド の使用に伴う数値誤差が軽減されます。

さらに、前節「バルクのエネルギー曲線計算に関するヒント」で議論したように、一連の計算において格子定数が変化する場合には、キーワード「scf.Ngrid」によりグリッド数を明示的に固定して下さい。

13 SCF 収束

13.1 概要

OpenMX Ver. 3.9 では、以下の7種類の電子密度混合法がキーワード「scf.Mixing.Type」により利用 可能です。

● 単純混合 (Simple)

関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight

反復部分空間における最小残差法 (RMM-DIIS) [58]

関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight, scf.Mixing.History, scf.Mixing.StartPulay

• Guaranteed reduction Pulay法 (GR-Pulay) [57]

関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight, scf.Mixing.History, scf.Mixing.StartPulay

• Kerker 混合 (Kerker) [59]

関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight, scf.Kerker.factor

• 電子密度に対する Kerker 計量付きの RMM-DIIS (RMM-DIISK) [58]

関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight, scf.Mixing.History, scf.Mixing.StartPulay, scf.Mixing.EveryPulay, scf.Kerker.factor

- Kohn-Sham ポテンシャルに対する Kerker 計量付きの RMM-DIIS (RMM-DIISV) [58]
 関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight, scf.Mixing.History, scf.Mixing.StartPulay, scf.Mixing.EveryPulay, scf.Kerker.factor
- Kohn-Sham ハミルトニアンに対する RMM-DIIS (RMM-DIISH) [58]

関連キーワード: scf.Init.Mixing.Weight, scf.Min.Mixing.Weight, scf.Max.Mixing.Weight, scf.Mixing.History, scf.Mixing.StartPulay, scf.Mixing.EveryPulay,

最初の3種類の方法においては、密度行列を混合することで入力密度行列が生成されます。密度行列は実 空間での量とみなすことができ、(スピン)電子密度に容易に変換することが可能です。一方、続く3種 類の方法(Kerker, RMM-DIISK, RMM-DIISV)では、フーリエ空間で電子密度混合が行われます。最 後の方法(RMM-DIISH)はKohn-Sham ハミルトニアンの混合が行われ、プラスUの計算や拘束条件 付の計算に有効な方法となっています。「RMM-DIIS」、「GR-Pulay」、「RMM-DIISK」による混合法 は全て Pulay 型混合法です。一般的に、大きなギャップを持つ系ではどの混合法を使用しても SCF 収束 を達成することが可能です。しかし、小さなギャップを持つ系や金属系では、SCF 計算における電子密度 の振動の問題(charge sloshing)がしばしば深刻となることから、SCF 収束を達成することは容易ではあ りません。そのような困難な系に対応するために、「Kerker」、「RMM-DIISK」あよび「RMM-DIISV」 による3種の混合法が利用可能です。この3種の混合法は金属系の SCF 収束を達成するための有効な方 法です。「Kerker」、「RMM-DIISK」または「RMM-DIISV」を使用する際には、SCF 計算の収束を加 速するために以下の処方が有用です。

- 「scf.Mixing.History」を増やす。30から50の比較的大きな値によって収束しやすくなります。
 さらに「scf.Mixing.EveryPulay」は1に設定されなければなりません。
- 「scf.Mixing.StartPulay」に、大きめの値を使用する。Pulay型の混合を開始する前に、ある程度の収束を達成しなければなりません。「scf.Mixing.StartPulay」の適切な値はおそらく 10 から 30 でしょう。
- 金属系の場合には「scf.ElectronicTemperature」に大きめの値を使用する。
 「scf.ElectronicTemperature」があまりに低い場合には、しばしば数値的不安定性が発生します。



Figure 7:5 種類の電子密度混合法における密度行列もしくは電子密度の残差ノルムのSCF 収束の過程。(a) シア ル酸分子、(b) Pt₁₃ クラスタ、(c) Pt₆₃ クラスタ。入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「SialicAcid.dat」, 「Pt13.dat」、「Pt63.dat」。

SCF 計算における電子密度の振動は一般に電子密度の長波長成分から生じています。 波数 q の関数で ある Kerker 重み w_q を次式の内積計算に導入することで、この長波長成分からの振動を抑制すること ができます。ここで振動の抑制度合は Kerker 因子 α を調整することで制御され、その値はキーワード 「scf.Kerker.factor」で与えることができます。

$$\langle A|B\rangle = \sum_{\mathbf{q}} \frac{A_{\mathbf{q}}^* B_{\mathbf{q}}}{w_{\mathbf{q}}}$$

$$w_{\mathbf{q}} = \frac{|\mathbf{q}|^2}{|\mathbf{q}|^2 + q_0^2}$$

$$q_0 = \alpha |\mathbf{q}_{\min}|$$

ここで、q_{min}は0ベクトルを除く最小の大きさを持つ qベクトルです。大きな α は電子密度の振動を大幅に抑制しますが、収束が遅くなる可能性があります。最適値は系に依存しますので、計算対象の系に 適した値を、ユーザーが調整することが必要です。

さらに、「RMM-DIISK」の振る舞いは次のキーワードにより調整することができます。

scf.Mixing.EveryPulay 5 # default = 1

Pulay 型混合法の残差ベクトルは、混合ステップが累積するにつれてある特定の部分空間を張るだけとなり、このため、その部分空間に直交した線型独立な新しいベクトル成分が導入されないために収束が困難になってきます。この線形従属問題を回避する一つの方法は、Kerker 混合の合間に時折 Pulay 型混合を行うことです。この方法ではキーワード「scf.Mixing.EveryPulay」を使用して頻度を指定することができます。例えば「scf.Mixing.EveryPulay=5」の場合、5回の SCF 反復ごとに Pulay 混合が、他のステップでは Kerker 型混合が行われます。「scf.Mixing.EveryPulay=1」は従来の Pulay 型混合に対応します。キーワード「scf.Mixing.EveryPulay」は「RMM-DIISK」に対してのみ使用でき、デフォルト値は「1」であることに注意して下さい。

SCF 収束性を向上させるための上記の処方箋は多くの場合に有効です。しかし、収束を加速させるために最も推奨されるのは以下の方法です。

• 「scf.Mixing.History」を増やす。30から50の比較的大きな値によって収束しやすくなります。 さらに「scf.Mixing.EveryPulay」は1に設定しなければなりません。

RMM-DIIS、RMM-DIISK、RMM-DIISVなどのPulay型混合は準ニュートン法に基づいていることから、 収束速度はいかに適切な近似ヘッセ(Hessian)行列を見つけられるかに依存します。「scf.Mixing.History」 を大きくするに従い、計算される近似ヘッセ行列の精度が向上する可能性があります。

図 7 は (a) シアル酸分子、(b) Pt_{13} クラスタ、(c) Pt_{63} クラスタに対する 7 種類の混合法の SCF 収 束の比較を示しています。密度行列もしくは電子密度の残差ノルムは「*System.Name.out*」ファイル内 で NormRD として記録されています。またこの計算で用いた入力ファイルは「work」ディレクトリ内の 「SialicAcid.dat」、「Pt13.dat」、「Pt63.dat」です。図 7 に示された全ての系に対して「RMM-DIISK」 と「RMM-DIISV」が頑健に動作していることがわかります。SCF 収束が極めて困難な場合では、大き な「scf.Kerker.factor」および小さな「scf.Max.Mixing.Weight」を用いた「Kerker」の使用が必要とな りますが、多くの場合で、「RMM-DIISK」と「RMM-DIISV」が最良の選択となります。図 7 には示さ れていませんが、我々の経験上、plus U 法と拘束法には「RMM-DIISH」が適切です。 入力ファイルでキーワード「scf.Kerker.factor」が与えられていない場合、次式により Kerker 因子 α の 適切な値が自動的に推定されます。

$$\alpha = \frac{0.5}{|\mathbf{b}_{\min}|^2} \left(4\frac{Dq}{Aq} + 1.0 \right),$$

このとき、

$$Aq = \frac{1}{3} \left(|\mathbf{b}_1|^2 + |\mathbf{b}_2|^2 + |\mathbf{b}_3|^2 \right),$$
$$Dq = \frac{1}{3} \sum_{i < j} \left| |\mathbf{b}_i|^2 - |\mathbf{b}_j|^2 \right|,$$

となります。ここで、 \mathbf{b}_i (i = 1, 2, 3) は逆格子ベクトルであり、 \mathbf{b}_{\min} は { \mathbf{b} } 内での最小ベクトルです。この式では系のサイズと異方性に対する α の依存性が考慮されています。一連の数値計算から、推測した値はほとんどの場合に、適切に機能していることが分かっています。

13.3 SCF 収束パラメータの on-the-fly での調整

SCF 計算を行っている途中で SCF 収束に関する以下のパラメータを変更することが可能です。

scf.maxIter
scf.Min.Mixing.Weight
scf.Max.Mixing.Weight
scf.Kerker.factor
scf.Mixing.StartPulay

例えば、入力ファイルで次の2種類のキーワードを以下のように指定した場合には、

System.CurrrentDirectory	./	<pre># default=./</pre>
System.Name	c60	

ディレクトリ「./」内に「c60_SCF_keywords」という名前のファイルを作成して下さい。このファイル 中に例えば、以下のように記述します。

scf.maxIter	100
<pre>scf.Min.Mixing.Weight</pre>	0.01
<pre>scf.Max.Mixing.Weight</pre>	0.10
scf.Kerker.factor	10.0
<pre>scf.Mixing.StartPulay</pre>	30
scf.criterion	1.0e-6

OpenMX は SCF ステップ毎にファイル「c60_SCF_keywords」をチェックします。ファイルの読み込み に成功した場合には、標準出力に次のメッセージが表示されます。

The keywords for SCF iteration are renewed by ./c60_SCF_keywords.

また、キーワード「scf.maxIter」に対して負の値が与えられた場合には、OpenMX は終了します。大規 模計算を行う場合、on-the-fly での SCF 収束パラメータの調整は有用でしょう。

14 再スタート

14.1 概要

状態密度、バンド分散、分子軌道などの計算を行う場合には予め自己無撞着計算を行っておき、二回目 以降の計算では自己無撞着計算をスキップすれば、計算時間を節約することができます。この計算の再 スタートを行うためのキーワードが「scf.restart」として用意されています。

scf.restart on # on|off,default=off

キーワード「scf.restart」を「on」にすると、最初の計算で作成された再スタート用のファイルが読み込 まれ、二回目の計算での初期のハミルトニアンおよび(スピン)電子密度として使用されます。ここで二回 目の計算の「System.Name」は最初の計算と同一でなければなりません。再スタートファイルは「work」 ディレクトリの下の「System.Name_rst」ディレクトリ内に保存されています。ここでSystem.Name は 「System.Name」を意味します。「System.Name_rst」内の再スタートファイルは密度行列混合法および フーリエ空間混合法の両方に関係する全ての情報を含んでいます。従って、二回目の計算において他の 混合法を使用することも可能です。再スタートの例として、図8にSCF計算の過程を示します。この計 算は「work」ディレクトリ内にある入力ファイル「C60.dat」を用いて行ったものです。図8より、二 回目の計算では再スタートファイルの使用によりSCF計算がすぐに終了していることが分かります。



Figure 8: C_{60} 分子の SCF 収束。二回目の計算では、最初の計算により生成された再スタートファイルを使用。 入力ファイルは「work」ディレクトリ内にある「C60.dat」。

14.2 MD および構造最適化中の外挿法

構造最適化および分子動力学 (MD) シミュレーションでは、SCFの収束を加速するために、過去のステップで生成された再スタートファイルが自動的に利用されます [60, 61]。この方法は電子密度の外挿法に

基づいており、外挿に用いる過去のステップ数をキーワード「scf.ExtCharge.History」により設定できます。

scf.ExtCharge.History 2 # default=2

ー連のベンチマーク計算から、「scf.ExtCharge.History」を2に設定すると収束が加速し、それ以上の大きな値を用いると数値的に不安定となることが分かっています。従って、デフォルト値の2を使用することを推奨します。

14.3 再スタート計算用の入力ファイル

構造最適化および分子動力学(MD)シミュレーションの各ステップにおいて、再スタート計算用の入力 ファイル「System.Name.dat#」が出力されます。「System.Name.dat#」には最終ステップでの原子座 標が挿入されており、また「構造格子の相対位置の固定」の章で説明された「Grid_Origin」の設定も行 われています。この入力ファイル「System.Name.dat#」を用いて構造最適化および分子動力学(MD) シミュレーションを前回の最終ステップから継続することが可能です。

15 構造最適化

15.1 最急降下法

構造最適化の例を本章で説明します。初期構造として、「入力ファイル」の章で扱ったメタン分子を取り 上げますが、メタン分子の炭素原子の *x* 座標が以下のように 0.3 Å に変更されています。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates</pre>

С	0.300000	0.000000	0.000000	2.0	2.0
Η	-0.889981	-0.629312	0.000000	0.5	0.5
Η	0.00000	0.629312	-0.889981	0.5	0.5
Η	0.00000	0.629312	0.889981	0.5	0.5
Η	0.889981	-0.629312	0.000000	0.5	0.5
	С Н Н Н	C 0.300000 H -0.889981 H 0.000000 H 0.000000 H 0.889981	C0.3000000.000000H-0.889981-0.629312H0.0000000.629312H0.0000000.629312H0.889981-0.629312	C0.3000000.0000000.000000H-0.889981-0.6293120.000000H0.0000000.629312-0.889981H0.0000000.6293120.889981H0.889981-0.6293120.000000	C0.3000000.0000000.0000002.0H-0.889981-0.6293120.0000000.5H0.0000000.629312-0.8899810.5H0.889981-0.6293120.0000000.5

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

次に、キーワード「MD.type」を「Opt」に、キーワード「MD.maxIter」を200 に設定します。「Opt」 は可変の前因子を持った最急降下法です。メタン分子の構造最適化の収束履歴を図 9 (a) に示します。図 では構造最適化のステップに対して原子にかかる力の絶対最大値を示しています。最急降下法では収束の 状況に応じて前因子を変化させるため、前因子が大きくなりすぎて構造が停留点を越えていることが見て 取れます。その後で完全な収束に至っています。この計算は「work」ディレクトリ内の「Methane2.dat」 を使用することにより、再現することができます。またメタン分子の場合と同様、図 9 (b) に示すよう にダイアモンド構造のケイ素に対しても類似した挙動を見ることができます。



Figure 9: (a) メタン分子 と (b) ダイアモンド構造のケイ素の原子の構造最適化における原子にかかる力の絶対最大値。初期構造は平衡構造から変形されたものを使用。入力ファイルはそれぞれ、「work」ディレクトリ内の「Methane2.dat」および「Si8.dat」。

15.2 EF、BFGS、RF、DIIS 最適化

「Opt」は頑健な方法ですが、一般的に収束速度は遅いと言えます。より高速な方法として、準ニュートン法に基づいた構造最適化手法が利用可能です。デカルト座標内で実行される固有ベクトル追跡(EF)法 [63]、Broyden-Fletcher-Goldfarb-Shanno(BFGS)法[65]、合理的関数(RF)法[64]、そして反復部分空間(DIIS)法[62]がサポートされています。EF および RF 法では、近似ヘシアンは BFGS 法により更新されます。キーワード「MD.Type」により、「Opt」、「EF」、「BFGS」、「RF」、「DIIS」の一つを選択して下さい。関連キーワードは次の通りになります。

MD.Type	EF	<pre># Opt DIIS BFGS RF EF</pre>
MD.Opt.DIIS.History	3	# default=3
MD.Opt.StartDIIS	5	# default=5
MD.Opt.EveryDIIS	200	# default=200
MD.maxIter	100	# default=1
MD.Opt.criterion	1.0e-4	<pre># default=0.0003 (Hartree/Bohr)</pre>

特に、これらの準ニュートン法に基づいた構造最適化法は次の2つのキーワードにより制御されます。

MD.Opt.DIIS.History	3	<pre># default=3</pre>
MD.Opt.StartDIIS	5	# default=5

キーワード「MD.Opt.DIIS.History」は近似へシアンを更新するための過去の履歴ステップ数を指定し ます。デフォルト値は3です。また、「EF」、「BFGS」、「RF」、「DIIS」を開始する構造最適化ステップ をキーワード「MD.Opt.StartDIIS」により指定します。これらの方法を開始する前の構造最適化ステッ プは、最急降下法により実行されます。デフォルト値は5です。

最適化の初期ステップは初期構造における力の最大値(絶対値)を参照することで自動的に調整されます。図 10 は、分子やバルクにおいて力の最大値(絶対値)が0.0003 Hartree/Bohr 以下に到達するまでの構造最適化ステップ数を示しています。ここに示されるように、EF および BFGS 法も同様な性能を示しているものの、ほとんどの場合に RF 法が最もロバストで効率的な方法です。これらの計算に使用された入力ファイルと出力ファイルは「work/geoopt_example/」ディレクトリ内にあります。

また、これらの準ニュートン法により、構造が最小停留点よりもむしろ鞍点に収束される可能性も あることに注意すべきです。これは、準ニュートン法の使用が開始された時の構造が変曲点に達しない 場合に起こり得ます。そのような場合には、準ニュートン法に移る前に、構造を最急降下法により十分 に最適化するべきです。対処方法は、「MD.Opt.StartDIIS」に対して大きな値を使用するだけです。十 分な収束に対して多数の反復ステップが要求される系では、ファイル「System.Name.dat#」を使用し て計算を再スタートすることも必要かも知れません。ここで「System.Name」は入力ファイルで指定し た「System.Name」です。

一般的に、「scf.energy.cutoff」に大きな値を用いることでエネルギー曲線が滑らかになり、結果として収束性を早めることができます。これは分子固体などの弱く相互作用している系において特に顕著です。このような弱く相互作用している系においては、300-400Ry 程度の大きな「scf.energy.cutoff」の使用が推奨されます。



Figure 10: (a) 分子系および (b) バルク系に対する構造最適化の反復回数。収束判定条件は原子に働く力の絶対 最大値が 3×10^{-4} Hartree/Bohr 以下。

15.3 RF 及び EF 最適化におけるヘシアン行列の初期値

RF 及び EF 最適化では2種類の初期へシアン行列が使用可能であり、以下のように設定します。

MD.Opt.Init.Hessian Schlegel # Schlegel|iden, default=Schlegel

デフォルトの「Schlegel」はSchlegel [66] によって提案された方法であり、結合の伸縮・屈曲・捻りか らなる単純なモデルに基づき初期ヘシアン行列を見積もります(OpenMX Ver.3.9 では結合の伸縮のみ を考慮して初期ヘシアン行列を構築します)。もう1つの「iden」では、ヘシアン行列を単位行列とし て計算を開始します。どちらの方法においても、ヘシアン行列は構造最適化ステップごとに Broyden-Fletcher-Goldfarb-Shanno (BFGS) 法 [65] を用いて更新されます。構造最適化手法として「BFGS」、 「DIIS」を用いた場合には「Schlegel」は使用できないことに注意して下さい。一般的に「iden」よりも 「Schlegel」の方が収束性がよいため、「Schlegel」をデフォルトとして設定しています。「EF」を用いた 最適化における「Schlegel」と「iden」の比較を図 11 に示しましたが、ほとんどの分子系やバルク系に おいて「Schlegel」の方が少ないステップ数で収束していることが分かります。


Figure 11: 初期へシアン行列を「iden」、「Schlegel」とした際の、力の最大値が 3×10^{-4} Hartree/Bohr を下回るまでに要した最適化ステップ数 (a) 分子系 (b) バルク系

15.4 制約条件付の構造最適化

構造最適化の際に任意の原子座標を初期座標に固定することができます。この制約条件はキーワード 「MD.Fixed.XYZ」を用いて各原子のx、y、z座標に対して、以下のように設定します。

<MD.Fixed.XYZ 1 1 1 1 2 1 0 0 MD.Fixed.XYZ>

上記の例は 2 つの原子から構成される系の場合です。系に N 個の原子がある場合、N 個分の指定が必要 です。第 1 列は「Atoms.SpeciesAndCoordinates」で個々の原子を特定するのに使用した連番です。第 2~4 列は、それぞれ x、y、z 座標のフラグです。フラグが「1」の場合には座標を固定、「0」の場合に は緩和されます。上記の例では、原子 1 の x、y、z 座標は固定、原子 2 は x 座標のみが固定されていま す。デフォルトでは全ての座標が緩和される指定になっています。このキーワードによる原子座標の固 定は、すべての構造最適化および分子動力学の方法において有効です。制限条件付の構造最適化は大規 模な系の局所構造の精密化にとって有用でしょう。

15.5 構造最適化の再スタート

最初の構造最適化の試行により、収束条件に達しなかった場合には、入力ファイル「System.Name.dat#」 を使って構造最適化を再スタートすることができます。入力ファイル「System.Name.dat#」は構造最 適化の各ステップで生成され、最終ステップでの幾何構造が挿入されています。構造最適化を再スター トさせるには最終ステップでの幾何構造を用いるだけでなく、最初の試行で計算された近似ヘシアン を用いることも必要です。OpenMX Ver. 3.9 では、近似ヘシアンも構造最適化ステップ毎に保存さ れ、「System.Name.dat#」により再スタートを行うときに自動的に再利用されます。そのため、「System.Name.dat#」を用いて複数の計算によって断続的に構造最適化が行われたとしても、構造最適化ス テップのための反復回数は単一計算の場合と同じになります。実行時間に制限がある共用計算システム を用いて、大規模系を最適化する場合にはこの機能が有用となるでしょう。

16 セル可変構造最適化

16.1 概要

OpenMX Ver.3.9 ではセル可変の構造最適化を拘束条件あり/なしの双方で使用可能となっています。関連するキーワードは以下の通りです。

MD.Type	RFC5	<pre># OptC1 OptC2 OptC3 OptC4 OptC5</pre>
		# OptC6 OptC7 RFC5 RFC6 RFC7
MD.Opt.DIIS.History	3	# default=3
MD.Opt.StartDIIS	5	# default=5
MD.Opt.EveryDIIS	200	# default=200
MD.maxIter	100	# default=1
MD.Opt.criterion	1.0e-4	<pre># default=0.0003 (Hartree/Bohr)</pre>

上記のキーワードは「構造最適化」セクションとまったく同じものなので、セル可変の構造最適化は従来の構造最適化と同様に制御可能です。セル可変の構造最適化は plus U 法を含めたコリニア計算のみに 利用可能です。ただし DFT-D2 法及び DFT-D3 法による vdW 相互作用はサポートしていません。セル 可変の構造最適化は「MD.Type」によって指定し、以下のオプションが選択可能です。

• OptC1

初期内部座標を維持したまま、格子ベクトルに拘束をかけずに最適化を行います。最適化は、最急 降下法によって行われます。

• OptC2

初期内部座標を維持したまま、格子ベクトル間の角度を初期値に固定して最適化を行います。従って、格子ベクトルの長さのみが最適化されます。最適化は、最急降下法によって行われます。

• OptC3

初期内部座標を維持したまま、格子ベクトル間の角度を初期値に固定し、格子ベクトルの長さも 互いに等しい状態を保ったまま最適化を行います: $|\mathbf{a}_1| = |\mathbf{a}_2| = |\mathbf{a}_3|$ 。従って、格子ベクトルの長 さのみが最適化されます。最適化は、最急降下法によって行われます。

• OptC4

初期内部座標を維持したまま、格子ベクトル間の角度を初期値に固定し、格子ベクトルの長さを 以下の拘束条件のもとで最適化します: $|\mathbf{a}_1| = |\mathbf{a}_2| \neq |\mathbf{a}_3|$ 。従って、格子ベクトルの長さのみが最 適化されます。最適化は、最急降下法によって行われます。

• OptC5

格子ベクトル、内部座標ともに拘束をかけずに同時に最適化を行います。最適化は、最急降下法に よって行われます。

• OptC6

格子ベクトル a₃ を固定したまま、格子ベクトルと内部座標ともに同時に最適化を行います。最適 化は、最急降下法によって行われます。 • OptC7

格子ベクトル a₂ と a₃ を固定したまま、格子ベクトルと内部座標ともに同時に最適化を行います。 最適化は、最急降下法によって行われます。

• RFC5

格子ベクトル、内部座標ともに拘束をかけずに同時に最適化を行います。このオプションでは、RF 法 [64] と DIIS 法 [62] の混合による内部座標の最適化が、BFGS 法 [65] を用いたヘシアン行列の 更新と共に行われます。初期ヘシアン行列は「MD.Opt.Init.Hessian」によって「iden」もしくは 「Schlegel」で指定し、デフォルトでは「Schlegel」が設定されています(詳細は「構造最適化」の 章をご参照下さい)。

• RFC6

格子ベクトル a₃ を固定したまま、格子ベクトルと内部座標ともにを同時に最適化を行います。最 適化は RFC5 と同じ方法で行われます。

• RFC7

格子ベクトル a₂ と a₃ を固定したまま、格子ベクトルと内部座標ともにを同時に最適化を行います。最適化は RFC5 と同じ方法で行われます。

目的に応じて上記のオプションを選択して下さい。将来的には、上記以外の拘束条件も実装予定です。 セル可変の構造最適化の例として、ダイヤモンド構造の格子ベクトルと内部座標の同時最適化を以 下に示します。計算は以下のコマンドによって行います。

% mpirun -np 16 openmx Cdia-RFC5.dat > Cdia-RFC5.std &

入力ファイル「Cdia-RFC5.dat」は「work/cellopt_example」ディレクトリに収められていますので、同じ計算を実施することが可能です。この計算例では、初期構造は以下のように歪んでいます。

```
Atoms.Number
                    2
Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit frac # Ang|AU
<Atoms.SpeciesAndCoordinates
  1
       С
            0.10000000000000
                                0.00000000000000
                                                  -0.05000000000000
                                                                        2.0
                                                                                2.0
  2
            0.2500000000000
                                0.2500000000000
                                                  0.25000000000000
                                                                        2.0
                                                                                2.0
       С
Atoms.SpeciesAndCoordinates>
Atoms.UnitVectors.Unit
                                 Ang # Ang|AU
<Atoms.UnitVectors
 1.6400 1.6400 0.0000
 1.6400 0.0000 1.6400
 0.0000 1.6400 1.6400
```

Atoms.UnitVectors>

クラスタ計算機(Intel Xeon of 2.6 GHz)では12回の最適化ステップに326秒を要しました。全エネル ギーと原子座標もしくは格子ベクトルに対する全エネルギーの最大勾配を「System.Name.out」にて確 認できます。この計算例の場合には、「Cdia-RFC5.out」にて以下の情報を得ることができます。

MD_iter	SD_scaling	Maximum force	Maximum step	Utot	Enpy	Volume
		(Hartree/Bohr)	(Ang)	(Hartree)	(Hartree)	(Ang ³)
1	1.25981732	0.16438857	0.10583545	-11.59621750	-11.59621750	8.82188800
2	1.25981732	0.08853079	0.05902053	-11.64994330	-11.64994330	9.81261691
3	1.25981732	0.04581932	0.03054622	-11.66453803	-11.66453803	10.28662955
4	1.25981732	0.02205340	0.01470227	-11.66928384	-11.66928384	10.56026328
5	3.14954331	0.01336972	0.02228286	-11.67121215	-11.67121215	10.73689973
6	3.14954331	0.00678359	0.01130598	-11.67332696	-11.67332696	11.04288573
7	3.14954331	0.00487464	0.01195765	-11.67421713	-11.67421713	11.13669753
8	3.14954331	0.00354039	0.02370087	-11.67479906	-11.67479906	11.18107598
9	3.14954331	0.00157491	0.00373195	-11.67534267	-11.67534267	11.29495641
10	3.14954331	0.00137813	0.00160469	-11.67537385	-11.67537385	11.34330266
11	3.14954331	0.00067979	0.00165878	-11.67538616	-11.67538616	11.37836604
12	3.14954331	0.00003708	0.0000000	-11.67538985	-11.67538985	11.39519327

最大勾配の絶対値が速やかに収束しており、閾値である 0.0003 Hartree/bohr に到達していることが見 て取れます。「work/cellopt_example」に、その他のセル可変構造最適化の例が含まれていますので参考 にして下さい。

16.2 ストレステンソル

ここまで「MD.Type」キーワードによるセル可変の構造最適化を説明してきましたが、これらの方法で はストレステンソルは歪みに対する全エネルギーの勾配から解析的に自動計算され、格子ベクトルに対 する勾配として変換されていました。セル可変の構造最適化を実施せずに、格子ベクトルに対する全エ ネルギーの勾配を求めたい場合には、以下のキーワードを用いて下さい。

scf.stress.tensor on # on|off, default=off

「scf.stress.tensor」キーワードが「on」の場合には、「*System.Name*.out」に格子ベクトルに対する全エネルギーの勾配が出力されます。

16.3 格子ベクトルに対する拘束

「MD.Type」キーワードにて「OptC1」、「OptC2」、「OptC5」を指定した場合には、以下のように格 子ベクトルのデカルト成分を初期値のまま固定することが可能です。設定するキーワードは以下となり ます。

<MD.Fixed.Cell.Vectors

- 0 0 1
- 0 0 0
- 0 0 0
- MD.Fixed.Cell.Vectors>

1行目のフラグは a_x , a_y , a_z , 2行目は b_x , b_y , b_z , 3行目は c_x , c_y , c_z に対応します。「1」の場合には成分 を固定し、「0」の場合には可変とします。

16.4 エンタルピーの最適化

印加された圧力のもとで可変セルの最適化を実行できます。これは次式のエンタルピー *H* を最小化する ことでなされます。

$$H = E + pV, \tag{1}$$

ここで *E* は単位胞あたりの全エネルギー、*p* は印加された圧力、そして *V* は単位胞の体積です。エンタ ルピーの最適化を実行するには入力ファイルに以下のキーワードを含めるだけです。

MD.applied.pressure 10.0 # in GPa, default=0

正の圧力はセルの圧縮に対応します。この機能はキーワード「MD.Type」に指定できる'OptC1', 'OptC2', 'OptC3', 'OptC4', 'OptC5', 'OptC6', 'OptC7'、さらに'RFC5', 'RFC6', and 'RFC7' と互換性がありま す。例として、ディレクトリ'work' 内の入力ファイル Si8-pV.dat を用いてエンタルピーの最適化を実行 できます。これは 10GPa 下での Si 結晶の最適化です。計算後、出力ファイル si8-pV.out に最適化の履 歴が確認できます。

MD_iter	SD_scaling	Maximum force	Maximum step	Utot	Enpy	Volume
		(Hartree/Bohr)	(Ang)	(Hartree)	(Hartree)	(Ang ³)
1	1.25981732	0.07663140	0.05108760	-32.84057849	-32.47335956	160.10300700
2	1.25981732	0.06717954	0.04478636	-32.84541333	-32.48138995	158.70978745
3	1.25981732	0.05879663	0.03919775	-32.84853574	-32.48736913	157.46427382
4	1.25981732	0.05131728	0.03421152	-32.85047522	-32.49182806	156.36581813
5	3.14954331	0.04468030	0.07446716	-32.85159836	-32.49515060	155.40690918
6	3.14954331	0.02956430	0.04927383	-32.85232293	-32.50062291	153.33695214
7	3.14954331	0.01960389	0.03267316	-32.85158714	-32.50293764	152.00696345
8	3.14954331	0.01318467	0.02197446	-32.85069024	-32.50392104	151.18717226
9	7.87385828	0.00909382	0.03789092	-32.84998761	-32.50434789	150.69473500
10	7.87385828	0.00253118	0.00537839	-32.84867882	-32.50470324	149.96919000
11	7.87385828	0.00198428	0.03321825	-32.84877730	-32.50477155	149.98234416
12	7.87385828	0.00271856	0.01866538	-32.84922787	-32.50499775	150.08016284
13	7.87385828	0.00086782	0.00943670	-32.84942256	-32.50507226	150.13256385
14	7.87385828	0.00077020	0.00982293	-32.84949585	-32.50509162	150.15607426
15	7.87385828	0.00020223	0.00270074	-32.84950610	-32.50511244	150.15146767
16	7.87385828	0.00005544	0.0000000	-32.84950546	-32.50511390	150.15055140

全エネルギーの減少よりむしろ体積の収縮によりエンタルピーが実際に最適化されることが確認で きます。

さらに、以下のキーワードで直交結晶系において特定の軸のみに圧力をかけることもできます。

MD.applied.pressure.flag 1 1 1 # default=1 1 1

既定の設定は「111」で、これは a、b、そして c 軸に沿って等しく印加された等方的な圧力を意味します。このキーワードに「100」を指定すると、圧力は直方体結晶系の bc 面に垂直な方向である a 軸のみに沿って印加されます。この機能は直方体結晶系に有効です。この場合は以下のように非零の要素が対角要素となるように単位ベクトルを与える必要があります。

<Atoms.UnitVectors

10.000 0.000 0.000 0.000 8.000 0.000 0.000 0.000 11.000 Atoms.UnitVectors>

直方体結晶系以外では他の格子ベクトルで定義される面に垂直な格子ベクトルに沿った非等方的な圧力を 印加することになります。この状況は六方晶系の例で見られ、このキーワードを以下の様に指定します。

MD.applied.pressure.flag 0 0 1 # default=1 1 1

<Atoms.UnitVectors
 6.000 0.000 0.000
 -3.000 5.196 0.000
 0.000 0.000 10.000
Atoms.UnitVectors>

17 分子動力学

OpenMX Ver 3.9 では次の5種類の分子動力学シミュレーションが実行可能です。

- 定エネルギーの分子動力学 (NVE)
- 速度スケーリングによる定温 (NVT) 分子動力学 (NVT_VS)
- 各原子に対して独立に速度スケーリングを考慮した定温 (NVT) 分子動力学 (NVT_VS2)
- 能勢-Hoover 法による定温 (NVT) 分子動力学 (NVT_NH)
- 多重熱浴分子動力学 (NVT_VS4)

各分子動力学シミュレーションの詳細を以下に説明します。

17.1 定エネルギーの分子動力学 (NVE)

キーワード「MD.Type」を「NVE」と指定することで、定エネルギーの分子動力学シミュレーションが 実行可能です。

MD.Type NVE # NOMD|Opt|NVE|NVT_VS|NVT_VS2|NVT_NH

MDの各ステップで計算される数値は、出力ファイル「*System.Name.*ene」(*System.Name*は「System.Name」 を意味します)に記録されます。詳細は、「source」ディレクトリ内のファイル「iterout_md.c」に書か れていますが、いくつかの数値に関して、ここに示しておきます。

1:	MD step
2:	MD time (fs)
14:	kinetic energy of nuclear motion, Ukc (Hartree)
15:	DFT total energy, Utot (Hartree)
16:	Utot + Ukc (Hartree)
17:	Fermi energy (Hartree)

出力ファイル「*System.Name.*ene」中で、最初の列は MD Step (MD ステップ) 2番目の列は MD time (MD 時間) 等に対応しています。

17.2 速度スケーリングによる NVT 分子動力学 (NVT_VS)

キーワード「MD.Type」を「NVT_VS」と指定することで、 速度スケーリング法 [30] による NVT ア ンサンブル分子動力学シミュレーションが実行可能です。

MD.Type NVT_VS # NOMD|Opt|NVE|NVT_VS|NVT_VS2|NVT_NH

この NVT 分子動力学では原子運動の温度は、以下の書式で制御することができます。

<MD.TempControl

3 100 2 1000.0 0.0 400 10 700.0 0.4 700 40 500.0 0.7

MD.TempControl>

この書式の最初の行は「<MD.TempControl」であり、最後の行は「MD.TempControl>」です。最初の「3」は温度制御のために必要な行の数です。この場合には、引き続く3行で温度の指定を行っており、 最初の列の数字は MD のステップ数を表し、2列目の数字は速度スケーリングが行われる MD ステップ の間隔を与えます。この計算例では、速度スケーリングは、MD ステップが100 回までは2回毎に行わ れ、MD ステップの100 回目から400 回目までは10 回ごとに行われ、さらに MD ステップ 400 回から 700 回では40 回ごとに行われます。3番目と4番目の列は、それぞれ設定温度 T_{give} (K) とその区間での スケーリング・パラメータ α を表します。またその区間中における温度は線形補間によって与えられま す。速度は次式を用いてスケーリングされます。

$$s = \sqrt{\frac{T_{\text{given}} + (T_{\text{calc}} - T_{\text{given}}) * \alpha}{T_{\text{calc}}}}$$

$$\mathbf{v}_i' = \mathbf{v}_i \times s$$

ここで、 T_{given} および T_{calc} はそれぞれ設定温度と原子の運動から計算された温度です。「NVT_VS」法で は、全原子の速度を使って温度を計算します。一方、「NVT_VS2」では、各原子の速度を用いて局所温度 が評価され、速度スケーリングをその局所温度に基づき行います。「MD.TempControl」で指定された最 後の MD ステップが終了すると、NVT アンサンブルは NVE アンサンブルに切り替わります。各 MD ス テップで計算された数値は、出力ファイル「System.Name.ene」(「System.Name」は「System.Name」 を意味します)に記録されます。詳細は、「source」ディレクトリ内のファイル「iterout_md.c」に書か れていますが、いくつかの数値に関して、ここに示しておきます。

- 1: MD step
- 2: MD time (fs)
- 14: kinetic energy of nuclear motion, Ukc (Hartree)
- 15: DFT total energy, Utot (Hartree)
- 16: Utot + Ukc (Hartree)
- 17: Fermi energy (Hartree)
- 18: Given temperature for nuclear motion (K)
- 19: Calculated temperature for nuclear motion (K)
- 22: Nose-Hoover Hamiltonian (Hartree)

出力ファイル「*.ene」中で、最初の列は MD Step (MD ステップ) 2番目の列は MD time (MD 時間) 等に対応しています。例として、図 12 (a) にグリシン分子の速度スケーリングによる MD 計算の結果を 示します。分子の温度が設定温度の周辺で振動していることが分かります。分子動力学シミュレーショ ンの可視化には OpenMX Viewer [152, 151] や XCrySDen [105] が利用できます。これらのソフトウエ アを用いて、出力ファイル「System.Name.md」を簡単にアニメーションとして可視化できます。

17.3 Nose-Hoover 法による NVT 分子動力学 (NVT_NH)

キーワード「MD.Type」を「NVT_NH」と指定することで、能勢-Hoover 法 [31] による NVT アンサン ブル分子動力学シミュレーションが実行可能です。



 Figure 12: (a) 左図: 速度スケーリング NVT 分子動力学によるグリシン分子の設定温度と計算温度の時間変化。

 (b) 右図: Nose-Hoover NVT 分子動力学によるグリシン分子の設定温度と計算温度の時間変化。入力ファイルは、

 「work」ディレクトリ内の「Gly_VS.dat」と「Gly_NH.dat」。

MD.Type NVT_NH # NOMD|Opt|NVE|NVT_VS|NVT_NH

この NVT 分子動力学では原子運動の温度は、以下の書式で制御することができます。

<MD.TempControl 4 1 1000.0 100 1000.0 400 700.0 700 600.0

MD.TempControl>

この書式の最初の行は「<MD.TempControl」であり、最後の行は「MD.TempControl>」です。最初の「4」は温度制御のために必要な行の数です。この場合には、引き続く4行で温度の指定を行っており、 最初の列の数字はMDのステップ数を表し、2列目は原子運動の設定温度を表します。MDステップの 間の温度は線形補間により与えられます。能勢-Hoover法[31]によるNVTアンサンブル分子動力学シ ミュレーションにおいても、速度スケーリングMDと同じキーワード「MD.TempControl」が使用され ていますが、書式が異なることに注意して下さい。「MD.TempControl」の指定の他に、次のキーワード を用いて、熱浴の質量を指定して下さい。

NH.Mass.HeatBath 30.0 # default = 20.0

次元は長さ²× 質量です。この表記では長さにはボーア半径、質量に統一原子質量単位(炭素原子の主 同位体の質量を12.0とする単位)を用います。

「速度スケーリングによる NVT 分子動力学」で説明したように、MD ステップの各段階において計算

された数値は、出力ファイル名「*System.Name.*ene」に保存されます。例として、Nose-Hoover 法によ るグリシン分子の計算結果を図 12 (b) に示します。原子運動の温度が設定温度の周辺で振動しているこ とがわかります。また、分子動力学の様子を可視化するには、NVT_VS の場合と同様に、フリーソフト OpenMX Viewer [152, 151] やXCrySDen [105] を用いて、出力ファイル「*System.Name.*md」を簡単に アニメーション化できます。

17.4 多重熱浴分子動力学 (NVT_VS)

OpenMX Ver. 3.9 では多重熱浴分子動力学計算(multi-heat bath molecular dynamics simulation)が 実行可能です。グループ化した各原子の温度は速度スケーリング法 [30] による熱浴で制御します。この 方法は次のキーワードで実行します。

MD.Type NVT_VS4

グループ数はで指定し、

MD.num.AtomGroup

グループは次のようにで定義されます。

2

<MD.AtomGroup

- 1 1
- 2 1
- 3 1
- 4 2
- 5 2

MD.AtomGroup>

最初の行は「<MD.AtomGroup」、最後の行は「MD.AtomGroup>」です。最初の列は原子を識別する ための通し番号で、「Atoms.SpeciesAndCoordinates」で指定された番号に対応します。2 列目は各原子 が属するグループを表す番号です。この番号は1から始まり、2、3、・・・という順序で指定しなければな りません。上の例は、系が5つの原子のみから構成され、2つのグループに分けた場合です。Ver. 3.9 で は、全グループの温度プロファイルは「速度スケーリングによる NVT 分子動力学」の章で述べたよう に、「MD.Temp.Control」というキーワードで制御します。将来的には、グループ毎に独立に温度が制 御できるような機能も導入する予定です。

17.5 制約条件付き分子動力学

原子座標を初期位置に固定して分子動力学計算を行うための制約 MD シミュレーションが実行可能です。 「制約条件付の構造最適化」の章で説明した方法で設定します。指定方法はそちらの章を参照して下さい。

17.6 初速度

次のキーワードにより、分子動力学計算において、各原子の初速度を指定することが可能です。

<MD.Init.Velocity 1 3000.000 0.0 0.0 2 -3000.000 0.0 0.0 MD.Init.Velocity>

この例は、2個の原子から構成される系の場合です。N 個の原子の系の場合は、N 行の指定行が必要となります。最初の列は、キーワード「Atoms.SpeciesAndCoordinates」の指定と同じ原子の通し番号です。2列目、3列目、4列目の数値は、それぞれ、各原子の初期速度のx、y、z成分です。速度の単位はm/sです。キーワード「MD.Init.Velocity」は「MD.Fixed.XYZ」と併用することが可能です。

17.7 ユーザーによる原子の質量の定義

OpenMX の分子動力学計算において、原子質量は「Set_Atom_Weight() of SetPara_DFT.c」で定義さ れています。しかし、キーワード「Definition.of.Atomic.Species」を用いて、簡単に原子質量を変更す ることができます。その場合、以下の様に4列目の数値で原子質量を定義します。

<Definition.of.Atomic.Species H H5.0-s1 H_PBE19 2.0 C C5.0-s1p1 C_PBE19 12.0 Definition.of.Atomic.Species>

4 列目の数値が明示的に与えられない際には、デフォルトの原子質量が使用されます。この方法は分子 動力学計算で原子質量の影響を調べる際に有用でしょう。また、とりわけ水素原子に対して重水素の質 量を割り当てることで、より時間ステップを大きくすることができるようになります。原子質量の定義 には、炭素原子の主同位体を 12.0 とする統一原子質量単位を用いています。

17.8 ファイルフォーマットの変換: md2axsf

分子動力学法や構造最適化では、「*System.Name.*md」に各ステップの構造が保存されます。「*System.Name.*md」 は xyz 形式のため、OpenMX Viewer [152, 151] や XcrySDen [105] で読み込むことも可能です。ただ し XCrySDen では周期的に拡張された格子を描画することができません (OpenMX Viewer では「*System.Name.*md」に対して周期的に拡張された格子を描画できます)。周期的に拡張された格子を描画す る際には、「xyz」から「axsf」形式への変換を以下の手順で行って下さい。まず md2axsf をコンパイル します。

% gcc md2axsf.c -lm -o md2axsf

次に、「System.Name.md」の変換を行います。

% ./md2axsf System.Name.md System.Name.axsf

生成された「System.Name.axsf」ファイルは XCrySDen などのソフトで可視化が可能です。

18 可視化

電子密度、分子軌道、ポテンシャル等のデータは Gaussian cube 形式でファイルに出力されます。図 13 に XcrySDen [105] を用いて可視化した等値面マップの例を示します。これらのデータは、Gaussian cube 形式で出力されているため、VESTA [103]、Molekel [104] や XCrySDen [105] 等の多くのソフトウエア で簡単に可視化できます。



Figure 13: (a) C₆₀ 分子の全電子密度の等値面 (0.13 の等値を使用)。(b) グリシン分子の最高被占軌道(HOMO)の等値面 (|0.06|の等値を使用)。(c) 分子磁石 (Mn₁₂O₁₂(CH₃COO)₁₆(H₂O)₄ [106])のスピン電子密度の等値 面 (|0.02|の等値を使用)。

19 バンド分散

バンド分散は次の2つの段階を経由して、計算されます。

(1) SCF 計算

ダイヤモンド構造の炭素を例として、バンド分散の計算方法を説明します。「work」ディレクトリ内のファイル「Cdia.dat」には、原子の座標、単位胞ベクトルおよび「scf.Kgrid」が次のように指定されています。

```
Atoms.Number
                   2
Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit Ang # Ang|AU
<Atoms.SpeciesAndCoordinates
1 C 0.000 0.000 0.000 2.0 2.0
2 C 0.890 0.890 0.890 2.0 2.0
Atoms.SpeciesAndCoordinates>
Atoms.UnitVectors.Unit
                               Ang # Ang|AU
<Atoms.UnitVectors
 1.7800 1.7800 0.0000
 1.7800 0.0000 1.7800
  0.0000 1.7800 1.7800
Atoms.UnitVectors>
scf.Kgrid
                       777 # means n1 x n2 x n3
```

バンド分散の単位胞ベクトルとバンド分散を計算するための k 点の経路は次の書式で与えられます。

Band.dispersion	on	<pre># on off, default=off</pre>
<band.kpath.unitcell< td=""><td></td><td></td></band.kpath.unitcell<>		
3.56 0.00 0.00		
0.00 3.56 0.00		
0.00 0.00 3.56		
Band.KPath.UnitCell>		
Band.Nkpath	5	
<band.kpath< td=""><td></td><td></td></band.kpath<>		
15 0.0 0.0 0.0 1.0	0.0 0.0 g X	
15 1.0 0.0 0.0 1.0	0.5 0.0 X W	
15 1.0 0.5 0.0 0.5	0.5 0.5 W L	
15 0.5 0.5 0.5 0.0	0.0 0.0 Lg	
15 0.0 0.0 0.0 1.0	0.0 0.0 g X	
Band.kpath>		

次に OpenMX を以下の様に、通常実行します。



Figure 14: 炭素ダイヤモンドのバンド分散。入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「Cdia.dat」。

% ./openmx Cdia.dat

ここでは単一コアを使用した計算例を示しましたが、もちろん並列計算も実行可能です。この実行が 正常に終了すると、「work」ディレクトリに「cdia.Band」というファイルが生成されます。キーワード 「Band.KPath.UnitCell」が存在する場合にはこの単位胞ベクトルを用いて k 点経路の指定に用いられる 逆格子ベクトル基底が計算されます。もしこのキーワード「Band.KPath.UnitCell」が指定されない場 合には、「Atoms.UnitVectors」による単位胞ベクトルを用いて逆格子ベクトルを計算し、その目的に使 用されます。

(2) データを gnuplot 形式に変換する

「source」ディレクトリに「bandgnu13.c」というファイルがあります。このファイルを次のようにして コンパイルします。

% gcc bandgnu13.c -lm -o bandgnu13

コンパイルが正常に終了すると、「source」ディレクトリに実行可能なファイル「bandgnu13」が生成し ます。このファイルを「work」ディレクトリにコピーして下さい。実行ファイル「bandgnu13」を用い て、次のコマンドを実行することにより、ファイル「cdia.Band」は gnuplot 形式に変換されます。

% ./bandgnu13 cdia.Band

これで、「cdia.GNUBAND」、「cdia.BANDDAT1」(および「cdia.BANDDAT2」)の2または3個のファ イルが生成されます。ファイル「cdia.GNUBAND」はgnuplotのスクリプトであり、アップとダウンの スピン状態のデータファイル(それぞれ「cdia.BANDDAT1」および「cdiaBANDDAT2」)を読み込む ためのファイルです。もし「LSDA-CA」、「LSDA-PW」、「GGA-PBE」のいずれかを用いてスピン分極 計算を行った場合には、「*.BANDDAT1」に加えてダウンスピン状態の「*System.Name*.BANDDAT2」 が生成されます。ファイル「cdia.GNUBAND」は次のコマンドにより、gnuplotを使ってプロットする ことができます。

% gnuplot cdia.GNUBAND

図 14 はここで説明した方法で計算した炭素ダイヤモンドのバンド分散を示しています。ただし「cdia.GNUBAND」 内の y 軸の範囲は変更されています。化学ポテンシャルがエネルギーの原点となるように自動的に調整 されていることに注意してください。

バンド分散を描く際の問題点はバンド分散の計算で使われる単位胞の選択法です。しばしば、SCF 計算で使用される単位胞と異なる単位胞を用いてバンド分散の計算における特殊 k 点の指定が行われ ます。このような場合は、バンド分散の計算で用いる単位胞をキーワード「Band.KPath.UnitCell」で 定義する必要があります。「Band.KPath.UnitCell」を定義するとバンド分散の計算の逆格子ベクトルは 「Band.KPath.UnitCell」で指定された格子ベクトルから計算されます。「Band.KPath.UnitCell」を定 義しなければ、逆格子ベクトルは「Atoms.UnitVectors」で指定された格子ベクトルで計算され、バン ド分散の計算に用いられます。体心、面心、底心、三方晶の場合はバンド分散の計算のための逆格子ベ クトルはバンド構造計算の慣例に従いキーワード「Band.KPath.UnitCell」を用いて指定するべきです。

20 状態密度

20.1 通常の方法

Kohn-Sham 固有値の状態密度(DOS)は次の2つの段階を経由して、計算されます。

(1) SCF 計算

ダイヤモンド構造の炭素を例として、DOSの計算方法を説明します。「work」ディレクトリ内のファ イル「Cdia.dat」には、次の様に DOS 計算のためのキーワードが指定されています。

Dos.fileout	on
Dos.Erange	-25.0 20.0
Dos.Kgrid	12 12 12

キーワード「Dos.Erange」で指定された最初と2番目の数値は、それぞれDOS計算のためのエネルギー 範囲(eV)の下限と上限であり、エネルギーの原点(0.0)は化学ポテンシャルに対応します。またキー ワード「Dos.Kgrid」で指定された数値(n1,n2,n3)は、DOS計算において第1ブリルアンゾーンを離 散化するためのグリッド数です。

次に OpenMX を以下の様に、通常実行します。

% ./openmx Cdia.dat

ここでは単一コアを使用した計算例を示しましたが、もちろん並列計算も実行可能です。計算が正常に 終了すると、「work」ディレクトリに「cdia.Dos.val」および「cdia.Dos.vec」の2つのファイルが生成 されます。「cdia.Dos.val」にはテキスト形式で固有値が、「cdia.Dos.vec」にはバイナリ形式で固有ベク トルが保存されています。この DOS 計算は、O(N)計算にも対応しており、この場合にはガウシアンブ ロードニング法 (Gaussian broadening method)が適用されます。

(2) DOS 計算

DOS計算用のユーティリティプログラムをコンパイルして下さい。「source」ディレクトリに移動して、次のコマンドでコンパイルします。

% make DosMain

コンパイルが正常に終了すると、「source」ディレクトリ内に実行ファイル「DosMain」が生成されます。 「DosMain」を「work」ディレクトリにコピーして、「work」ディレクトリに移動して下さい。このプロ グラム「DosMain」を使って先の2つのファイル「cdia.Dos.val」および「cdia.Dos.vec」から全状態密 度 (DOS) と射影 DOS(PDOS) を以下の手順で計算します。

% ./DosMain cdia.Dos.val cdia.Dos.vec

その際に、プログラムから対話形式で次のように質問されることでしょう。

% ./DosMain cdia.Dos.val cdia.Dos.vec
Max of Spe_Total_CNO = 8
1 1 101 102 103 101 102 103



Figure 15: ダイヤモンド炭素の全状態密度 (DOS) と部分状態密度 (PDOS)、また PDOS の積分曲線。フェル ミ準位をゼロに設定。s、p、d軌道の間で電荷の再配分が起っているため、s および p軌道のフェルミ準位までの PDOS の積分値は正確には 1 ではないことに注意。「work」ディレクトリにある入力ファイル「Cdia.dat」を用い て同じ計算が実行できる。

```
<cdia.Dos.val>
<cdia>
Which method do you use?, Tetrahedron(1), Gaussian Broadeninig(2)
1
Do you want Dos(1) or PDos(2)?
2
Number of atoms=2
Which atoms for PDOS : (1,...,2), ex 1 2
1
pdos_n=1
1
<Spectra_Tetrahedron> start
Spe_Num_Relation 0 0 1
Spe_Num_Relation 0 1 1
Spe_Num_Relation 0 2 101
```

Spe_Num_Relation 0 3 102 Spe_Num_Relation 0 4 103 Spe_Num_Relation 0 5 101 Spe_Num_Relation 0 6 102 Spe_Num_Relation 0 7 103 make cdia.PDOS.Tetrahedron.atom1.s1 make cdia.PDOS.Tetrahedron.atom1.p1 make cdia.PDOS.Tetrahedron.atom1.p3 make cdia.PDOS.Tetrahedron.atom1.p3 make cdia.PDOS.Tetrahedron.atom1

DOS の計算には四面体法 (tetrahedron method) [67] もしくはガウシアンブロードニング法 (Gaussian broadening method)が選択できます。またユーザーはDOS またはPDOS を選ぶことができます。PDOS の計算を選択する場合は、PDOS を評価する原子を選択して下さい。この場合には、選択した原子の軌道 (s, px(p1), py(p2), pz(p3),..)上に射影した PDOS が各ファイルに出力されます。これらのファイル では、最初と二番目の列は、エネルギー (eV)、および DOS (eV^{-1})または PDOS (eV^{-1})の値であ り、3 番目の列の数値は DOS または PDOS の積分値を示します。「LSDA-CA」、「LSDA-PW」、また は「GGA-PBE」を用いたスピン分極計算を行った場合、これらのファイルの第 2 列および第 3 列の数 値は、それぞれアップスピン状態およびダウンスピン状態の DOS と PDOS に対応し、第 4 列と第 5 列 の数値はそれぞれに対応する積分値です。ガウシアンブロードニング法を使用した場合、ガウス分布の パラメーター値、 $a(eV)(exp(-(E/a)^2)$ で定義されるガウス分布の幅を決めるパラメーター)を設定し なければなりません。ここで説明した手続きによって得られたダイヤモンド炭素の DOS および PDOS を図 15 に示します。

20.2 多数のk点で計算する場合

多数の k 点を伴なう大規模系の状態密度(DOS)計算では大容量サイズのメモリーが必要になり、「Dos-Main」を用いた後処理計算において、メモリ不足のために計算が異常終了してしまうことがあります。 このような場合、on-the-flyのガウシアンブロードニング法が利用できます。この方法では、OpenMX の DOS 計算の際に、on-the-fly でガウシアンブロードニング法が適用され、DOS の計算が行われます。 大きなデータ量となる波動関数の情報はファイル「*System.Name*.DOS.vec」に記録されません。この方 法では、大容量のメモリを必要としませんので、大規模な系の状態密度計算が可能です。本方法を用い る場合には、入力ファイルに次の様にキーワードを指定します。

DosGauss.fileout	on	<pre># default=off, on off</pre>
DosGauss.Num.Mesh	200	# default=200
DosGauss.Width	0.2	<pre># default=0.2 (eV)</pre>

この方法を使用する場合、キーワード「DosGauss.fileout」を「on」と指定します。そして、キーワード「DosGauss.Num.Mesh」では、キーワード「Dos.Erange」で指定したエネルギー範囲の分割数を指定します。キーワード「DosGauss.width」では、ガウス分布の $\exp(-(E/a)^2)$ を定義する幅aを指定します。キーワード「DosGauss.fileout」と「Dos.fileout」は排他的で併用することはできませんので、注意して下さい。従って、このキーワードを使用する場合には、「Dos.fileout」は、次の様に「off」に設定します。

Dos.fileout off # on off, default=off

また「Dos.fileout」および「DosGauss.file」の両方のキーワードに対して次の2つのキーワードが有効です。

Dos.Erange -20.0 20.0 # default=-20 20 Dos.Kgrid 5 5 5 # default=Kgrid1 Kgrid2 Kgrid3

キーワード「DosGauss.fileout」では、ガウシアンブロードニング法による DOS だけしか計算できません。四面体法による DOS は計算できませんので、注意して下さい。「DosGauss.fileout」を用いた場合でも、「DosMain」による後処理の手続きは、四面体法による DOS が計算不可であること以外は、これまで説明した方法と同様です。

21 全エネルギーの軌道分解

OpenMX Ver. 3.9 では、全エネルギーを各基底関数の寄与に分解することが可能です。これは、基底関数への射影によって行われます [68]。全エネルギーの軌道分解は、以下のキーワードを加えるだけで実施可能です。

Energy.Decomposition on # on|off, default=off

例として、メタン分子の全エネルギーの軌道分解を以下に示します。

% mpirun -np 5 openmx Methane_ED.dat > met_ed.std &

ここで使用している「Methane_ED.dat」は「work」ディレクトリに収められています。計算が終わると「met_ed.out」が得られ、以下の様な情報が書き出されます。

Utot = Utot(up) + Utot(dn)

- = Ukin(up) + Ukin(dn) + Uv(up) + Uv(dn)
- + Ucon(up)+ Ucon(dn) + Ucore+UHO + Uvdw

Uele = Ukin(up) + Ukin(dn) + Uv(up) + Uv(dn)
Ucon arizes from a constant potential added in the formalism

Total energy (Hartree) = -8.216132481346387

Decomposed.energies.(Hartree).with.respect.to.atom

		Utot	Utot(up)	Utot(dn)	Ukin(up)	Ukin(dn)	Uv(up)	
1	С	-6.132295762765	-3.066148	-3.066148	2.076016	2.076016	-2.957459	
2	Н	-0.520959186503	-0.260480	-0.260480	0.300675	0.300675	-0.499086	
3	Н	-0.520959174111	-0.260480	-0.260480	0.300675	0.300675	-0.499086	
4	Н	-0.520959173764	-0.260480	-0.260480	0.300675	0.300675	-0.499086	
5	Н	-0.520959184204	-0.260480	-0.260480	0.300675	0.300675	-0.499086	

Decomposed.energies.(Hartree).with.respect.to.atomic.orbital

1	С		Utot	Utot(up)	Utot(dn)	Ukin(up)	Ukin(dn)	Uv(up)	
	I	multip	ole						
none			-4.483770	-2.241885	-2.241885	0.000000	0.000000	0.000000	
S		0	-0.675699	-0.337849	-0.337849	0.203145	0.203145	-0.556473	
S		1	0.003690	0.001845	0.001845	0.036240	0.036240	-0.034310	
px		0	-0.325884	-0.162942	-0.162942	0.496144	0.496144	-0.673031	
ру		0	-0.325912	-0.162956	-0.162956	0.496166	0.496166	-0.673068	
pz		0	-0.325884	-0.162942	-0.162942	0.496144	0.496144	-0.673031	
px		1	0.005096	0.002548	0.002548	0.107318	0.107318	-0.104552	

全エネルギーが各原子の各軌道からの寄与に分解されているのが分かります。不純物原子や空孔に よる局所的な摂動が隣接原子の安定性/不安定性にどのように影響するかを議論する際に、本機能は有用 です。また、本機能は幅広い現象に対する物理的な描像を解析するのに役立つものと期待されます。し かしながら、この機能の公開はまだ試験的なものです。我々はこの機能を近い将来にさらに発展させる ことを考えています。

22 軌道の最適化

軌道最適化法 [41] を用いて基底の動径関数を変分的に最適化することができます。メタン分子(入力ファ イル「Methane_OO.dat」)を例として、軌道最適化の手順を説明します。軌道最適化法では、最適化動 径関数は、プリミティブ動径関数の線形結合で表されます。線形結合の係数は縮約係数と呼ばれ、この 縮約係数が変分原理に基づき最適化されます。軌道最適化法でのプリミティブ動径関数と最適化動径関 数の数は、次の様にで指定します。

<definition.of.atomic.species< th=""></definition.of.atomic.species<>					
Η	H5.0-s4>1	H_CA19			
С	C5.0-s4>1p4>1	C_CA19			
Definition.of.Atomic.Species>					

水素原子(H)のs軌道に対しては、4つのプリミティブ動径関数の線形結合から1つの最適化動径関数 が得られます。同様に、炭素原子(C)の場合、4つのプリミティブ動径関数の線形結合から1つのs(p)軌道の最適化動径関数が得られます。さらに、以下のキーワードにより軌道最適化法が制御されます。

orbitalOpt.Method	species	<pre># Off Species Atoms</pre>
orbitalOpt.Opt.Method	EF	# DIIS EF
orbitalOpt.SD.step	0.001	<pre># default=0.001</pre>
orbitalOpt.HistoryPulay	30	# default=15
orbitalOpt.StartPulay	10	# default=1
orbitalOpt.scf.maxIter	60	# default=40
orbitalOpt.Opt.maxIter	140	# default=100
orbitalOpt.per.MDIter	20	# default=1000000
orbitalOpt.criterion	1.0e-4	<pre># default=1.0e-4</pre>
CntOrb.fileout	on	<pre># on off, default=off</pre>
Num.CntOrb.Atoms	2	# default=1
<atoms.cont.orbitals< td=""><td></td><td></td></atoms.cont.orbitals<>		
1		
2		
Atoms.Cont.Orbitals>		

入力ファイル「Methane_OO.dat」を用いて OpenMX を通常実行します。

% ./openmx Methane_00.dat

この計算が正常に終了すると、ファイル「met_oo.out」中に軌道最適化の履歴が記録されています。

iter=	1	Gradient	Norm=	0.057098961101	Uele=	-3.217161102876
iter=	2	Gradient	Norm=	0.044668461503	Uele=	-3.220120116009
iter=	3	Gradient	Norm=	0.034308306321	Uele=	-3.223123238394
iter=	4	Gradient	Norm=	0.025847573248	Uele=	-3.226177980300
iter=	5	Gradient	Norm=	0.019106400842	Uele=	-3.229294858054
iter=	6	Gradient	Norm=	0.013893824906	Uele=	-3.232489198284
iter=	7	Gradient	Norm=	0.010499500005	Uele=	-3.235304178159
iter=	8	Gradient	Norm=	0.008362635043	Uele=	-3.237652870812
iter=	9	Gradient	Norm=	0.006959703539	Uele=	-3.239618540761
iter=	10	Gradient	Norm=	0.005994816379	Uele=	-3.241268535418
iter=	11	Gradient	Norm=	0.005298095979	Uele=	-3.242657118263
iter=	12	Gradient	Norm=	0.003059655878	Uele=	-3.250892948269
iter=	13	Gradient	Norm=	0.001390201488	Uele=	-3.255123241210
iter=	14	Gradient	Norm=	0.000780925380	Uele=	-3.255179362845
iter=	15	Gradient	Norm=	0.000726631072	Uele=	-3.255263012792
iter=	16	Gradient	Norm=	0.000390930576	Uele=	-3.250873416989
iter=	17	Gradient	Norm=	0.000280785975	Uele=	-3.250333677139
iter=	18	Gradient	Norm=	0.000200668585	Uele=	-3.252345643243
iter=	19	Gradient	Norm=	0.000240367596	Uele=	-3.254238199726
iter=	20	Gradient	Norm=	0.000081974594	Uele=	-3.258146794679

多くの場合、20~50回の反復計算で収束に達します。プリミティブ基底関数および最適化基底関数で計 算されたメタン分子の全エネルギーを以下に示します。

Primitive basis orbitals Utot = -7.992569945749 (Hartree)

Optimized orbitals by the orbital optimization Utot = -8.133746986502 (Hartree)

軌道最適化によって全エネルギーは低下しており、変分的に基底関数が最適化されていることが分かり ます。図 16 に、プリミティブ基底および最適化基底を使って得られた分子およびバルクの全エネルギー の収束の様子を示します。ここで扱った全ての系に対して、最適化基底の収束特性が優れていることが分 かります。上記の例でのメタン分子の場合、最適化された基底関数は「C_1.pao」と「H_2.pao」の2つ のファイルに出力されます。これらのファイル「C_1.pao」と「H_2.pao」は擬原子基底関数の入力デー タとして、OpenMX の計算に対してそのまま使用できます。最適化された基底関数はファイルに出力さ れますので、計算しようとする系の基底関数を予め最適化しておくと便利です。この際、軌道最適化法 を適用する系としては、化学的に類似した小さな系を選択することを推奨します。

キーワード「orbitalOpt.Method」には、次の2つのオプションが用意されています。(1) それぞれ の原子上の基底関数が完全に最適化される「atoms」、(2) それぞれの原子種の基底関数が最適化された 「species」。

95



Figure 16: プリミティブ基底関数および最適化基底関数で計算された炭素 2 量体(C_2)、メタン分子(CH_4)、ダイヤモンド構造の炭素とケイ素、エタン分子(C_2H_6)、ヘキサフルオロエタン(C_2F_6)の全エネルギー。全エネルギーと全基底数は、 C_2 、ダイヤモンド構造の炭素およびケイ素の場合は1原子についての値、 CH_4 、 C_2H_6 および C_2F_6 の場合は1分子についての値。

• atoms

各原子単位で基底関数が最適化されます。動径波動関数 R は磁気量子数には依存しませんので、 系の回転に対する全エネルギーの不変性が保証されます。

• species

「Definition.of.Atomic.Species」で定義した同一名の原子種の基底関数は同一の軌道に最適化され ます。動径波動関数 R は磁気量子数には依存しませんので、系の回転に対する全エネルギーの不 変性が保証されます。ほぼ同様の化学的環境を持つ原子に対して同一の最適化基底を生成したい 場合に、有用な方法です。

「入力ファイル」の章でも同様な情報が記載されていますが、ユーザーの利便性のため、関連するキー ワードの詳細を以下に列挙します。

orbitalOpt.scf.maxIter 軌道最適化における SCF 反復の最大回数を「orbitalOpt.scf.maxIter」キーワードで指定します。

orbitalOpt.Opt.maxIter

軌道最適化の反復の最大回数を「orbitalOpt.Opt.maxIter」キーワードで指定します。軌道最適化の反 復は、収束条件が達成しなかった場合でも、同キーワードで設定した回数で終了します。

orbitalOpt.Opt.Method

軌道最適化の収束方法として、2つの手法がサポートされています。「EF」は固有ベクトル追跡法、「DIIS」 は反復部分空間における直接反転法です。それぞれのアルゴリズムは構造最適化のそれと同じです。 「orbitalOpt.Opt.Method」キーワードでは「EF」あるいは「DIIS」を指定して下さい。

orbital Opt. Start Pulay

「orbitalOpt.StartPulay」キーワードで指定した最適化ステップから、準ニュートン法である「EF」または「DIIS」法を開始します。

orbitalOpt.HistoryPulay

準ニュートン法である「EF」および「DIIS」法において、次ステップでの縮約係数を推定するために参照する過去のステップ数を「orbitalOpt.HistoryPulay」キーワードで指定します。

$orbital Opt. {\bf SD. step}$

準ニュートン法である「EF」および「DIIS」法を開始するまでの最適化ステップは最急降下法が適用されます。最急降下法で使用する前因子は「orbitalOpt.SD.step」キーワードで指定します。多くのケースにおいて、「orbitalOpt.SD.step」の適切な値は 0.001 程度となります。

orbitalOpt.criterion

軌道最適化の収束条件((Hartree/bohr)²)を「orbitalOpt.criterion」キーワードで指定します。「微分のノルム <orbitalOpt.criterion」という条件が満たされた時に反復ループが終了します。

CntOrb.fileout

最適化動径関数をファイルに出力したい場合は、「CntOrb.fileout」キーワードを「ON」にする必要が あります。

Num.CntOrb.Atoms 最適化動径関数をファイルに出力する際の原子数を「Num.CntOrb.Atoms」キーワードで指定します。

Atoms.Cont.Orbitals

「Atoms.SpeciesAndCoordinates」キーワードの第1列で定義した原子の通し番号を用いて、最適化基 底を出力する原子を「Atoms.Cont.Orbitals」キーワードで次のように指定します。

```
<Atoms.Cont.Orbitals
1
2
Atoms.Cont.Orbitals>
```

記述は「<Atoms.Cont.Orbitals」で始め、「Atoms.Cont.Orbitals>」で終わります。行の数は、

「Num.CntOrb.Atoms」で記述する数字と整合性がなければなりません。例えば、最適化擬原子軌道が「C_1.pao」と「H_2.pao」などとして保存された場合、その原子種名はキーワード

「Definition.of.Atomic.Species」での設定における第一列の記号に対応し、記号の後の数字はキーワー

ド「Atoms.SpeciesAndCoordinates」の設定における第一列の数値を意味します。これらの出力ファイル「C_1.pao」と「H_2.pao」は基底関数の入力データとして使用可能です。

ー般に行列対角化の計算時間は、使用する基底関数の数の 3 乗に比例します。そのため大規模な系の計算 では、対角化が計算の律速となります。一方、近似手法である O(N) 法の計算量は O(N) となり、大規模 系の取り扱いが可能となります。しかし計算精度に関しては注意深い配慮が必要となります。OpenMX Ver. 3.9 では、分割統治法 (DC 法) [50] と局在自然軌道 (LNO) による分割統治法 (DC 法) [51]、O(N)Krylov 部分空間法 [43] の三つの O(N) 法が利用可能です。これらの三つの O(N) 法のなかでの我々の推 奨は DC-LNO 法です。なぜなら、この方法は頑健で金属を含む幅広い物質に適応でき、これら三つの方 法のなかで並列化効率が最も高いと期待されるからです。以下の章では、それぞれの O(N) 法について 計算例を示しながら説明します。

23.1 分割統治法 (DC法)

DC 法は数値的に安定で広範囲の物質に適用可能であり、また計算精度と計算効率を容易に制御できる 方法です。本手法は特に共有結合性の物質群に適しています。この章では、DC 法を用いた O(N) 計算 について説明します。「work」ディレクトリ内の入力ファイル「DIA8_DC.dat」において、キーワード 「EigenvalueSolver」に対して「DC」を指定して下さい。

scf.EigenvalueSolver DC

入力ファイル「DIA8_DC.dat」を用いて OpenMX を通常実行します。

% ./openmx DIA8_DC.dat



Figure 17: 分割統治法によるダイヤモンド炭素の計算時間とメモリ使用量。計算時間は1回のSCFステップに対 する対角化の所要時間、またメモリ使用量は1つのMPIプロセス当りを示す。計算にはMPI並列計算で16プロセ スを使用。基底関数にはC5.0-s1p1、DC法ではorderN.HoppingRanges=6.0 (Å)を使用。使用計算機はXeonプロ セッサ(2.6 GHz)。計算に用いた入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「DIA8_DC.dat」、「DIA64_DC.dat」、 「DIA216_DC.dat」、「DIA512_DC.dat」。

Table 4: 通常の対角化法と DC 法によって計算された C₆₀ 分子、小ペプチド分子 (バロルフィン (valorphin) [107] 、シトシンとグアニンから構成される DNA の全エネルギーと計算時間。計算には最小基底関数を使用。DC の後のカッコ内の数値は、DC 計算に使われた「orderN.HoppingRanges」を示す。計算時間は Opteron PC クラ スター (48 MPI プロセス, 2.4 GHz) 用いて測定。入力ファイルは、「work」ディレクトリ内の「C60_DC.dat」、 「Valorphin_DC.dat」、「CG15c_DC.dat」。

	Total energy (Hartree)	Computational time (s)
\mathbf{C}_{60}		
(60 atoms, 240 orbitals)		
Conventional	-343.89680	36
DC (7.0)	-343.89555	37
Valorphin		
(125 atoms, 317 orbitals)		
Conventional	-555.28953	81
DC (6.5)	-555.29019	76
DNA		
(650 atoms, 1880 orbitals)		
Conventional	-4090.95463	576
DC (6.3)	-4090.95092	415

この入力ファイルは8個の炭素原子を含むダイヤモンド格子のDC計算を行うためのものです。構造最 適化は行いません。計算時間はXeonプロセッサ(2.6 GHz)を使用した場合におよそ120秒です。図 17に、分割統治法によるダイヤモンド炭素の計算時間と計算メモリ量をスーパーセル内の炭素原子数の 関数として示します。計算時間は1回のSCFステップに対する対角化の所要時間、またメモリ使用量は 1つのMPIプロセス当りを示します。図から、計算時間とメモリ使用量は原子数にほぼ比例することが 分かります。DC法の計算精度と計算効率はキーワード「orderN.HoppingRanges」で制御されます。

• orderN.HoppingRanges

各原子を中心とする球の半径 (Å)を「orderN.HoppingRanges」キーワードで定義します。DC 法、 DC-LNO 法、および O(N) クリロフ部分空間法では、この球内に含まれる原子を選択することで 切り取られたクラスタが構成されます。

系の原子数を N とすると、「orderN.HoppingRanges」で指定された半径の球で物理的に切り取られたクラスターが N 個、構築されます。それぞれのクラスターに対して、独立に固有値問題を解き、中心原子への射影状態密度を計算します。その後、全ての原子からの射影状態密度を足し合せることで、全系の状態密度が計算されます。「orderN.HoppingRanges」の適切な値は系によって異なりますが、分子系では計算精度と計算効率の妥協点として次の値が推奨されます。

orderN.HoppingRanges 6.0 - 7.0 # in Ang.

表 4 に、C₆₀ 分子と小ペプチド分子 (バロルフィン (valorphin) [107]) およびシトシンとグアニンから 構成される DNA について、通常の対角化法と DC 法で計算した全エネルギーの比較を示します。DC 法 で計算した全エネルギーの誤差は、どの系でも 1 原子当りミリハートリー程度であることが分かります。 また本計算で用いた計算条件では原子数が 500 以上になると DC 法が通常の対角化法より高速となるこ とが推定されますが、計算時間における通常の対角化法と DC 法の交差点は、系と並列計算で使用する コア数に依存しています。

切り取られたクラスターのサイズに対する全エネルギーの精度の依存性を見るため、通常の対角化 と比較した全エネルギーの誤差を図 18 に示します。ここでは切り取られたクラスターの原子数をパラ メーターとして (a) 有限ギャップを持った固体、(b) 金属、(c) 分子の3つの場合を取り上げました。こ れから分かることは、(a) 有限ギャップを持った固体と(c) 分子系の場合にはその誤差がほぼ指数関数的 に減少し、(b) 金属の場合には収束速度が相対的に遅いということです。



Figure 18: DC 法で計算された (a) 有限ギャップを持った固体、(b) 金属、(c) 分子系の全エネルギーにおける誤 差。横軸は各切り取られたクラスタ内の原子数。水平方向の点線は「ミリハートリー(mili-Hartree)」の精度を 示す。

23.2 局在自然軌道による分割統治法 (DC-LNO)

DC-LNO 法 [51] は DC 法の改良版です。占有状態の部分空間を張る局在自然軌道 (LNO) を導入するこ とによって、計算効率が改善されます。本来の基底関数である PAO と比較して LNO の次元が低減され ているため、結果として計算コストが削減されます。占有状態への射影演算子を局所固有値分解を用い て低ランク近似することで、LNO が生成されます。この LNO 生成する計算は逐次的でないため、非常 に効率的に実行可能です。図 19(a) に示すように、切られたクラスター(truncated cluster)内の遠方領 域の原子に対して LNO が割り当てられ、また近傍では PAO を割り当てられます。このため計算精度を 保ちながら、計算効率を向上させることが可能となります。本手法はギャップのある系のみならず、切 られたクラスターが十分に大きければ(典型的には 200 原子以上を含むクラスター)、金属系にも適用 可能です。



Figure 19: (a) DC-LNO 法における切られたクラスター(truncated cluster)の構築。中心原子からの近傍 (オレンジ色) と遠方の範囲 (黄色) の領域はそれぞれ PAO と LNO が割り当てられます。(b) DC-LNO 法の多階層並列化。

DC-LNO 法のオーダー (N) 計算の最初のステップとして、ディレクトリ work に置かれた入力ファ イルを用いて Si 結晶のオーダー (N) 計算を以下のように実行できます。

% mpirun -np 112 ./openmx Si8-LNO.dat | tee si8-lno.std

この計算は Xeon クラスター計算機 (2.6 GHz)の 112 コアを用いて 66 秒で実行されました。また用いた入力ファイルはディレクトリ「work」中に「Si8-LNO.dat」として保存されています。図 19(b) に示すように、原子レベル、スピンレベル、対角化レベルの三段階の並列化が実装されています。そのため、例えば 1000 原子系であれば並列計算において 40000 CPU コアまでの加速が期待できます。1000 原子×2 (スピン分極計算)×20 CPU コア (ノードあたり)の積が 40000 となるためです。多階層並列化のベンチマーク計算は後で示します。ハイブリッド並列を実行する場合には、次のキーワードを設定して下さい。

scf.dclno.threading on # off|on

ハイブリッド並列では、並列化の最下層である対角化が OpenMP で並列化されます。この手法の計算の 精度と効率は以下のキーワードで制御されます。

orderN.HoppingRanges	7.0	# 7.0 (Ang.)
orderN.LNO.Buffer	0.2	<pre># default = 0.2</pre>
orderN.LNO.Occ.Cutoff	0.1	<pre># default = 0.1</pre>

キーワード「orderN.HoppingRanges」の役割は DC 法でのそれと同一です。各原子に対する切られた クラスターはキーワード「orderN.HoppingRanges」で指定された半径の球内部の原子から構成されま す。本パラメタの適切な選択は系によりますが、一連のベンチマーク計算からは 300 原子を含むように 「orderN.HoppingRanges」を設定した場合には金属系に対しても十分な精度が確保されることが分かっ ています。



 Figure 20:
 切られたクラスター内の原子数に対する DC 法と DC-LNO 法の全エネルギーの絶対誤差

 (Hatree/atom)。(a) ダイアモンド、(b) ダイアモンド構造のシリコン、(c) TiO2 ルチル構造、(d) BCC

 構造のリチウム、(e) FCC 構造のアルミニウム、(f) BCC 構造の鉄。どのケースでも実験の格子定数を

 使用。



Figure 21: 通常のオーダー N^3 対角化と DC-LNO 法によって計算された全動径分布関数 (RDF)。(a) 3500 K でのシリコン、(b) 2500 K でのアルミニウム、(c) 800 K でのリチウム、そして (d) 3000K で の SiO₂。MD シミュレーションは立方体のスーパーセルに対して時間刻み 2fs で 10ps の間で実行され ました。シリコン、アルミニウム、リチウム、SiO₂ の各スーパーセル(格子定数: 10.86, 12.15, 14.04, 14.25 (Å))はそれぞれ 64, 108, 128, そして 192 個の原子を含む。シミュレーションの詳細は文献 [51] を参照のこと。

この設定は精度を重視したもので、効率性の面からは系に応じて検討が必要です。精度と効率のバランスの取れた選択は 200 から 300 原子程度にあると考えられます。LNO を割り当てる原子の領域はキーワード「orderN.LNO.Buffer」で制御されます。「orderN.LNO.Buffer=0.0」は全ての SNAN 原子に LNO を割り当てることを意味します。一方、「orderN.LNO.Buffer=1.0」の場合には全ての SNAN 原子に PAO を割り当てます。この取扱いは DC 法と同等です。SNAN については、「ユーザーによる FNAN+SNAN の定義」の 23.4 節を参照してください。「orderN.LNO.Buffer=1.0」の既定値は 0.2 ですが、0.1~0.2 の「orderN.LNO.Buffer」が精度と効率に関して適切な選択です。次式 [51] で定義される Λ_{0i} の固有値を確認することで各原子 *i* の LNO が決定されます。

$$\Lambda_{\mathbf{0}i} = \sum_{\mathbf{R}j} \rho_{\mathbf{0}i,\mathbf{R}j} S_{\mathbf{R}j,\mathbf{0}i},\tag{2}$$

ここで $\rho_{0i,Rj}$ と $S_{Rj,0i}$ はそれぞれ密度行列と重なり行列のブロック要素です。固有値は LNO に対する 電子の占有数として解釈できますので、キーワード「orderN.LNO.Occ.Cutoff」で設定した占有数以上 を持つ LNO を選択することにより、占有状態の部分空間を良く張った LNO が得られます。キーワード 「orderN.LNO.Occ.Cutoff」を使用する代わりに各元素の LNO の数をキーワード「LNOs.Num」で直接 に指定することもできます。例えば、元素種を以下のように定義した場合、

<Definition.of.Atomic.Species

Si	Si7.0-s2p2d1	Si_PBE19
Н	H6.0-s2p1	H_PBE19

Definition.of.Atomic.Species>

LNO の数は以下の様に指定できます。

<LNOs.Num Si 4 H 1 LNOs.Num>

この場合、LNO の数は Si で 4、H で 1 にそれぞれ固定されます。構造最適化や分子動力学シミュレーションの際に LNO 数の変化を避けるため「orderN.LNO.Occ.Cutoff」よりも「LNOs.Num」の使用が 推奨されます。DC 法と DC-LNO 法の比較を図 20 に示します。DC-LNO 法ではクラスター内の遠方領 域において PAO の代わりに LNO が使用されていますが、ギャップのある系と金属系の両方においてそ の精度は DC 法に匹敵することが分かります。また DC-LNO 法の応用例として高温の分子動力学シミュ レーションで得られたシリコン、アルミニウム、リチウム、SiO₂ の液体の動径分布関数 (RDF) を図 21 に示します。いずれの場合でも DC-LNO 法が通常のオーダー N^3 対角化法の結果を良く再現しているこ とが分かります。また得られた RDF は他の計算結果 [52, 53, 54, 55] とも整合しています。



Figure 22: DC-LNO 法の MPI 並列化における速度向上比。ベンチマーク計算は 64 原子を含むダイア モンドのスーパーセルに対して実施。8.0 Å のカットオフ半径を使用され、239 と 142 の原子が近傍領域 と遠方領域に割り当てられ、結果として 3675 の行列次元を持ったクラスター問題になる。ベンチマーク 計算の詳細は参考文献 [51] を参照のこと。

DC-LNO 法の MPI 並列計算における速度向上比を図 22 に示します。これはダイアモンド (64 原子 を含むスーパーセル)の非スピン分極計算の結果です。スピンインデックスの多重度は1のため、原子レ ベルの並列化の最大並列数である 64MPI プロセスまでほぼ理想的な振る舞いが見られます。64MPI プ ロセスを超えると原子レベルでの並列化に加えて対角化の並列化が考慮されます。128 と 256 の MPI プ ロセスを用いた場合には理想的な速度向上比を超えたスピードアップが観測されました。これはメモリ 使用の削減によりキャッシュの効率的な利用によると推定されます。本ベンチマーク計算で用いた最大 の 1280 MPI プロセスまで良いスケーリングが達成されています。1 MPI プロセスでの経過時間を基準 として算出された並列化効率はおよそ 70%です。本ベンチマーク計算で使用した PC クラスターの各計 算ノードは 20CPU コアから構成されるため、1280 (=64×20) MPI プロセスまで良いスケーリングが見 られることは妥当な結果です。近年の超並列計算機の発展に伴って、多階層並列化は計算時間を短縮す るために有効な手段であることが分かります。

23.3 O(N) Krylov 部分空間法

DC 法は広範な系に適用でき、数値的にも安定な方法です。しかし金属系に対して高精度な結果を得る には、図 16 に示したように切り取られたクラスターのサイズを大きくする必要があり、その場合には計 算量が増大します。計算量を削減する一つの方法は、切り取られたクラスターによって定義されるベク トル空間を次元数がより小さな Krylov 部分空間 [43] にマッピングすることです。次のキーワードによ り O(N) Krylov 部分空間法を利用できます。

scf.EigenvalueSolver Krylov

基本的に計算精度と計算効率は次の2つのキーワードで制御されます。

orderN.HoppingRanges	6.0
orderN.KrylovH.order	400

キーワード「orderN.HoppingRanges」は、DC 法の場合と同様に、各原子を中心とする球の半径を定義 します。ハミルトニアンに対する Krylov 部分空間の次元は、キーワード「orderN.Krylov.order」で指 定します。さらに次のキーワードで O(N) Krylov 部分空間法による計算の詳細が設定可能です。

• orderN.Exact.Inverse.S on off, default=on

キーワード「orderN.Exact.Inverse.S」を「on」に設定すると、切り取られた各クラスタの重なり 行列の逆行列が厳密に評価されます。offに設定する場合はキーワード「orderN.KrylovS.order」の 項を参照して下さい。デフォルトでは「on」に設定されています。

• orderN.KrylovS.order 1200, default=orderN.KrylovH.order×4

「orderN.Exact.Inverse.S=off」の場合、Krylov部分空間法によって逆行列を近似します。この時、切 り取られた各クラスタに対する重なり行列のクリロフ部分空間法の次元を「orderN.KrylovS.order」 キーワードで指定します。デフォルト値は、「orderN.KrylovH.order」で設定した値の4倍です。

• orderN.Recalc.Buffer on off, default=on

キーワード「orderN.Recalc.Buffer」を「on」に設定すると、バッファ行列は各 SCF 反復毎に再計 算されます。「off」の場合にはバッファ行列は初回の SCF ステップで計算され、その後の SCF 反 復では固定されます。デフォルトでは「on」に設定されています。



 Figure 23: (a) Krylov 部分空間法と DC 法で計算された金属および絶縁固体の全エネルギー(Hartree/atom)に

 おける絶対誤差と(b) その計算時間(s/atom/MD)。比較を容易にするため、1 MPI プロセスを用いて計算。図

 (a) のカッコ内の数値はコア領域およびバッファ領域における平均原子数。図(b) のカッコ内の数値は、切り取ら

 れたクラスター内の基底関数の数に対する Krylov 部分空間の次元の百分率を示す。

• orderN.Expand.Core on off, default=on

キーワード「orderN.Expand.Core」を「on」に設定すると、コア領域は半径 $1.2 \times r_{\min}$ の球の中にある原子から構成されます。ここで r_{\min} は、中心原子と最隣接原子間の距離です。このコア領域はクリロフ部分空間を生成するときの第 1 ステップで使用されるベクトル群を定義します。「orderN.Expand.Core」が「off」の場合、中心の原子がコア領域と見なされます。デフォルトでは「on」に設定されています。

ー般にキーワード「orderN.Exact.Inverse.S」と「orderN.Expand.Core」は共有結合性物質に対しては 「on」とした方が収束性が向上しますが、単純金属では「off」とした方が収束性が向上する場合もあり ます。図 23 に、種々の物質に対し、Krylov 法と DC 法で計算した全エネルギーの絶対誤差を示します。 特に金属系では DC 法と比較して Krylov 部分空間法の方が効率的であり、共有結合性とイオン性の増 大とともに計算時間は同じ程度になることが分かります。

大規模な計算を実現するために、O(N) Krylov 部分空間法は並列化に配慮して実装されています。 MPIによる並列化の場合には原子数と同じ MPI プロセス数までは計算を加速させることができます。また OpenMP/MPI ハイブリッド並列によって OpenMP スレッドを使用すればさらに計算速度の向上が可能です。超並列計算機を用いて 10 万個以上の原子から構成される系の並列計算を実施した例を図 24 に示します [44, 45]。この例では、ベンチマーク系として 131072 個の炭素原子から構成されるダイヤモ ンドの計算を行い、131072 MPI プロセスを使用し、その並列化効率は 68%に達しています。



Figure 24: スーパーコンピュータ「京」上でのハイブリッド並列計算における O(N) Krylov 部分空間法の並列 化効率。すべての場合で OpenMP の 8 スレッドを使用。ベンチマーク系として 131072 個の炭素原子から成るダ イヤモンド構造を計算。

23.4 ユーザーによる FNAN+SNAN の定義

OpenMX Ver. 3.9 で実装されている O(N) 法では、切り取られたクラスター内の原子は第1隣接と第2隣接の2種類の原子に分類されます。中心原子上の基底関数のカットオフ半径 r_0 と隣接原子の基底関数のカットオフ半径 r_N の和 $(r_0 + r_N)$ が、原子間距離より小さい場合、その原子は第1隣接原子に分類 され、この条件を満たさないクラスター内の原子は第2隣接原子に分類されます。第2隣接原子の選択 は、キーワード「orderN.HoppingRanges」によって決定されており、第1と第2隣接原子数は、それ ぞれ FNAN および SNAN として標準出力に書き出されています。さらに「orderN.HoppingRanges」とは独立に SNAN が決定するキーワード「orderN.FNAN+SNAN」が利用可能です。このキーワードに よって (FNAN+SNAN) の数値を以下の様にユーザーが直接、与えることができます。

```
<orderN.FNAN+SNAN</pre>
```

- 1 60
- 2 65
- 3 60
- 4 50
- ••
- •

orderN.FNAN+SNAN>

この指定では、行数は原子数に等しくなければなりません。最初の列は、キーワード

「Atoms.SpeciesAndCoordinates」の第1列と同一の通し番号であり、2列目が (FNAN+SNAN) の値 です。このキーワードを用いて、各原子に対して (FNAN+SNAN) が明示的に与えられた場合には、 (FNAN+SNAN) の値が指定された値になるように各原子毎にクラスターの球半径が調整されます。キー
ワード「orderN.HoppingRanges」によってクラスターサイズを指定した場合の問題点は単位胞ベクトル を変化させた際に顕在化します。この場合、単位胞ベクトルを変化に伴い、大きく(FNAN+SNAN)が変 化し、その結果としてエネルギー曲線上に大きな飛びが生じます。キーワード「orderN.FNAN+SNAN」 によって明示的に(FNAN+SNAN)を与えることで、この様なケースを避けることができます。

24 MPI 並列化

大規模系の計算を実行するために、分散メモリ型並列計算機上での MPI 並列計算が実行可能です。

24.1 O(N) 計算

O(N) 法は並列化に適したアルゴリズム構造を持っているため、高い並列化効率が期待されます。 典型 的な MPIの実行は次の様に行います。

% mpirun -np 4 openmx DIA512_DC.dat > dia512_dc.std &

「work」ディレクトリ中の「DIA512_DC.dat」は、分割統治 (DC) 法を用いて 512 個の炭素原子からな るダイヤモンド格子の SCF 計算を実行するための入力ファイルです。MPI プロセス数に対する速度向 上比を図 25 (a) に示します。この並列計算は CRAY-XC30 (Xeon プロセッサ、2.6 GHz) 上で実行し、 1MD ステップの経過時間から速度向上比が算出されました。128 個の MPI プロセスを用いて、その速 度向上は約 84 倍であり、またプロセス数の増加に伴い、並列化効率は減少していくことが分かります。 並列化効率が減少する理由は、計算負荷の大きな O(N) 対角化計算において 1 個のプロセスに割り当て られる原子数が減少し、disk I/O のような並列化されていない部分の経過時間が顕在化するためです。 また原子種や幾何学構造が一様でない系では、負荷分散が崩れるために並列化効率が大きく減少する場 合もあります。MD 計算や分子動力学計算では、動的に負荷分散を保つアルゴリズムが実装されており、 可能な限り並列化効率の向上が図られています。並列化に関するさらなる情報については、「DC-LNO 法」と「O(N) Krylov 部分空間法」の章を参照して下さい。

24.2 クラスター計算

クラスター計算では、スピン多重度と固有状態のループ構造に対して MPI 並列化が実装されています。 スピン多重度は非スピン分極計算およびノンコリニア計算では 1、スピン分極計算では 2 となります。 スピン多重度がまず優先的に並列化され、多数の MPI プロセスが使用された際には、さらに固有状態 が並列化されます。OpenMX Ver. 3.9 では、クラスター計算の固有値問題は、高並列固有値ソルバー: ELPA [39] によって計算されます。ELPA1 または ELPA2 が次のキーワードで選択できます。

scf.eigen.lib elpa1 # elpa1|elpa2, default=elpa1

既定の選択肢は ELPA1 です。ここでは提示しませんが、我々のベンチマーク計算は計算速度に関して ほぼ同様な性能であることを示唆しています。図 25 (b) に、Mn₁₂ 単一分子磁石のスピン分極計算の所 要時間と速度向上比を示します。使用した入力ファイル「Mn12.dat」は「work」ディレクトリ に保存 されています。速度向上比は、32 プロセスと 64 プロセスで、それぞれ 11 および 17 であることが分か ります。

24.3 バンド計算

バンド計算ではスピン多重度、k点、固有状態の3つのループ構造に対して MPI 並列化が実装されてい ます。スピン多重度は非スピン分極計算およびノンコリニア計算では1、スピン分極計算では2となりま す。スピン多重度がまず優先的に並列化され、多数の MPI プロセスが使用された際には、さらに k 点、 固有状態の順番で並列化されます。また MPI プロセス数が(スピン多重度)×(k 点数)以下の場合、 各 k 点で化学ポテンシャルと密度行列の各計算のために2回の対角化が行われます。これは波動関数を



Figure 25: CRAY-XC30 (Xeon プロセッサ、2.6GHz)上で MPI 並列計算を行った場合の、1MD ステップの所 要時間における速度向上比。(a) DC 法によるダイヤモンド (512 炭素原子)の計算、(b) クラスター法による Mn₁₂ 単一分子磁石 (148 原子)の計算、(c) バンド法によるダイヤモンド (64 炭素原子、3×3×3のk点)の計算。比較の ために、理想的な速度向上比に対応する直線も示す。

保持する際のメモリ使用量を削減するためで、1回目の対角化で化学ポテンシャルを探索し、2回目の対 角化で波動関数を保持することなく、直接に密度行列を計算しています。一方、MPIプロセス数が(ス ピン多重度)×(k点数)を越える場合、各プロセスは多数のk点での波動関数をメモリ上に保持する 必要がないため、対角化は一度だけで、計算効率が見かけの上で向上します。図 25 (c) に示す様に、プ ロセス数の関数として速度向上比を見た場合、バンド計算の並列化効率は良好であることが分かります。 この計算は $3 \times 3 \times 3$ 個のk点を考慮したダイヤモンド(64炭素原子)の非スピン分極バンド計算を行った もので、使用した入力ファイルは「work」ディレクトリにある「DIA64_Band.dat」です。この場合の スピン多重度は1です。またコリニア計算ではブリルアンゾーンの半分のk点のみが考慮されます。a 軸、b軸、c軸に対する全てのk点数が奇数の場合には、F点が含まれますので、実際の計算が行われ たk点数は($3 \times 3 \times 3 - 1$)/2+1=14となります。プロセス数が14以上では、速度向上比が理想値を超えて いますが、これは上記で説明したアルゴリズムの変更によるものです。クラスター計算と同様に、バン ド計算における固有値問題の解法には高並列固有値ソルバー: ELPA [39]を使用しています。ELPA1ま たはELPA2が次のキーワードで選択できます。

scf.eigen.lib elpa1 # elpa1|elpa2, default=elpa1

既定の選択肢は ELPA1 です。ここでは提示しませんが、我々のベンチマーク計算は計算速度に関して ほぼ同様な性能であることを示唆しています。

24.4 完全な3次元並列化

OpenMX Ver. 3.6 以下のバージョンでは、単位胞の a 軸に対する 1 次元領域分割法によりデータを分散し、それに基づき MPI 並列化が実装されていました。一方、OpenMX Ver. 3.9 ではデータ分散のために、完全な 3 次元領域分割をサポートしています。従って、並列化の際に均等な負荷分散を実現するために単位胞をどのように指定したら良いかについて、考慮する必要がありません。OpenMX Ver. 3.9 では、単位胞ベクトルの選択に依存することなく、ほぼ同等の並列化効率が得られます。

24.5 使用可能な MPI プロセス数

OpenMX Ver. 3.6 以下のバージョンでは、並列計算で使用できる MPI プロセス数の最大値は、系に含まれる原子数で制限されていました。OpenMX Ver. 3.9 ではこのような制限はありません。MPI プロセス数が原子数より大きい場合でも、可能な限り MPI 並列化が効率良く行われます。この機能は k 点数が系の原子数より大きい場合に特に有用となるでしょう。

25 MPI/OpenMP ハイブリッド並列化

MPI/OpenMP を用いたハイブリッド並列計算は次のコマンドで実行可能です。

% mpirun -np 32 openmx DIA512-1.dat -nt 4 > dia512-1.std &

「-nt」によって各 MPI プロセスに割り当られたスレッド数を与えます。もし「-nt」が指定されない場合 は、スレッド数は1にセットされ、この場合には通常の MPI 並列化となります。OpenMX Ver. 3.9 の並 列化は OpenMX Ver. 3.6 からは大きく変更されていますので、計算効率とメモリ使用の効率に関して、 通常の MPI 並列化と比較して、ハイブリッド並列化が有効かどうかまだ十分なデータがありません。し かし予備的なベンチマーク計算では、ハイブリッド並列化は、メモリの利用に関しては効率が良く、一方 で計算効率に関しては両者とも同程度であるという結果となっています。通常の並列化と OpenMP/MPI ハイブリッド並列化の適切な選択は、使用する計算機に依存していると考えられますので、ベンチマー ク計算によって、確認されることを推奨します。

26 大規模計算

26.1 通常の固有値解法

数百個のプロセッサコアが利用可能であれば、通常の対角化法で1000原子から構成される系の構造最 適化が可能です。1000原子系のベンチマーク計算は次のように「runtestL2」によって実行できます。

% mpirun -np 128 openmx -runtestL2 -nt 4

OpenMX は7個のテスト計算を実行し、計算結果を「work/large2_example」に保存されている参照デー タと比較します。以下に示すのは、Xeon クラスター計算機で 640 個の MPI プロセスと1 個の OpenMP スレッドを用いて実行した「runtestL2」の結果です。

1	$large2_example/C1000.dat$	Elapsed time(s) = 777.60	diff Utot= 0.00000007341	diff Force= 0.00000008795
2	$large2_example/Fe1000.dat$	Elapsed time(s) = 8181.70	diff Utot= 0.00000002241	diff Force= 0.000000011061
3	$large2_example/GRA1024.dat$	Elapsed time(s) = 927.20	diff Utot= 0.00000012903	diff Force= 0.000000004981
4	$large2_example/Ih-Ice1200.dat$	Elapsed time(s) = 445.88	diff Utot= 0.00000000216	diff Force= 0.00000001451
5	$large2_example/Pt500.dat$	Elapsed time(s) = 2629.20	diff Utot= 0.00000015832	diff Force= 0.00000001879
6	$large2_example/R-TiO2-1050.dat$	Elapsed time(s) = 844.58	diff Utot= 0.00000002263	diff Force= 0.00000001108
7	$large2_example/Si1000.dat$	Elapsed time(s) = 658.53	diff Utot= 0.000000000404	diff Force= 0.000000000908

Total elapsed time (s) 14464.69

これら全ての計算において、各原子の基底関数には価電子基底関数を2つ、分極基底関数を1つを割り当 てていますので、十分な精度を持った計算となっています。「Pt500.dat」を除く、他の全ての系は1000 原子以上から構成されています。ここでファイル名の最後の数字はそれぞれの系に含まれる原子数を示 しています。上記の表に示された1 MD ステップ当たりの経過時間は30 分程度です。従って、数百個の プロセッサコアが利用可能であれば1000 原子から構成される系の構造最適化が可能であることが分か ります。この計算に用いた入力ファイルと出力ファイルはディレクトリ「work/large2_example」に保存 されています。出力ファイルから得られた情報に基づき、1 SCF ステップ当たりの経過時間をまとめた ものを以下に示します。

No.	Input file	SCF steps	Elapsed time($s/SCF/spin$)	Dimension
1	$large2_example/C1000.dat$	53	14.7	13000
2	$large2_example/Fe1000.dat$	408	10.0	13000
3	$large2_example/GRA1024.dat$	72	12.9	13312
4	$large2_example/Ih-Ice1200.dat$	57	7.8	9200
5	$large2_example/Pt500.dat$	161	16.3	12500
6	$large2_example/R-TiO2-1050.dat$	38	22.2	15750
7	$large2_example/Si1000.dat$	45	14.6	13000

Kohn-Sham ハミルトニアンの次元は 10000 のオーダで、SCF ステップ当たりの所要時間は全ての系に 対して 15 秒程度です。全所要時間の差は、主に SCF 反復回数の差から生じていることが分かります。

26.2 O(N) 法と通常の固有値解法の組み合わせ

O(N)法によって 1000 個以上の原子を含む大規模な系を取り扱うことが可能ですが、OpenMX で実行 される O(N)法では、波動関数に関する情報を得ることができません。大規模系に対する波動関数と対 応する固有値を得るための簡便な方法は、最初にO(N)法を用いて自己無撞着な電子密度を求め、次に この自己無撞着な電子密度の下で、一度だけ通常の対角化計算を行うものです。この方法の例として、

564 個の炭素原子で構成される多重連結したカーボンナノチューブ (MCCN)の大規模計算を示します。 まず最初に、16 MPI プロセス (Xeon, 2.6GHz) と O(*N*) Krylov 部分空間法を用いて MCCN の SCF 計 算を実行しました。計算条件は以下の通りです。C5.0-s2p1 (基底関数)、「scf.energycutoff=130 Ryd」 、「scf.criterion=1.0e-7」、「orderN.HoppingRange=6.5 Å」、「orderN.KrylovH.order=400」、および RMM-DHSK (混合法)。入力ファイルは「work」ディレクトリの中の「MCCN.dat」です。フーリエ 表示での差分電子密度のノルムを SCF ステップの関数として、図 26 に示します。系の電子密度が収束 するのに 56 SCF ステップが必要であり、また計算時間は約7分でした。この後、以下の様にキーワー ドを設定します。

scf.maxIter	1
scf.EigenvalueSolver	Band
scf.Kgrid	1 1 1
scf.restart	on
MO.fileout	on
num.HOMOs	2
num.LUMOs	2
MO.Nkpoint	1
<mo.kpoint< td=""><td></td></mo.kpoint<>	
0.0 0.0 0.0	
MO.kpoint>	



Figure 26: 564 個の炭素原子で構成される多重連結したカーボンナノチューブ(MCCN)のSCF 収束の過程。 フーリエ表示での差分電子密度のノルムをSCF ステップに対して表示。入力ファイルは「work」ディレクトリ中の「MCCN.dat」。

次に波動関数を計算するために、16 MPI プロセス (Xeon, 2.6GHz) と通常の対角化法を用いて、同じ 系の計算を実行し、その計算時間は約2分でした。図27 は上記の方法で計算した MCCN の Γ 点での HOMO および LUMO の等値面図です。この計算例では、O(N) 法と通常の対角化法の計算時間の差は それほど大きくありませんが、O(N) 法と通常の固有値解法の組み合わせする本手法は数千原子を含む 大規模系に対して有用だと考えられます。



Figure 27: 564 個の炭素原子からなる多重連結カーボンナノチューブ (MCCN)の (a) 最高被占軌道 (HOMO) および (b) 最低空軌道 (LUMO)の等値面図。等値面値として |0.005| を使用。

27 電場

SCF 計算や構造最適化の際に、ノコギリ波による一様な外部電場を印加することができます。例えば、 a 軸に沿って 1.0 GV/m (10^9 V/m)の電場を印加する場合、次の様にキーワード「scf.Electric.Field」 を指定して下さい。

scf.Electric.Field 1.0 0.0 0.0 # default=0.0 0.0 0.0 (GV/m)

電場の符号は、電子に印加されるものとして定義されています。ノコギリ波による一様外部電場が真空 領域を持たない周期的なバルク系に印加されると、ポテンシャルの不連続面が導入されることになりま す。そのため、数値的な不安定性が引き起こされる可能性があります。一方、分子系に対しては不連続 面は真空領域に配置されますので、通常は数値不安定性の問題は起こりません。電場印加の例として、 電場によって誘起されたニトロベンゼン分子中の全電荷の変化を図 28 に示します。-NO₂ 内の酸素とパ ラ炭素原子、それにパラ水素原子の間で大きな電子移動が起こっているのが分かります。入力ファイル は「work」ディレクトリ中の「Nitro_Benzene.dat」です。図 28 に示した差電子マップに関しては「2 つの Gaussian Cube ファイルの差の解析」の 63 章も参照して下さい。



Figure 28: ゼロ外部電場印加の場合と、a軸に沿って印加された外部電場 (a)10 GV/m、および (b)-10 GV/m 下 でのニトロベンゼン分子の全電子密度の差。ここでオレンジ色と青色はそれぞれ、電子密度の増加および減少を示 す。傾いた矢印は印加した電場の傾きを図示。入力ファイルは「work」ディレクトリ中の「Nitro_Benzene.dat」。

28 電荷ドーピング

キーワード「scf.system.charge」により電子と正孔のドーピングが可能です。

scf.system.charge 1.0 # default=0.0

正と負の符号はそれぞれ正孔と電子のドーピングに対応しています。部分的な電荷のドーピングも可能で す。OpenMXではPoisson方程式の解法にFFTが用いられていますので、キーワード「scf.system.charge」 で与えられる過剰電荷は逆電荷を持った一様な背景電荷によって中性化されます。従って、異なる電荷 状態間の全エネルギーを比較する場合には、全エネルギーにはバックグランドの電荷によって誘起され る付加的な静電的相互作用が含まれていることに注意が必要です。電荷と孤立系を扱う正しい方法につ いて章 58 で議論されています。

例として、正孔ドープ、中性、電子ドープの場合のカーボンナノチューブ (14 Å の有限長) のスピン 密度を図 29 に示します。中性および電子ドープのナノチューブの全スピンモーメントは 1.0 および 2.2 であり、一方、正孔をドープしたナノチューブでは全スピンモーメントはほとんどゼロです。中性およ び電子ドープのナノチューブではナノチューブ端のダングリングボンドによりスピン分極が発生してい ます。



Figure 29: (a) 4 つの正孔をドープした場合、(b) 中性の場合、そして (c) 4 つの電子をドープした場合の、 14 Å の有限長の (5,5) カーボンナノチューブのスピン密度。インプットファイルは「work」ディレクトリ中の 「Doped_NT.dat」。

29 分数核電荷を持つ仮想原子

分数核電荷を持つ仮想原子を導入した計算が実行できます。これは分数核電荷を持つ仮想原子の擬ポテンシャルを使用することで可能となります。仮想原子の擬ポテンシャルは ADPACK で生成できます。 ADPACK での関連するキーワードは次の様に与えられます。

AtomSpecies 6.2 total.electron 6.2 valence.electron 4.2 <occupied.electrons 1 2.0 2 2.0 2.2 occupied.electrons>

上の例は炭素原子と窒素原子の中間に位置付けられる仮想原子に対するものです。仮想原子の擬ポテンシャルに対応する基底関数は同じ分数核電荷を持つ仮想原子に対して生成しなければなりません。これは、*.paoに保存されている原子の電子密度を用いて中性原子のポテンシャルが作成されるためです。例として、この方法をより計算した $C_{7.8}N_{0.2}$ の DOS を図 30 に示します。入力ファイルはディレクトリ「work」中の「DIA8-VA.dat」です。この計算では、単位セル内の 8 個の炭素原子の内の 1 つを、有効核電荷 4.2 の仮想原子に置き換えました。これは $C_{7.8}N_{0.2}$ の化学量論的化合物に相当しています。



Figure 30: 仮想原子の擬ポテンシャルを使って計算した C_{7.8}N_{0.2} の状態密度 (DOS)。用いた入力ファイルは「work」ディレクトリ中の「DIA8-VA.dat」。

30 LCAO 係数

クラスター計算とバンド計算の両方で、LCAO 係数を解析することができます。クラスター計算では、 キーワード「level.of.fileout」を2に設定すると、ファイル「*System.Name*.out」にLCAO 係数が加えら れます。例として、「テスト計算」の章で扱っている「Methane.dat」のLCAO 係数を以下に示します。

LCAO coefficients for up (U) and down (D) spins

				1 (U)	2 (U)	3 (U)	4 (U)	5 (U)	6 (U)
				-0.69899	-0.41525	-0.41525	-0.41524	0.21215	0.21215
1	С	0	S	0.69137	-0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
		0	px	0.00000	-0.10055	0.63544	0.00033	-0.68649	-1.00467
		0	ру	0.00000	0.00028	-0.00029	0.64331	0.00000	-0.00001
		0	pz	-0.00000	0.63544	0.10055	-0.00023	-1.00467	0.68649
2	Η	0	S	0.12870	0.05604	-0.35474	-0.25425	-0.59781	-0.87489
3	Η	0	S	0.12870	-0.35475	-0.05627	0.25420	-0.87488	0.59781
4	Η	0	S	0.12870	0.35497	0.05604	0.25393	0.87488	-0.59781
5	Η	0	S	0.12870	-0.05626	0.35497	-0.25388	0.59781	0.87488
				7 (U)	8 (U)				
				0.21223	0.24739				
1	С	0	S	0.0000	1.90847				
		0	px	0.00000	0.00000				
		0	ру	-1.21683	-0.00000				
		0	pz	-0.00000	0.00000				
			_						

. . .

バルクの計算でLCAO係数を出力する場合にはキーワード「MO.fileout」を「ON」に設定して下さい。その際、キーワード「MO.kpoint」で指定された k 点における LCAO係数がファイル「System.Name.out」に出力されます。クラスター計算で LCAO係数を出力するためには「level.of.filout」を「2」と設定しますが、バンド計算では、関連するキーワードは、「level.of.fileout」ではなく「MO.fileout」となります。

31 分子軌道

分子や結晶の Kohn-Sham 軌道を Gaussian cube 形式で出力できます。Gaussian cube 形式は広く用い られるデータ形式であるため、VESTA [103] や XCrySDen [105] などの多くのソフトウェアを用いて Kohn-Sham 軌道を可視化することが出来ます。関連するキーワードは以下で与えられます。

MO.fileout		on	<pre># on off, default=off</pre>
num.HOMOs		1	<pre># default=2</pre>
num.LUMOs		1	<pre># default=2</pre>
MO.Nkpoint		2	<pre># default=1</pre>
<mo.kpoint< td=""><td></td><td></td><td></td></mo.kpoint<>			
0.0 0.0	0.0		
0.5 0.0	0.0		
MO.kpoint>			

cube ファイルを生成する際にはキーワード「MO.fileout」を「ON」として下さい。出力する最高占有の 分子あるいは結晶の軌道 (HOMO)の数と最低非占有の分子あるいは結晶の軌道 (LUMO)の数はキーワー ド「num.HOMOs」と「num.LUMOs」でそれぞれ指定できます。バンド計算では HOMO と LUMO を 計算する k 点をキーワード「MO.Nkpoint」と「MO.kpoint」で指定します。キーワード「MO.Nkpoint」 は HOMO と LUMO を計算する k 点の数を与えます。キーワード「MO.kpoint」によって上に示したよ うに k 点を露わに指定できます。k 点は「Atoms.UnitVectors」で与えられた単位セルベクトルの逆格子 ベクトルに基づいて指定されます。出力される cube ファイルは以下のとおり要約されます。

クラスターの場合:

「MO.fileout=ON」かつ「scf.EigenvalueSolver=Cluster」ならば以下のファイルが生成されます。

• System.Name.homo0_0.cube, System.Name.homo0_1.cube, ...

HOMO が Gaussian cube 形式で出力されます。「homo」の下の最初の数字はスピン状態を表しま す (up=0, down=1)。二番目の数字は固有状態を表します。すなわち、0, 1, 2 がそれぞれ HOMO, HOMO-1, HOMO-2 に対応します。この総数はキーワード「num.HOMOs」で指定されます。

• System.Name.lumo0_0.cube, System.Name.lumo0_1.cube, ...

LUMO が Gaussian cube 形式で出力されます。「lumo」の下の最初の数字はスピン状態を表しま す (up=0, down=1)。二番目の数字は固有状態を表します。すなわち、0, 1, 2 がそれぞれ LUMO, LUMO+1, LUMO+2 に対応します。この総数はキーワード「num.LUMOs」で指定されます。

バルクの場合:

- 「MO.fileout=ON」かつ「scf.EigenvalueSolver=Band」ならば以下のファイルが生成されます。
- System.Name.homo0_0_0_r.cube, System.Name.homo1_0_1_r.cube, ... System.Name.homo0_0_0_i.cube, System.Name.homo1_0_1_i.cube, ...

HOMO が Gaussian cube 形式で出力されます。「homo」の下の最初の数字は k 点を意味し、この k 点はキーワード「MO.kpoint」で指定されます。二番目の数字はスピン状態を表します (up=0, down=1)。三番目の数字は固有状態を表します。すなわち、0, 1, 2 がそれぞれ HOMO, HOMO-1, HOMO-2 に対応します。この総数はキーワード「num.HOMOs」で指定されます。r と i は波動関数の実部と虚部を表します。

• System.Name.lumo0_0_0_r.cube, System.Name.lumo1_0_1_r.cube, ... System.Name.lumo0_0_0_i.cube, System.Name.lumo1_0_1_i.cube, ...

LUMO が Gaussian cube 形式で出力されます。「lumo」の下の最初の数字は k 点を意味し、この k 点はキーワード「MO.kpoint」で指定されます。二番目の数字はスピン状態を表します (up=0, down=1)。三番目の数字は固有状態を表します。すなわち、0, 1, 2 がそれぞれ LUMO, LUMO+1, LUMO+2 に対応します。この総数はキーワード「num.LUMOs」で指定されます。r と i は波動 関数の実部と虚部と表します。



例として valorphin 分子の HOMO と LUMO を図 31 に示します。

Figure 31: (a) valorphin 分子の HOMO、(b) valorphin 分子の LUMO。VESTA [103] による可視化。 入力ファイルはディレクトリ work の Valorphin_MO.dat。

32 電荷解析

それぞれの原子に有効電荷を割り当てるのは恣意性を含んだ難しい問題ですが、OpenMX では各原子の 電荷状態を解析するために Mulliken 電荷解析、Voronoi 電荷解析、また静電ポテンシャルフィッティン グ法 (ESP) の3つの方法が利用可能です。

32.1 Mulliken 電荷

「テスト計算」の章で示したように Mulliken 電荷の計算結果はデフォルトで「*System.Name*.out」に出力 されます。それぞれの原子に対して射影された Mulliken 電荷に加えて、「*System.Name*.out」ではそれ ぞれの基底関数に射影された Mulliken 電荷も出力されています。メタン分子の出力ファイル「met.out」 に保存された結果を以下に示します。

1	С		Up spin	Down spin	Sum	Diff
		multip	le			
S		0	0.598003833	0.598003833	1.196007667	0.00000000
sum	over	m	0.598003833	0.598003833	1.196007667	0.00000000
sum	over	m+mul	0.598003833	0.598003833	1.196007667	0.00000000
px		0	0.588514081	0.588514081	1.177028163	0.00000000
ру		0	0.588703212	0.588703212	1.177406424	0.00000000
pz		0	0.588514081	0.588514081	1.177028162	0.00000000
sum	over	m	1.765731375	1.765731375	3.531462749	0.00000000
sum	over	m+mul	1.765731375	1.765731375	3.531462749	0.00000000
2	Η		Up spin	Down spin	Sum	Diff
		multip	le			
S		0	0.409066346	0.409066346	0.818132693	0.00000000
sum	over	m	0.409066346	0.409066346	0.818132693	0.00000000
sum	over	m+mul	0.409066346	0.409066346	0.818132693	0.00000000
3	Η		Up spin	Down spin	Sum	Diff
		multip	le			
S		0	0.409065912	0.409065912	0.818131824	0.00000000
sum	over	m	0.409065912	0.409065912	0.818131824	0.00000000
sum	over	m+mul	0.409065912	0.409065912	0.818131824	0.00000000

Decomposed Mulliken populations

. . . .

ここで分かるように、Mulliken 電荷は全ての基底関数に対して分解されています。上記の表では分解された Mulliken 電荷は2種類の方法で加算されています。その一つは「sum over m」で、それぞれの動

径関数に対する磁気量子数についての加算を意味しています。もう一つは「sum over m+mul」で、これは磁気量子数と動径関数についての加算を意味しています。

32.2 Voronoi 電荷

各原子の Voronoi 電荷は、Voronoi 多面体内の電子密度を積分することで計算されます。OpenMX での Voronoi 多面体は Fuzzy セル分割法 [69] による連続的にぼかされた (smeared) 境界から構成されていま す。Voronoi 多面体は原子半径を考慮せずに構造だけで決定されるので、Voronoi 解析はしばしば過大 あるいは過小評価した電荷を与えることに注意する必要があります。Voronoi 電荷を計算する場合には、 入力ファイルに次のキーワード「Voronoi.charge」を設定して下さい。

Voronoi.charge on # on|off, default = off

メタン分子の場合、以下の Voronio 電荷が「*System.Name*.out」に出力されます。

Sum of Voronoi charges for up = 4.000000290723 Sum of Voronoi charges for down = 4.000000290723 Sum of Voronoi charges for total = 8.000000581446

Total spin magnetic moment (muB) by Voronoi charges = 0.00000000000

		Up spin	Down spin	Sum	Diff	Voronoi Volume (An	ug.^3)
Atom=	1	1.129270484	1.129270484	2.258540969	0.00000000	2.355421391	
Atom=	2	0.717682452	0.717682452	1.435364903	0.00000000	62.245579466	
Atom=	3	0.717682452	0.717682452	1.435364903	0.00000000	62.245579466	
Atom=	4	0.717682452	0.717682452	1.435364903	0.00000000	62.245579466	
Atom=	5	0.717682451	0.717682451	1.435364903	0.00000000	62.245579466	

炭素原子(Atom = 1)は正に、水素原子(Atom=2-5)は負に帯電しており、この結果は化学的な直観と は整合しません。しかし、Voronoi解析は最密構造を持つバルク固体に対して有益な情報を与え、Voronoi 体積はバルク系の局所構造の解析にも有効です。

32.3 静電ポテンシャルフィッティング

小さな分子系に対しては、静電ポテンシャル (ESP) フィッティング法 [109, 110, 111] が有効電荷を決定 するのに良く用いられています。多くの場合に、得られた結果は化学的な直観に整合しています。ただ し、ESP フィッティング法では表面部分から離れた原子に対して、十分なサンプリング点が存在しない ために、巨大分子やバルク系には適用できません。ESP フィッティング法では、最小二乗法を用いて有 効点電荷を決定します。DFT 計算によって求めた静電ポテンシャルを可能な限り再現するように、最小 二乗法を用いて有効点電荷を決定します。ESP フィッティング電荷は次の二段階で計算します。

(1) SCF 計算

通常のSCF計算後、次の2つのファイルが出力されます。

System.Name.out System.Name.vhart.cube

二つのファイルを作成するための追加のキーワードは必要ありません。これらのファイルは通常の SCF 計算から得られる出力ファイルですが、キーワード「level.of.fileout」は1または2に設定する必要があ ります。

(2) ESP フィッティング電荷

ESP フィッティング電荷を計算するためにプログラムコードをコンパイルします。ディレクトリ「source」 に移動し、次のようにコンパイルします。

% make esp

コンパイルが正常に完了すると、ディレクトリ「work」に実行形式ファイル「esp」が作成されます。ESP フィッティング電荷はプログラム「esp」を用いて二つのファイル「System.Name.out」、「System.Name.vhart.cube」から計算します。例えば、「テスト計算」の章で示したメタン分子の場合、ESP フィッティング電荷は次の様に計算されます。

% ./esp met -c 0 -s 1.4 2.0

拡張子なしのファイル名を指定するだけで十分ですが、二つのファイル「met.out」と「met.vhart.cube」 は「work」ディレクトリに保存しておかなければなりません。オプションの「-c」と「-s」は制限条件 と倍率 (scale factor)を指定するパラメータです。ソースコード「eps.c」のヘッダーの部分に次の説明が 記載されています。

-c constraint parameter
 '-c 0' means charge conservation
 '-c 1' means charge and dipole moment conservation
 -s scale factors for vdw radius
 '-s 1.4 2.0' means that 1.4 and 2.0 are 1st and 2nd scale factors

ESP フィッティング法は、電荷保存、並びに電荷と双極子モーメント保存の二つの制約条件下でフィッ ティングを行います。後者は DFT 計算によって求めた電荷と双極子モーメントを再現できますが、双極 子モーメントの保存条件を導入すると、特に大きな分子に対して、物理的に容認できない点電荷が得ら れる可能性が生じます。従って前者の制約条件が推奨されます。サンプリング点としては二つのシェル 構造で挟まれた領域内の実空間格子点が選択されます。シェル構造は各原子に割り当てられた球の足し 合せから定義されます。球の半径は「-s」以降に与えた1番目および2番目の倍率 (scale factor)×ファ ン・デル・ワールス半径で与えられます [112]。

計算結果は次のように標準出力(ユーザーのディスプレイ)に出力されます。

% ./esp met -c 0 -s 1.4 2.0

This is free software, and you are welcome to redistribute it under the constitution of the GNU-GPL. Constraint: charge Scale factors for vdw radius 1.40000 2.00000 Number of grids in a van der Waals shell = 28464 Volume per grid = 0.0235870615 (Bohr^3) Success 1 Fitting Effective Charge= -0.93558216739 Atom= 2 Fitting Effective Charge= 0.23389552572 Atom= Atom= 3 Fitting Effective Charge= 0.23389569182 Atom= 4 Fitting Effective Charge= 0.23389535126 Atom= 5 Fitting Effective Charge= 0.23389559858 Magnitude of dipole moment 0.0000015089 (Debye) -0.000002455 -0.0000014558 Component x y z 0.000003114

RMS between the given ESP and fitting charges (Hartree/Bohr³)= 0.096515449505

33 自然電子密度解析

Weinhold [6] による自然結合軌道法では、原子有効電荷は自然占有数(natural population, NP)と呼ばれ、原子に局在化した自然原子軌道(natural atomic orbitals, NAO)から計算されます。OpenMX は NP 解析をサポートしており、truncated cluster 法をベースとした独自の手法 [7] により、大規模系においても選択した原子の NP 解析を効率的に実施することが可能です。NP の計算は SCF 計算の後に行われ、標準出力に結果が表示されます。NP 解析は以下の手順で行って下さい。

(a) 小規模計算の場合 (scf.EigenvalueSolver = Cluster)

NPの計算は以下のキーワードにより制御します。

NBO.switch on1

このオプションでは、フルサイズの密度行列を用いて NP の計算が行われます。エチレンカーボネート 分子に対する例が「work/nbo_example」ディレクトリ内に「EC_NAO.dat」と「EC_NAO.std」として 収められていますので、ご参照下さい。

(b) 大規模計算の場合 (scf.EigenvalueSolver = Krylov)

「NBO.switch = on1」を用いた大規模系のNAO計算は、密度行列のサイズが大きいためメモリ不足となる場合があります。その様な場合、大規模系の計算に対しては「NBO.switch」を以下の様に設定した計算を行って下さい。

NBO.switch on2

O(N) クリロフ部分空間法 (scf.EigenvalueSolver = Krylov) を用いた計算の際に、このオプションが使 用可能です。O(N)の SCF 計算の後、指定した数原子に対して効率的に NP 計算を行います(化学反応 のような重要なイベントを解析する際には、全原子についてではなく局所的な数原子に対して NP 計算 をすれば十分なケースがほとんどです)。 NP 解析の対象となる原子は、以下のように指定します。

NBO.Num.CenterAtoms 5
<NBO.CenterAtoms
269
304
323
541
574
NBO.CenterAtoms>

キーワード「NBO.Num.CenterAtoms」によって、計算対象とする原子の数を指定して下さい。続け て「<NBO.CenterAtoms」と「NBO.CenterAtoms>」の間に計算対象とする原子の通し番号を記載し て下さい。ここで用いる通し番号は、キーワード「Atoms.SpeciesAndCoordinates」にて指定したもの です。「NBO.switch」が「on2」の場合にのみ「NBO.CenterAtoms」は有効であり、「on1」の場合には 「NBO.CenterAtoms」は無視され全原子に対して NP 計算が行われます。大規模系に対する NP 解析の 例として SiO2_NAO.dat と SiO2_NAO.std が「work/nbo_example」ディレクトリに収められています。 これらは、648 原子からなる SiO2 のバルク系に対する計算例です。 (c) NAO 計算に用いるパラメータ: NAO.threshold

NAO 計算の際には、占有された NAO と Rydberg (低占有) NAO を分離するプロセスがあります。分離 する際の閾値として用いるキーワードが「NAO.threshold」であり、スピン軌道毎の電子数を指定しま す。デフォルト値は 0.85 として設定されており、多くの場合にこの値で問題ありません。不自然な占有 NAO 数が得られた場合には、「NAO.threshold」を調整して下さい。

(d) 計算例

.

以下にエチレンカーボネート分子に対する NP 解析の計算結果を示します。まず、全ての原子に対する NP とその総和が標準出力に表示されます。

 1
 0
 :
 6.46917105

 2
 C
 :
 4.09908587

 3
 C
 :
 4.09909317

 4
 0
 :
 6.46902031

 5
 C
 :
 3.14623972

 6
 0
 :
 6.50714720

 7
 H
 :
 0.80250093

 8
 H
 :
 0.80249967

 9
 H
 :
 0.80262024

 10
 H
 :
 0.80262185

```
Total : 34.0000000
```

Global atom num.: 1 (0) / NP = 6.4692

NP in NAO Energy (Hartree)	0.0013 1.2529	1.6803 -0.7196	0.0046 0.4452	1.6731 -0.3208	0.0055 0.7108	1.3000 -0.2935	0.0073 0.4327	1.7972 -0.3005
1 s	-1.8000	1.2493	-0.0776	0.1255	-0.0125	-0.0027	0.0000	0.0000
2 s	1.9201	0.0014	0.0530	-0.0030	0.0163	0.0015	-0.0000	-0.0000
1 px	-0.4312	0.1031	-0.6568	1.0499	0.0431	0.0115	-0.0000	-0.0000
2 px	0.1913	-0.0062	1.7251	0.0215	-0.0500	-0.0052	0.0000	0.0000
1 py	-0.1040	-0.0056	0.0371	0.0110	-2.1699	1.0361	-0.0000	-0.0000
2 ру	0.0573	0.0025	-0.0493	-0.0052	3.4499	0.1576	0.0000	0.0000
1 pz	0.0000	-0.0000	-0.0000	-0.0000	-0.0000	-0.0000	-0.6206	1.0131
2 pz	-0.0000	-0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	1.7312	0.0267

全ての原子に対する NP が表示された後、各原子の NAO に対する NP とエネルギー準位が表示され、各 NAO に対応する LCPAO 係数が表示されます。将来的には NBO の計算及び解析も OpenMX に実装される予定です。

34 ノンコリニアDFT

OpenMX ではノンコリニア DFT 法が利用可能です。各実空間グリッド上でスピン量子化軸に制限を 持たない最も一般的な方法が実装されています。またスピン軌道相互作用 [8, 9, 10, 11, 16] も自己無 撞着計算において取り入れることが可能です。ノンコリニア DFT 計算を実行する場合、キーワード 「scf.SpinPolarization」を以下のように設定して下さい。

scf.SpinPolarization NC # On|Off|NC

この場合、Kohn-Sham 軌道は二成分スピノルによって表現されます。それぞれのサイトの初期スピンの 方位は次の様に与えられます。

- 1: 原子の通し番号
- 原子種の名前
- 3: x-座標(もしくはa軸に対する規格化座標)
- 4: y-座標(もしくはb軸に対する規格化座標)
- 5: z-座標(もしくは c 軸に対する規格化座標)
- 6: up スピン状態に対する初期占有数
- 7: down スピン状態に対する初期占有数
- 8: スピン磁気モーメントに対する局所磁場の Euler 角: theta
- 9: スピン磁気モーメントに対する局所磁場の Euler 角: phi
 8と9番目の Euler 角は初期スピン密度の生成にも使用
- 10: 軌道磁気モーメントに対する局所磁場の Euler 角: theta
- 11: 軌道磁気モーメントに対する局所磁場の Euler 角: phi
- 次のいずれかのキーワード「scf.Constraint.NC.Spin」、「scf.NC.Zeeman.Orbital」、
 もしくは「scf.NC.Zeeman.Orbital」が指定された際に、それぞれの原子に対して
 制約法を適用する場合には「1」、適用しない場合には「0」。
- 13: LDA(GGA)+U法の際に、軌道分極を促進する場合には「on」、通常計算の場合には「off」。

スピン磁気モーメントと軌道磁気モーメントの方位に対する初期 Euler 角 (θ 、 ϕ) はそれぞれ 8 番目、9 番目および 10 番目、11 番目の列で与えられます。12 番目の列は制約法のスイッチで、それぞれの原子 サイトにスピン磁気モーメントと軌道磁気モーメントの方位に対する制約汎関数を付加します。ここで、 「1」は制約汎関数を付加、「0」は制約法無しを意味します。スピン磁気モーメントの方位に制約条件を 付加する DFT 計算の詳細については「スピン磁気モーメント方位の制約 DFT」の 38 章を参照して下さ い。最後の 13 番目の列は LDA(GGA)+U 法の際に、軌道分極を促進する手法へのスイッチで、軌道分 極を促進する場合には「on」、通常計算の場合には「off」となります。図 32 はノンコリニア DFT 法で 計算した MnO 分子中のスピン磁気モーメントをベクトル表示したものです。この計算は、「work」ディ レクトリ内の入力ファイル「Mol_MnO_NC.dat」を使って、再現することができます。実空間における ノンコリニアスピン磁気モーメントを可視化するために、次の二つのファイルが利用できます。

System.Name.nc.xsf System.Name.ncsden.xsf

ここで、*System.Name*はユーザーが指定した「System.Name」です。「*System.Name.nc.xsf*」と「*System.Name.ncsden.xsf*」はXCrySDenでサポートされているベクトルファイルフォーマット (XSF)のファイルです。前者が Mulliken 解析によってそれぞれの原子に対して射影されたスピン磁気モーメントを、後者が実空間グリッド上のスピン磁気モーメントになります。この二つのファイルは、図 32 に示すように XCrySDen の「Display → Forces」を使って可視化できます。

Mulliken 解析で計算されるそれぞれの原子のスピン磁気モーメントとその Euler 角は、ファイル 「System.Name.out」内に次のように保存されています。

Total spin moment (muB) 4.998503442 Angles (Deg) 44.991211196 0.00000000

		Up	Down	Sum	Diff	theta	phi
1	Mn	9.59803	4.76902	14.36705	4.82901	44.99208	0.00000
2	0	3.40122	3.23173	6.63295	0.16949	44.96650	-0.00000

ー般にノンコリニア DFT 法おける SCF 計算はコリニア計算と比較して、収束が容易ではありません。 これはスピン方位の変化に伴うエネルギーの変化が非常に小さいためです。スピン磁気モーメントや軌 道磁気モーメントの方位に制約条件を課す制約法は SCF 計算の収束の加速に有効に働くことがありま す。ノンコリニア DFT 法では、スピン軌道相互作用がサポートされていますが、コリニア DFT 法では サポートされていません。スピン軌道相互作用に関しては「相対論的効果」の章を参照して下さい。



Figure 32: ノンコリニア DFT 法で計算した MnO 分子中のスピン磁気モーメント。(a) Mulliken 解析によって それぞれの原子に対して射影されたスピン磁気モーメント。(b) 実空間グリッド上のスピン磁気モーメント。図は XCrySDen の「Display → Forces」により可視化。入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「Mol_MnO_NC.dat」。

35 相対論的効果

OpenMXのWEBサイトで公開されている擬ポテンシャルは原子に対するDirac方程式を数値的に解く ことで生成されています。相対論的擬ポテンシャルには質量項やポテンシャル勾配項から生じる相対論効 果に加え、スピン軌道相互作用も含まれています。この相対論的擬ポテンシャルを用いて相対論効果を考 慮することが可能です。ただしOpenMXの計算では波動方程式としてShrödinger方程式と同等の微分 演算子が用いられていますので、価電子に対する直接的な相対論効果は無視されています。直接的な効 果は小さいことが分かっており、価電子に対する大部分の相対論効果は内殻電子を通し、間接的に生じ ます。間接的な相対論効果は擬ポテンシャルの中に含まれており、結局、内殻電子だけでなくOpenMX の計算で扱う価電子に対してもまた十分な精度で相対論効果が考慮されています。スピン軌道相互作用 を量子数 j の縮退度に応じて平均化する操作は「半相対論的扱い」として知られ、またスピン軌道相互 作用を含めた場合には「完全な相対論的扱い」と呼ばれます。コリニアDFT計算の際には「半相対論的 扱い」のみが実行できます。またノンコリニアDFT計算の際には「半相対論的扱い」と「完全な相対論 的扱い」のどちらも実行可能です。

35.1 完全な相対論的扱い

擬ポテンシャル法の範疇で、スピン軌道相互作用を含む「完全な相対論効果」をノンコリニア DFT 計 算において考慮することができます [12, 32, 16]。一方、スピン軌道相互作用の取扱いはコリニア DFT 計算ではサポートされていません。次の二つのステップで「完全な相対論効果」の考慮が可能です。

(1) j 依存型擬ポテンシャルの生成

まず最初に ADPACK を使用し、j 依存型擬ポテンシャルを作成して下さい。ユーザーの便宜のために、 多くの元素に対する j 依存型擬ポテンシャルがデータベース Ver. 2019 [149] として利用可能です。j 依 存型擬ポテンシャルを作成するための詳細は ADPACK のマニュアルを参照して下さい。

(2) SCF 計算

キーワード「Definition.of.Atomic.Species」の設定中で j 依存型擬ポテンシャルを指定した場合、次の



Figure 33: ノンコリニア DFT 法によって計算したスピン軌道相互作用が (a) 無し、(b) 有りの場合の GaAs 固体 のバンド構造。Ver.2019 のデータベースから、基底関数として Ga7.0-s2p2d2 と As7.0-s2p2d2 を、また擬ポテン シャルとして Ga_CA19.vps と As_CA19.vps を使用。交換相関項は LDA を、scf.Kgrid と scf.energycutoff にはそ れぞれ 12×12×12 と 140 (Ryd) を使用。また計算における格子定数は実験値 (5.65Å)。入力ファイルは「work」 ディレクトリの「GaAs.dat」。

キーワード「scf.SpinOrbit.Coupling」でスピン軌道相互作用が導入できます。

scf.SpinOrbit.Coupling on # On|Off, default=off

スピン軌道相互作用は、摂動法として取り扱われるのではなく、擬ポテンシャル法の枠組で自己無撞着 に組み込まれます。このスピン軌道相互作用を介して、二成分スピノル中の α および β スピン成分は直 接に相互作用します。ノンコリニア DFT 計算において実空間でのスピン方位はスピン軌道相互作用を 組み込んだ場合に意味を持ちます。スピン軌道相互作用が存在しない場合では、分子や結晶方位に対す る相対的なスピン方位はエネルギー的に縮退しており、実空間でのスピン方位は一義的に決定されませ ん。ただし相対的なスピン間の方位(例えば強磁性と反強磁性)はスピン軌道相互作用が含めない場合 でも物理的に意味を持ち、エネルギー的な差異を生じさせますので誤解しないようにして下さい。スピ ン軌道分裂の例として、図 33 にノンコリニア DFT 法によって計算されたスピン軌道相互作用が (a) 無 い場合と (b) ある場合の GaAs 固体のバンド構造を示します。入力ファイルは「work」ディレクトリの 「GaAs.dat」です。図 33 (a) では分裂は見られませんが、図 33 (b) ではスピン軌道相互作用によってい くつかのバンドの縮退が解けていることが分かります。表5 に二つの k 点、 Γ 点および L 点でのスピン 軌道相互作用によるエネルギー分裂幅を示します。他の計算値および実験値と良い一致が見てとれます。

Table 5: GaAs 固体の Γ_{15v} および L_{3v} において計算されたスピン軌道分裂 (eV) 。比較のために他の理論 値 (LMTO: 参考文献 [113], PP: 参考文献 [114]) と実験値 (参考文献 [115]) も併記。入力ファイルは「work」 ディレクトリ中の「GaAs.dat」。

Level	OpenMX	LMTO	PP	Expt.
Γ_{15v}	0.344	0.351	0.35	0.34
L_{3v}	0.213	0.213	0.22	

35.2 スピン軌道相互作用のコントロール

OpenMX Ver. 3.9 では、データベース Ver. 2019 に保存された擬ポテンシャルを用いてスピン軌道相互 作用の強さを制御することができます。スピン軌道相互作用の強弱を予め調整した擬ポテンシャルを特 別に用意する必要はありません。それぞれの角運動量量子数に対するスケーリング係数を以下のように キーワード「scf.SO.factor」で指定します。

<scf.SO.factor Ga s 1.0 p 2.0 d 1.0 f 1.0 As s 1.0 p 2.0 d 1.0 f 1.0 scf.SO.factor>

1列目はキーワード「Definition.of.Atomic.Species」で定義された原子名であり、それに続けて角運動量 量子数のシンボル、係数を指定します。スケーリング係数「1.0」は実際の原子におけるスピン軌道相互 作用に対応します。系内の全ての原子に対して、*f*軌道まで必ず指定して下さい。

35.3 半相対論的扱い

「半相対論的な取り扱い」を導入する方法の一つは、ADPACK によって作成された半相対論的擬ポテン シャルを使用することですが、より簡単な方法は *j* 依存型擬ポテンシャルを用い、次のようにキーワー ド「scf.SpinOrbit.Coupling」を「off」にすることです。

scf.SpinOrbit.Coupling off # On|Off, default=off

この場合、OpenMX の計算において j 依存型擬ポテンシャルが読み込まれた際に、自動的に j の縮退度 を重みとして平均化されます。この平均化の操作によって j 依存型擬ポテンシャルは半相対論的な擬ポ テンシャルに変換されます。つまり、j 依存型擬ポテンシャルは、相対論的および半相対論的取り扱い の両者に利用できることになります。従って、相対論的な効果を考慮する場合には、半相対論的な擬ポ テンシャルではなく、完全に相対論的な j 依存型擬ポテンシャルを作成することをお勧めします。実際、 図 33 (a) の計算は「scf.SpinOrbit.Coupling=off」とし、図 33 (b) と同じ擬ポテンシャルのファイルを 用いて、実行したものです。

36 軌道磁気モーメント

各原子サイトでの軌道磁気モーメントは、ノンコリニア DFT 計算において、デフォルトで計算されます。 局所的な軌道磁気モーメントはスピン軌道相互作用の結果として現れるため、スピン軌道相互作用が考 慮された場合にのみ、この値は有限値となります [118, 119]。例として、ディレクトリ「work」内の入力 ファイル「FeO_NC.dat」を用いた酸化鉄固体のノンコリニア LDA+U 計算 (U=5eV) について説明しま す。LDA+U の計算については、「DFT+U」の章を参照して下さい。計算した鉄のサイトの軌道磁気モー メントおよびスピン磁気モーメントを表 6 に示します。また以下のように「System.Name.out」内に軌 道成分に分解した軌道磁気モーメントが出力されています。ここで「System.Name」は「System.Name」 を意味します。

Total Orbital Moment (muB) 0.000001885 Angles (Deg) 126.954120326 185.681623854

	Or	bital moment	(muB)	theta	(Deg)	phi	(Deg)
1	Fe	0.76440		131.3003	89 51	.5708	32
2	Fe	0.76440		48.6997	2 231	.5707	1
3	0	0.00000		40.6861	.2 210	.4840)5
4	0	0.00000		48.1838	87 222	.7236	57

Decomposed Orbital Moments

1	Fe		Orbital Moment(muB)	Angles	(Deg)
		mult	iple		
S		0	0.00000000	90.0000	0.0000
sum	over	m	0.00000000	90.0000	0.0000
S		1	0.00000000	90.0000	0.0000
sum	over	m	0.00000000	90.0000	0.0000
px		0	0.000055764	42.7669	270.0000
ру		0	0.000046795	28.9750	180.0000
pz		0	0.000044132	90.0000	239.0920
sum	over	m	0.000120390	47.1503	239.0920
px		1	0.001838092	10.8128	-90.0000
ру		1	0.001809013	3.5933	180.0000
pz		1	0.000362989	90.0000	251.7994
sum	over	m	0.003683170	11.3678	251.7994
d3z^2	2-r^2	0	0.043435663	90.0000	224.2874
dx^2-	-y^2	0	0.066105902	24.3591	229.7056

Table 6: 遷移金属酸化物 MO (M=Mn, Fe, Co, Ni)のスピン磁気モーメント $M_s(\mu_B)$ と軌道磁気モーメント $M_o(\mu_B)$ 。LDA+U 法 [20]を用いて計算し、M の最初の 1d 軌道に対して、 Mn には 3.0 (eV)、 Fe には 5.0 (eV)、 Co には 7.0 (eV)、Ni には 7.0 (eV)の実効 U 値を使用。Mulliken 解析は多重基底関数の使用に際して大きめのス ピンモーメントを与える傾向があるため、Voronoi 分割によって、局在スピンモーメントを計算。入力ファイルは 「work」ディレクトリ中の「MnO_NC.dat」、「FeO_NC.dat」、「CoO_NC.dat」、「NiO_NC.dat」。比較のために他 の理論値 [70] と実験値 [70] も併記。

_		M_s		M_o		
	Compound	l OpenMX	Other calc.	OpenMX	Other calc.	Expt. in total
_	MnO	4.519	4.49	0.004	0.00	4.79, 4.58
	FeO	3.653	3.54	0.764	1.01	3.32
	CoO	2.714	2.53	1.269	1.19	3.35, 3.8
	NiO	1.687	1.53	0.247	0.27	1.77, 1.64, 1.90
_						
dxy	0	0.361874370		80.4206	50.6465	
dxz	0	0.397108491		144.2572	-12.7324	
dyz	0	0.427070801		138.9995	100.0151	
sum ove	er m	0.776513038		132.4577	51.6984	
d3z^2-r	^2 1	0.000144144		90.0000	196.4795	
dx^2-y^2	2 1	0.000270422		31.2673	224.0799	
dxy	1	0.003006770		85.5910	50.2117	
dxz	1	0.002952926		139.3539	-4.1301	
dyz	1	0.003222374		134.0513	95.9246	
sum ove	er m	0.006795789		126.2536	52.1993	
f5z^2-3	r^2 0	0.001903274		90.0000	33.4663	
f5xz^2-2	xr^2 0	0.005186342		14.5594	118.0868	
f5yz^2-	yr^2 0	0.005258572		17.3323	-35.0807	
fzx^2-z	y^2 0	0.005477755		29.3372	224.9067	
fxyz	0	0.004851020		10.1407	249.0607	
fx^3-3*:	xy^2 0	0.002029489		84.1842	-81.2087	
f3yx^2-	y^3 0	0.001611593		82.6686	176.3172	
sum ove	er m	0.020307129		9.9551	249.3739	

• • •

表 6 に示すように、OpenMX の計算結果は、一連の 3d 遷移金属酸化物のスピンおよび軌道磁気モーメントの他の計算結果と整合しています。しかし、軌道磁気モーメントの絶対値は基底関数や DFT+U 法のオンサイトの U などの計算条件に大きく影響を受けます。軌道磁気モーメントの収束計算には分極関数を含むかなり大きな基底関数が必要であることにも注意すべきです。一方、スピン磁気モーメントの値は計算条件に対する変化が比較的、小さいことが経験上、分かっています。

37 DFT+U法

3d 軌道や4f 軌道などの局在軌道上での局所クーロン相互作用を考慮するために、DFT+U 法が利用可 能です。占有数演算子、汎関数形、ダブルカウント項の取り扱いに関して様々な表式のDFT+U 法が実 装されています。本機能はコリニア計算とノンコリニア計算の両方で利用できます。本機能を用いて論 文等を出版される際には実装に関する論文 [20, 21, 22] を引用して下さい。本手法の理論と実装の詳細は 参考文献 [20, 21, 22] と技術ノート [23, 24] を参照して下さい。

37.1 標準設定

37.1.1 DFT+U 法の選択: 単純化または一般化

DFT+U法における占有数演算子、汎関数形、ダブルカウント項を選択するために次の二つのキーワードを指定します。

scf.Hubbard.U	on	#	on off, default=off
scf.DFTU.Type	2	#	1:Simplified(Dudarev) 2:General, default=1

これらのキーワードはコリニア計算とノンコリニア計算 [21, 22] の両方で共通です。scf.DFTU.Type=1 は Dudarev ら [25] によるいわゆる「単純化回転不変形式」に相当し、ここで U (Hubbard U) のみが役 割を担います [20]。より一般的な DFT+U 法では U だけでなく、J (Hunt のカップリング J) も入力パ ラメタとなります。DFT+U 法を使用する際にはキーワード「scf.SpinPolarization」は常に「on」また は「nc」と設定して下さい。

占有数演算子 [20] は以下のキーワードで指定されます。

scf.Hubbard.Occupation dual # onsite|full|dual, default=dual

三つの占有数演算子 (onsite、full、dual) において、dual 演算子のみが総和測 (占有数行列のトレース が電子の総数を与える)を満たします。「onsite」、「full」、「dual」の演算子の詳細は参考文献 [20] を参 照して下さい。

原子種をキーワード「Definition.of.Atomic.Species」で以下の様に定義した場合、

```
<Definition.of.Atomic.Species
Ni Ni6.0S-s2p2d2f1 Ni_CA13S
0 05.0-s2p2d1 0_CA13
Definition.of.Atomic.Species>
```

各軌道の $U \ge J$ の値(eV単位)はキーワード「Hubbard.U.values」により次の様に指定されます。

<Hubbard.U.values # eV Ni 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 5.0 2d 0.0 1f 0.0 O 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 0.0 Hubbard.U.values>

<Hund.J.values # eV Ni 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 0.9 2d 0.0 1f 0.0 O 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 0.0 Hund.J.values> U(J)の指定は<Hubbard.U.values (<Hund.J.values)から開始し、記述の最後はHubbard.U.values> (Hund.J.values>)とします。全ての基底関数に対して、上記の形式で eV 単位で $U \ge J$ を与えて下さ N_{o} 「1s」や「2s」は第1 s 軌道と第2 s 軌道を意味します。「1s」の後ろの数値が第1 s 軌道の U (また d J)の値です。同一の規則が p 軌道や d 軌道に適用されます。もし scf.DFTU.Type=1 ならば、U の値 のみが読まれ、その際には J の値を指定する必要はありません。

37.1.2 二重計算に対する補正項の選択

二重計算 (double-counting, DC) に対する補正は DFT+U 法を含む「埋め込み」法において共通して生じ るものです。scf.DFTU.Type=2を用いた場合、DC 項は以下のキーワードで指定しなければなりません。

scf.dc.Type cFLL # sFLL|sAMF|cFLL|cAMF, default=sFLL

上記では「cFLL」の DC 項が選択されます。「sFLL」、「sAMF」、「cFLL」、「cAMF」の指定において「c」と「s」はそれぞれ電荷 (スピン非分極) 密度とスピン密度 LDA/GGA を用いた密度汎関数法を意味 します。そして、「FLL」と「AMF」はダブルカウント項の扱いにおける完全局在極限 (fully localized limit、FLL) と周辺平均場 (around mean-field、AMF) に対応します。各手法の詳細な定義と振る舞い は参考文献 [21, 22] を参照してください。cFLL または cAMF の DC 項が選択された場合、LDA(また は GGA) のスピン密度交換相関ポテンシャルが SCF ループ中で考慮されないことに注意してください [21, 22]。scf.dc.Type=sFLL は Liechtenstein ら [26] によって提案された形式に対応します。単純化回 転不変形式 (scf.DFTU.Type=1) が指定された際には sFLL の DC 項が暗黙に仮定されていることにも注 意してください。どの種類の DFT+U 法が指定されたのか、標準出力における以下のメッセージ (SCF ループの開始前)から確認することができます。

For scf.DFTU.Type=1,

scf.DFTU.Type: 1(Simplified)

For scf.DFTU.Type=2 and scf.dc.Type=cFLL,

DFT+U計算例として、NiO 固体の状態密度を図 34 に示します。この計算では Ni の第 1 d 軌道に 対して U = 5 eV とし、また 0.5 もしく 1.0 eV の J 値を割り当てました。入力ファイルはディレクトリ 「work」中の「NiO-cFLL.dat」と「NiO-sFLL.dat」です。d 軌道への U の導入によりギャップが大きく なり、また scf.dc.Typeの選択に応じて J の与える効果が異なっています。各軌道の占有数はファイル 「System.Name.out」に出力されます。この出力形式はタイトル「Occupation Number in LDA+U」で 始まる軌道分解されたマリケン占有数のそれと同じです。NiO 固体(「scf.dc.Type=cFLL」、U = 5 eV 、J = 0.5 eV)の計算例を以下に示します。



Figure 34: NiO における up スピンの状態密度。(a) LDA, (b) 「scf.dc.Type=cFLL」での DFT+U、(c) 「scf.dc.Type=sFLL」での DFT+U。U は 5 eV に固定。青色の線は J = 0.5 eV、赤色の線は J = 1.0 eV。

1 Ni

spin= 0

Sum = 8.708572022602

		1	2	3	4	5	6	7	8
Individual		-0.0041	0.0012	0.0012	0.0022	0.0040	0.0040	0.0044	0.0064
S	0	0.1792	-0.0008	-0.0000	0.0015	-0.0000	0.0003	0.0124	-0.0000
S	1	-0.9756	0.0052	0.0000	0.0026	0.0000	-0.0041	-0.1251	0.0000
px	0	0.0006	0.0007	-0.0012	-0.0123	0.0003	0.0006	-0.0033	-0.0000
ру	0	0.0006	-0.0013	-0.0000	-0.0122	0.0000	0.0000	-0.0033	0.0000
pz	0	0.0006	0.0007	0.0012	-0.0123	-0.0003	0.0006	-0.0033	0.0000
px	1	0.0091	0.0053	-0.0095	-0.0867	0.0205	0.0152	-0.0206	0.0026
ру	1	0.0093	-0.0116	-0.0000	-0.0870	-0.0000	-0.0207	-0.0236	-0.0000
pz	1	0.0091	0.0052	0.0095	-0.0867	-0.0205	0.0152	-0.0206	-0.0026
d3z^2-r^2	0	0.0002	0.0348	0.0604	-0.0000	-0.0020	0.0012	0.0001	-0.0005
dx^2-y^2	0	0.0004	0.0604	-0.0348	-0.0000	0.0011	0.0020	0.0001	0.0003
dxy	0	-0.0001	0.0007	0.0012	0.0151	0.0367	-0.0218	0.0097	-0.0003

dxz	0	-0.0006	-0.0015	-0.0000	0.0167	0.0000	0.0417	0.0112	0.0000
dyz	0	-0.0001	0.0007	-0.0012	0.0151	-0.0367	-0.0218	0.0097	0.0003
d3z^2-r^2	1	-0.0025	-0.4966	-0.8626	-0.0006	0.0295	-0.0174	-0.0006	0.0056
dx^2-y^2	1	-0.0042	-0.8625	0.4967	-0.0010	-0.0170	-0.0301	-0.0010	-0.0033
dxy	1	0.0136	-0.0160	-0.0276	-0.5343	-0.7016	0.4220	-0.1326	0.0055
dxz	1	0.0225	0.0332	0.0000	-0.5657	-0.0000	-0.7918	-0.1607	-0.0000
dyz	1	0.0136	-0.0161	0.0275	-0.5343	0.7016	0.4219	-0.1325	-0.0055
f5z^2-3r^2	0	-0.0029	0.0032	0.0065	-0.0804	-0.0514	0.0334	-0.0282	-0.0069
f5xz^2-xr^2	0	0.0017	-0.0304	-0.0148	0.0467	-0.0113	-0.0653	0.0174	-0.4673
f5yz^2-yr^2	0	0.0013	0.0057	-0.0294	0.0479	0.0517	0.0341	0.0272	0.4428
fzx^2-zy^2	0	-0.0001	-0.0360	0.0237	-0.0031	-0.0256	-0.0567	0.0001	0.5857
fxyz	0	0.1218	-0.0003	-0.0000	0.2573	0.0000	0.0172	-0.9581	0.0000
fx^3-3*xy^2	0	-0.0023	-0.0195	-0.0197	-0.0655	0.0563	-0.0083	-0.0223	-0.3532
f3yx^2-y^3	0	0.0017	0.0072	0.0228	0.0618	-0.0401	0.0441	0.0352	-0.3430

	9	10	11	12	13	14	15	16
	0.0116	0.0117	0.0207	0.0207	0.0238	0.0972	0.1112	0.1114
0	-0.0003	-0.0000	0.0000	-0.0005	-0.0075	-0.0206	-0.0000	-0.0000
1	0.0001	0.0000	0.0000	-0.0013	0.0076	0.0102	0.0000	-0.0000
0	-0.0005	0.0006	-0.0024	0.0014	0.0043	-0.0270	0.0291	0.0170
0	0.0006	0.0000	0.0000	-0.0027	0.0044	-0.0279	-0.0000	-0.0338
0	-0.0005	-0.0006	0.0024	0.0014	0.0043	-0.0270	-0.0291	0.0171
1	0.0229	-0.0402	0.1442	-0.0832	-0.1073	0.5479	-0.6901	-0.4038
1	-0.0437	0.0000	-0.0005	0.1632	-0.1127	0.5594	0.0003	0.7916
1	0.0229	0.0402	-0.1437	-0.0841	-0.1073	0.5478	0.6898	-0.4043
0	0.0053	0.0093	0.0012	0.0006	-0.0001	0.0003	-0.0202	0.0115
0	0.0092	-0.0053	-0.0007	0.0011	-0.0002	0.0006	0.0117	0.0199
0	-0.0033	-0.0056	-0.0049	-0.0032	-0.0237	0.0916	0.0095	-0.0067
0	0.0069	-0.0000	-0.0000	0.0054	-0.0236	0.0915	0.0000	0.0102
0	-0.0033	0.0056	0.0049	-0.0031	-0.0237	0.0916	-0.0095	-0.0067
1	-0.0241	-0.0404	-0.0230	-0.0138	0.0011	-0.0001	0.0089	-0.0052
1	-0.0418	0.0233	0.0134	-0.0238	0.0018	-0.0002	-0.0051	-0.0090
1	0.0224	0.0367	0.0645	0.0399	0.1012	-0.0657	-0.0086	0.0058
1	-0.0489	0.0000	0.0002	-0.0737	0.1010	-0.0652	-0.0000	-0.0096
1	0.0224	-0.0367	-0.0648	0.0395	0.1011	-0.0657	0.0086	0.0058
0	0.0928	0.1648	-0.6676	-0.3997	-0.5498	-0.1226	-0.1505	0.0868
0	0.4854	0.4030	-0.3328	0.3674	0.3359	0.0744	-0.0944	-0.0506
0	0.1112	0.6352	0.1497	-0.4674	0.3502	0.0772	-0.0023	0.1046
0	0.6859	-0.3821	-0.0991	0.1577	-0.0010	-0.0008	0.0028	0.0032
0	0.0052	0.0000	0.0000	-0.0109	0.0195	0.0064	0.0000	0.0007
0	0.4934	0.1037	0.5899	-0.2158	-0.4352	-0.0974	0.1173	0.0705
0	0.1435	-0.4920	-0.1130	-0.6043	0.4520	0.0997	0.0019	0.1351
	0 1 0 0 1 1 1 0 0 0 0 1 1 1 1 1 0 0 0 0	9 0.0116 0 -0.0003 1 0.0001 0 -0.0005 0 0.0006 0 -0.0005 1 0.0229 1 -0.0437 1 0.0229 0 0.0053 0 0.0092 0 -0.0033 0 0.0092 0 -0.0033 1 -0.0241 1 -0.0418 1 0.0224 1 -0.0489 1 0.0224 0 0.0928 0 0.4854 0 0.1112 0 0.6859 0 0.0052 0 0.4934 0 0.1435	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	9 10 11 0.0116 0.0117 0.0207 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 1 0.0001 0.0000 0.0000 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0 0.0006 0.0000 0.0000 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 1 0.0229 -0.0402 0.1442 1 -0.0437 0.0000 -0.0005 1 0.0229 0.0402 -0.1437 0 0.0053 0.0093 0.0012 0 0.0053 -0.0053 -0.0007 0 0.0053 -0.0053 -0.0012 0 0.0053 -0.0053 -0.0012 0 0.0069 -0.0000 -0.0030 1 -0.0241 -0.0404 -0.0230 1 -0.0244 0.0367 0.0645 1 -0.0489 0.0000 0.0002 1 0.0224 -0.367 -0.0	9 10 11 12 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 1 0.0001 0.0000 -0.0024 0.0014 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0 0.0006 0.0000 -0.0027 0 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0014 1 0.0229 -0.0402 0.1442 -0.0832 1 -0.0437 0.0000 -0.0035 0.1632 1 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0066 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0032 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0032 0 0.0069 -0.0033 0.0134 -0.0331 1 -0.0241 -0.0404 -0.0230 -0.0138 1 -0.0418 0.0233 </td <td>9 10 11 12 13 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0.0238 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 -0.0075 1 0.0001 0.0000 0.0000 -0.0013 0.0076 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0.0043 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 1 0.0229 -0.0402 0.1442 -0.0832 -0.1177 1 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 -0.1073 1 -0.0437 0.0000 -0.0055 0.1632 -0.1127 1 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 -0.1073 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0066 -0.0011 0 0.0053 -0.0077 0.0011 -0.0023 0 -0.0033 -0.0056 -0.0049 -0.0031 -0.236 0 -0.04</td> <td>9 10 11 12 13 14 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0.0238 0.0972 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 -0.0206 0.0102 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0.0043 -0.0270 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0144 0.0043 -0.0270 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0144 0.0043 -0.0270 0 -0.0035 -0.0006 0.0024 0.0144 0.0043 -0.0270 1 -0.029 -0.0402 0.1442 -0.0832 -0.1073 0.5478 0 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 -0.1073 0.5478 0 0.0053 0.0093 0.012 0.0006 -0.0031 0.0003 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0032 -0.0237 0.0916 0 0.00092 -0.0053</td> <td>9 10 11 12 13 14 15 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0.0238 0.0972 0.1112 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 -0.0075 -0.0206 -0.0000 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0.0044 -0.0279 -0.0000 0 -0.0005 0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 -0.0279 -0.0000 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 -0.0279 -0.0000 0 -0.0055 -0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 -0.0279 -0.0001 1 0.0229 -0.0402 0.1442 -0.0832 -0.1173 0.5478 0.6898 0 0.0053 0.0093 0.012 0.0006 -0.0011 0.0003 -0.0220 0 0.0054 -0.0031 -0.0237 0.916 0.0095 0 0.0056 -0.0049<!--</td--></td>	9 10 11 12 13 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0.0238 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 -0.0075 1 0.0001 0.0000 0.0000 -0.0013 0.0076 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0.0043 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 1 0.0229 -0.0402 0.1442 -0.0832 -0.1177 1 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 -0.1073 1 -0.0437 0.0000 -0.0055 0.1632 -0.1127 1 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 -0.1073 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0066 -0.0011 0 0.0053 -0.0077 0.0011 -0.0023 0 -0.0033 -0.0056 -0.0049 -0.0031 -0.236 0 -0.04	9 10 11 12 13 14 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0.0238 0.0972 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 -0.0206 0.0102 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0.0043 -0.0270 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0144 0.0043 -0.0270 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0144 0.0043 -0.0270 0 -0.0035 -0.0006 0.0024 0.0144 0.0043 -0.0270 1 -0.029 -0.0402 0.1442 -0.0832 -0.1073 0.5478 0 0.0229 0.0402 -0.1437 -0.0841 -0.1073 0.5478 0 0.0053 0.0093 0.012 0.0006 -0.0031 0.0003 0 0.0053 0.0093 0.0012 0.0032 -0.0237 0.0916 0 0.00092 -0.0053	9 10 11 12 13 14 15 0.0116 0.0117 0.0207 0.0207 0.0238 0.0972 0.1112 0 -0.0003 -0.0000 0.0000 -0.0005 -0.0075 -0.0206 -0.0000 0 -0.0005 0.0006 -0.0024 0.0014 0.0044 -0.0279 -0.0000 0 -0.0005 0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 -0.0279 -0.0000 0 -0.0005 -0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 -0.0279 -0.0000 0 -0.0055 -0.0006 0.0024 0.0014 0.0043 -0.0279 -0.0001 1 0.0229 -0.0402 0.1442 -0.0832 -0.1173 0.5478 0.6898 0 0.0053 0.0093 0.012 0.0006 -0.0011 0.0003 -0.0220 0 0.0054 -0.0031 -0.0237 0.916 0.0095 0 0.0056 -0.0049 </td

		17	18	19	20	21	22	23	24
Individual		0.2342	0.9866	0.9949	0.9950	1.0070	1.0070	1.0101	1.0101
S	0	0.9835	-0.0030	-0.0001	0.0000	-0.0000	0.0001	0.0003	0.0000
S	1	0.1796	-0.0015	-0.0000	0.0000	0.0000	-0.0000	-0.0000	-0.0000
px	0	-0.0023	-0.5138	-0.3934	-0.6753	-0.0494	-0.0317	0.1133	-0.2016
ру	0	-0.0021	-0.5218	0.7787	-0.0000	-0.0000	0.0587	-0.2264	-0.0000
pz	0	-0.0023	-0.5138	-0.3933	0.6753	0.0494	-0.0317	0.1132	0.2017
px	1	0.0092	-0.0625	-0.0195	-0.0329	0.0012	0.0006	-0.0049	0.0083
ру	1	0.0095	-0.0631	0.0376	-0.0000	0.0000	-0.0016	0.0097	0.0000
pz	1	0.0092	-0.0625	-0.0195	0.0329	-0.0012	0.0006	-0.0049	-0.0083
•••									

各原子サイトの占有数行列を対角化することで、固有値と固有ベクトルが得られます。占有数行列の固 有値は物理的には局在軌道上の電子占有数となります。また固有ベクトルがその局在軌道に対応してい ます。

37.1.3 軌道分極

DFT+U 汎関数は、軌道占有の自由度に複数の極値を持っており、SCF 計算の結果は初期占有数近傍に 存在する局所的な極値に収束することがあります。そのため収束した電子状態は最低エネルギーを持っ た基底状態であるとは限りません。軌道分極を持つ基底状態を見出すために、次のフラグによって軌道 分極を明示的に促進することが可能です。

コリニア計算の場合

<Atoms.SpeciesAndCoordinates # Unit=AU
1 Ni 0.0 0.0 0.0 10.0 6.0 on
2 Ni 3.94955 3.94955 0.0 6.0 10.0 on
3 0 3.94955 0.0 0.0 3.0 3.0 on
4 0 3.94955 3.94955 3.94955 3.0 3.0 on
Atoms.SpeciesAndCoordinates>

ノンコリニア計算の場合

<atoms.speciesandcoordinates< th=""><th colspan="8"># Unit=AU</th></atoms.speciesandcoordinates<>					# Unit=AU							
1	Ni	0.0	0.0	0.0	10.0	6.0	40.0	10.0	0	on		
2	Ni	3.94955	3.94955	0.0	6.0	10.0	40.0	10.0	0	on		
3	0	3.94955	0.0	0.0	3.0	3.0	10.0	40.0	0	on		
4	0	3.94955	3.94955	3.94955	3.0	3.0	10.0	40.0	0	on		
Atom	ns.S	SpeciesAr	ndCoordin	nates>								

軌道分極を促進させる場合には、最後の列で「on」と指定して下さい。通常の計算を行う場合には「off」 と指定します。軌道分極の促進は各原子サイト毎に行われるため、全ての原子に対して「on」もしくは 「off」を指定しなければなりません。指定を明示的に行わない場合には、「off」が設定されます。「on」 の設定がされた場合は、最初の数回の SCF ステップにおいて軌道分極が促進され、それ以降に続く SCF ステップでは 通常の計算が行われます。この取扱いにより軌道分極が促進され、多くの場合で基底状態 が得られますが、逆に不安定な方向への収束を導く可能性もあり、万能な方法ではありません。詳細は 文献 [20] を参照してください。また scf.dc.Type=cFLL と cAMF を使用する際には軌道分極のフラグの 使用は推奨されません。

37.2 付加機能

標準的な DFT+U 計算は上記で言及したキーワードで実施されます。ここでは、OpenMX で利用できる付加機能を説明します。これらの機能は scf.DFTU.Type=2の場合のみに利用できます。

37.2.1 二つのスレーター積分の比の調整 (F^4/F^2)

scf.DFTU.Type=2による一般化 DFT+U 法では入力値 $U \geq J$ を用いてクーロン相互作用テンソルが生成されます。原子の球対称性を仮定し、スレーター積分 $(F^0, F^2, F^4, ...) \geq \text{Racah-Wigner}$ 係数からこのテンソルが計算されます。d軌道に対する一般的な DFT+U 法の取扱いでは比: F^4/F^2 が必要となり、通常は $F^4/F^2 = 0.625$ が使用されます。ただし、この値は球対称な原子環境のみで有効であり、固体中ではこの値から逸脱する可能性があります。キーワード「scf.Slater.Ratio」により、ユーザーは各自の目的に応じて F^4/F^2 を調整できます。

scf.Slater.Ratio 0.75 # default=0.625

37.2.2 入力パラメタUからのJと F^4/F^2 の見積もり

Yukawa 型の遮蔽クーロンポテンシャルを仮定することで入力の U の値から $J \ge F^4/F^2$ を見積もるこ とができます。この目的のためにキーワード「scf.Yukawa」を「on」と設定します。

scf.Yukawa on # default=off

scf.Yukawa=onと設定することで、<Hubbard.U.values ... Hubbard.U.values>の中にある U の値 だけが読み込まれ、<Hund.J.values ... Hund.J.values>の中にある J の値と scf.Slater.Ratio は無視されます。代わりに、 $J \ge F^4/F^2$ の値は入力の U の値に対応する Thomas-Fermi 遮蔽長を見積 もることで自動的に生成されます [21, 22]。例として、以下のように定義された基底関数があるとします。

```
<Definition.of.Atomic.Species
Ni Ni6.0S-s2p2d2f1 Ni_CA13S
O 05.0-s2p2d1 O_CA13
Definition.of.Atomic.Species>
```

scf.Yukawa=on かつ U の値がキーワード「Hubbard.U.values」により、以下の様に設定されるとします。

<Hubbard.U.values # eV
Ni 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 6.4 2d 3.0 1f 0.0</pre>

0 1s 0.0 2s 0.0 1p 0.0 2p 0.0 1d 0.0 Hubbard.U.values>

```
この時、SCF ループが開始する前に標準出力に以下のメッセージが表示されます。
 Calculating Thomas-Fermi screening length
 *******
 <species: Ni, angular momentum= 2, multiplicity number= 0>
  TF-screening-length lambda= 1.340787 1/au
  Hubbard U= 6.400000 eV
  Hund J= 1.154943 eV
  Slater F0= 6.399932 eV
  Slater F2= 9.321381 eV
  Slater F4= 6.847820 eV
  F4/F2= 0.734636
 <species: Ni, angular momentum= 2, multiplicity number= 1>
  TF-screening-length lambda= 0.271461 1/au
  Hubbard U= 3.000000 eV
  Hund J= 0.380184 eV
  Slater FO= 3.000017 eV
  Slater F2= 2.970544 eV
  Slater F4= 2.352036 eV
  F4/F2= 0.791786
```

これらのU、J、 F^4/F^2 の値は DFT+U 計算の SCF ループ中で用いられます。この計算例で用いられ た入力ファイル「NiO-Yukawa.dat」はディレクトリ「work」中に保存されていますので、参考にして 下さい。

38 ノンコリニアスピン方位に対する制約条件付き DFT

ノンコリニア DFT 法において任意のスピン方位を持つ電子構造を計算するために制約条件付き DFT 法 が利用可能です。制約条件付き DFT 法では、スピン方位と初期スピン方位の差がゼロで無い限り系の エネルギーにペナルティーを与える汎関数が付加されます [13]。ノンコリニアスピン方位に対する制約 条件付き DFT 法は次のキーワードで利用できます。

<pre>scf.Constraint.NC.Spin</pre>	on	<pre># on on2 off, default=off</pre>
<pre>scf.Constraint.NC.Spin.v</pre>	0.5	<pre># default=0.0(eV)</pre>

キーワード「scf.Constraint.NC.Spin」を「on」もしくは「on2」とした場合にペナルティ関数が導入さ れます。「on」の場合、スピンの向きは初期の配向に拘束されますが、スピンの大きさには制約は課され ません。全エネルギーの安定化するようにスピンの大きさは自動的に最適化されます。一方、「on2」の場 合、スピンの向きと大きさの両方に制約条件が課され、「Atoms.SpeciesAndCoordinates」で指定した初 期値から逸脱するとエネルギーにペナルティが加算されます。キーワード「scf.Constraint.NC.Spin.v」 は導入した制約の強さを制御する際に使用します。各原子に対して制約を付与する場合には以下の様に 指定します。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

Atoms.	Specie	sAndCoordi	inates>							
2	Cr	0.00000	2.00000	0.00000	7.0	5.0	20.0 0.0	0.0 0.0	1	off
1	Cr	0.00000	0.00000	0.00000	7.0	5.0	-20.0 0.0	0.0 0.0	1	off



Figure 35: クロム二量体の全エネルギーと Cr 原子サイトの磁気モーメント。結合距離は 2.0 Å。入力ファイルは 「work」ディレクトリ中の「Cr2_CNC.dat」。

12列目の「1」は制約が課されることを意味し、「0」は制約が課さないことを意味します。また本制約条件 付き DFT は「DFT+U」の章で説明した DFT+U 計算と互換しており、同時に両手法を用いることが可 能です。本手法の適用例として、クロム二量体の二つの局所スピンの間の相対角度に対する全エネルギー と磁気モーメントの依存性を図 35 に示します。ディレクトリ「work」の入力ファイル「Cr2_CNC.dat」 を用いてこの計算を再現できます。

制約付き DFT 法を用いてスピン角度の関数として滑らかなエネルギー曲線を計算するための処方箋 をここで説明します。多くの場合、局在磁気モーメントは 3d 電子のように局在した d 軌道または f 軌 道への部分占有状態から生じます。局在軌道への電子の部分占有状態は占有数空間に多くの自由度を持 ち、そのために多数の局所解を持っています。このような局所解を避けるため、まず容易軸に沿ったス ピン方位から計算を開始するべきです。最初の計算が終了すると、リスタートファイルが生成されます。 次の計算ではスピン方位を最初の計算と比較して、僅かに、例えば 30 度ほど回転させます。この際に最 初の計算で生成されたリスタートファイルを読み込みます。同じ手順を計算したい全てのスピン回転角 度の場合に適用します。各計算では前回のステップで生成されたリスタートファイルを利用して下さい。 この段階的なアプローチは局所解の回避に有効な方法です。 **39** 第二変分法:磁気異方エネルギー (Magnetic Anisotropy Energy: MAE)

前章ではスピン方位を制御する制約付き DFT 法を紹介しました。制約付き DFT 法を用いて磁性系の磁 気異方性エネルギーの評価が可能です。この場合、自己無撞着に計算された全エネルギーから磁気異方 性エネルギーが計算されます。ただし、その計算コストは大きく、また縮退する局在 d 軌道に対しては 占有数空間における自由度のために局所解に陥り、正しく計算できない可能性があります。これらの問 題を回避する手段の一つは第二変分法を用いることです。この方法ではまず最初にコリニア DFT 計算 でSCF電子密度を計算します。この際にリスタートファイルが生成されます。次にこのリスタートファ イルを用いてノンコリニア DFT 法の枠組みで一回だけの対角化を行います。その際にスピン軌道相互 作用 (SOI) を考慮し、対角化を実行します。この計算手法は第二変分法と呼ばれています。第二変分法 は Harris 汎関数 [14] に基づくため、スピン回転とスピン軌道相互作用による摂動の効果はバンドエネ ルギーのみに生じます。全エネルギーはバンドエネルギーと二重計算項の和で記述することが可能です が、Harris 汎関数を用いれば一回だけの対角化により、入力電子密度と SCF 電子密度の差の二次のオー ダーの誤差で全エネルギーが評価できます。その際に二重計算項は入力電子密度のみから計算されるた め、スピン回転とスピン軌道相互作用による摂動エネルギーはバンドエネルギーのみに含まれることに なります。従ってエネルギーの比較を行う際にはバンドエネルギーのみに着目するべきです。Harris 汎 関数における二重計算項はスピン回転角に依存しません。OpenMXの出力では変化するように見えます が、これは各エネルギー項が入力電子ではなく出力電子によって計算されるためです(出力に惑わされ ないよう注意して下さい)。第二変分法を用いて、最初にコリニア DFT 法で強磁性状態を計算し、SCF 電子密度の結果を得ます。次に、SCF電子密度が保存されたリスタートファイルを用いてノンコリニア DFT の枠組みでスピン軌道相互作用を考慮し、一回だけの対角化が実行します。リスタートファイルは 以下のキーワードで読み込まれます。

<pre>scf.restart.filename</pre>	FePt
scf.restart	c2n

キーワード「scf.restart.filename」を用いて読み込むリスタートファイルが指定されます。キーワード 「scf.restart」の「c2n」により、コリニア DFT 計算で生成されたリスタートファイルがノンコリニア DFT 計算用に変換されます。例として、「work」で利用可能な入力ファイル「FePt.dat」用いて最初の コリニア計算を実行し、リスタートファイルを生成します。二回目の計算では、スピン方位を以下のキー ワードで指定します。

<pre>scf.Restart.Spin.Angle.Theta</pre>	90.0
scf.Restart.Spin.Angle.Phi	0.0

この二つのキーワードはスピン方位のオイラー角 (θ , ϕ)を指定します。実空間上の全てのグリッド上 のスピン方位がオイラー角で指定された同一方向に並ぶことになります。そのため、第二変分法による 磁気異方エネルギー (MAE)の評価は強磁性体のみに適用可能であることに注意して下さい。第二変分 法が MAE の評価にどのように適用されるのか、ここで一つの例を示します。図 36 は L1₀ FePt バルク でのスピン回転角度に対する MAE 曲線を示しています。「Full SCF」の結果は 38 章で説明した制約付 き DFT 法で得られました。入力ファイル「FePt-NC-SCF.dat」がディレクトリ「work」中に保存され ていますので、ユーザーは同一の計算を実行することが出来ます。スピン軌道相互作用を考慮したノン コリニア DFT 計算により、それぞれのスピン回転角度において、完全な自己無撞着計算が実行されま した。ここで電子温度は 300 K で k 点数は 17³ です。結果として、「Full SCF」では 2.78 meV/f.u の MAE が得られました。第二変分法による二つの計算結果もまた図 36 に示されています。最初にディレ


Figure 36: L1₀ FePt バルクでのスピン回転角度に対する磁気異方性エネルギーの MAE 曲線。「Full SCF」に用いた入力ファイルは「FePt-NC-SCF.dat」、また入力ファイル「FePt.dat」と「FePt-NC.dat」は第二変分法による二つの計算に用いられました。これらの入力ファイルはディレクトリ「work」中に あります。

クトリ「work」の入力ファイル「FePt.dat」を用いてコリニア計算を実行し、リスタートファイルを生成します。次にディレクトリ「work」中の入力ファイル「FePt-NC.dat」を用いて一度だけの対角化を実行します。第二変分法による二つの計算において、一つは「Full SCF」と同一の電子温度 (300K) と同一のk点数が用いられた場合の結果です。この時、MAE は 2.89 meV/f.u. となりました。もう一方では最初の SCF 計算と二番目の計算の電子温度 (k 点格子) にそれぞれ 800K (9^3) と 300 K (17^3)が用いられた場合の結果です。この場合は MAE は 2.90 meV/f.u. となりました。第二変分法による二つの計算はほとんど同じ結果を与えるので、SCF 電子密度を生成するためのコリニア計算とノンコリニア計算 (スピン軌道相互作用を含む)において異なる電子温度とk 点数の使用が許容されるでしょう。SCF 計算に対しては高い電子温度と少数のk 点数を割り当てることで計算効率の向上が期待でき、また二番目のノンコリニア計算に対しては低い電子温度と多数のk 点数を用いて計算精度を向上させることが可能です。第二変分法では出力ファイルの「Utot」の代わりに「Uele」に着目すべきであることを再度、注意しておきます。第二変分法は Harris 汎関数に基づくため、MAE は「Uele」により評価されるべきです。他方「full SCF」での MAE は全エネルギーの「Utot」を用いて評価されます。MAE の評価におけ

る「full SCF」と第二変分法の間の差は約0.1 meV/f.u.です。したがって、第二変分法は精度と効率の 観点から MAE の評価への効率的なアプローチであると考えられます。

第二変分法は MAE の評価だけでなく、スピン軌道相互作用がどのようにバンド構造を変化させるか 調べる際にも活用できます。つまりノンコリニア DFT 法による直接的な SCF 計算が困難な大規模系の バンド構造の解析にも適用できるでしょう。 スピンおよび軌道磁気モーメントに対して Zeeman 項を導入することができます。

40.1 スピン磁気モーメントに対する Zeeman 項

次のキーワードによって、スピン磁気モーメントに対する Zeeman 項が一様磁場との相互作用として導入されます。

scf.NC.Zeeman.Spinon# on|off, default=offscf.NC.Mag.Field.Spin100.0# default=0.0 (Tesla)

スピン磁気モーメントに対し Zeeman 項を導入する場合、キーワード「scf.NC.Zeeman.Spin」を「on」 にします。一様磁場の強度は、キーワード「scf.NC.Mag.Field.Spin」で、テスラ単位で指定します。本 手法は制約条件付き DFT 法として利用することが可能で、各原子毎に磁場の方向を指定することができ ます。スピン磁気モーメントに対する磁場の方位は、キーワード「Atoms.SpeciesAndCoordinates」に よって次のように指定します。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

1 Sc 0.000 0.000 0.000 6.6 4.4 10.0 50.0 160.0 20.0 1 on 2 Sc 2.000 0.000 0.000 6.6 4.4 80.0 50.0 160.0 20.0 1 on Atoms.SpeciesAndCoordinates>

スピン磁気モーメントに対する磁場の方位を指定するために、第8列と9列で Euler 角 (θ 、 ϕ)を指定します。第12列は制約条件に対するスイッチです。「1」は制約条件有り、「0」は無しを意味しています。 各原子サイトに対して印加磁場の方位を制御できるため、この方法は様々なノンコリニアスピン構造を 研究する手段となります。ただし、キーワード「scf.NC.Zeeman.Spin」と「scf.Constraint.NC.Spin」は 互いに両立できないことに注意して下さい。従って、「scf.NC.Zeeman.Spin」が「on」の場合、キーワー ド「scf.Constraint.NC.Spin」は次のように「off」としなければなりません。

scf.Constraint.NC.Spin off # on|off, default=off

この章で説明したスピン磁気モーメントの方位に対する Zeeman 項と、前章で説明した制約法は、どち らもスピン方位を制御する方法ですが、Zeeman 項を付加した場合には、スピン磁気モーメントの大き さが増加する可能性があることに注意して下さい。

40.2 軌道磁気モーメントに対する Zeeman 項

次のキーワードによって、軌道磁気モーメントに対する Zeeman 項が一様磁場との相互作用として導入 されます。

scf.NC.Zeeman.Orbital on # on|off, default=off
scf.NC.Mag.Field.Orbital 100.0 # default=0.0(Tesla)

軌道磁気モーメントに対して Zeeman 項を組み込む場合、キーワード「scf.NC.Zeeman.Orbital」を「on」 にします。一様磁場の強度は、キーワード「scf.NC.Mag.Field.Orbital」で、テスラ単位で指定できます。 この方法は制約条件付き DFT 法として利用することが可能で、各原子毎に磁場の方向を指定すること ができます。軌道磁気モーメントに対する磁場の方位は、キーワード「Atoms.SpeciesAndCoordinates」 によって次のように指定します。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

1 Sc 0.000 0.000 0.000 6.6 4.4 10.0 50.0 160.0 20.0 1 on 2 Sc 2.000 0.000 0.000 6.6 4.4 80.0 50.0 160.0 20.0 1 on Atoms.SpeciesAndCoordinates>

軌道磁気モーメントに対する磁場の方位を指定するために、第10列と11列で Euler 角 (θ 、 ϕ)を指定します。第12列は制約条件に対するスイッチです。「1」は制約条件有り、「0」は無しを意味しています。 各原子サイトに対して印加磁場の方位を制御できるため、この方法は様々なノンコリニアスピン構造を研究する手段となります。また軌道磁気モーメントに対する磁場の方位はスピン磁気モーメントの場合と同じである必要はありません。この機能を利用し、様々な磁気構造を計算することが可能です。

41 Berry 位相による巨視的分極の計算

Berry 位相の方法を用いて、バルクの巨視的電気分極を計算することができます [15]。例として、塩化 ナトリウム中のナトリウム原子の Born 有効電荷を巨視的電気分極から計算する手順を説明します。

(1) SCF 計算

最初に、「work」ディレクトリ中にある入力ファイル「NaCl.dat」を用いて、通常の SCF 計算を実行します。この際に、キーワード「HS.fileout」をオンにします。

HS.fileout on # on|off, default=off

SCF 計算が正常に完了すると、「work」ディレクトリ中に出力ファイル「nacl.scfout」が生成されます。

(2) 巨視的分極の計算

巨視的分極はポストプロセスのプログラム「polB」を用いて計算します。この際に「nacl.scfout」が入 カデータとなります。まず「source」ディレクトリにおいて、「polB」を次のようにコンパイルします。

% make polB

コンパイルが正常に完了すると、「work」ディレクトリ中に実行形式ファイル「polB」が生成されます。 次に、「work」ディレクトリに移動し、次のように実行します。

% polB nacl.scfout もしくは % polB nacl.scfout < in > out

後者の場合、テキストファイル「in」には次のデータが保存されています。

9999 111

前者の場合、次のように会話形式でプログラムから質問されます。

```
ChemP
                        = -0.15625000000 (Hartree)
E_Temp
                        = 300.0000000000 (K)
Total_SpinS
                        = 0.0000000000 (K)
Spin treatment
                        = collinear spin-unpolarized
r-space primitive vector (Bohr)
 tv1= 0.000000
                5.319579
                         5.319579
 tv2= 5.319579
                0.000000
                         5.319579
 tv3= 5.319579 5.319579
                         0.000000
k-space primitive vector (Bohr^-1)
 rtv1= -0.590572
               0.590572 0.590572
 rtv2= 0.590572 -0.590572 0.590572
 rtv3= 0.590572 0.590572 -0.590572
 Cell_Volume=301.065992 (Bohr^3)
Specify the number of grids to discretize reciprocal a-, b-, and c-vectors
 (e.g 2 4 3) 9 9 9
  k1
       0.00000
                 0.11111
                          0.22222
                                    0.33333
                                             0.44444 ...
                                             0.44444 ...
  k2
       0.00000
                 0.11111
                          0.22222
                                    0.33333
                 0.11111
  k3
       0.00000
                          0.22222
                                    0.33333
                                             0.44444 ...
Specify the direction of polarization as reciprocal a-, b-, and c-vectors
(e.g 0 0 1 ) 1 1 1
逆格子ベクトルの離散化グリッド数と分極の方向を指定した後に、計算が以下のように進行します。
calculating the polarization along the a-axis ....
The number of strings for Berry phase : AB mesh=81
 calculating the polarization along the a-axis ....
                                               1/ 82
 calculating the polarization along the a-axis ....
                                               2/ 82
 . . . . .
 . . .
Electric dipole (Debye) : Berry phase
Absolute dipole moment
                        163.93373639
            Background
                            Core
                                           Electron
                                                          Total
```

149

Dx	-0.0000000	94.64718996	-0.0000338	94.64718658
Dy	-0.0000000	94.64718996	-0.0000283	94.64718713
Dz	-0.0000000	94.64718996	-0.0000317	94.64718679

	Background	Core	Electron	Total
Px	-0.0000000	707.66166752	-0.00002529	707.66164223
Ру	-0.0000000	707.66166752	-0.00002118	707.66164633
Pz	-0.0000000	707.66166752	-0.00002371	707.66164381

Elapsed time = 77.772559 (s) for myid= 0

 V_c を単位セルの体積、eを素電荷、 Δu_{β} を β 座標方向の変位、 ΔP_{α} を α 座標方向の巨視的分極の変化とすると、Born 有効電荷 $Z^*_{\alpha\beta}$ は次のようにテンソルで定義されます。

$$Z^*_{\alpha\beta} = \frac{V_c}{|e|} \frac{\Delta P_\alpha}{\Delta u_\beta}$$

上記の表式に従い、Born 有効電荷を計算する際には、ナトリウム原子の *x、y、z* 座標を変化させなが ら、上の手順を少なくとも 2 回もしくは 3 回実行します。例えば *x* 座標方向を変位させて分極を計算す ると、次の結果が得られます。

Px = 94.39497736 (Debye/unit cell) at x= -0.05 (Ang)
Px = 94.64718658 (Debye/unit cell) at x= 0.0 (Ang)
Px = 94.89939513 (Debye/unit cell) at x= 0.05 (Ang)

従って、ナトリウム原子の Born 有効電荷は以下のように計算されます。

$$Z_{xx}^* = \frac{(94.89939513 - 94.39497736)/(2.54174776)}{0.1/0.529177}$$

= 1.050

塩化ナトリウム固体では、Born 電荷のテンソルの非対角項はゼロ、そして $Z_{xx}^* = Z_{yy}^* = Z_{zz}^*$ となります。表7に、ここでの計算値と他の計算値 [116] および実験値 [117] との比較を示します。計算値と実験値が良く一致していることが分かります。巨視的分極の計算はコリニアおよびノンコリニア DFT 法の両者に対してサポートされています。また MPI プロセス数が系の原子数を上回る場合でも、プログラム「polB」は効率的な並列計算が可能です。

Table 7: Berry 位相による巨視的分極の計算から見積もられた NaCl 中の Na の Born 有効電荷。入力ファイルは 「work」ディレクトリ中の「NaCl.dat」。比較のため、他の計算値 (FD: 参考文献 [116]) と実験値 (参考文献 [117]) も併記。

	OpenMX	FD	Expt.
Z^*	1.05	1.09	1.12

42 交換結合パラメータ

42.1 概要

摂動論に基づく Liechtenstein の方法 [17] を用いて局在したスピン間の交換結合パラメタ J_{ij} を計算できます。この計算はポストプロセスのプログラム「jx」を用いて実行します。OpenMX Ver 3.9 において本機能はクラスタやバルク系のコリニア DFT 計算のみに有効で、ノンコリニア DFT 計算には一般化されていません。本機能を用いて論文等を出版される場合は文献 [18, 19] を引用して頂けますと幸いです。

このプログラム「jx」は*J_{ij}*を計算する以下の三つの方法を提供します。

クラスタ系に対して、本プログラム「jx」は以下の表式に基づき原子サイト $i \ge j$ の間の交換結合定数 J_{ij} を計算します。

$$J_{ij} = \frac{1}{4} \sum_{n,n'} \frac{-f_{n\uparrow} + f_{n'\downarrow}}{\varepsilon_{n\uparrow} - \varepsilon_{n'\downarrow}} \times \sum_{\mu,\nu \in i} \sum_{\mu',\nu' \in j} C_{j\mu',n\uparrow} C^*_{i\nu,n\uparrow} [\hat{P}_i]_{\nu\mu} C_{i\mu,n'\downarrow} C^*_{j\nu',n'\downarrow} [\hat{P}_j]_{\nu'\mu'}$$
(3)

$$\hat{P}_i \equiv \hat{H}_{i\uparrow} - \hat{H}_{i\downarrow},\tag{4}$$

 $\varepsilon_{n\sigma}$ と $\mathbf{C}_{n\sigma}$ は Kohn-Sham 方程式の固有値と固有ベクトルです。ここで、波数 k、バンドインデックス n、スピンインデックス σ となります。また、 $[\hat{P}_i]_{\nu\mu}$ と $[\hat{P}_j]_{\nu'\mu'}$ はサイト i と j のポテンシャル差演算 子の部分行列をそれぞれ表します。

バルク系に対して、本プログラム「jx」は以下の表式に基づきセル 0 と R にそれぞれ位置する原子サ イト $i \ge j$ の間の交換結合定数 $J_{i0,jR}$ を計算します。

$$J_{i\mathbf{0},j\mathbf{R}} = \frac{1}{2} \sum_{p=1}^{N_{\rm P}} \tilde{R}_p \sum_{\mu,\nu \in i} \sum_{\mu',\nu' \in j} \operatorname{Re} \left\{ [\hat{P}_i]_{\nu\mu} G^+_{i\mu,j\nu'}(\downarrow, \tilde{z}_p, \mathbf{R}) [\hat{P}_j]_{\nu'\mu'} G^+_{j\mu',i\nu}(\uparrow, \tilde{z}_p, -\mathbf{R}) \right\}.$$
(5)

 \tilde{z}_p と \tilde{R}_p は近似されたフェルミ関数の極(複素平面の上側に位置する)と対応する留数です [74]。i と j は単位胞での原子のインデックスです。R は原子 j が位置するセルのインデックスです。グリーン関数 $G^+_{j\mu',i\nu}(\uparrow,\varepsilon,-\mathbf{R})$ と $G^+_{i\mu,j\nu'}(\downarrow,\varepsilon,\mathbf{R})$ は以下の式で定義されます。

$$G^{+}_{j\mu',i\nu}(\uparrow,\varepsilon,-\mathbf{R}) \equiv \int d^{3}\left(\frac{ka}{2\pi}\right) e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{R}} \sum_{n} \frac{C_{j\mu',n\uparrow}(\mathbf{k})C_{i\mu,n\uparrow}(\mathbf{k})}{\varepsilon+i\eta-\varepsilon_{n\uparrow}(\mathbf{k})}$$
(6)

$$G_{i\mu,j\nu'}^{+}(\downarrow,\varepsilon,\mathbf{R}) \equiv \int d^{3}\left(\frac{ka}{2\pi}\right) e^{-i\mathbf{k}\cdot\mathbf{R}} \sum_{n'} \frac{C_{i\mu,n'\downarrow}(\mathbf{k})C_{j\nu',n'\downarrow}(\mathbf{k})}{\varepsilon + i\eta - \varepsilon_{n'\downarrow}(\mathbf{k})}.$$
(7)



(a) Interaction between individual sites *i* and *j* located at specific cells.



Figure 37: 独立なサイト間と周期的なイメージ間での交換結合定数の模式図。

交換結合 J_{ii}の R に渡る総和を考慮する場合には以下の表式を用いて計算することもできます。

$$J_{ij} = \sum_{\mathbf{R}} J_{i\mathbf{0},j\mathbf{R}}$$

$$= \frac{1}{4} \int d^3 \left(\frac{ka}{2\pi}\right) \sum_{n,n'} \frac{-f_{n\uparrow}(\mathbf{k}) + f_{n'\downarrow}(\mathbf{k})}{\varepsilon_{n\uparrow}(\mathbf{k}) - \varepsilon_{n'\downarrow}(\mathbf{k})}$$

$$\times \sum_{\mu,\nu\in i} \sum_{\mu',\nu'\in j} C_{j\mu',n\uparrow}(\mathbf{k}) C^*_{i\nu,n\uparrow}(\mathbf{k}) [\hat{P}_i]_{\nu\mu} C_{i\mu,n'\downarrow}(\mathbf{k}) C^*_{j\nu',n'\downarrow}(\mathbf{k}) [\hat{P}_j]_{\nu'\mu'}. \tag{8}$$

式 (3), (5), (8) の詳細は文献 [18, 19] を参照してください。式 (5) と (8) の取扱いの相違は図 37 に模式的に示されています。図 37 (a) は式 (5) に相当する独立サイト間での相互作用の模式図です。一方、式 (8) に相当する周期イメージ間での相互作用は図 37 (b) に模式的に示されています。後節で説明されるように、実行時にオプション Flag.PeriodicSum を指定することでどちらかの計算が選択できます。

42.2 Jxの計算

ポストプロセスコード「jx」を用いて OpenMX の出力から J_{ij} を計算します。まずディレクトリ「source」 に移動して、以下のようにコンパイルを実行して下さい。

% make jx

コンパイルが正常に完了すると、実行ファイル「jx」がディレクトリ「work」中に生成されます。

42.3 OpenMX 計算による SCF 計算

 J_{ij} 計算の前に、scfout ファイルを生成するためにコリニア DFT 計算を実行して下さい。scfout ファイルを生成するために、OpenMXの入力ファイル中にキーワード「HS.fileout」を加えます。

HS.fileout on # on|off, default=off

「jx」で信頼のおける計算結果を得るためには比較的小さな基底関数セットを用いることが必要です。現 在の実装では使用する擬原子基底関数が良く局在していることが前提となっており、多数の基底関数を 含めた場合にはこの前提条件が満されなくなるからです。例えば、Feにはs2p2d2、Ndにはs2p1d1が 基底関数セットとして適切な選択となります。

42.4 Jxの設定ファイルの準備

「jx」を実行するために設定ファイルを用意します。この設定ファイル中に様々な制御パラメータを指定します。設定ファイルは OpenMX の入力ファイルと同じ書式を持っています。

例として「jx.config」を以下に示します。「jx.config」はディレクト「work」中に保存されています。

Flag.PeriodicSum	off	<pre># default - off</pre>
Num.Poles	60	
Num.Kgrid	27 27 27	
Num.ij.pairs	236	
Bunch.ij.pairs	236	
<ijpairs.cellid< td=""><td></td><td></td></ijpairs.cellid<>		
1 1 -2 -2 -2		
1 1 -2 -2 -1		
1 1 -2 -2 0		
2 2 0 -1 2		
2 2 0 0 -2		
2 2 0 0 -1		
ijpairs.cellid>		

それぞれのキーワードを以下に説明します。

Flag.PeriodicSum off # default - off

60

このフラグは交換結合をどのように計算するかを決定します。周期系でこのフラグが「on」の場合、本 プログラム「jx」は式 (8) に基づいて J_{ij} を計算します。一方、「off」の場合には式 (5) に基づいて $J_{i0,j\mathbf{R}}$ を計算します。このフラグはクラスター計算では役割を持っていません。クラスター計算では、 J_{ij} は 式 (3) から計算されます。

Num.Poles

このキーワードでは式 (5) に現れるフェルミ関数の有限極近似 [74] に対する極の数 $N_{\rm P}$ を指定します。 極の数の増加に從い計算精度が向上しますが、計算時間は極の数に比例して増加します。適切な極の数 は系によりますが、bcc 構造の Fe では 0.05meV の精度を達成するにはおよそ 60 程度です。300K の電 子温度においては多くの系で 60 個の極で十分な精度が得られますが、一度、御自身でその収束性を確認 されることをお勧めします。

Num.Kgrid 27 27 27

このキーワードは第一 Brillouin 領域の離散化に対する k 点の数を指定します。ここで指定する k 点数 は SCF 計算の際と同じ値、もしくはそれ以上の値を指定して下さい。クラスター計算では自動的にガン マ点のみが考慮されますので、このキーワードに役割はありません。

Num.ij.pairs 236 # NOTE: Number of ij pairs.

このキーワードは計算する交換結合定数 J の数を指定します。この値はキーワード<i jpairs.cellid と d i jpairs.cellid>の間の行数と同数でなければなりません。

```
<ijpairs.cellid

1 1 -2 -2 -2

1 1 -2 -2 -1

1 1 -2 -2 0

...

2 2 0 -1 2

2 2 0 0 -2

2 2 0 0 -1

ijpairs.cellid>
```

このフィールドでは計算する交換結合定数 J のサイト $i, j \geq J_{i0,jR}$ のセルベクトル $\mathbf{R} = l_1 \mathbf{a}_1 + l_2 \mathbf{a}_2 + l_3 \mathbf{a}_3$ を指定します。ここで、 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ 及び \mathbf{a}_3 は OpenMX 入力での単位格子ベクトルです。このフィールドの データの並び方は $i j l_1 l_2 l_3$ の順です。クラスターあるいは周期イメージ計算では以下の様に別のフィー ルドを指定します。

```
<ijpairs.nocellid
1 1
1 2
ijpairs.nocellid>
```

これらの J_{ij} 計算ではセルベクトルが現れないため、明示的に指定する必要がありません。

Bunch.ij.pairs 236 # default=Num.ij.pairs

既定の設定ではメモリ消費が多くなり、計算が出来ない場合があります。メモリ消費量を低減させるために、上記のキーワードが利用可能です。この値は Num.ij.pairs と同じか、より小さい値であるべきです。小さい「Bunch.ij.pairs」を用いるとメモリ消費量は低減されますが、計算時間が長くなる傾向があります。

42.5 Jx の実行と MPI 並列計算

ポストプロセスプログラム「jx」を以下の様に実行して下さい。

% ./jx fe2.scfout jx.config > jx.log

第一引数は OpenMX で生成された scfout ファイルです。第二引数は先に説明された設定ファイルです。 周期系の計算に対しては MPI 並列化が実装されており、以下の様に実行可能です。 % mpirun -np 2 ./jx fe2.scfout jx.config > jx.log

一方で「cluster」計算に対しては「jx」は並列化されていません。並列化は「band」計算のみに実装されていますので、注意してください。また k ベクトルに対する並列化のみが考慮されていることや、並列数が k 点の総数より大きくなると計算資源の無駄となることにも注意しなければなりません。

42.6 実例

クラスター計算の実例としてディレクトリ「work」中に保存された入力ファイル「Fe_Cluster_jx.dat」を 用いて以下のように OpenMX の通常計算を実行します。

% mpirun -np 2 ./openmx Fe_Cluster_jx.dat

入力ファイル「Fe_Cluster_jx.dat」は鉄二量体の SCF 計算のためのものです。この計算が通常通りに終 了すると、scfout ファイル「Fe_Cluster_jx.scfout」が生成されます。次に、「jx」による計算を以下のよ うに実行します。

% ./jx Fe_Cluster_jx.scfout jx_cluster.config

ここで「jx_cluster.config」はディレクトリ「work」中に保存されています。すると、標準出力に以下の メッセージが表示されます。

```
jx: code for calculating an effective exchange coupling constant J
Copyright (C), 2003, Myung Joon Han, Jaejun Yu, and Taisuke Ozaki
          2019, Asako Terasawa and Taisuke Ozaki
This is free software, and you are welcome to
redistribute it under the constitution of the GNU-GPL.
******
Read the scfout file (Fe_Cluster_jx.scfout)
***
The file format of the SCFOUT file: 3
And it supports the following functions:
- jx
- polB
- kSpin
- Z2FH
- calB
***
Previous eigenvalue solver = Cluster
atomnum
                  = 2
ChemP
                  = -0.089740215968 (Hartree)
```

E_Temp

 $\ensuremath{\mathsf{Evaluation}}$ of J based on cluster calculation

i	j	J [meV]	J [mRy]
1	1	1591.520791120630	116.974621661729
1	2	106.511867492210	7.828477938772
2	2	1591.520746009061	116.974618346089

Elapsed time = 0.036225 (s)

1番と2番の原子の間の交換結合定数 J₁₂は 106.5 meV と計算されます。

バルク計算の実例として、ディレクトリ「work」中に保存された入力ファイル「Fe_Bulk_jx.dat」を 用いて以下のように OpenMX の通常計算を実行します。

% mpirun -np 28 ./openmx Fe_Bulk_jx.dat

入力ファイル「Fe_Bluk_jx.dat」は鉄(BCC構造)のSCF計算のためのものです。この計算が通常通り に終了すると、scfoutファイル「Fe_Bluk_jx.scfout」が生成されます。次に、「jx」による計算を以下の ように実行します。

% mpirun -np 112 ./jx Fe_Bulk_jx.scfout Fe_Bulk_jx.config | tee jx.log

ここで「Fe_Bulk_jx.config」はディレクトリ「work」中に保存されています。すると、画面に以下のメッセージが表示されます。

jx: code for calculating an effective exchange coupling constant J Copyright (C), 2003, Myung Joon Han, Jaejun Yu, and Taisuke Ozaki 2019, Asako Terasawa and Taisuke Ozaki This is free software, and you are welcome to redistribute it under the constitution of the GNU-GPL. Read the scfout file (Fe_Bulk_jx.scfout) *** The file format of the SCFOUT file: 3 And it supports the following functions: - jx - polB - kSpin - Z2FH

- calB

Previous	eigenvalue	solver	=	Band
atomnum			=	2
ChemP			=	-0.205912787451 (Hartree)
E_Temp			=	300.0000000000 (K)

Jij calculation for a periodic structure

Number of k-grids: 27 27 27

flag_periodic_sum = 0: coupling between site i at cell 0 and site j at cell R
Number of poles of Fermi-Dirac continued fraction (PRB.75.035123): 60

i	j	c1	c2	c3	J [meV]	J [mRy]	time_eig [s]
	1	 -2			-0.845809571401	-0.062165857439	0.51534
- 1	- 1	-2	-2	-1	0.274300677331	0.020160728111	0.00000
1	1	-2	-2	0	0.036006012552	0.002646393135	0.00000
1	1	-2	-2	1	0.274300705154	0.020160730156	0.00000
1	1	-2	-2	2	-0.845809596417	-0.062165859278	0.00000
1	1	-2	-1	-2	0.274300737539	0.020160732536	0.00000
1	1	-2	-1	-1	-0.206315672897	-0.015163922403	0.00000
1	1	-2	-1	0	0.149714301525	0.011003798302	0.00000
1	1	-2	-1	1	-0.206315540488	-0.015163912672	0.00000
1	1	-2	-1	2	0.274300804604	0.020160737465	0.00000
2	2	0	-1	2	0.149714016159	0.011003777328	0.00000
2	2	0	0	-2	0.401809366424	0.029532443987	0.00000
2	2	0	0	-1	11.452192349598	0.841720620155	0.00000

Elapsed time = 340.817975 (s)

図 38 (a) は計算で得られた Fe (BCC 構造)の交換結合定数 *J* を距離の関数としてプロットしたもので す。同様に (b) は HCP 構造の Co、(c) は FCC 構造の Ni、そして (d) は Fe 二量体の計算結果です。こ こでの計算では、基底関数セットとして A6.0H-s2p2d2 (ここで A=Fe, Ni, Co)、交換相関汎関数とし て GGA-PBE が用いられました。またスピン配置は強磁性が仮定されています。計算に用いられた入 カファイルは「Fe_Bulk_jx.(dat,config)」、「Co_Bulk_jx.(dat,config)」、「Ni_Bulk_jx.(dat,config)」、及び 「Fe_Cluster_jx.(dat,config)」です。これらは入力ファイルはディレクトリ「work」中に保存されていま すので、同一の計算を実行することが可能です。計算の詳細は文献 [19] を参照して下さい。

得られた交換結合定数を用いて平均場近似の枠組みで周期系のキュリー温度を計算することも可能 です。一般の周期系のキュリー温度 T_C は以下の固有値方程式の最大固有値として得られます。



Figure 38: 距離の関数として計算された交換結合定数 J。(a) bcc Fe, (b) hcp Co, (c) fcc Ni, and (d) Fe dimer。この計算の入力ファイルは「Fe_Bulk_jx.(dat,config)」、「Co_Bulk_jx.(dat,config)」、「Ni_Bulk_jx.(dat,config)」、「Fe_Cluster_jx.(dat,config)」であり、これらはディレクトリ「work」中に保存されています。

$$T\langle \vec{s}_i \rangle_z = \frac{2}{3k_{\rm B}} \sum_j \tilde{J}_{ij} \langle \vec{s}_j \rangle_z \tag{9}$$

$$J_{ij} \equiv J_{ij} - J_{i0,j0}\delta_{ij}.$$
 (10)

ここで、 $J_{ij} \ge J_{i0,j0}$ の定義はそれぞれ式 (8) \ge (5) にあります。表 8 には BCC 構造の Fe、HCP 構造の Co、そして FCC 構造の Ni に対して式 (9) で計算されたキュリー温度を実験値とともに示します。

	$T_{\rm C} [{\rm K}]$				
System	calculated	experimental			
bcc Fe	1321	1040			
hcp Co	1640	1131			
fcc Ni	445	627			

 Table 8: BCC 構造の Fe、HCP 構造の Co、そして FCC 構造の Ni に対して交換結合定数と平均場近似

 から計算されたキュリー温度とこれらの実験値。

43 電気伝導計算

43.1 概要

非平衡グリーン関数法(non-equilibrium Green function method、 NEGF 法)に基づき、分子、ナノ ワイヤ、超格子構造などの電子に由来する電気伝導特性を計算することが可能です。電気伝導計算の機 能はコリニアとノンコリニア計算のどちらもサポートしています。その特徴と機能を以下に列挙します。

- ゼロおよび有限バイアス電圧下における二つの電極に接続した系の SCF 計算
- ゲートバイアス電圧下での SCF 計算
- DFT+U 法と併用が可能
- スピン依存の透過率と電流
- 電流に垂直な方向に対して k 分解された透過率と電流
- 電流-電圧曲線の計算
- 高精度・高効率な周回積分
- バイアス電圧効果の補間
- ゼロバイアス電圧下における周期系の迅速な透過率計算
- 固有チャネル解析 [141]
- 実空間における電流・スピン流 [139]

各機能の実装の詳細については、文献 [73] を参照して下さい。まずコニリア計算の場合について、各機能の使用法を説明します。その後に、ノンコリニア計算に関して、補足説明します。

考察する系

OpenMX Ver. 3.9 の実装では、図 39 (a) に示す系を NEGF 法により取り扱います。この系は左右の半 無限電極部分とそれに接続する中心部からなり、また bc 面上での二次元周期性が仮定されています。二 次元周期性を考慮すると、この系は図 39 (b) に示す Bloch 波数ベクトル k に依存する一次元問題に変換 することができます。中心領域 C_0 と左右の領域 L_0 および R_0 との境界面近くの電子構造の緩和を考慮 するために、OpenMX Ver. 3.9 の実装では、領域 $C(\equiv L_0|C_0|R_0)$ のグリーン関数が自己無撞着に決定 されます。現実装においては、ユニットセルの a 軸が電子輸送の方向であると仮定されていることに留 意して下さい。計算モデルの幾何構造を作成する際には、この仕様を守らなければなりません。これに 関連して、「ステップ 1:リード線部の計算」の節も参照して下さい。

計算の流れ

NEGF 計算は次の三段階で実行します。

ステップ 1 ightarrow ステップ 2 ightarrow ステップ 3

各ステップを以下に説明します。



Figure 39: NEGF 法により取り扱う系の構成。a 軸方向の左右に半無限電極が配置され、また bc 面上に二次元 周期境界条件を仮定。(b) bc 面内での周期性を考慮することにより、(a) に示す構成から一次元化された系。C 領 域は、 C_0 、 L_0 および R_0 からなる拡張された中心領域を表す。

• ステップ 1

左右の電極部分のバンド構造計算を、プログラムコード「openmx」を用いて実行。得られた計算 結果は、ステップ2のNEGF計算における電極部分に使用。

• ステップ 2

図 39 に示した系に対して、ゼロまたは有限バイアス電圧下での NEGF 計算をプログラムコード 「openmx」を用いて実行。この際に、ステップ1で計算した結果を電極部分の構築に使用。

• ステップ 3

ステップ2で得た結果を利用し、プログラムコード「openmx」を用いて、透過率、電流密度、スピン流密度、固有チャネルを計算。

例:炭素鎖

最初の試みとして炭素鎖を例にとり、上述の三つのステップについて説明します。

ステップ 1

%./openmx Lead-Chain.dat | tee lead-chain.std

ステップ1の計算により、ファイル「negf-chain.hks」が生成されます。

ステップ 2

%./openmx NEGF-Chain.dat | tee negf-chain.std

ステップ2の計算により、ファイル「negf-chain.tranb」が生成されます。

ステップ 3

openmx はステップ2の計算が完了すると自動的にステップ3の計算に移ります。. ステップ2とス テップ3の計算を分離して行いたい場合には、以下のように openmx を実行して下さい。



Figure 40: 炭素鎖の透過率のエネルギー依存性。エネルギーの原点は左電極の化学ポテンシャルに設定。

%./openmx NEGF-Chain.dat | tee negf-chain.std

ステップ3では、openmxは「negf-chain.tranb」を読み込み、透過率、電流、固有チャネルの計算を行います。計算終了後に以下のファイルがステップ3で生成されます。

negf-chain.conductance	<pre>negf-chain.tranec0_0_0_2_r.cube</pre>
negf-chain.current	negf-chain.tranec0_0_0_3_i.cube
negf-chain.tran0_0	negf-chain.tranec0_0_0_3_r.cube
negf-chain.tranec0_0_0_0_i.cube	negf-chain.tranec0_0_0_4_i.cube
negf-chain.tranec0_0_0_0_r.cube	negf-chain.tranec0_0_0_4_r.cube
negf-chain.tranec0_0_0_1_i.cube	negf-chain.traneval0_0_0
negf-chain.tranec0_0_0_1_r.cube	negf-chain.tranevec0_0_0
negf-chain.tranec0_0_0_2_i.cube	

ディレクトリ「work/negf_example」中の入力ファイルを用いると、この計算を再現することができま す。ステップ3の計算で得られた「negf-chain.tran0_0」の六列目を四列目の関数としてプロットすると、 図 40 に示す透過率曲線が得られます。

43.2 ステップ1: 電極部分の計算

ステップ1の計算は、通常のバンド構造計算と同じものです。ただし入力ファイルに二つのキーワード 「NEGF.output_hks」と「NEGF.filename.hks」を付け加えます。

NEGF.output_hks on NEGF.filename.hks lead-chain.hks

上記のキーワードを付け加えることで、電極部分を構築するための情報がファイルに保存されます。ハミル トニアン行列要素、電子分布、および差電子 Hartree ポテンシャルが、キーワード「NEGF.filename.hks」 で指定されたファイルに保存されます。上記の場合には、ファイル「lead-chain.hks」が生成されます。 「*NEGF.filename*.hks」で指定されたファイルは、ステップ2の計算で使用されることになります。現実 装では電子輸送の方向はa軸方向に仮定されていますので、バンド構造計算においては、この仕様を念 頭において電極モデルを構築する必要があります。しかし、ユーザー自身で構造を回転させる必要はあ りません。格子ベクトルの指定を変更するだけで、簡単に電子輸送の方向を適切に設定することが可能 です。例えば、次の格子ベクトルにおいて、

<Atoms.UnitVectors 3.0 0.0 0.0 0.0 3.0 0.0 0.0 0.0 10.0 Atoms.UnitVectors>

a 軸としてベクトル (0.0, 0.0, 10.0) を指定したい場合には以下のようにベクトルの順番を入れ替えるだけで、電子輸送の方向を適切に設定できます。

<Atoms.UnitVectors 0.0 0.0 10.0 3.0 0.0 0.0 0.0 3.0 0.0 Atoms.UnitVectors>

この様に指定すれば、(0.0, 0.0, 10.0)の方向が電子輸送の方向になります。上の例で示したように、格 子ベクトルの順序を変更する際には、キーワード「scf.Kgrid」も同様に変更しなければならないことに 注意して下さい。

ステップ2の計算において、表面グリーン関数を用いることにより、電極部分の半無限性を考慮しています。そのため、ステップ2の計算ではa軸方向に関しては波数空間の離散化を導入することなしに、半無限性を取り扱うことができるようになります。a軸方向の半無限性の取扱いに関し、ステップ1とステップ2での計算の整合性を保つために、ステップ1のバンド構造計算ではa軸方向に多数のk 点を割り当るようにして下さい。また、bc面上のk点数は、ステップ1とステップ2の計算において同一の値を使用して下さい。

43.3 ステップ 2: NEGF 計算

A. 左電極 | デバイス | 右電極の設定

図 39 に示した領域 L₀、C₀、R₀ は次のようにして設定できます。

中心領域 C_0 の幾何学的構造は、キーワード「Atoms.Number」および「Atoms.SpeciesAndCoordinates」 により、以下のように指定します。

Atoms.Number 18 <Atoms.SpeciesAndCoordinates 1 C 3.000 0.000 0.000 2.0 2.0 18 C 28.500 0.000 0.000 2.0 2.0 Atoms.SpeciesAndCoordinates> 左側の電極部分 L₀ の幾何学的構造は、キーワード「LeftLeadAtoms.Number」および 「LeftLeadAtoms.SpeciesAndCoordinates」により、以下のように指定します。

LeftLeadAtoms.Number 3 <LeftLeadAtoms.SpeciesAndCoordinates 1 C -1.500 0.000 0.000 2.0 2.0 2 C 0.000 0.000 0.000 2.0 2.0 3 C 1.500 0.000 0.000 2.0 2.0 LeftLeadAtoms.SpeciesAndCoordinates>

右側の電極部分 R₀ の幾何学的構造は、キーワード「RightLeadAtoms.Number」および 「RightLeadAtoms.SpeciesAndCoordinates」により、以下のように指定します。

 RightLeadAtoms.Number
 3

 <RightLeadAtoms.SpeciesAndCoordinates</td>

 1
 C 30.000
 0.000
 2.0
 2.0

 2
 C 31.500
 0.000
 0.000
 2.0
 2.0

 3
 C 33.000
 0.000
 0.000
 2.0
 2.0

 3
 C 33.000
 0.000
 0.000
 2.0
 2.0

 RightLeadAtoms.SpeciesAndCoordinates>

ここで示した例は、上述の節で取り上げた炭素鎖の場合のものです。中心領域 C_0 は 18 個の炭素原子から 構成され、左側の領域 L_0 と右側の領域 R_0 は、それぞれ 3 個の炭素原子から成り、すべての隣接原子間 距離は 1.5 Å です。デバイス領域 C_0 と電極 L_0 および R_0 の幾何学的構造を設定することで、OpenMX は図 39 に示した拡張中心領域 $C (\equiv L_0 | C_0 | R_0)$ を構成します。中心領域 C_0 とその外側の $L_0(R_0)$ の境界 付近での電子構造の緩和を考慮するために、拡張中心領域 C のグリーン関数が自己無撞着に決定されま す。NEGF 法を用いて、拡張中心領域 C のグリーン関数を計算するために、次の二つの条件を満たすよ うに計算モデルを構築する必要があります [73]。

- 1. 領域 C_0 における局在基底軌道 ϕ は、領域 L_0 および R_0 の局在基底軌道と重なるが、領域 L_1 およ び R_1 と重なることはない。
- 2. $L_i(R_i)$ 領域における局在基底軌道 ϕ は、その最近接セル $L_{i-1}(R_{i-1})$ および $L_{i+1}(R_{i+1})$ より遠方のセル内の基底軌道と重なることはない。

OpenMX の基底関数は実空間において厳密に局在しているため [41, 42]、特定のカットオフ半径を持つ局 在軌道を各領域に対して割り当てると、 L_i および R_i のユニットセルの大きさを調整することにより、上 記の二つの条件を常に満たすことができます。領域 L_0 、 C_0 、 R_0 の単位胞を指定する必要はありませんが、 周期性を暗黙のうちに仮定していることに留意して下さい。半無限電極の構築は、ステップ 1 のバンド構 造計算で用いた単位胞を利用して自動的に行われます。そのための情報はファイル「*NEGF.filename.hks*」 に保存されています。また、図 39 に示した配置構造のため、左側と右側の電極の bc 面内の単位胞ベク トルは一致していなければなりません。また拡張中心領域 *C* に対する bc 面内の単位胞ベクトルは、電 極部分の単位胞ベクトルと同じであることが暗黙のうちに仮定されています。ユーザーは、こうした制 約の枠内で、幾何構造を設定できます。

原子位置の指定で用いられる単位は、以下の様に指定します。

Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit Ang # Ang|AU

ただし、NEGF計算では「Ang」または「AU」のみに対応しています。「FRAC」での指定はできませんので、注意して下さい。

どの様に OpenMX が指定した幾何学的な配置構造を解析したのか確認するために、標準出力にその 情報が記載されています。上述の炭素鎖の例では以下の情報が出力されています。

<TRAN_Calc_GridBound>

```
*******
```

```
The extended cell consists of Left0-Center-Right0.
The cells of left and right reads are connected as.
...|Left2|Left1|Left0-Center-Right0|Right1|Right2...
```

```
Atom1 = 12 Atom2 = 12 Atom3 = 12 Atom4 = 1 Atom5 = 1 Atom6 = 1 Atom7 = 1
Atom8 = 1 Atom9 = 1 Atom10 = 1 Atom11 = 1 Atom12 = 1 Atom13 = 1 Atom14 = 1
Atom15 = 1 Atom16 = 1 Atom17 = 1 Atom18 = 1 Atom19 = 1 Atom20 = 1 Atom21 = 1
Atom22 = 13 Atom23 = 13 Atom24 = 13
```

 $L_0|C_0|R_0$ からなる拡張された中心領域の原子には数値が割り当てられています。「12」および「2」は原 子が L_0 に属し、「12」は L_1 内の原子と基底関数間の重なりを持つことを意味します。「13」および「3」 は原子が R_0 に属し、「13」は R_1 にある原子と基底関数間の重なりを持つことを意味します。また「1」 は原子が C_0 に属していることを意味します。この出力を調べることで、計算する系の幾何学的な構造 が適切に構築されているか否かを確認することができます。

B. キーワード

ステップ 2 の NEGF 計算を実行するために、キーワード「scf.EigenvalueSolver」を次のように指定 します。

scf.EigenvalueSolver NEGF

NEGF 計算に関連するキーワードを以下に列挙します。

NEGF.filename.hks.l lead-chain.hks NEGF.filename.hks.r lead-chain.hks

NEGF.Num.Poles	100	# defalut=150
NEGF.scf.Kgrid	1 1	# defalut=1 1
NEGF.bias.voltage	0.0	<pre># default=0.0 (eV)</pre>
NEGF.bias.neq.im.energy	0.01	<pre># default=0.01 (eV)</pre>
NEGF.bias.neq.energy.step	0.02	<pre># default=0.02 (eV)</pre>

各キーワードの内容を以下に説明します。

NEGF.filename.hks.l	<pre>lead-chain.hks</pre>
NEGF.filename.hks.r	lead-chain.hks

電極部分の情報を含むファイルは、上記の二つのキーワードにより指定できます。「NEGF.filename.hks.l」 は左側、「NEGF.filename.hks.r」は右側の電極部分に対応します。

NEGF.Num.Poles 100 # defalut=150

平衡密度行列は、周回積分法により評価します [73,74]。この方法で用いる極の数は、キーワード 「NEGF.Num.Poles」により指定します。

NEGF.scf.Kgrid 1 1 # defalut=1 1

逆格子ベクトル \tilde{b} および \tilde{c} を離散化するための k 点数を、キーワード「NEGF.sef.Kgrid」により指定します。a 軸方向には周期性を持っていないため、a 軸に対しては指定する必要がありません。

NEGF.scf.Iter.Band 6 # defalut=6

SCF計算の最初の数ステップでは、b軸および c 軸と同様に a 軸方向にも周期性を仮定することにより、 通常の対角化法を用いた方が最終的な収束が加速されることが分かっています。自己無撞着な NEGF 法においてしばしば問題となる SCF 計算での収束困難性は、この方法によってかなり軽減します。通 常の対角化法を使用する SCF ステップ数を、キーワード「NEGF.scf.Iter.Band」により指定します。 「NEGF.scf.Iter.Band」で指定した SCF ステップ数までは通常の対角化法を用い、それ以降のステップ においては、NEGF 法が適用されることになります。デフォルト値は 6 です。

NEGF.bias.voltage 0.0 # default=0.0 (eV)

キーワード「NEGF.bias.voltage」により、左右の電極間に印加するソース・ドレインバイアス電圧を eVの単位で指定します。この eVの単位は電圧に換算するとボルト (V)に対応しています。ソースとド レイン間の電位差のみが物理的に意味を持つため、電位の差であるソース・ドレインバイアス電圧を本 キーワードによって与えることになります。

NEGF.bias.neq.im.energy	0.01	#	default=0.01	(eV)
NEGF.bias.neq.energy.step	0.02	#	default=0.02	(eV)

有限のソース・ドレインバイアス電圧を印加すると、密度行列の一部は非平衡グリーン関数から計算されま す。非平衡グリーン関数は複素平面上で一般に解析的ではありませんので、平衡グリーン関数で用いられた 周回積分法は使用できません。現在の実装では、非平衡グリーン関数は微小虚部を付与した実軸上で単純 な矩形求積法を用いて評価しています。この際、虚数部はキーワード「NEGF.bias.neq.im.energy」により 指定します。またステップ幅はキーワード「NEGF.bias.neq.energy.step」により、eVの単位で与えます。 通常はデフォルト値で十分な精度が確保できますが、収束性の詳細な議論は文献 [73] を参照して下さい。 非平衡グリーン関数を評価する実軸上のエネルギー点数は標準出力およびファイル「System.Name.out」 で確かめることができます。「NEGF-Chain.dat」の例では、バイアス電圧が 0.5V の際には 120 個のエ ネルギー点が割り当てられており、以下のように標準出力から確認できます。

```
Intrinsic chemical potential (eV) of the leads
Left lead: -7.752843837400
Right lead: -7.752843837400
add voltage = 0.0000 (eV) to the left lead: new ChemP (eV): -7.7528
add voltage = 0.5000 (eV) to the right lead: new ChemP (eV): -7.2528
Parameters for the integration of the non-equilibrium part
lower bound: -8.706843837400 (eV)
upper bound: -6.298843837400 (eV)
energy step: 0.02000000000 (eV)
```

グリーン関数を評価するエネルギー点の総数は、非平衡グリーン関数を評価する実軸上のエネルギー点 と、平衡グリーン関数を評価する極の数の総和で与えられます。計算時間は、エネルギー点の総数に比 例することに留意して下さい。

NEGF.Poisson.Solver FD # FD|FFT, default=FD

120

NEGF 法では差電子密度に対する静電ポテンシャルを 2 次元 FFT+1 次元有限差分法 (FD) [73] もし くは 3 次元 FFT 法 (FFT) [75] のどちらかの方法で評価します。このポアソン・ソルバーの選択はキー ワード「NEGF.Poisson.Solver」で行います。非極性系についてはどちらの方法も同様の静電ポテンシャ ルを与えますが、極性系については両者の差異は大きくなります。前者の FD では、電極部分と中心領 域の境界条件が厳密に満されるため、理論的にはより正しい方法です。ここでの境界条件とは、電極部 分と中心領域の界面での静電ポテンシャルがステップ 1 の計算におけるポテンシャル値と同一であると いうものです。SCF 収束性の観点からは、FD の収束性が悪く、一方、後者の FFT の方がより SCF 収 束が容易であるという傾向が分かっています。デフォルトは FD です。

C. SCF の収束条件

energy step: number of steps:

NEGF法では、キーワード「scf.criterion」により与えられるSCFの収束条件は残差ノルム「NormRD」 に適用されます。NEGF法以外の場合には、SCFの収束条件はdUeleに適用されます。

D. ゲート・バイアス電圧

OpenMX Ver. 3.9 の実装では、次式で定義されるポテンシャルを加えることで、ゲート電圧 $V_{\rm g}(x)$ が取り扱われます。

$$V_{\rm g}(x) = V_{\rm g}^{(0)} \exp\left[-\left(\frac{x - x_{\rm c}}{d}\right)^8\right],$$

ここで、 $V_{g}^{(0)}$ はゲート電圧に対応する定数であり、キーワード「NEGF.gate.voltage」により指定できます。

NEGF.gate.voltage 1.0 # default=0.0 (in eV)

また x_c は領域 C_0 の中心位置、d は領域 C_0 の a 軸方向のセルベクトルの長さです。式の形が示すよう に、印加されたゲート電圧は、主として拡張中心領域 C 内の領域 C_0 に作用します。このポテンシャル は、鏡像電荷によって生成されるポテンシャル形状に類似しています [76]。

E. 状態密度 (DOS)

NEGF 計算において、状態密度 (DOS) は次のキーワードを設定することにより計算できます。

Dos.fileout	on	<pre># on off, default=off</pre>
NEGF.Dos.energyrange	-15.0 25.0 5.0e-3	#default=-10.0 10.0 5.0e-3 (eV)
NEGF.Dos.energy.div	200	# default=200
NEGF.Dos.Kgrid	1 1	# default=1 1

NEGF 法において DOS を計算する際には、「Dos.fileout」を「on」にして下さい。また、DOS を計算 するエネルギー範囲は、キーワード「NEGF.Dos.energyrange」により与えます。ここで、最初と二番 目の数値はエネルギーの下限と上限で、三番目の数値は DOS を滑らかにするために用いる虚数値です。 「NEGF.Dos.energyrange」により指定されたエネルギー範囲は、キーワード「NEGF.Dos.energy.div」で 指定した数値で分割され、そのエネルギー点上で DOS が計算されます。逆格子ベクトル \tilde{b} および \tilde{c} を離散化 するためのk点のそれぞれの数を、キーワード「NEGF.Dos.Kgrid」により指定します。「NEGF.Dos.Kgrid」 で与える数を「NEGF.sef.Kgrid」より大きな値にすることで計算精度が向上します。NEGF 計算が完了 すると、「*System.Name*.Dos.val」と「*System.Name*.Dos.vec」の二つのファイルを生成します。その後 の解析手順は、一般の場合と同様です。また、エネルギーの原点は左側の電極の化学ポテンシャルに設 定されていることに留意して下さい。

43.4 ステップ 3: 透過率、電流 (密度) と固有チャネル

ステップ2とステップ3の計算を終了後、透過率、電流(密度)、固有チャネルを計算できます。

43.4.1 透過率、電流、コンダクタンス

最初に、openmx を用いて透過率、電流、コンダクタンスを計算します。この計算に関連するキーワード は以下のとおりです。

NEGF.tran.Analysis on # default on NEGF.tran.CurrentDensity on # default on NEGF.tran.energyrange -10 10 1.0e-3 # default=-10.0 10.0 1.0e-3 (eV)

NEGF.tran.energydiv	200	<pre># default=200</pre>
NEGF.tran.Kgrid	1 1	<pre># default= 1 1</pre>

- NEGF.tran.Analysis, NEGF.tran.Channel, NEGF.tran.CurrentDensity
 NEGF.tran.Analysis を on にした場合、透過率、電流、コンダクタンスが計算されます。
- NEGF.tran.energyrange, NEGF.tran.energydiv

キーワード「NEGF.tran.energyrange」により透過率を計算するエネルギー範囲を指定します。 最初と二番目の数値は、エネルギーの下限値と上限値で、三番目の数値は透過率を滑らかにする ための虚数値です。「NEGF.tran.energyrange」により指定されるエネルギー範囲は、キーワード 「NEGF.tran.energydiv」により指定した数値で分割され、そのエネルギー点上で透過率が計算さ れます。

• NEGF.tran.Kgrid

逆格子ベクトル \tilde{b} および \tilde{c} を離散化するためのk点の数のそれぞれの値を、「NEGF.tran.Kgrid」 により指定します。「NEGF.tran.Kgrid」で与える値は「NEGF.scf.Kgrid」で与える値とは異なる ものに設定することが可能であり、計算精度を向上には大きな値の使用が推奨されます。

透過率、電流、コンダクタンスの計算では、以下の様なメッセージが標準出力に表示されます。

Chemical potentials used in the SCF calculation Left lead: -5.125617225230 (eV) Right lead: -5.125617225230 (eV) NEGF.current.energy.step 1.0000e-02 seems to be large for the calculation of current ... The recommended Tran.current.energy.step is 0.0000e+00 (eV). TRAN_Channel_kpoint 0 0.000000 0.000000 TRAN_Channel_energy 0 0.000000 eV

```
Parameters for the calculation of the current
  lower bound: -5.125617225230 (eV)
 upper bound:
                -5.125617225230 (eV)
 energy step:
                 0.01000000000 (eV)
  imaginary energy 0.00100000000 (eV)
 number of steps: 0
  calculating...
 myid0= 0 i2= 0 i3= 0 k2= 0.0000 k3= -0.0000
 myid0= 1 i2= 0 i3= 0 k2= 0.0000 k3= -0.0000
Transmission: files
  ./negf-chain.tran0_0
Current: file
  ./negf-chain.current
Conductance: file
```

```
./negf-chain.conductance
```

TRAN_Channel_Num 5

計算が終わると、以下の3つのファイルが生成されます。

negf-chain.tran0_0, negf-chain.current, negf-chain.conductance:

• System.Name.tran#_%

このファイルにはアップとダウンのスピン状態に対する透過率が保存されます。4番目の列は、左側リード線部の化学ポテンシャルに対する相対的なエネルギーで、6番目と8番目の列は、それ ぞれアップとダウンスピン状態に対する透過率です。「NEGF.tran.Kgrid」により与えられる k 点の数を多く取ると、ファイル拡張子に「#」と「%」の異なる組を持つファイルが、k 点毎に生成します。ファイルの数字と k 点との対応はファイル内で確認できます。

• System.Name.current

このファイルには、アップスピン状態とダウンスピン状態に対する k 分解された電流およびその 平均値がアンペアの単位で保存されます。

• System.Name.conductance



Figure 41: Fe|MgO|Fe の化学ポテンシャルでの k 分解透過率。(a) 平行スピン配置での多数スピン状態、(b) 平行 スピン配置での少数スピン状態、(c) 反平行スピン配置でのスピン状態。各計算には、120×120 個の k 点を使用。

このファイルには、アップスピン状態とダウンスピン状態に対する k 分解されたコンダクタンス とその平均値が量子化コンダクタンスの単位 ($G_0 \equiv \frac{e^2}{h}$)で保存されています。コンダクタンス Gは、左電極の化学ポテンシャル μ_L での透過率 T に、次のように比例します。

$$G = \frac{e^2}{h}T(\mu_L)$$

ー例として、ファイル「*System.Name.*conductance」を用いて作成された Fe|MgO|Fe 構造の k 分解 透過率を図 41 に示します。

43.4.2 実空間における電流/スピン流密度

ステップ3で、実空間における電流/スピン流密度が計算可能です。この計算に関連するキーワードは以下のとおりです。

NEGF.tran.CurrentDensity on # default on

• NEGF.tran.CurrentDensity

NEGF.tran.CurrentDensity が on の場合、 実空間での電流密度が計算されます。

電流密度の計算の際には、 openmx の計算から以下の標準出力が得られます。

```
Start Calculation of the currentdensity
  Spin #0
   Sum of current in real space [a.u.]
     Left(ideal) : -9.10585e-06
     Right(ideal): -9.10583e-06
     Left(truncated ):
                        -8.66971e-06
     Right(truncated):
                        -8.69926e-06
 Spin #1
   Sum of current in real space [a.u.]
     Left(ideal) : -4.54540e-08
     Right(ideal): -4.54544e-08
     Left(truncated ):
                        -4.19469e-08
     Right(truncated): -4.27460e-08
Output: Currentdensity
  Charge-current density along a-axis: ./negf-8zgnr-0.3.curden1.cube
  Spin-current density along a-axis: ./negf-8zgnr-0.3.scurden1.cube
  Charge-current density: ./negf-8zgnr-0.3.curden.xsf
  Spin-current density: ./negf-8zgnr-0.3.scurden.xsf
 Voronoi Charge-current density: ./negf-8zgnr-0.3.curden_atom.xsf
 Voronoi Spin-current density: ./negf-8zgnr-0.3.scurden_atom.xsf
この計算例の場合には、以下の6つのファイルが作成されます。
```

negf-8zgnr-0.3.curden.xsf, negf-8zgnr-0.3.scurden.xsf, negf-8zgnr-0.3.curden1.cube, negf-8zgnr-0.3.scurden1.cube, negf-8zgnr-0.3.curden_atom.xsf, negf-8zgnr-0.3.scurden_atom.xsf,

これらのファイルには、以下の物理量が記載されています。

- System.Name.curden.xsf, System.Name.scurden.xsf
 これらのファイルには実空間格子上の電流及びスピン流の密度が記載されます。XCrySDen の「Display→Forces」によって可視化可能です。
- System.Name.curden1.cube, System.Name.scurden1.cube
 これらのファイルには、実空間格子上の電流及びスピン流の密度の a 成分が記載されます。VESTA や XCrySDen にて可視化可能です。
- System.Name.curden_atom.xsf, System.Name.scurden_atom.xsf

これらのファイルには各原子の Voronoi 多面体にて平均化した電流及びスピン流の密度が記載されます。XCrySDen の「Display→Forces」によって可視化可能です。

OpenMX Ver. 3.9 では、

NEGF.OffDiagonalCurrent on # default off

を設定することでノンコリニア磁性の計算も可能となっており、以下のファイルが作成されます。

- System.Name.odcurden_r.xsf, System.Name.odcurden_i.xsf
- System.Name.odcurden1_r.cube, System.Name.odcurden1_i.cube
- System.Name.odcurden_atom_r.xsf, System.Name.odcurden_atom_i.xsf

これらのファイルには電流密度の非対角スピン成分が記載されます。これらは一般的に複素数となるため、実部と虚部に分けて出力されます。

例として、図 42 に 0.3V のバイアス電圧下で反強磁性接合を持つグラフェンナノリボン(8-zigzag) の電流密度を示します。境界の近傍では、基底関数が適切に扱われていないため非物理的な振る舞いを しています。より正確な計算を実現するためには、より大きなスーパーセルモデルを用意する必要があ ります。



Figure 42: (a) 0.3V のバイアス電圧下で反強磁性接合を持つグラフェンナノリボン(8-zigzag)の電流密度。(b) (a) の a 成分の等値面。

43.4.3 固有チャネル解析

ステップ3では、透過固有チャネルの計算も可能です。この計算に関連するキーワードは以下のとおり です。

NEGF.tran.Channel		on	#	default on			
NEGF.Channel.Nkpoint	t	1	#	default=1			
<negf.channel.kpoint< td=""><td>t</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></negf.channel.kpoint<>	t						
0.0 0.0							
NEGF.Channel.kpoint	>						
# default 0.0 0.0							
NEGF.Channel.Nenergy	у	1	#	default=1			
<negf.channel.energy< td=""><td>у</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></negf.channel.energy<>	у						
0.0							
NEGF.Channel.energy	>						
# default 0.0							
NEGF.Channel.Num	5 ;	# defualt=5	(fo	or collinear),	10(for	Non-colli	near)

• NEGF.tran.Channel

NEGF.tran.Channel が on の場合、固有チャネルが計算されます。

• NEGF.Channel.Nkpoint, <NEGF.Channel.kpoint, NEGF.Channel.kpoint>

これらのキーワードは、固有チャネルを計算するk点を指定するのに用います。<NEGF.Channel.kpoint と NEGF.Channel.kpoint>の間に1行毎にk点を記載して下さい。k点の総数は NEGF.Channel.Nkpoint にて指定して下さい。 k座標は2次元の規格化座標として記述し、透過方向に垂直な2つの逆格 子ベクトルの係数として kを指定して下さい。

• NEGF.Channel.Nenergy, <NEGF.Channel.energy, NEGF.Channel.energy>

これらのキーワードは、計算する固有チャネルのエネルギーの指定に用います。<NEGF.Channel.energy と NEGF.Channel.energy>の間に1行毎にエネルギーを記載して下さい。エネルギーの総数は NEGF.Channel.Nenergyにて指定して下さい。エネルギーの単位はeVであり、左電極の化学ポテ ンシャルを基準に設定して下さい。

• NEGF.Channel.Num

このパラメータでは、実空間表記での固有チャネルの数を指定します。k、エネルギー、スピンの それぞれについて、透過固有値が降順に出力されます。ファイル形式は Gaussian cube 形式で、実 部・虚部に分けて出力されます。

固有チャネルの計算では、以下の様な標準出力が openmx より得られます。

File index : negf-8zgnr-0.3.traneval#k_#E_#spin negf-8zgnr-0.3.tranevec#k_#E_#spin

```
myid0 = 0, #k : 0, N_{ort} / N_{nonort} : 380 / 380
PE 0 generates ./negf-8zgnr-0.3.traneval0_0_0 . Sum(eigenval) : 0.031643
```

```
Eigenchannel calculation finished
They are written in plottable files.
File index : negf-8zgnr-0.3.tranec#k_#E_#spin_#branch_r.cube(.bin)
             negf-8zgnr-0.3.tranec#k_#E_#spin_#branch_i.cube(.bin)
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_0_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_1_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_1_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_2_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_2_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_3_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_3_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_4_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_4_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_0_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_0_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_1_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_1_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_2_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_2_i.cube
./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_3_r.cube
                                          ./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_3_i.cube
```

```
この例では、以下の 22 個のファイルが生成します。
```

./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_4_r.cube

```
negf-8zgnr-0.3.treval0_0_0, negf-8zgnr-0.3.tranevec0_0_0,
negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_0_r.cube - negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_4_r.cube,
negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_0_0_i.cube - negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_4_i.cube
```

System.*Name*.traneval{#k}_{#E}_{#s}
 このファイルには、{#k}番目の k、{#E}番目のエネルギー及び {#s}番目のスピンについて、全ての固有チャネルの透過固有値が記載されます。

./negf-8zgnr-0.3.tranec0_0_1_4_i.cube

• System.Name.tranevec{#k}_{#E}_{#s}

このファイルには、{#k}番目の k、{#E}番目のエネルギー及び {#s}番目のスピンについて、固有 チャネルの LCAO 成分が記載されます。

例えば、negf-chain.tranevec0_0_0 は以下の様になります。

```
# of k-point = 0
k2= 0.00000 k3= 0.00000
# of Energy = 0
e= 0.00000
```

Real (Re) and imaginary (Im) parts of LCAO coefficients

		1		2		3		4	
		0.9778		0.0000		0.0000		0.0000	
		Re	Im	Re	Im	Re	Im	Re	Im
1	COs	-0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	0.0000
	1 s	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000
	0 px	-0.63002	-1.49377	-0.14466	0.00019	0.01644	-0.00032	-0.07885	0.00095
	0 ру	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
	0 pz	0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000
2	C 0 s	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000
	1 s	0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000
	0 px	0.18040	-0.03816	-0.00452	0.00009	-0.00545	-0.00010	-0.01970	-0.00004
	0 ру	-0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
	0 pz	0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000
3	C 0 s	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000
	1 s	-0.00000	-0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000
	0 px	2.06634	0.40490	0.11067	0.00023	-0.06068	0.00009	-0.06690	-0.00042
	0 ру	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	0.00000
	0 pz	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000
4	C 0 s	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000
	1 s	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	-0.00000	0.00000	-0.00000	0.0000

• System.Name.tranec{#k}_{#E}_{#s}_{#c}_r.cube, System.Name.tranec{#k}_{#E}_{#s}_{#c}_i.cube

このファイルには、Gaussian cube 形式で固有チャネルの実部・虚部が記載されます。VESTA や XcrySDen などを用いて、等値面を描画できます。図 43 に 0.3V のバイアス電圧下で反強磁性接 合を持つグラフェンナノリボン (8-zigzag)の例を示します。

43.5 ステップ3のみを再計算する方法

事前に openmx を実行し、NEGF 計算が終了している場合には、直接ステップ3の計算を実行すること ができます。このような場合には、以下のキーワードを設定して下さい。

NEGF.tran.SCF.skip on

openmx によって *System.Name*.tranb を読み込まれ、事前のステップ2の計算結果を用いて、透過率、 固有チャネルが順次計算されます。他方、ステップ2の計算までで止めたい場合には、キーワード を以 下のとおり設定して下さい。

NEGF.tran.SCF.skip off NEGF.tran.Analysis off NEGF.tran.Channel off



43.6 ゼロバイアス下における周期系

bc 面の周期性だけでなく a 軸方向にも周期性を持った系の透過率は容易に計算可能です。3 次元の周期 性を持つ系の場合には、グリーン関数法を用いることなく、通常のバンド構造計算によって得られたハ ミルトニアンを利用し、ゼロバイアス電圧下での透過率が計算できます。この方法により、様々な幾何 構造や磁気構造を持った系の輸送特性を低い計算コストで調べることが可能となります。とりわけ超格 子構造などの計算には有用でしょう。この計算は、ステップ1のバンド構造計算において、キーワード 「NEGF.Output.for.TranMain」を付け加えることで実行可能です。

NEGF.Output.for.TranMain on

ステップ1の計算が正常に終了すると、ステップ3の計算に利用可能なファイル「*.tranb」を生成され ます。つまり、ステップ2の計算が省略されることになります。

43.7 バイアス電圧効果の補間法

大規模な系の SCF 計算を各バイアス電圧において実行するのは非常に計算時間を要します。バイアス電 圧効果の補間法を用いて NEGF 法による計算コストを低減することが可能です。次の手順により補間 を行います。(i) 対象とするバイアス電圧領域から選択した 2、3のバイアス電圧についての SCF 計算。 (ii) 透過率および電流を計算するとき、中心散乱領域と右側電極部分に対するハミルトニアンのブロッ ク要素、 $H_{a,C}^{(k)} \geq H_{a,R}^{(k)}$ 、さらに化学ポテンシャル μ_R について次のような線形補間を行います。

$$H_{\sigma,C}^{(\mathbf{k})} = \lambda H_{\sigma,C}^{(\mathbf{k},1)} + (1-\lambda) H_{\sigma,C}^{(\mathbf{k},2)},$$

$$H_{\sigma,R}^{(\mathbf{k})} = \lambda H_{\sigma,R}^{(\mathbf{k},1)} + (1-\lambda) H_{\sigma,R}^{(\mathbf{k},2)},$$

$$\mu_R = \lambda \mu_R^{(1)} + (1-\lambda) \mu_R^{(2)},$$

ここで、上付きの添字1および2は、事前にSCF計算を行ったバイアス電圧において、計算された、も しくは使用した量であることを意味します。補間の精度を保証するために、一般に内挿補間を行うべき であり、従ってλは0から1の範囲の値に設定するべきです。

ステップ3の計算において、入力ファイルに次のキーワードを加えることにより補間を行います。

NEGF.tran.interpolate	on	<pre># default=off, on off</pre>
NEGF.tran.interpolate.file1	c1-negf-0.5.tranb	
NEGF.tran.interpolate.file2	c1-negf-1.0.tranb	
NEGF.tran.interpolate.coes	0.7 0.3	# default=1.0 0.0

補間を行う際には、キーワード「NEGF.tran.interpolate」を「on」に設定して下さい。上記の例では、 キーワード「NEGF.tran.interpolate.file1」と「NEGF.tran.interpolate.file2」により指定されるファイ ル「cl-negf-0.5.tranb」と「cl-negf-1.0tranb」には、それぞれ 0.5 V および 1.0 V のバイアス電圧下での 計算結果が保存されます。キーワード「NEGF.tran.interpolate.coes」により重み 0.7 と 0.3 が指定され ていますので、 $V = 0.7 \times 0.5 + 0.3 \times 1.0 = 0.65$ [V] における透過率と電流の値が本補間法により計算 されます。

ー次元炭素鎖の電流と透過率について、完全な SCF 計算と補間法の比較を図 44 (a) および (b) に示 します。補間法での計算では、0V、0.5V および 1.0V の三つのバイアス電圧において SCF 計算を行い、



Figure 44: (a) SCF 計算(実線)と補間法(点線)により計算した一次元炭素鎖の電流、(b) SCF 計算(実線) と補間法(点線)により計算した 0.3V のバイアス電圧下での一次元炭素鎖の透過率。密度行列における非平衡成 分の積分には虚数部 0.01eV と格子間隔 0.01eV を使用。

他のバイアス電圧における結果は補間で求めました。比較のために、補間法を用いずに完全な SCF 計算 から求めた電流値も示しました。図 44 から、この簡易的な補間法は、電流および透過率のどちらもに も非常に正確な結果を与えていることが確認できます。補間の際の SCF 計算で用いるバイアス電圧の適 切な選択は系に依存しますが、この結果は、バイアス電圧の効果を計算精度を保ちつつ補間するために、 本方法が非常に有用であることを示唆しています。

43.8 NEGF の並列化

NEGF 計算には MPI を用いた並列化が実装されています。MPI 並列化に加えて、MKL (Math Kernel Library)を用いると、グリーン関数を評価するときの行列乗算および逆行列計算を OpenMP により並 列化することもできます。この場合、MPI/OpenMP によるハイブリッド並列化を実行可能で、さらに 計算時間を短縮することができます。並列計算の実行方法は以前に述べたものと全く同じです。

図 45 に、NEGF 計算における OpenMP/MPI ハイブリッド並列の速度向上比を示します。これは 0.5 eV の有限バイアス電圧下にある 8-ジグザグ型グラフェンナノリボン(ZGNR)の密度行列の計算を 行った場合の結果です。密度行列計算には 197 個のエネルギー点(101 個は平衡密度行列、96 個は非平 衡密度行列)を用いています。k 点サンプリングには Γ 点のみを用い、スピン分極計算を行いました。エ ネルギー点、k 点、スピンの三つのループに関して 394 個の組み合わせを MPI により並列化しました。 1 スレッドに相当するフラット MPI 並列化の速度向上比は 64 プロセスまで順当に向上しています。さ らに、2 および 4 スレッドに相当するハイブリッド並列化により速度向上比が大きく改善されているこ とが分かります。64 個のプロセスと 4 スレッドに相当する 64 個のクアッドコア・プロセッサを完全に 用いた場合、速度向上比は約 140 であり、NEGF 法のスケーラビリティが良いことを実証しています。 詳細については文献 [73] を参照して下さい。OpenMX Ver. 3.9 では、MPI 並列化におけるプロセス数 が原子数を超えても効率的に並列化が実行されることにも留意して下さい。

43.9 ノンコリニア DFT 法に対する NEGF 法

OpenMX Ver. 3.9 は、ノンコリニア DFT 法と組み合わせた NEGF 法に対応しています。ノンコリニア DFT 法の全ての機能と NEGF 法は整合性を持った実装となっています。スピン-軌道相互作用、DFT+U 法、そしてスピン磁気モーメントおよび軌道磁気モーメントの方位に対する制約法の全ての機能が NEGF



Figure 45: 8-ジグザググラフェンナノリボン (ZGNR)の密度行列の計算における OpenMP/MPI ハイブリッド 並列の速度向上比。速度向上比は、 T_1 および T_p をシングルコア計算および並列計算の経過時間とするとき、 T_1/T_p により定義。プロセスおよびスレッドは MPI および OpenMP の並列計算で使用したコア数。並列計算は AMD opteron クワッドコア・プロセッサ (2.3 GHz)を搭載する CRAY-XT5 マシン上で実行。

法の実装と適合しています。従って、らせん状磁気構造を持つ磁区を介した電子輸送など、広範な問題 を取り扱うことが可能であると期待されます。NEGF計算の実行の方法は、基本的にコリニア DFT法 の場合と同一です。

ノンコリニア DFT 法と組み合わせた NEGF 計算の一例として、ジグザグ型グラフェン・ナノリボン の透過率の計算結果を図 46 に示します。ジグザグ端におけるスピン磁気モーメントは、左側および右側 の電極部分のそれぞれにおいて、上方向および右方向に整列しています。電極部分の計算は、ステップ 1 においてスピン磁気モーメントの制約法を用いてノンコリニアバンド構造計算により行いました。次に ステップ 2 の計算では制約条件を課しませんでした。ステップ 2 の SCF 計算の結果、図 46 (a) に示すよ うに中心部分のスピン方向は徐々に回転していくことが分かります。この計算は、「work/negf_example」 ディレクトリに保存されている入力ファイル「Lead-L-8ZGNR-NC.dat」、「Lead-R-8ZGNER-NC.dat」、 「NGEF-8ZGNR-NC.dat」により再現できます。また、同じディレクトリに金の一次元鎖のノンコリニ ア NEGF 計算の入力ファイルが保存されていますので、参考にして下さい。

43.10 実例

NEGF 計算の参考例として、以下の5つの入力ファイルがディレクトリ「work/negf_example」中に保存されています。

- ゼロバイアス電圧下にある一次元炭素鎖
 - ステップ 1: Lead-Chain.dat ステップ 2: NEGF-Chain.dat
- ゼロバイアス電圧下にあるグラフェン・シート


Figure 46: (a) 矢印で表したノンコリニアスピン方位を持つジグザグ型グラフェン・ナノリボン。矢印の長さは、 スピン磁気モーメントの大きさに対応。ステップ1の計算において、スピン磁気モーメントの方位に対する制約 法を適用。左側電極および右側電極において、ジグザグ端のスピン磁気モーメントがそれぞれ上方向および右方 向となるように制約法を適用。(b)図(a)に示すチャネル領域Cを通過する電子の透過率。

ステップ 1: Lead-Graphene.dat ステップ 2: NEGF-Graphene.dat

 0.3Vの有限バイアス電圧下にある反強磁性接合を持つ 8-ジグザグ型グラフェン・ナノリボン ステップ 1: Lead-L-8ZGNR.dat, Lead-R-8ZGNR.dat

ステップ 2: NEGF-8ZGNR-0.3.dat

• ゼロバイアス電圧下にあるノンコリニア磁気接合を持つ 8-ジグザグ型グラフェン・ナノリボン

ステップ 1: Lead-L-8ZGNR-NC.dat, Lead-R-8ZGNR-NC.dat ステップ 2: NEGF-8ZGNR-NC.dat

• ノンコリニア NEGF 法で計算したゼロバイアス電圧下にある金の一次元鎖

ステップ 1: Lead-Au-Chain-NC.dat ステップ 2: NEGF-Au-Chain-NC.dat

43.11 NEGF の自動実行テスト

NEGF 計算に関連する機能が適切にインストールされていることを確認するために、NEGF 計算の自動 実行テストを次のようにして行うことができます。

MPI 並列実行の場合

% mpirun -np 16 openmx -runtestNEGF

% mpirun -np 8 openmx -runtestNEGF -nt 2

このテスト計算において、OpenMX はステップ1およびステップ2の計算を含む五つのテストケースを実行し、「work/negf_example」に保存されている参照結果と比較します。比較結果(全エネルギー、力、平均電流密度及び固有透過率の和の絶対差異)は、「work」ディレクトリ内にファイル「runtestNEGF.result」として保存されます。参照結果は、2.6 GHz Xeon マシンの16 MPI プロセスを用いて計算されたものです。絶対差異が少数点以下7桁以内であれば、インストールが正常であると判断されます。

44 最局在ワニエ関数

44.1 生成方法

OpenMX Ver. 3.9 を用いて最局在ワニエ関数(MLWF)を生成することが可能です[122, 123]。MLWF を計算するためのキーワードと設定について以下に説明します。キーワードの様式は、OpenMX で本来 用いている形式に厳密に従っています。具体的な例として、この章ではダイヤモンド構造のシリコンに 関する計算結果を示します。計算はディレクトリ「work/wf_example」中にある入力ファイル「Si.dat」 を用いて、プログラムコード「openmx」を用いて再現できます。その他のポストプロセスコードは使用 しません。通常の SCF 計算の収束解が得られた後に、再スタートファイルを用い、適切な MLWF が得 られるまで、いくつかのパラメータを変更しながら以下に説明する手順を繰り返すことになります。

本機能を用いて発表を行う際には、文献[77]を引用して頂けますと幸いです。

MLWFを生成する

MLWF を生成するために、キーワード「Wannier.Func.Calc」を「on」と明示的に設定して下さい。 デフォルト値は「off」です。

Wannier.Func.Calc on #default off

生成する MLWF の数の指定

生成する MLWF の数を、キーワード「Wannier.Func.Num」により指定します。デフォルト値はあ りません。

Wannier.Func.Num 4 #no default

ブロッホ状態を選択するエネルギーウィンドウ

MLWF は、1組のブロッホ状態から生成されます。固有エネルギーに対するエネルギー窓を指定す ることで、1組のブロッホ状態が選択されます。参考文献 [123] に従って、二つのエネルギー窓を導入 します。1つは、外エネルギー窓とよばれ、下限を示す「Wannier.Outer.Window.Bottom」と上限を示 す「Wannier.Outer.Window.Top」の2つのキーワードにより指定されます。もう1つは、内エネルギー 窓で、下限を示す「Wannier.Inner.Window.Bottom」と上限を示す「Wannier.Inner.Window.Top」の 2つの同様なキーワードにより指定されます。これらの4つの値はすべて、フェルミ準位からの相対的 な値を eV 単位で与えます。内エネルギー窓は外エネルギー窓の領域内に設定する必要があります。内 エネルギー窓を定義する下限値と上限値が等しいときには、内エネルギー窓は定義されていないことに なり、計算には使用できません。外エネルギー窓にデフォルト値はなく、また内エネルギー窓の下限値 と上限値のデフォルト値はともに 0.0 です。例えば、次の様に設定します。

Wannier.Outer.Window.Bottom-14.0#lower boundary of outer window, no default valueWannier.Outer.Window.Top0.0#upper boundary of outer window, no default valueWannier.Inner.Window.Bottom0.0#lower boundary of inner window, default value 0.0Wannier.Inner.Window.Top0.0#upper boundary of outer window, default value 0.0

目的のバンドを含む2つのエネルギー窓を適切に設定するためには、MLWFの計算の前にバンド構造と 状態密度の一方または両方を計算し、その範囲を事前に知っておく必要があります。

MLWFの局在化計算では再スタートファイルから重なり行列要素を取得し、計算を行います。重な り行列はある特定の外エネルギー窓に対して計算され、ファイルに保存されています。従って再計算の 際に外エネルギー窓を再定義する場合には、事前に設定した外エネルギー窓の範囲内での変更が可能で す。また計算を再スタートする際には、内エネルギー窓は外エネルギー窓の範囲内で自由に変更可能で す。MLWFの両エネルギー窓の依存性を確かめる際には、上述の制約の範疇でエネルギー窓を調節して 下さい。計算の再スタートさせる場合には、本節の後半にある「重なり行列の計算を省いた最適化の再 スタート」を参照して下さい。

MLWF の最初の推定

キーワード「Wannier.Initial.Guess」を「on」または「off」と設定することにより、MLWFの初期 推定をするか否かを選択できます。デフォルト値は「on」です。多くの場合に MLWF の初期推定を行 うことで、スプレッド関数を最小化する際の収束性が改善し、また局所的な解への収束を避けることが 可能になります。初期推定を行う際には、生成する MLWF と同数の局在関数の組を定義しなければな りません。外エネルギー窓の内部のプロッホ波動関数は、局在関数の組に射影されます。従って、この ような局在関数はプロジェクタとも呼びます。プロジェクタを指定するには、以下の手順が必要です。

A. プロジェクタに用いる局在関数の定義

擬原子軌道(PAO)をプロジェクタに用いますので、PAOの設定は基底関数の場合と同様です。ダイヤモンド構造のシリコンでの設定例は、以下の様になります。

Species.Number 2

<Definition.of.Atomic.Species Si Si7.0-s2p2d1 Si_CA19 proj1 Si7.0-s1p1d1f1 Si_CA19 Definition.of.Atomic.Species>

この例では、SiのPAOをプロジェクタとして使用し、原子種「proj1」を上記のように定義します。キー ワードの対「<Definition.of.Atomic.Species」および「Definition.of.Atomic.Species>」内で、1行目の Si原子に加えて、プロジェクタに関する原子種「proj1」を定義します。この原子種「proj1」は「Si7.0s1p1d1f1」と擬ポテンシャル「Si_CA19」で定義されます。ただし、この行で定義された擬ポテンシャ ルは実際の計算では使用されません。単にデータ入力の一貫性を保つために与えています。どのような PAO もプロジェクタとして使用可能ですが、各1-成分に対しては単一の動径軌道のみが指定可能であ り、すべての場合に「s1p1d1f1」の指定を推奨します。

B. プロジェクタの軌道、中心位置、配向の指定

対となるキーワード「<Wannier.Initial.Projectos」および「Wannier.Initial.Projectos>」を用いて、 プロジェクタ名、局在軌道関数、局在軌道の中心、軌道の方位を指定する局所的な *z* 軸および *x* 軸を指 定します。設定例を以下に示します。

各行には次の項目が記載されています。例えば、第1行目では、原子種名「proj1」はキーワード対「Definition.of.Atomic.Species」で定義されています。プロジェクタ名と選択された軌道をつなぐためにハイ フン「-」を用います。「sp3」は、この原子種の sp_3 混成軌道が生成するワニエ関数の初期推定として使 用されることを意味します(利用可能な軌道およびその混成軌道を表9に示します)。この混成軌道か らなるプロジェクタは、次に続く3つの数「0.25 0.25」で与えられる位置を中心として配置されま す。これらの数値は、キーワード「Wannier.Initial.Projectors.Unit」により定義される単位で与えられ ています(説明は後述します)。その次の3つの数から成る2組の値は、局所座標系のz軸およびx軸 の方向をそれぞれ定義しています。ここで、各軸はxyz座標系の3つの成分により定義されるベクトル により指定されます。この例の第1行目では、局所z軸は元のx軸に対して逆向きの「-1.0 0.0 0.0」で 表されるベクトルで定義され、局所 x軸はもとのz軸に対して逆向きの「0.0 0.0 -1.0」で表されるベク トルで定義されています。第2行目では、局所軸は元の座標系と同じです。

プロジェクタとして用いる軌道として、PAO 自身かまたはそれらの混成軌道も使用可能です。「sp3」 により定義されるプロジェクタの総数は4個であること注意して下さい。同様に、「sp」および「sp2」 により定義されるプロジェクタの総数は、それぞれ2個および3個です。サポートされているPAO およ びそれらの混成軌道のリストは表9にまとめられています。このリストに記載されていないプロジェク タは使用できませんので注意して下さい。

プロジェクタは、単位胞内のどこにでも配置することができます。その位置の指定には、単位胞ベクトルに相対的な規格化座標(FRAC)か、原子単位(AU)もしくはオングストローム(ANG)の単位で表したデカルト座標が使用できます。その選択はキーワード「Wannier.Initial.Projectors.Unit」で行います。

Wannier.Initial.Projectors.Unit FRAC #AU, ANG or FRAC

k 点グリッドおよび隣接する k 点を結ぶ b ベクトル

キーワード「Wannier.Kgrid」により、Monkhorst-Pack のk点グリッドを指定します。デフォルト の設定はありません。k空間における微分を計算する際に有限差分を用いるために、中心のk点からの 距離に応じて殻 (shell) ごとに隣接 k点を結ぶ b ベクトルを探索します。探索する殻の最大数は、キー ワード「Wnnier.Maxshells」により指定します。デフォルト値は 12 で、適切な b ベクトルの組を見出 すことができない場合には、最大数を増やして下さい。単位格子ベクトル間で大きなアスペクト比を持 つ系の場合、問題が起きることがあります。その場合にはエラーメッセージが表示されます。しかし通 常は、最大数 12 で有効に機能します。「Wannier.Kgrid」の適切な設定もまた、b ベクトルを見つけると きに役立ちます。ここで、各逆格子ベクトルに対する離散化のグリッド間隔は、互いにほとんど同等で なければなりません。

Wannier.MaxShells		12		#	default	value	is	12.
Wannier.Kgrid	8	8	8	#	no defau	ilt val	lue	

Orbital name	Number of included	Description
	projector	
S	1	s orbital from PAOs
р	3	p_x, p_y, p_z from PAOs
px	1	p_x from PAOs
ру	1	p_y from PAOs
pz	1	p_z from PAOs
d	5	$d_{z^2}, d_{x^2-y^2}, d_{xy}, d_{xz}, d_{yz}$ from PAOs
dz2	1	d_{z^2} from PAOs
dx2-y2	1	$d_{x^2-y^2}$ from PAOs
dxy	1	d_{xy} from PAOs
dxz	1	d_{xy} from PAOs
dyz	1	d_{xy} from PAOs
f	7	$f_{z^3}, f_{xz^2}, f_{yz^2}, f_{zx^2}, f_{xyz}, f_{x^3-3xy^2}, f_{3yx^2-y^3}$ from
		PAOs
fz3	1	f_{z^3} from PAOs
fxz2	1	f_{xz^2} from PAOs
fyz2	1	f_{yz^2} from PAOs
fzx2	1	f_{zx^2} from PAOs
fxyz	1	f_{xyz} from PAOs
fx3-3xy2	1	$f_{x^3-3xy^2}$ from PAOs
f3yx2-y3	1	$f_{3yx^2-y^3}$ from PAOs
sp	2	Hybridization between s and px orbitals, including
		$\frac{1}{\sqrt{2}}(s+p_x)$ and $\frac{1}{\sqrt{2}}(s-p_x)$
sp2	3	Hybridization among s, px, and py orbitals, including
		$\frac{1}{\sqrt{3}}s - \frac{1}{\sqrt{6}}p_x + \frac{1}{\sqrt{2}}p_y, \frac{1}{\sqrt{3}}s - \frac{1}{\sqrt{6}}p_x - \frac{1}{\sqrt{2}}p_y \text{ and } \frac{1}{\sqrt{3}}s + \frac{2}{\sqrt{6}}p_x$
sp3	4	Hybridization among s, px, py and pz orbitals:
		$\frac{1}{\sqrt{2}}(s+p_x+p_y+p_z), \frac{1}{\sqrt{2}}(s+p_x-p_y-p_z)$
		$\frac{1}{\sqrt{2}}(s-p_x+p_y-p_z), \frac{1}{\sqrt{2}}(s-p_x-p_y+p_z)$
sp3dz2	5	Hybridization among s, p_x, p_y, p_z and d_{z^2} orbitals:
_		$\frac{1}{\sqrt{2}}s - \frac{1}{\sqrt{2}}p_x + \frac{1}{\sqrt{2}}p_y,$
		$\frac{\sqrt{5}}{\frac{1}{\sqrt{5}}}s - \frac{1}{\sqrt{5}}p_x + \frac{1}{\sqrt{5}}p_y, \frac{1}{\sqrt{5}}s - \frac{2}{\sqrt{5}}p_x$
		$\frac{1}{\sqrt{2}}p_{z} + \frac{1}{\sqrt{2}}d_{z^{2}}, -\frac{1}{\sqrt{2}}p_{z} + \frac{1}{\sqrt{2}}d_{z^{2}}$
sp3deg	6	Hybridization among $s, p_{\pi}, p_{\mu}, p_{\tau}$ and d_{π^2}, d_{π^2} and d_{π^2}, d_{π^2}
~F • • • • 0		bitals: $\frac{1}{2}s - \frac{1}{2}p_r - \frac{1}{2}d_{r2} + \frac{1}{2}d_{r2}$
		$\frac{1}{\sqrt{6}} s + \frac{1}{\sqrt{2}} n_{\pi} - \frac{1}{\sqrt{4}} d_{\pi} 2 + \frac{1}{2} d_{\pi} 2 - 2$
		$ \begin{vmatrix} \sqrt{6} & \sqrt{2}^{Fx} & \sqrt{12}^{wz^2} + 2^{wx^2} - y^2, \\ \frac{1}{2}s - \frac{1}{2}n & -\frac{1}{2}d & 2 - \frac{1}{2}d & 2 - 2 \end{vmatrix} $
		$ \begin{vmatrix} \sqrt{6} & \sqrt{2}^{Py} & \sqrt{12}^{w_{z^2}} & 2^{w_{x^2}-y^2}, \\ \frac{1}{2}s + \frac{1}{2}n & -\frac{1}{2}d & 2 - \frac{1}{2}d & 2 \end{vmatrix} $
		$\begin{bmatrix} \sqrt{6}^{3} & \sqrt{2}py - \sqrt{12}az^{2} - 2ax^{2} - y^{2}, \\ 1 & a - 1 & a - 1 & d - 1 & a - 1 & y - 1 & d \end{bmatrix}$
		$\frac{1}{\sqrt{6}}s - \frac{1}{\sqrt{2}}p_z + \frac{1}{\sqrt{3}}a_{z^2}, \frac{1}{\sqrt{6}}s + \frac{1}{\sqrt{2}}p_z + \frac{1}{\sqrt{3}}a_{z^2}$

Table 9: プロジェクタ用の軌道。	軌道の方位は z 軸および a	x 軸を再定義することで回転可能。
----------------------	-----------------	-------------------

ワニエ関数の広がり (スプレッド)の最小化

もつれたバンド (entangled band)の場合 [123]、MLWF を見出すためには2つのステップが必要と なります。最初のステップは、非孤立バンドのもつれを解くことによりスプレッド関数のゲージ不変部 分を最小化することです。第2ステップは孤立バンドの場合と同様です [122]。ゲージ依存部分は、スプ レッド関数の勾配に応じて、選択したブロッホ波動関数のユニタリー変換により最適化します。最初のス テップでは、3つのパラメータを用いて MLWF を生成するための自己無撞着ループを制御します。それ らは、SCF ループの最大数「Wannier.Dis.SCF.Max.Steps」、収束基準「Wannier.Dis.Conv.Criterion」、 そして入出力部分空間プロジェクタの混合を制御するパラメータ「Wannier.Dis.Mixing.Para」です。

Wannier.Dis.SCF.Max.Steps	2000	#	default	200		
Wannier.Dis.Conv.Criterion	1e-12	#	default	1e-8		
Wannier.Dis.Mixing.Para	0.5	#	default	value	is	0.5

第2ステップにおいては、3種類の最適化法が利用できます。1つは最急降下法 (SD: steepest descent)で、2つ目は共役傾斜法 (CG: conjugate gradient)です。3つ目は、始めに SD 法を用いその 後 CG 法に切り替えるハイブリッド法です。キーワード「Wannier.Minimizing.Scheme」で、どの方法 を使うかを指定します。0 は簡易な SD 法、1 は CG 法、2 はハイブリッド法です。SD 法のステップ 長をキーワード「Wannier.Minimizing.StepLength」により指定します。CG 法では、割線法 (secant method)を用いて最適ステップ長を求めます。最大割線ステップと初期ステップ長を、それぞれ「Wannier.Minimizing.Secant.Steps」と「Wannier.Minimizing.Secant.StepLength」により指定します。また 最小化ステップの最大数および収束条件を、それぞれ「Wannier.Minimizing.Max.Steps」および「Wannier.Minimizing.Conv.Criterion」により指定します。

Wannier.Minimizing.Scheme	2	<pre># default 0, 0=SD 1=CG 2=hybrid</pre>
Wannier.Minimizing.StepLength	2.0	# default 2.0
Wannier.Minimizing.Secant.Steps	5	# default 5
Wannier.Minimizing.Secant.StepLength	2.0	# default 2.0
Wannier.Minimizing.Conv.Criterion	1e-12	# default 1e-8
Wannier.Minimizing.Max.Steps	200	# default 200

ハイブリッド法での SD 法および CG 法の最大の最適化ステップ数は「Wannier.Minimizing.Max.Steps」 で指定した値となります。

重なり行列の計算を省いた最適化の再スタート

ー旦、重なり行列 $M_{mn}^{(\mathbf{k},\mathbf{b})}$ を計算し、ファイルに保存しておけば、再計算が容易に実行できます。事前に 計算された重なり行列 $M_{mn}^{(\mathbf{k},\mathbf{b})}$ を利用し、再計算する場合には、キーワード「Wannier.Readin.Overlap.Matrix」 を「on」と設定して下さい。

Wannier.Readin.Overlap.Matrix on # on|off, default is on

重なり行列の計算は時間を要しますので、このキーワードを指定することで、無駄な計算を省くことが 可能となります。このキーワードが指定している場合にはプログラムコード「openmx」は、ファイル から固有エネルギーおよび固有状態と共に、重なり行列を読み取ります。外エネルギー窓とk点グリッ ドは、保存された重なり行列と固有値の計算時に用いたものと同じでなければならないことに注意し



Figure 47: (a) ダイヤモンド構造における Si の補間バンド構造(シンボル線)と元のバンド構造(実線)との比較。(b) ダイヤモンド構造における Si のフェルミ準位近くの4つの価電子状態と4つの伝導状態からなる8つの MLWF の一つ。sp3 混成の初期推定から計算したもの。

て下さい。読み込み時にそれらのパラメーターの一貫性がチェックされます。内エネルギー窓、MLWF の初期推定、また収束条件に関しては、最適化を再スタートする際に変更することができます。「Wannier.Readin.Overlap.Matrix」が「off」に設定されている場合には、重なり行列が計算されて自動的に ファイルに保存されます。「System.Name」で定義された名前と「.mmn」という拡張子を持つファイル が生成されます。また固有エネルギーと固有状態も、拡張子「.eigen」を持ったファイルとして保存され ます。

44.2 解析

補間バンド構造の表示

補間バンド構造を表示するためには、キーワード「Wannier.Interpolated.Bands」を「on」に設定して下さい。

Wannier.Interpolated.Bands on # on|off, default=off

k 経路と経路に沿ったサンプリング密度などの他の必要な設定は、OpenMX におけるバンド分散を表示 するための設定と同様です。従って、補間バンド構造を作成するために、キーワード「Band.dispersion」 を「on」に設定しなければなりません。収束後、補間バンド分散データは「.Wannier_band」の拡張子 を持つファイルに保存されます。このファイルは「.Band」ファイルと同じ形式です。一例として、ダイ ヤモンド構造における Si の補間バンド構造と元のバンド構造を図 47 (a) に示します。 MLWFを描画するためには、キーワード「Wannier.Function.Plot」を「on」に設定して下さい。デフォルト値は「off」です。

Wannier.Function.Plot	on	<pre># default off</pre>
Wannier.Function.Plot.SuperCells	1 1 1	# default=0 0 0

キーワード「Wannier.Function.Plot」を「on」に設定すると、すべての MLWF を描画するためのファ イルが生成されます。MLWF は、例えば「.mlwfl_4_r.cube」のファイル拡張子を持つ Gaussian Cube 形 式のファイルで保存されます。このファイルは、HOMO や LUMO といった分子軌道ファイルと同じ形 式で名前が付けられています。「.mlwfl」の後の数字はスピン・インデックスを、次の文字は MLWF の インデックスで、最後の文字「r」は real を、「i」は imaginary を表し、それぞれ MLWF の実部と虚数 部という意味です。ユーザーは、MLWF を描画するスーパーセルのサイズを設定できます。キーワード 「Wannier.Function.Plot.Supercells」によりそのサイズを指定します。上の例における「111」は、単 位格子セルを中心に置き、a 軸、b 軸、c 軸方向のプラスおよびマイナス方向に1だけ拡大するという意 味です。従って、この場合の MLWF は、27 個 = $(1 \times 2 + 1) \times (1 \times 2 + 1)$ のセルからなる 拡張セルに描画されます。図 47 (b) は、ダイヤモンド構造における Si のフェルミ準位近くの 4 つの価 電子状態と 4 つの伝導状態からなる 8 つの収束した MLWF 内の一つを示したものです。

44.3 スプレッド関数の最適化過程の確認

最適化の過程は標準出力に書き出されます。以下の方法により、最適化の進行過程を確認して下さい。 ここでは便宜上、標準出力はファイル「stdout.std」に保存されていると仮定します。以下で示す例は、 「openmx*.*/work/wf_example」中の入力ファイル「Si.dat」を用いて、ユーザー各自が同じ計算を実行 することができます。

DISE

次の様にして、バンドのもつれをほどく処理(最適化の第1段階)の自己無撞着ループが確認できます。

% grep "DISE" stdout.std

Ι	Iter		Omega_I (Angs^2)	Delta_I (Angs^2)	> DISE
I	1	Ι	18.371525257652	18.371525257652	> DISE
I	2	Ι	17.955767336391	-0.415757921261	> DISE
I	3	Ι	17.659503060694	-0.296264275698	> DISE
I	4	Ι	17.454033576174	-0.205469484520	> DISE
I	5	Ι	17.311180447271	-0.142853128902	> DISE
I	6	Ι	17.210945408916	-0.100235038355	> DISE
I	7	Ι	17.139778800398	-0.071166608519	> DISE
I	8	Ι	17.088603102826	-0.051175697572	> DISE
I	9	Ι	17.051329329614	-0.037273773211	> DISE
	10	Ι	17.023842837298	-0.027486492316	> DISE

ここで、「Iter」は繰り返し数、「Omega_I」はスプレッド関数のゲージ不変部分、「Delta_I」は隣接する 2 つのステップ間の「Omega_I」の差をそれぞれ意味します。キーワード「Wannie.Dis.Conv.Criterion」 に与えた収束条件が「Delta_I」に適用されます。

CONV

次の様にして、スプレッド関数のゲージ依存部分の最適化(最適化の第2段階)過程が確認できます。 % grep "CONV" stdout.std Opt Step |Mode of Gradient|d_Omega_in_steps| d_Omega | (in Angs^2) ---> CONV I SD 1 | 6.52434844E-01 | 5.41612774E-04 |-5.41340331E-04 | ---> CONV 2 | 6.51123660E-01 | 5.40524307E-04 |-5.40253165E-04 | ---> CONV | SD SD 200 | 4.77499752E-01 | 3.96392019E-04 |-3.96271308E-04 | ---> CONV |Opt Step |Mode of Gradient| d_Omega | (Angs^2) ---> CONV CG 1 | 8.61043764E-01 | -3.24716990E-01 | ---> CONV | CG 58 | 1.67083857E-12 | -5.37225101E-13 | ---> CONV | CG 59 | 5.44431651E-13 | -1.98972260E-13 | ---> CONV CONVERGENCE ACHIEVED ! ---> CONV CONVERGENCE ACHIEVED ! ---> SPRD

ここで、「Opt Step」はSD 法またはCG 法のどちらかにおける最適化ステップであり、「Mode of Gradient」 は、スプレッド関数の勾配の絶対値です。SD 法では、ゲージ依存スプレッド関数における隣接する 2 つの ステップ間の差が2 つの異なる方法で計算されます。その結果が「d_Omega_in_steps」および「d_Omega」 です。「d_Omega_in_steps」は、

$$d\Omega = \epsilon \sum_{\mathbf{k}} ||G^{(\mathbf{k})}||^2,$$

であり、 ϵ はステップ長、 $G^{(k)}$ はスプレッド関数の勾配です。この式の詳細は参考文献 [122] に説明されています。一方、「d_Omega」は

$$d\Omega = \Omega^{(n+1)} - \Omega^{(n)},$$

により与えられます。ここで、*n* は反復(繰り返し)数です。CG 法では、「d_Omega」のみを評価しま す。キーワード「Wannier.Minimizing.Conv.Criterion」で与えられた収束条件が、「Mode of Gradient」 に適用されます。

SPRD

次の様にして、ワニエ関数の広がりの変化を確認できます。

% grep "SPRD" stdout.std

Opt	Step	1	Omega_I		Omega_D		Omega_OD	1	Tot_Omega	I	(in Angs^2)> SPRI)
SD	1	1	16.93053479	1	0.13727387	1	6.57748455	1	23.64529321	Ι	> SPRD	
SD	2	1	16.93053479	1	0.13724827	1	6.57696989	1	23.64475295	Ι	> SPRD	
SD	3	I	16.93053479	1	0.13722279	1	6.57645620	1	23.64421378	Ι	> SPRD	
SD	4	1	16.93053479	I	0.13719743	1	6.57594347	I I	23.64367569	Ι	> SPRD	
SD	199	1	16.93053479	1	0.13399285	1	6.48989479	1	23.55442243	L	> SPRD	
SD	200	I	16.93053479	I	0.13398326	I	6.48950811	1	23.55402616	L	> SPRD	
Opt	Step	I	Omega_I	1	Omega_D	1	Omega_OD	1	Tot_Omega	Ι	(Angs^2)> SPRD	
CG	1	1	16.93053479	1	0.15480701	1	6.14396737	1	23.22930917	Ι	> SPRD	
CG	2	1	16.93053479	1	0.17172507	1	5.87830203	1	22.98056189	Ι	> SPRD	
CG	3	1	16.93053479	1	0.17012089	1	5.78940789	1	22.89006357	Ι	> SPRD	
CG	57	1	16.93053479	1	0.16557875	1	5.73752928	1	22.83364282	L	> SPRD	
CG	58	1	16.93053479	1	0.16557876	1	5.73752928	1	22.83364282	Ι	> SPRD	
CG	59	1	16.93053479	1	0.16557876	1	5.73752928	1	22.83364282	Ι	> SPRD	
****	*****	****	*****	*****	*******	****	*******	*	> SPRD			
CONVE	ERGENC	E AC	HIEVED !			>	SPRD					
****	*****	****	**********	*****	*******	****	*******	*	> SPRD			

ここで、「Opt Step」は SD 法または CG 法のどちらかにおける最適化ステップです。「Omega_I」はス プレッド関数のゲージ不変部分です。「Omega_D」はおよび「Omega_OD」は、それぞれゲージ依存の 対角成分および非対角成分からの寄与です。「Tot_Omega」は、スプレッド関数の上記 3 つの成分の総 和です。

CENT

次の様にしてワニエ関数中心の変化を確認できます。

% gr	ер	"CENT" stdout.std			
WF	1	(1.14164289, 1.14164298, 1.14164266)		2.95573380	>CENT
WF	2	(1.55716251, 1.55716342, 1.14164203)	1	2.95572597	>CENT
WF	3	(1.55716191, 1.14164295, 1.55716190)		2.95572978	>CENT
WF	4	(1.14164389, 1.55716087, 1.55716055)	1	2.95572957	>CENT
WF	5	(0.20775982, 0.20775967, 0.20775893)		2.95572677	>CENT
WF	6	(0.20776045,-0.20775959,-0.20775914)	1	2.95572605	>CENT
WF	7	(-0.20775851, 0.20775981,-0.20775888)		2.95572925	>CENT

WF 8 (-0.20775787,-0.20775767, 0.20775933) | 2.95573335 --->CENT Total Center (5.39761509, 5.39761243, 5.39760738) sum_spread 23.64583455 --->CENT SD 1 -----> CENT WF 1 (1.14164582, 1.14164592, 1.14164559) | 2.95566613 --->CENT 2 (1.55715957, 1.55716049, 1.14164497) | 2.95565831 --->CENT WF 3 (1.55715897, 1.14164588, 1.55715897) | 2.95566211 --->CENT WF 4 (1.14164683, 1.55715794, 1.55715761) | 2.95566190 --->CENT WF 5 (0.20775689, 0.20775673, 0.20775599) | 2.95565910 --->CENT WF 6 (0.20775752,-0.20775666,-0.20775620) | 2.95565838 --->CENT WF WF 7 (-0.20775558, 0.20775687, -0.20775594) | 2.95566158 --->CENT 8 (-0.20775493,-0.20775474, 0.20775639) | 2.95566569 --->CENT WF Total Center (5.39761509, 5.39761243, 5.39760738) sum_spread 23.64529321 --->CENT -----> CENT 2 -----SD 59 -----> CENT CG 1 (1.14585349, 1.14584696, 1.14584386) | 2.85421846 --->CENT WF 2 (1.55295615, 1.55294970, 1.14584792) | 2.85422167 --->CENT WF 3 (1.55296133, 1.14584610, 1.55295139) | 2.85421070 --->CENT WF 4 (1.14584053, 1.55296761, 1.55296391) | 2.85417080 --->CENT WF 5 (0.20356211, 0.20355857, 0.20355600) | 2.85418933 --->CENT WF WF 6 (0.20355119,-0.20355008,-0.20355192) | 2.85422458 --->CENT WF 7 (-0.20355306, 0.20355395, -0.20355905) | 2.85420611 --->CENT WF 8 (-0.20355603,-0.20356000, 0.20355520) | 2.85420117 --->CENT Total Center (5.39761571, 5.39761281, 5.39760730) sum_spread 22.83364282 --->CENT

「SD」または「CG」で始まる行に、最適化法とそのステップ数が示されています。「WF」で始まる行 は、各ワニエ関数の中心の(x, y, z)座標をÅ単位で、またその広がりをÅ²単位で示しています。すべ てのワニエ関数中心と広がりの総和を、「Total Center」で始まる行に示しています。

44.4 MLWF の作成例

様々な物質の MLWF の作成例として、ディレクトリ「work/wf_example」に入力ファイルが用意されています。

• Benzene.dat

ベンゼンの6個の π 分子軌道から p_z 軌道型のワニエ関数を生成します。

• GaAs.dat

GaAsの4つの価電子バンドから最局在ワニエ関数を生成します。

• Si.dat

Siの価電子バンドおよび伝導バンドの両方を含む8つのワニエ関数を生成します。初期値は*sp*3 混成軌道です。

• symGra.dat

グラフェンシートのワニエ関数を生成します。初期値は、炭素原子上の*sp*2 混成軌道と*p*z 軌道です。

 $\bullet\,\, \mathrm{pmCVO.dat}$

非磁性の立方ペロブスカイト $CaVO_3$ に対する t_{2q} 型のワニエ関数を生成します。

• NC_CVO.dat

「pmCVO.dat」の場合にスピン・軌道相互作用を含めた計算例です。

• GaAs_NC.dat

「GaAs.dat」の場合にスピン・軌道相互作用を含めた計算例です。

• VBz.dat

バナジウム・ベンゼン無限鎖に対するワニエ関数を生成します。これは、参考文献 [77] で研究されたものです。

44.5 出力ファイル

MLWFの計算で生成される 4 つのファイルを以下に説明します。拡張子「.mmn」のファイルには重な り行列要素 $M_{mn}^{(\mathbf{k},\mathbf{b})}$ が保存されています。拡張子「.amn」のファイルには初期推定のための射影行列要素 $A_{mn}^{(\mathbf{k})}$ が保存されています。拡張子「.eigen」のファイルには各 k 点における固有エネルギーと固有状態が 保存されています。拡張子「.eigen」のファイルにはサンプリングした k グリッドと共役な Wigner-Seitz スーパーセル内にある、一組の格子ベクトル上での MLWF 間のホッピング積分が保存されています。最 適化計算を再スタートする際には、拡張子「.mmn」のファイルが読み込まれます。4 つのファイルのよ り詳しい情報を以下に説明します。

A. ファイル「.mmn」の形式

10

このファイルの構造は、Wannier90 [145] のファイル構造に厳密に従っています。このファイルの最初の 行は、第2行の数値についての説明です。第2行の数は、左から右に、それぞれ外エネルギー窓に含ま れるバンド数 (N_{win})、k 点の数、b ベクトルの数、スピン成分の数です。次に続く各行は $M_{mn}^{(\mathbf{k},\mathbf{b})}$ の データブロックで、ループ形式で書き出されています。最も外側のループはスピン成分のループ、次は k 点のループ、そして b ベクトルのループです。また最も内側のループは、それぞれバンド・インデッ クスの n および m です。各ブロックにおいて、最初の行は 5 つの数から構成されます。最初の 2 つの 数は、現在の k 点インデックスおよび隣接する k+b のインデックスです。次の 3 つの数は、単位セル k+b 点の座標です。ブロックの 2 行目からは、各行列要素の実部と虚部です。各ブロックにおいては、 $N_{win} \times N_{win}$ 個の複素数があります。例として、入力ファイル「Si.dat」を用いて生成された「.mmn」 ファイルを以下に示します。

1

Mmn_zero(k,b). band_num, kpt_num, bvector num, spinsize

E10

	T	.0		512	õ
1	512	0	0	0	
0	.571090	282808		-0.819911068319	
0	.000031	.357498		-0.000045367307	
-0	.000149	292597		0.000215591228	
-0	.003821	911756		0.005522040495	
0	.028616	452988		0.019804944108	

```
0.003677357735

-0.006610037555

-0.004574771451

-0.000950861169

-0.000000008855

0.000000005272

.....

....
```

B.ファイル「.amn」の形式

このファイルの構造は、Wannier90 [145] のファイル構造に厳密に従っています。ファイルの第1行は ファイル全体の記述です。第2行の4つの数は、それぞれ外エネルギー窓内のバンドの数(N_{win})、k点 の数、生成する MLWF の数、スピン成分の数です。同様に、データブロックはループ形式で書き出さ れています。最も外側のループはスピン成分で、その次がk点、生成する MLWF、バンドの数です。こ のファイルの最初の行に示されているように、各ブロックにおいて、最初の3つの整数は、それぞれバ ンド・インデックス、MLWF インデックス、およびk点インデックスです。その後に、行列要素の実部 と虚部 (Hartree) が出力されています。例として、入力ファイル「Si.dat」を用いて生成された「.amn」 ファイルを以下に示します。

Amn. Fist line BANDNUM, KPTNUM, WANNUM, spinsize. Next is m n k...

	10	C	512	8	1
1	1	1	0.053943539299	0.0001617	03961
2	1	1	-0.000525446164	-0.000000	08885
3	1	1	0.002498021589	0.000000	84311
10	1	1	-0.00000023582	-0.000000	00069
1	2	1	0.053943534952	0.0001617	03965
2	2	1	0.033382665372	0.000004	93665
3	2	1	-0.051189536188	-0.0000014	80360

C. ファイル「.eigen」の形式

このファイルは、各k点での固有エネルギーと固有状態を保存しています。最初の行は、系のフェルミ準 位です。二行目にはバンドの数が示されています。次のデータは、主に二つの部分から成ります。最初の 部分は固有エネルギーで、次の部分は固有状態に対応しています。各部分において、最も外側のループは スピン成分です。次のループはk点で、その後にバンド・インデックス(指数、添字)が続きます。固有 状態については、基底系に関して一つ以上の内部ループがあります。例として、入力ファイル「Si.dat」 により生成されたファイルを以下に示します。

Fermi level -0.112747 Number of bands 10

- 1 1 -0.566228100179
- 2 1 -0.122518136808
- 3 1 -0.122518129040

4 1 -0.122518115949

5 1 -0.026598417854

.

```
WF kpt 1 (0.0000000,0.00000000,0.0000000)
```

- 1 1 0.4790338281 -0.0014359768
- 1 2 0.0440709749 -0.0001321095
- 1 3 -0.000003333 -0.000000000

• • • • • • • •

• • • • •

D. ファイル「.HWR」の形式

このファイルには、中心 (R = 0) の単位セル内の m 番目の MLWF である $|m, 0\rangle$ と、R の単位セル内 の n 番目の MLWF である $|n, \mathbf{R}\rangle$ の間のホッピング積分が保存されています。次のルールに従い、行列 要素 $\langle m, \mathbf{0} | \hat{H} | n, \mathbf{R} \rangle$ は、書き出されます。最初の行は説明のみです。2 行目と3 行目には、MLWF の数 と Wigner-Seitz のスーパーセル内の格子ベクトルの数がそれぞれ書かれています。5、6、7 行目には単 位セルベクトルが書かれています。8 行目には、コリニア計算かノンコリニア計算、またスピン分極の 取扱いに関して説明されています。9 行目はフェルミ準位 (Hartree) です。10 行目からデータブロック が始まり、ループ形式で書き出されています。最も外側のループはスピン成分です。次のループは R に ついて、最後の2 つは m と n のループです。各 R は各ブロックの第1 行目に縮退数とともに記載され ています。各行においては、m と n のインデックスが表示され、その後にホッピング積分の実部と虚部 (Hartree) が続きます。例として、入力ファイル「Si.dat」により生成されたファイルを以下に示します。

Real-space Hamiltonian in Wannier Gauge on Wigner-Seitz supercell.

```
Number of Wannier Function 8
```

```
Number of Wigner-Seitz supercell 617
```

Lattice vector (in Bohr)

0.00000	5.10000
5.10000	5.10000
5.10000	0.00000
	0.00000 5.10000 5.10000

collinear calculation spinsize 1

```
Fermi level -0.112747
```

R	(-6	2	2)	4		
	1	1		-0.000	0789031	62	-0.00000003750
	1	2		0.000	0242377	63	-0.00000000148
	1	3		0.000	0242376	91	-0.00000000341
	1	4		0.000	0242383	75	0.00000004117
	1	5		0.000	0726569	18	-0.00000000196
	1	6		-0.000	0224705	44	-0.0000000859
	1	7		-0.000	0224815	57	0.00000000750
	1	8		-0.000	0224927	06	0.00000000148
	2	1		0.000	0242380	91	0.00000000049
	2	2		-0.000	0789018	74	-0.00000000011
	2	3		0.000	0242349	12	-0.00000000023

44.6 MLWF の自動実行テスト

MLWF 計算に関連する機能が適切にインストールされていることを確認するために、MLWF 計算の自動実行テストが次のように実行できます。

MPI 並列計算の場合

% mpirun -np 16 openmx -runtestWF

MPI/OpenMP 並列計算の場合

% mpirun -np 8 openmx -runtestWF -nt 2

このテスト計算において、OpenMX は 8 個のテストケースを実行し、計算結果を「work/wf_example」 に保存されている参照結果と比較します。比較結果 (スプレッド関数と Ω 関数それぞれにおける絶対差 異)が、「work」ディレクトリ中のファイル「runtestWF.result」に保存されます。参照結果は、Xeon のクラスターマシンを用いて計算されたデータです。絶対差異が小数点以下 7 桁以内であれば、インス トールが正常であると判断されます。

45 Wannier90 とのインターフェース

OpenMX の計算結果を Wannier90 [145] を用いてさらに解析することが出来ます。Wannier90 [145] を 用いて最局在ワニエ関数が計算できます。その他にワニエ関数に射影した DOS やバンド構造、フェルミ 面、ベリー位相に関連する物性(異常ホール伝導度や光伝導率)などの物性が計算可能です。OpenMX の計算結果を Wannier90 に読み込ませるためには、OpenMX の入力ファイル中に以下の2つのキーワー ドを設定します。

Wannier.Func.Calc	on	#	on off,	default=off
Wannier90.fileout	on	#	on off,	default=off

このように設定した入力ファイルを用いて OpenMX を実行すると計算終了時に以下のメッセージが表示されます。

The input files for Wannier90,

System.Name.amn System.Name.mmn System.Name.eig System.Name.win

are successfully generated.

計算終了後に、上記 4 つのファイルが生成されます。3 つのファイルは wannier90 の実行形式ファイル 「wannier90.x」にて読み込まれるものであり、最後の「*System.Name.*win」は「wannier90.x」の計算を 制御する入力ファイルです。図 48 に計算の模式図を示しました。 重なり行列「*System.Name.*mmn」、

Interface with Wannier90



Figure 48: OpenMX と Wannier90 を用いた模式的な計算フロー

射影行列「System.Name.amn」と固有値「System.Name.eig」を用いて、「wannier90.x」では最局在ワニエ関数を計算します。最局在ワニエ関数が得られると、さまざまな物理量の計算が可能となります。 「System.Name.win」には、デフォルトでは光伝導度を計算するが設定されています。

berry_task kubo

キーワード「berry_task」を適切に変更することで、その他の物理量の計算が可能です。いくつかのオ プション例を以下に示します。

berry_task	kubo	#	optical conductivity
berry_task	ahc	#	anomalous Hall conductivity

Wannier90の詳しい解説は、Wannier90 [145] のウェブサイトをご参照下さい。

図 49 及び図 50 には、例として、ダイヤモンド構造をもつシリコンのゼーベック係数と、SrVO₃の光 伝導度を示しました。入力ファイル「Si-Wannier90.dat」及び「SrVO3-Wannier90.dat」は「work」ディ レクトリに収められています。



Figure 49: OpenMX と Wannier90 を用いて得られた 8 個のワニエ軌道によるダイヤモンド構造のシリ コンの (a) バンド構造と (b) T=300K におけるゼーベック係数 (入力ファイル:「work」ディレクトリ 内の「Si-Wannier90.dat」)。



Figure 50: OpenMX と Wannier90 により得られた SrVO₃の(a) バンド構造及び(b) 光伝導度。得られた光伝導度は過去の実験データ [147] と良く一致している。用いた入力ファイルは「work」ディレクトリ内の「SrVO3-Wannier90.dat」である。

46 対角化のための数値的に厳密な低次スケーリング法

大規模計算のために数値的に厳密な低次スケーリング法がサポートされています [124]。この方法の計算 量は、Nを基底関数の数とすると、1、2、3次元の系に対してそれぞれ $O(N(\log N)^2)$ 、 $O(N^2)$ 、 $O(N^{7/3})$ として増加します。O(N) 法と異なり、本方法は低次のスケーリングにも関らず通常の $O(N^3)$ 対角化法 と同じく数値的に厳密な方法であり、一つの理論的な枠組で絶縁体から金属にも適用可能です。計算の データ構造が適切に区分けされているため、図 51 に示すように大規模な並列処理に適しています。しか し計算量の前因子が大きくなるため、並列計算において多数の CPU コアを使用した場合にのみに、こ の方法が有利になります。多数の CPU コアを使って低次元の大規模系を計算する場合、この方法は適 切な選択となるでしょう。この方法を選択するには、キーワード「scf.EigenvalueSolver」を以下の様に 指定します。

scf.EigenvalueSolver cluster2

本手法は、クラスター計算あるいはブリルアンゾーンでのサンプリングに対してΓ点だけが考慮された 周期系のコリニア DFT 計算に対してのみサポートされています。全エネルギー計算ばかりでなく、力 の計算も実装されていますので、幾何学構造の最適化を行うことができます。しかし状態密度計算や波 動関数の計算は実装されていません。周回積分の極の数 [74] は次のキーワードで設定します。

Table 10: 数値的に厳密な低次スケーリング法と通常の対角法の計算時間(秒)。どちらの場合も、8 MPI プロセスを用いて C₆₀ 分子の全エネルギーを計算。入力ファイルは「work」ディレクトリの「C60_LO.dat」。

Method	Total energy (Hartree)	Computational time (sec.)
Low-order	-343.896238929370	69.759
Conventional	-343.896238929326	2.784

収束に必要な極の数は系の大きさに依らずに、系のスペクトル半径に依存しています [124]。電子温度が 300K 以上の場合には、100 の極を用いれば全エネルギーと力は十分に収束します。例として、「work」 ディレクトリ中の入力ファイル「C60_LO.dat」を用いた計算を示します。

90

% mpirun -np 8 openmx C60_L0.dat

表 10 に示すように、本法で計算された全エネルギーは、倍精度の範囲内で通常の対角化法とほぼ一致 していますが、一方、計算時間に関しては、従来法と比較し、非常に長い時間を要しています。計算時 間に関し、本法と通常の対角化法の交点は、系の次元にも依りますが並列処理に 100 個以上のコアを使 う場合、原子数で 300 程度であると推測されます。



Figure 51: DNA の対角化 (SCF 計算)の OpenMP/MPI ハイブリッド並列計算の速度向上比。対角化には数値 的に厳密な低次スケーリング法を使用。速度向上比は $2T_2/T_p$ として定義。 T_2 は 2 MPI プロセスによる所要時間、 T_p は並列計算の所要時間。これらの並列計算は AMD の Opteron クアッドコア・プロセッサ (2.3 GHz) からなる CRAY-XT5 マシン上で実施。電子温度を 700K とし、周回積分のための極の数は 80。比較のために、Householder 法と QR 法による通常の対角化法の並列計算の速度向上比も示す (シングルスレッドの場合)。また低次スケーリ ング法および通常法に対して、矢印で示した点での所要時間も示す。

47 有効遮蔽媒質法(ESM 法)

47.1 概要

有効遮蔽媒質法 (ESM 法) は、電荷を有するスラブモデルあるいは電場印加条件下にあるスラブモデル についての第一原理計算手法です [125, 126, 127, 128]。本手法では、スラブの表面並行方向には 2 次元 の周期境界条件を保ちつつ、垂直方向には 1 次元の境界条件を与え (図 52(a))、その 1 次元境界条件の 下での Poisson 方程式をグリーン関数法によって解きます。実際には次のような半無限媒質を境界条件 として導入することによって、孤立スラブ系、荷電スラブ系、および一様電場下にあるスラブ系を扱い ます。

- (a) 孤立スラブ系:真空(比誘電率 *ε* = 1)+真空
- (b) 荷電スラブ系:真空+理想金属(比誘電率 $\varepsilon = \infty$)
- (c) 一様電場下スラブ:理想金属+理想金属

ここで、「スラブ」とは、通常の表面モデルとして使われるスラブばかりでなく、二次元的に配置された 分子群から構成される系も含まれます。孤立スラブモデルは分極した系の解析に、また荷電スラブモデ ルは電極表面のシミュレーションに適用できます。二枚の理想金属媒質の間に挟まれたままで電場が印 加されたスラブモデルは、金属コンデンサ内にある物質のモデル化に該当します。OpenMX において、 ESM 法の計算で使用する単位セルは次のように構築します(図 52 (a)参照)。



Figure 52: (a) 半無限媒質 (ESM) を伴うスラブの概略図。 $ESM(I) \ge ESM(II)$ はそれぞれ、 $x = 0 \ge x = a$ ($a \ t x$ 軸方向のセルの長さ)におけるセル境界。(b) ESM 法を用いた固液界面モデル系の MD 計算の単位セルの例。 スラブと ESM は y-z 面に平行に配置。

- 1. セルの a 軸は b-c 平面に対して垂直で x 軸に対して平行
- 2.2 つの周期境界条件は y および z 軸方向に設定
- 3. ESM はセル境界 (*x* = 0, *a*) に配置
- 4. *x* 軸の原点はセル境界に設定
- 5. x 軸の分率座標は、0 と1 の間で指定

ESM 法に基づく計算は次のキーワードによって実行します。

ESM.switch on3 # off, on1=v|v|v, on2=m|v|m, on3=v|v|m, on4=on2+EF ESM.buffer.range 4.5 # default=10.0 (ang),

ここで、on1、on2、on3、on4はESMの組み合わせ、すなわちそれぞれ「真空+真空」、「理想金属+理想金属」、「真空+理想金属」、「理想金属+電場中の理想金属」を表しています。キーワード「ESM.buffer.range」はモデル内原子に対する排他的領域の幅(Å単位)を指定しており、これは波動関数とESMの重なりを回避するために指定します。

1. ESM.switch = on1:

ESM(I) および ESM(II) は半無限真空です。この条件は、計算する系の全電荷が中性である場合の みに適用されます。従って、キーワード「scf.system.charge」は必ずゼロに設定します。

2. ESM.switch = on2:

ESM(I) および ESM(II) は半無限の理想金属です。電荷を持つ系を取り扱うことができます。キー ワード「scf.system.charge」は有限な値に設定します。

3. ESM.switch = on 3:

ESM(I) および ESM(II) は、それぞれ、半有限の真空および理想金属です。電荷を持った系を取り 扱うことができます。キーワード「scf.system.charge」は有限な値に設定します。

4. ESM.switch = on4:

ここでは on2 と同じ ESM の組み合わせが適用されており、系に電場が印加されます。次のキー ワードを使うことで計算する系に一様電場を印加することができます。

ESM.potential.diff 1.0 # default=0.0 (eV),

ここで、下部の理想金属を基準に2枚の半無限理想金属媒質間の電位差(eV単位)を指定できます。電場はセル長aと電位差によって決まります。

5. ESM 法を使った MD 計算

ESM 法を適用しながら固液界面系の MD 計算を行うことができます。表面モデルスラブと液体領 域は図 52 (b)のように配置します。与えられた領域内に分子を制限するため、次のキーワードを 使って障壁ポテンシャルを導入します(図 52 (b)参照)。

ESM.wall.position	6.0	<pre># default=10.0 (ang)</pre>
ESM.wall.height	100.0	# default=100.0 (eV),

ここで、「ESM.wall.position」はセル上端と障壁ポテンシャルの原点の間の距離 $a - x_b$ 、また「ESM.wall.height」は $x = x_b + 1.0$ (Å) でのポテンシャルの高さ(ポテンシャルエネルギーの 値)です。尚、MD を実行する間に表面モデルスラブの移動を防ぐために、そのスラブの最下層原 子の座標を固定することをお勧めします。

6. ESM 法で扱われる軸の選択

図 52(a) に示したように、マニュアルでは ESM 法による扱いは x 軸に適応されます。しかしなが ら、ESM 法で扱われれる軸の選択はキーワード「ESM.direction」で以下のように変更できます。

ESM.direction x # x|y|z, default=x

既定の方向は図 52(a) のとおり x 軸です。

47.2 テスト計算例

デモ計算として、図 53 (a) に「真空+理想金属」(ESM.switch=on3)の境界条件の下で、 1×1 の アルミニウム終端 Si(111) スラブ中の余剰電荷 ρ_{ex} 分布を示します(このテスト計算の入力ファイル 「Al_Si111_ESM.dat」は work ディレクトリにあります)。ドープ電荷とそれに対応して発生する鏡像電 荷との間の引力的相互作用により、スラブ内にあるドープ電荷が理想金属側の表面に偏析している様子 がわかります。図 53 (b) は、図 53 (a) に示した各条件での Hartree ポテンシャル変化 $\Delta V_{\rm H}$ を示してい ます。ここで、Al-Si(111) スラブ内部のポテンシャルと、スラブと理想金属間の電場はドープした電荷 の量に従って変化します。



Figure 53: 真空+理想金属の条件における Si(111) スラブモデル。(a) Si(111) スラブ中の過剰電荷 ρ_{ex} の分布。(b) Si(111) スラブのバイアスによる Hartree ポテンシャルの変化 ΔV_{Ho} ドープした電荷の量は-0.01、-0.005、+0.005、+0.01 e。各プロットは同じ ESM による中性のスラブを基準とした電荷または Hartree ポテンシャルの差の変化。

48 仕事関数の計算

*System.Name.*v0.cube または *System.Name.*v1.cube のどちらかを用いて、金属の仕事関数を計算でき ます。仕事関数は次式で定義されます。

$$\Phi = (\phi_{\infty} + E[N-1]) - E[N],$$

$$= \phi_{\infty} - \mu,$$
 (11)

ここで E[N] と E[N-1] はそれぞれ N 電子系と (N-1) 電子系の全エネルギーです。 ϕ_{∞} と μ はそれ ぞれ表面からの無限遠でのポテンシャルと化学ポテンシャルです。式 (11) の第二行は Janak の定理 [89] から $E[N-1] - E[N] = \int dn \partial E / \partial n = -\mu$ として得られます。ここで、n はフェルミ面での一粒子固有 状態の占有数です。 dn = -ds/S はフェルミ面の面積 S と無限小面積 ds で定義され、表面積分はフェル ミ面上で実施されます。仕事関数は表面に関連した量であるため、図 54(a) に示したスラブモデルを導入 する必要があります。例として、アルミニウムスラブを考えます。ここで層の厚さは 5 であり、約 60 Å の真空が x 軸に沿って章 47 での有効遮蔽媒質 (ESM) 法と共に考慮されます。ここで周期的スラブ間の 相互作用を回避するため「ESM.switch=on1」が使われます。入力ファイル「All111_WorkFunc_0E.dat」を用いて以下のとおり SCF 計算が実行できます。

% mpirun -np 28 ./openmx Al111_WorkFunc_OE.dat

計算が正常に完了すると、cubeファイル「Al111_WorkFunc_0E.v0.cube」が得られます。cubeファイ ルを解析するため、ディレクトリ「source」中の後処理コード「gcube2oned.c」が利用できます。この コードは以下のようにコンパイルできます。

% gcc gcube2oned.c -lm -o gcube2oned

実行コード「gcube2oned」を作業ディレクトリにコピーして下さい。「gcube2oned」を用いて三次元の cube データを選択した方向の一次元のデータに変換できます。以下のとおり、1 は a 軸に相当し、残り の二次元の bc 面上での積分が実行されます。

% gcube2oned Al111_WorkFunc_OE.vO.cube 1 > 1d_pot.txt



Figure 54: (a) Al 原子で構成されたスラブモデル。層の厚さは 5、また 60 Å の真空が挿入されている。 (b) Al 原子で構成されたスラブモデル。層の厚さは 5、また 60 Å の真空が挿入され、さらに Al 層に加 えて、真空領域の波動関数の裾が正確に記述できるように空原子から構成される 6 層が両表面に導入さ れている。



Figure 55: **bc** 面上で平均された a 軸に沿った一次元ポテンシャル (Hartree)。v0.cube ファイルからの 取得。空原子を構成する層の数は両表面に対して 0 から 7 まで系統的に変化。計算に用いられた入力ファ イルは Al111_WorkFunc_%E.dat、% は 0 から 7 まで。これらはすべてディレクトリ work で利用可能。

得られたファイル 1d_pot.txt の第一、第二、第三列は格子点のシリアル番号、a 軸に沿った位置、そして bc 面上で平均された一次元ポテンシャル (Hartree) に対応します。b 軸または c 軸に沿った一次元ポテン シャルの場合は gcube2oned の引数に 2 または 3 を与えます。図 55 は Al(111) 面の表面に垂直な a 軸に 沿った一次元ポテンシャルを示します。空原子を構成する層の数は両表面に対して 0 から 7 まで系統的に 変化させました。図 54 に示したように真空領域に向かっての波動関数の裾が正確に記述できるように空 原子から構成された層が考慮されます。計算に用いられた入力ファイルは「Al111_WorkFunc_%E.dat」であり、ここで % は 0 から 7 まで変化し、その値は空原子から構成された層数に対応します。これら はすべてディレクトリ「work」中で利用可能です。式 (11) のポテンシャル ϕ_{∞} は 70 Å 周辺でのポテン シャルから得られます。他方、化学ポテンシャル μ は出力ファイルから得られます。70 Å 周辺でのポテン シャルなら得られます。この場合は仕事関数は基本的に化学ポテンシャルから決定されます。図 56 は式 (11) を用いて計算された仕事関数を空原子から構成される空層数の関数としてプロットした ものです。Al(111) 表面の仕事関数が二つの空層で収束に至ることが分かります。これは収束結果を得 るには二つの空層を加えることで十分であることを示唆します。

表11には五つの金属の仕事関数の計算結果と対応する実験値を示します。すべての計算で7つの層を導入しました。計算値と実験値の良い一致が見られます。計算に用いた入力ファイルは「Al111_WorkFunc_7E.dat」、「Cu111_WorkFunc_7E.dat」、「Ag111_WorkFunc_7E.dat」、「Au111_WorkFunc_7E.dat」、



Figure 56: 空層数の関数としての Al(111) 表面の仕事関数 (eV)。数値は式 (11) に基づいて取得。計算 は図 55 に掲載。

「Pd111_WorkFunc_7E.dat」で、これらは全てディレクトリ「work」中に保存されています。

ギャップのある系では式 (11) は厳密には有効ではありません。しかしながら、式 (11) は近似的な扱いとして使用できます。特に分極のある表面でのギャップのある系では、周期的スラブ間の相互作用を回避するため 47 章で説明された ESM 法を用いる必要があります。

Table 11: 五つの金属の仕事関数の計算結果と対応する実験値。報告された実験値は文献ごとにややば らつきがあることに注意。表にはその一つを掲載。

	OpenMX	Expt.
Al(111)	4.19	$4.26{\pm}0.03$ [129]
Cu(111)	4.74	$4.94{\pm}0.03$ [130]
Ag(111)	4.51	$4.46{\pm}0.02$ [131]
Au(111)	5.33	$5.26 {\pm} 0.04$ [132]
Pd(111)	5.40	$5.55{\pm}0.01$ [133]

49 NEB (Nudged elastic band)法

49.1 概要

幾何学的位相空間内の二つの安定構造をつなぐ最小エネルギー経路 (MEP) を調べるために、OpenMX Ver. 3.9 では参考文献 [134] に基づく NEB 法がサポートされています。実装の詳細を以下にまとめます。

- 参考文献 [134] の (8)-(11) 式に基づく正接の計算
- 参考文献 [134] の (4) 式に基づく垂直力の計算
- 参考文献 [134] の (12) 式に基づく平行力の計算
- DIIS 法+BFGS 法によるハイブリッド最適化法

NEBの機能は構造最適化とほぼ同様な手続で利用可能です。そのため、比較的容易に本機能を使いこな すことができるでしょう。その特徴を以下に列挙します。

- 構造最適化とほぼ同様な手続で使用可能
- ハイブリッド MPI/OpenMP 並列化
- 直線初期経路またはユーザー定義による初期経路
- 3つのルーチンのみを付加

49.2 実行方法

NBE の計算は次の三つのステップで実行されます。

- 1. 反応物の構造最適化
- 2. 生成物の構造最適化
- 3. 反応物と生成物をつなぐエネルギー経路の最適化

数値誤差が相殺するように、3つの計算において同一の計算パラメータを使用して下さい。ここで計算パ ラメータとは単位格子セル、カットオフエネルギー、基底関数、擬ポテンシャル、電子温度等のことで す。ステップ1およびステップ2の計算の後、「*.dat#」ファイルが作成されます。ファイル「*.dat#」 中に記載されている原子座標を利用して、容易にステップ3に必要な入力ファイルを作成できます。ス テップ3に対する入力ファイルが作成できれば、NEBの計算は、次のように通常のOpenMX計算の場 合と同様に実行できます。

% mpirun -np 32 openmx input.dat -nt 4

49.3 計算例と関連キーワード

計算例として二つの入力ファイルが用意されています。

 \bullet C2H4_NEB.dat

2個のエチレン分子の環状付加反応によるシクロブタンの生成

• Si8_NEB.dat

ダイヤモンド構造の Si 中での格子間水素原子の拡散

以下では入力ファイル「C2H4_NEB.dat」を用いた NEB 計算を例に説明します。

反応物と生成物の構造を設定

反応物の原子座標を次のように入力ファイル中で指定します。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

1	С	-0.66829065594143	0.0000000101783	-2.19961193219289	2.0	2.0
2	С	0.66817412917689	-0.0000000316062	-2.19961215251205	2.0	2.0
3	Η	1.24159214112072	-0.92942544650857	-2.19953308980064	0.5	0.5
4	Н	1.24159212192367	0.92942544733979	-2.19953308820323	0.5	0.5
5	Н	-1.24165800644131	-0.92944748269232	-2.19953309891389	0.5	0.5
6	Η	-1.24165801380425	0.92944749402510	-2.19953309747076	0.5	0.5
7	С	-0.66829065113509	0.0000000341499	2.19961191775648	2.0	2.0
8	С	0.66817411530651	-0.0000000006073	2.19961215383949	2.0	2.0
9	Η	1.24159211310925	-0.92942539308841	2.19953308889301	0.5	0.5
10	Η	1.24159212332935	0.92942539212392	2.19953308816332	0.5	0.5
11	Η	-1.24165799549343	-0.92944744948986	2.19953310195071	0.5	0.5
12	Н	-1.24165801426648	0.92944744880542	2.19953310162389	0.5	0.5
	~ .					

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

生成物の原子座標を次のように入力ファイル中で指定します。

<NEB.Atoms.SpeciesAndCoordinates

1	С	-0.77755846408657	-0.0000003553856	-0.77730141035137	2.0	2.0
2	С	0.77681707294741	-0.0000002413166	-0.77729608216595	2.0	2.0
3	Η	1.23451821718817	-0.88763832172374	-1.23464057728123	0.5	0.5
4	Η	1.23451823170776	0.88763828275851	-1.23464059022330	0.5	0.5
5	Η	-1.23506432458023	-0.88767426830774	-1.23470899088096	0.5	0.5
6	Η	-1.23506425800395	0.88767424658723	-1.23470896874564	0.5	0.5
7	С	-0.77755854665393	0.0000000908006	0.77730136931056	2.0	2.0
8	С	0.77681705017323	-0.0000000970885	0.77729611199476	2.0	2.0
9	Η	1.23451826851556	-0.88763828740000	1.23464060936812	0.5	0.5
10	Η	1.23451821324627	0.88763830875131	1.23464061208483	0.5	0.5
11	Η	-1.23506431230451	-0.88767430754577	1.23470894717613	0.5	0.5
12	Η	-1.23506433587007	0.88767428525317	1.23470902573029	0.5	0.5
		aa				

NEB.Atoms.SpeciesAndCoordinates>

NEB 計算のためのキーワード

NEB 計算は次のようにキーワード「MD.Type」を設定することによって実行します。

MD.Type NEB

経路中のイメージ数を以下のキーワードで指定します。

MD.NEB.Number.Images 8 # default=10

ここで、2つの終端構造(反応物と生成物)はイメージの数から除きます。 バネ定数は次のように与えます。

MD.NEB.Spring.Const 0.1 # default=0.1(hartee/borh²)

ほとんどの場合、得られる経路はこの値に大きく依存しません。 MEPの最適化はハイブリッド最適化法 (DIIS+BFGS) によって行います。この最適化法は次のキーワー ドによって制御されます。

MD.Opt.DIIS.History	4	# default=7
MD.Opt.StartDIIS	10	# default=5
MD.maxIter	100	# default=1
MD.Opt.criterion	1.0e-4	<pre># default=1.0e-4 (Hartree/Bohr)</pre>

これらのキーワードの仕様は、構造最適化に対するものと同様なので、詳細についてはマニュアルの「構造最適化」の章をご覧下さい。またキーワード「MD.Fixed.XYZ」で原子の位置を固定することも可能です。

NEB 計算の実行

以下の様に、入力ファイル「C2H4_NEB.dat」を用いて NEB 計算を実行できます。

% mpirun np 16 openmx C2H4_NEB.dat

計算が正常に完了すると、24個以上のファイルが作成されます。これらの出力ファイルを以下に列挙します。

c2h4.neb.opt	history of optimization for finding MEP
c2h4.neb.ene	total energy of each image
c2h4.neb.xyz	atomic coordinates of each image in $\ensuremath{\text{XYZ}}$ format
C2H4_NEB.dat#	input file for restarting.
C2H4_NBE.dat_0	input file for the precursor
C2H4_NBE.dat_1	input file for the image 1
C2H4_NBE.dat_2	input file for the image 2
C2H4_NBE.dat_3	input file for the image 3

C2H4_NBE.dat_4	input file for the image 4
C2H4_NBE.dat_5	input file for the image 5
C2H4_NBE.dat_6	input file for the image 6
C2H4_NBE.dat_7	input file for the image 7
C2H4_NBE.dat_8	input file for the image 8
C2H4_NBE.dat_9	input file for the product
c2h4_0.out	output file for the precursor
c2h4_1.out	output file for the image 1
c2h4_2.out	output file for the image 2
c2h4_3.out	output file for the image 3
c2h4_4.out	output file for the image 4
c2h4_5.out	output file for the image 5
c2h4_6.out	output file for the image 6
c2h4_7.out	output file for the image 7
c2h4_8.out	output file for the image 8
c2h4_9.out	output file for the product

「c2h4.neb.opt」には、図 57 (a) に示すように、MEP の最適化過程の履歴が保存されています。以下の 「c2h4.neb.opt」に示されるように、このファイルの最初の部分に説明が記載されています。

		I	NOIM C	Jum of robut thereby of	Turages
(Har	tree/Bohr)	(Ang) (H	artree/Bohr)	(Hartree)	
		-			
' 94520 0.	12552539 0	.04583072	0.49503563	-223.77727271	
0.	08684953 0	0.03163814	0.35379139	-223.85742175	
'94520 0.	05494411 0	0.01922344	0.25668987	-223.89831309	
0.	03790970 0	0.01234783	0.20282699	-223.92042217	
353424 0.	02936250 0	.01326992	0.17349184	-223.93482686	
353424 0.	02588308 0	0.01169327	0.15249816	-223.94772371	
353424 0.	02303223 0	.01039732	0.13836350	-223.95785384	
333	(Har 94520 0. 94520 0. 94520 0. 94520 0. 53424 0. 53424 0.	(Hartree/Bohr) 94520 0.12552539 0 94520 0.08684953 0 94520 0.05494411 0 94520 0.03790970 0 53424 0.02936250 0 53424 0.02588308 0 53424 0.02303223 0	(Hartree/Bohr) (Ang) (Hartree/Bohr) 94520 0.12552539 0.04583072 0 94520 0.08684953 0.03163814 0 94520 0.05494411 0.01922344 0 94520 0.03790970 0.01234783 0 94520 0.02936250 0.01326992 0 953424 0.02588308 0.01169327 0 953424 0.02303223 0.01039732 0	(Hartree/Bohr)(Ang)(Hartree/Bohr)945200.125525390.045830720.49503563945200.086849530.031638140.35379139945200.054944110.019223440.25668987945200.037909700.012347830.2028269993524240.029362500.013269920.17349184934240.025883080.011693270.15249816934240.023032230.010397320.13836350	(Hartree/Bohr)(Ang)(Hartree/Bohr)(Hartree)945200.125525390.045830720.49503563-223.77727271945200.086849530.031638140.35379139-223.85742175945200.054944110.019223440.25668987-223.89831309945200.037909700.012347830.20282699-223.920422179534240.029362500.013269920.17349184-223.934826869534240.025883080.011693270.15249816-223.947723719534240.023032230.010397320.13836350-223.95785384

また「c2h4.neb.ene」と「c2h4.neb.xyz」は、図 57 (b) に示すように反応物からの距離(Bohr)の関数 としての全エネルギーの変化および構造の変化が保存されていますので、MEPの分析に利用できます。 「c2h4.neb.ene」の内容は次のようなものです。

#

1st column: index of images, where 0 and MD.NEB.Number.Images+1 are the terminals



Figure 57: (a) 二個のエチレン分子の環状付加反応 (シクロブタンの生成)の NEB 計算の最適化履歴 (c2h4.neb.opt)、 (b) 反応物からの距離 (Bohr)の関数としての 2 つのエチレン分子の全エネルギーの変化 (c2h4.neb.ene) と、それ に対応する最小エネルギー経路上のイメージの幾何構造 (c2h4.neb.xyz)。本 NEB 計算の入力ファイルは「work」 ディレクトリ内の「C2H4_NEB.dat」。

#	2nd	column:	Total ene	ergy (Ha	artree) of	each ima	age		
#	3rd	column:	distance	(Bohr)	between r	neighbors			
#	4th	column:	distance	(Bohr)	from the	image of	the index	0	
#									
	0	-28	.02185123	(0.0000000) 0	.00000000		1.33646479
	1	-28	.02178507	(0.82118927	7 0	.82118927		1.33567761
	2	-28	.02140083	(0.82112464	1 1	.64231391		1.33523542
	3	-28	.02029258	(0.82111520) 2	.46342911		1.33463918
	4	-28	.01779519	(0.82113225	5 3	.28456136		1.33375873
	5	-28	.01261498	(0.82135735	5 4	.10591871		1.33262670
	6	-27	.98761576	(0.82169347	7 4	.92761218		1.34184319
	7	-27	.91797754	(0.82218705	5 5	.74979923		1.51281867
	8	-28	.02565242	(0.82256542	2 6	.57236464		1.55582513
	9	-28	.06263668	(0.82263897	7 7	.39500361		1.55437554

ここで第1列はイメージの通し番号で、0と9はそれぞれ反応物と生成物に相当します。第2列はそれ ぞれのイメージの全エネルギーです。第3および第4列は、幾何学的位相空間内の2つの隣接イメージ の間の距離(Bohr)と反応物からの距離(Bohr)です。それぞれのイメージの計算は、基本的に異なる 入力ファイルによる独立した OpenMX の計算として実行されるため、「System.Name.dat_#」ファイル



Figure 58: (a) ダイヤモンド Si 中の格子間水素原子の拡散に対する NEB 計算の最適化履歴 (si8_neb.neb.opt)、 (b) 反応物からの距離(Bohr)の関数としての全エネルギーの変化 (si8_neb.neb.ene) と、それに対応する最小エ ネルギー経路上のイメージの幾何構造 (si8_neb.neb.xyz)。本 NEB 計算の入力ファイルは「work」ディレクトリ内 の「Si8_NEB.dat」。

が自動生成されています。ここで「*System.Name*」は「System.Name」、「#」はそれぞれのイメージの 通し番号です。対応する出力ファイル「*System.Name_*#.out」も出力されますが、これは MEP 上で電 子構造がどのように変化するのか、分析するために役立つでしょう。

「C2H4_NEB.dat」と同様に、「Si8_NEB.dat」でも NEB 計算を実行できます。計算が正常に終了す れば、図 58 に示す最適化の履歴と MEP に沿った全エネルギー変化が得られるでしょう。

49.4 NEB 計算の再スタート

最適化ステップ数が最大値に達しても計算が収束しないことがしばしば発生します。この場合には、前のジョブの最後の最適化ステップから、新しいジョブとして最適化を続けて下さい。ファイル「*System.Name.*dat#」が最適化ステップ毎に生成されています。このファイルには、最終ステップでの全てのイメージの原子座標が設定されています。この入力ファイル「*System.Name.*dat#」を使って最適化計算を再スタートできます。

49.5 ユーザー定義の初期経路

デフォルトで、反応物と生成物をつなぐ初期経路は、それらを結ぶ直線です。しかし、系によっては直線上に生成されたイメージの幾何学構造は原子間距離が近接してしまい、物理的には許容できないもの になります。この場合、初期イメージの原子座標を明示的に与える必要があります。ユーザー自身で初 期イメージの原子座標を明示的に与える方法は、実は再スタートの場合と同様です。どちらの場合でも 次のキーワードによって、それぞれのイメージの原子座標を明示的に与えます。

```
<NEB1.Atoms.SpeciesAndCoordinates
  1 Si
           -0.12960866043083
                                0.13490502997627
                                                  -0.12924862991035
                                                                        2.0
                                                                               2.0
  2 Si -0.40252421446808
                               5.19664433048606
                                                   4.91248322056082
                                                                       2.0
                                                                               2.0
   . . .
NEB1.Atoms.SpeciesAndCoordinates>
<NEB2.Atoms.SpeciesAndCoordinates
                                                                               2.0
  1 Si
          -0.08436294149342
                                                  -0.08374099211565
                                                                       2.0
                              -0.02173837971883
  2 Si -0.33677725120015 5.10216241168093
                                                   5.01087499461541
                                                                       2.0
                                                                               2.0
   . . .
NEB2.Atoms.SpeciesAndCoordinates>
```

「MD.NEB.Number.Images」で指定した全てのイメージに対して、原子座標を与える必要があります。 さらに、キーワードを「on」に設定して下さい。

scf.restart on

49.6 NEB 計算における SCF の確認

NEB 計算での標準出力には、イメージ1の情報のみが表示されます。他のイメージについての情報は表示されません。SCF の反復計算が全てのイメージに対して収束するという保証はありませんので、ユーザー各自で SCF 計算の収束性を確認する必要があります。全てのイメージについて SCF 収束をモニタするために、一時ファイルが利用できます。NEB 計算では、それぞれのイメージに対して一つの入力ファイル「*System.Name.*dat_#」が作成されます。ここで「#」は0から MD.NEB.Number.Images+1までの値で、それぞれの入力ファイル中の「system.name」は「system.name_#」に変更されています。従って、ファイル「system.name_#.DFTSCF」をモニタすることによって各イメージの SCF 計算の収 束状況を確認できます。

49.7 並列計算

NEB計算の並列化の設定はプロセスとスレッドの数に応じて自動的に行われます。ただし MPI 並列化で 適正な計算負荷を実現するためには、適切なプロセス数を設定する必要があります。ここで適切な MPI プロセス数とは、「MD.NEB.Number.Images」で与えられるイメージ数で割り切れる MPI プロセス数 のことです。この場合には計算負荷が最適化されます。MPI 並列プロセス数は原子数を越えられます。 他の機能の並列化と同様に、MPI/OpenMP によるハイブリッド並列化もサポートしています。

ほとんどの場合に、デフォルトの並列化の設定で問題なく動作しますが、大規模系の計算において 少数の MPI プロセスを用いるとメモリー不足が重大な問題となり得ます。デフォルトの MPI 並列化で は、イメージが優先的に並列化されます。MPI プロセス数がイメージ数を上回ると、次にそれぞれの各 イメージ内の計算が並列化されます。その際に、メモリーもまた同様に並列化されます。そのため、デ フォルトの並列化設定では、多数の MPI プロセスが利用できなければメモリー不足のために異常終了す る可能性があります。この状況を避けるために次のキーワードが利用できます。

MD.NEB.Parallel.Number 3

この例では、イメージを3つのグループに分けてそれぞれで並列計算を行います。そのため、MPIプロ セスを3つのグループに分類し、各MPIグループを各イメージのグループの計算に割り当てます。並列 化構造は2階層となっており、上の階層がイメージのグループの並列化、下の階層はそれぞれのイメージ 内の計算の並列化です。全てのイメージの計算を完了するために、グループ化した計算を最低[(イメー ジ数)/(MD.NEB.Parallel.Number)]回繰り返します。「MD.NEB.Parallel.Number=1」と設定した場合 には、イメージの並列化は行わずに、イメージ内の計算に全てのMPIプロセスが割り当てられることに なり、この場合にメモリ使用量が最小になります。従って、この並列化法は大規模系のNEB計算に有効 でしょう。このキーワードが入力ファイルで指定されない場合には、デフォルトの並列化法が適用され ます。

49.8 その他の注意

バルク系に対しては「FRAC」の替わりに「Ang」または「AU」で原子座標を指定して下さい。「FRAC」 で指定した場合には、原子の位置は0から1の間の規格化座標に自動的に変換された後に、それに対応 するカルテシアン座標が生成されます。この場合、幾何空間中でイメージが連続的に配置されないこと になり、NEB計算が破綻します。これを避けるために、「Ang」または「AU」で原子座標を指定して下 さい。

NEBの機能を実装するために、3つのルーチン、「neb.c」、「neb_run.c」、「neb_check.c」のみが追加 されています。メインルーチンは「neb.c」です。関連する方法を実装する場合には、ルーチン「neb.c」 を参照して下さい。

50 Tersoff-Hamann 法による STM イメージ

Tersoff-Hamann 法 [71] によって走査型トンネル顕微鏡(STM)のイメージを計算することができます。 この方法は、化学ポテンシャルから計ったエネルギーウィンド内の部分電荷密度の計算に他なりません。 部分電荷密度は次のキーワードを使って計算します。

partial.charge	on	<pre># on off, default=off</pre>
partial.charge.energy.window	0.0	# in eV

ここで、二番目のキーワードにより化学ポテンシャル(プラスの値は伝導帯を、マイナスは価電子帯を 意味します)から計ったエネルギーウィンドウ(eV単位)を指定します。部分電荷密度の計算は状態密 度(DOS)の計算の際に実行されますので、次のキーワード も指定する必要があります。

Dos.fileout	on	<pre># on off, default=off</pre>
Dos.Erange	-20.0 20.0	# default = -20 20
Dos.Kgrid	555	<pre># default = Kgrid1 Kgrid2 Kgrid3</pre>

計算が正常に終了すれば、Tersoff-Hamann 近似の範疇で STM シミュレーションに利用できる「System.Name.pden.cube」が生成されます。例として、本手法によって得られたグラフェン層の STM 像を 図 59 に示します。



Figure 59: Tersoff-Hamann 近似によるグラフェン層の STM 像。計算では「partial.charge.energy.window」に 2eV に設定。入力ファイルはディレクトリ「work」中の「Graphene_STM.dat」。ソフトウェア WSxM [153] を使 い、cube ファイル「Graphene_STM.pden.cube」を等値面値 0.0001 で可視化。
51 vdW相互作用のためのDFT-D2, DFT-D3法

Grimme による DFT-D2 法 [135] 及び DFT-D3 法 [136, 137] により、vdW 相互作用を組み込むことが できます。

51.1 DFT-D2法

DFT-D2法に関連するキーワードを以下に列挙します。

scf.dftD	on	<pre># on off, default=off</pre>
DFTD.Unit	Ang	# Ang AU
DFTD.rcut_dftD	100.0	<pre># default=100 (DFTD.Unit)</pre>
DFTD.d	20.0	# default=20
DFTD.scale6	0.75	# default=0.75
DFTD.IntDirection	1 1 1	# default=1 1 1 (1:on 0:off)

vdW 相互作用を組み込む際には、「scf.dftD」を「on」に設定して下さい。二体ポテンシャルのカットオ フ半径はキーワード「DFTD.rcut_dftD」で指定します。ここで、その単位は「DFTD.Unit」で与えま す。Grimmeの論文 [135] にある (12) 式の「d」値は「DFTD.d」によって指定します。そのデフォルト値 は 20 です。Grimmeの論文 [135] にある (11) 式の倍率は「DFTD.scale6」で指定します。PBE 関数を用 いた場合のデフォルト値は 0.75 です。また本手法で導入された vdW 相互作用は「DFTD.IntDirection」 によって a、b、もしくは c 軸方向で打ち切ることが可能で、ここで「1」は相互作用を含み、「0」は含 まない場合です。また次のように、それぞれの原子の周期性を個別に制御できます。

<DFTD.periodicity

1 1 2 1 3 1 4 1 DFTD.periodicity>

ここで第1列は「Atoms.SpeciesAndCoordinates」と同様の通し番号、第2列はフラグで、対応する原 子に対して「1」は周期的、「0」は非周期的であることを意味します。「0」を指定した原子は非周期的で あると見なされ、周期セルとの相互作用は含まれません。

vdW相互作用を実装する上での主な変更は二つのルーチン、「Total_Energy.c」中の「Calc_EdftD()」 と「DFTDvdW_init.c」に対して行われています。「DFTDvdW_init.c」中では、vdW 補正のパラメー タが容易に変更でき、「Total_Energy.c.」の「Calc_EdftD()」ではどのように実装されているのか確認で きます。

OpenMX では基底関数として局在軌道を用いるため、vdW 相互作用のような弱い相互作用の効果を調べる際には、基底関数重なり誤差(BSSE)を考慮する事が重要です。BSSE を評価するために counterpoise 法(CP法)[46,47]が使用できます。CP 法については「空原子の配置」の章を参照して下さい。

51.2 DFT-D3法

Grimme らによる DFT-D3 法 [136, 137] により vdW 相互作用を取り入れることが可能です。関連パラ メータは以下となります(デフォルトのパラメータは GGA-PBE 用のものが設定されています)。

scf.dftD	on	<pre># on off, default=off</pre>
version.dftD	3	# 2 3, default=2
DFTD3.damp	bj	# zero bj, default=bj
DFTD.Unit	AU	# Ang AU
DFTD.rcut_dftD	100.0	<pre># default=100 (DFTD.Unit)</pre>
DFTD.cncut_dftD	40	<pre># default=40 (DFTD.Unit)</pre>
DFTD.IntDirection	1 1 1	# default=1 1 1 (1:on 0:off)

DFT-D2 もしくは DFT-D3 計算を実施する際には「scf.dftD」を「on」にします。DFT-D2 では、「version.dftD」を「2」とし、DFT-D3 では「3」として下さい。DFT-D3 の減衰関数としてゼロ及び Becke-Johnson(BJ)[137] の双方が使用可能です。相互作用のカットオフ半径は「DFTD.rcut_dftD」で指定し、 配位数の計算に用いるカットオフは「DFTD.cncut_dftD」です。「DFTD.Unit」で指定する単位は AU を推奨しています。「DFTD.IntDirection」では、a、b、c 軸方向の仮想原子との相互作用を加味するか 否かを指定し、「1」の場合には加味し、「0」の場合には無視します。各原子の周期性の制御は、DFT-D2 法と同様に以下の様にで行います。

<DFTD.periodicity 1 1 2 1 3 1 4 1 DFTD.periodicity>

ここで第1列は「Atoms.SpeciesAndCoordinates」と同様の通し番号、第2列はフラグで、対応する原 子に対して「1」は周期的、「0」は非周期的であることを意味します。「0」を指定した原子は非周期的で あると見なされ、周期セルとの相互作用は含まれません。

DFT-D3 法のための主要な改変は、「DFTD3vdW_init.c」と「Total_Energy.c」内の「Calc_EdftD()」 のみとなっています。「DFTD3vdW_init.c」において、vdW 相互作用パラメータを変更することが可能 です。また、「Total_Energy.c」内の「Calc_EdftD()」を見ることで、どの様にエネルギーが計算されて いるか確認することができます。

その他の汎関数を使用する際には、以下のキーワードを設定して下さい。

DFTD.scale6	1	<pre># default=0.75 1.0 (for DFT-D2 DFT-D3)</pre>
DFTD.scale8	0.7875	<pre># default=0.722 0.7875 (for PBE with zero bj damping)</pre>
DFTD.sr6	1.217	<pre># default=1.217 (for PBE)</pre>
DFTD.a1	0.4289	<pre># default=0.4289 (for PBE)</pre>
DFTD.a2	4.4407	<pre># default=4.4407 (for PBE)</pre>

「 s_6 」と「 s_8 」はGrimmeの論文 [136] 中の式 (3) に含まれるスケーリングファクターであり、「DFTD.scale6」 と「DFTD.scale8」にて指定します。このスケーリングファクターは汎関数と減衰関数に依存して変 わります。また、ゼロ減衰関数を用いる場合には「sr6」、BJ 減衰関数を用いる場合には「a1」と「a2」 を設定する必要があります。これらのパラメータは Grimme の論文の式(6)に含まれるものです。

DFT-D3計算の例として、2つのベンゼン分子(平行に配置、 D_{6h} 対称)間の相互作用を、2分子間の距離の関数として計算したものを図 60 に示します。計算に用いた以下の入力ファイルは「work/DFT-D3」ディレクトリに収められています。

Dimer-Ben-10.0.dat	Dimer-Ben-3.88.dat	Dimer-Ben-4.5.dat	Mono-Ben-1.dat
Dimer-Ben-3.3.dat	Dimer-Ben-3.89.dat	Dimer-Ben-5.0.dat	Mono-Ben-2.dat
Dimer-Ben-3.4.dat	Dimer-Ben-3.8.dat	Dimer-Ben-6.0.dat	Mono-Ben.dat
Dimer-Ben-3.6.dat	Dimer-Ben-3.9.dat	Dimer-Ben-7.0.dat	
Dimer-Ben-3.86.dat	Dimer-Ben-4.0.dat	Dimer-Ben-8.0.dat	
Dimer-Ben-3.87.dat	Dimer-Ben-4.2.dat	Dimer-Ben-9.0.dat	

1 分子を「Mono-Ben.dat」を用いて最適化した後、2 分子間の距離を変えた計算を「Dimer-Ben-#.dat (#=3.3-9.0)」を用いて実施しました。その際、ベンゼンの構造は1 分子で最適化した構造に固定して います。「Mono-Ben-1.dat」及び「Mono-Ben-2.dat」では、1 分子の計算を counterpoise 補正を行った ものになっています。最も安定な分子間距離が 3.87Å として得られており、これは Density fitted local second-order Møller Plesset perturbation theory (DF-LMP2) [138] による結果(3.89 Å)とよく一致し ています。counterpoise 補正を加えた相互作用エネルギーは 1.73 kcal/mol となっており、こちらも文 献値(1.7 kcal/mol)[138] とよく一致し、基底関数重なり誤差が無視できないものであることが分かり ます。



Figure 60: 平行に並んだベンゼン(D_{6h} 対称性)二量体における分子間の相互作用エネルギー。counterpoise 補正を加えた相互作用エネルギーを三角で示す。計算に用いた入力ファイルは、全て「work/DFT-D3」ディレクトリに収められている。

52 バンドアンフォールディング法

界面、不純物、欠陥や構造歪み等を含む不完全な系をスーパーセル法によって計算した場合、得られた バンド構造と角度分解光電子分光法(ARPES)などにより得られたスペクトルとの比較において、実験 で観測される周期性と計算で用いたスーパーセルの周期性が異なることが一般的です。スーパーセル法 で得られたバンド構造は対応する小さなブリルアンゾーン内で折り畳まれており(folding)、この場合、 実験で観測された周期性との整合性をとるために適切な単位胞に対するブリルアンゾーンを用いて再表 示する必要があります。適切な単位胞の選び方は自明ではありませんが、OpenMX ではスーパーセル 法で得られたバンド構造を、ユーザーが入力ファイルで指定した単位胞のブリルアンゾーンで展開する (unfolding、アンフォールディング)ことが可能です[142]。このバンドアンフォールディング法はコリ ニア計算、ノンコリニア計算の双方に対応しています。実験結果との比較を行う以外にも、バンドアン フォールディング法を用いることでそれぞれのバンドがどの擬原子軌道から構成されているか解析が行 う事が可能となり、バンドの物理的背景や、構造不完全性の導入がもたらす影響を議論するのに有用な 手法となっています。

以下では、一連の計算を通してバンドアンフォールディング法の機能を紹介します。

52.1 バンド構造の解析

まず、構造不完全性のないプリミティブセルの SiC に対するバンド計算において、それぞれのバンドを 各擬原子軌道からの寄与に分解してみましょう。 ここでは、バンドのアンフォールディングは行いませ ん。SCF 計算は、以下の様に実行します。

% mpirun -np 16 openmx SiC_Primitive.dat > sic_primitive.std &

入力ファイル「SiC_Primitive.dat」は「work/unfolding_example」ディレクトリに含まれており、基底 関数や構造は以下の様に指定されています。

```
Species.Number
                   3
<Definition.of.Atomic.Species
     C7.0-s2p2d1
                    C_PBE19
С
                    Si PBE19
Si
     Si7.0-s2p2d1
Te Te11.0-s2p2d2f1 E
Definition.of.Atomic.Species>
Atoms.Number
               3
Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit FRAC # Ang|AU
<Atoms.SpeciesAndCoordinates
1 C
       0.33333333
                    0.66666666 0.5000000
                                            2.0 2.0
2 Si 0.66666666 0.33333333 0.5000000
                                            2.0 2.0
3 Te 0.0000000
                    0.0000000 0.5000000
                                            0.0 0.0
Atoms.SpeciesAndCoordinates>
Atoms.UnitVectors.Unit
                                      # Ang|AU
                                Ang
<Atoms.UnitVectors
3.0690 0.000000000 0.000
```

-1.5345 2.6578319641 0.000

0.0000 0.000000000 10.000

Atoms.UnitVectors>

伝導帯の記述を改善するために、長い裾の基底関数を有する空原子を、六角形の中央に配置しています。 キーワード「Band.dispersion」を以下の様に設定して下さい。

「sic_primitive.BANDDAT1」により、図 61(a) のようにバンド構造を描画することが可能です。バンド 構造の描画については「Band dispersion」の章をご覧下さい。

バンド構造の解析に関連するキーワード

バンドアンフォールディング法の計算にあたっては、以下のキーワードも設定する必要があります。

Unfolding.Electronic.Band	on	<pre># on off, default=of:</pre>	f
Unfolding.LowerBound	-10.0	<pre># default=-10 eV</pre>	
Unfolding.UpperBound	6.0	# default= 10 eV	

4

Unfolding.Nkpoint

<Unfolding.kpoint

K 0.3333333333 0.333333333 0.0000000000 G 0.000000000 0.000000000 0.000000000 M 0.5000000000 0.000000000 0.000000000 K 0.3333333333 0.333333333 0.0000000000 Unfolding.kpoint>

Unfolding.desired_totalnkpt 30

上記のキーワードの内容を以下に説明します。

Unfolding.Electronic.Band on off, default=off
 「on」にすることで、バンドアンフォールディング法を行います。デフォルトは「off」です。

• Unfolding.LowerBound

「Unfolding.LowerBound」によって解析を行うバンドのエネルギー最小値を指定します。エネル ギーはフェルミエネルギーを基準とし、デフォルト値は-10 eV となっています。

• Unfolding.UpperBound

「Unfolding.UpperBound」では、解析を行うバンドのエネルギー最大値を指定します。エネルギー はフェルミエネルギーを基準とし、デフォルト値は 10 eV となっています。



Figure 61: (a) プリミティブセルの SiC のバンド構造。赤線が通常の計算手法により求めたものであ り、緑丸は全スペクトルの重みを示している。(b) 軌道分解されたスペクトルの重み。緑の丸印は炭素 原子の s、 p_x と p_y のスペクトルの重みの総和を表し、紫の丸印は炭素原子の p_z 軌道のスペクトルの重 みの総和を、丸印の半径は重みの大きさを反映している。計算には「work/unfolding_examples」内の 「SiC_Primitive.dat」を用いた。

• Unfolding.Nkpoint

「Unfolding.Nkpoint」では、「Unfolding.kpoint」で列挙する k 点の数を指定します。

• Unfolding.kpoint

「Unfolding.kpoint」では、「Unfolding.Nkpoint」にて指定した数だけk点を指定します。上記の例で は4つのk点が列挙されており、「K」から「G」、「G」から「M」、「M」から「K」のパスとなっていま す。このパスに沿ってバンドの解析が行われます。k点を指定する際には、「Atoms.UnitVectors」で 指定した単位胞の逆格子ベクトルに対する規格化座標を用いて下さい。「Unfolding.ReferenceVectors」 によって、バンドアンフォールディング法に用いる格子ベクトルを変更することもできます。「Unfolding.ReferenceVectors」を指定しなかった場合には、「Atoms.UnitVectors」で指定した格子ベ クトルが自動的に使用されることに注意して下さい。「Unfolding.ReferenceVectors」については、 次の節にて説明します。

$\bullet \ Unfolding.desired_totalnkpt$

「Unfolding.kpoint」において指定されたパスは概ね等間隔に分割され、分割される間隔は、(k空間における総パス長)/「Unfolding.desired_totalnkpt」で見積もられます。ただし、実際の間隔は「Unfolding.kpoint」にて指定した k 点が常に解析に含まれるように、自動的に調整されます。

バンド構造の解析に関連した出力ファイル

SCF が収束すると、バンドの解析・アンフォールディングに関連した以下のファイルが生成されます。

• sic_primitive.unfold_totup

参考文献 [142] 中の式(24)より得られる全スペクトルの重みが保存されています。1列目は「Unfolding.kpoint」にて指定された最初の k 点からの距離(Bohr⁻¹ 単位)、2列目はフェルミエネル ギーを基準とするエネルギー(eV 単位)、3列目は全スペクトルの重みです。スピン分極した計算 の場合には、「*System.Name.*unfold_totdn」がダウンスピン用に追加で生成され、ノンコリニア計 算の場合には「*System.Name.*unfold_tot」という単一のファイルが生成されます。

• sic_primitive.unfold_orbup

参考文献 [142] 中の式(26)より得られる軌道分解されたスペクトルの重みが保存されています。 1 列目は「Unfolding.kpoint」にて指定された最初のk点からの距離(Bohr⁻¹単位)、2 列目はフェ ルミエネルギーを基準とするエネルギー(eV単位)、3 列目は軌道分解されたスペクトルの重み です。軌道分解されたスペクトルの重みの出力順序は「System.Name.out」をご参照下さい。スピ ン分極した計算の場合には、「System.Name.unfold_orbdn」がダウンスピン用に追加で生成され、 ノンコリニア計算の場合には「System.Name.unfold_orb」という単一のファイルが生成されます。

• sic_primitive.unfold_plotexample

上記のデータを gnuplot にて描画するための例が「System.Name.unfold_plotexample」として生成されます。gnuplot のコマンドラインにおいて、以下の様に打ち込むことで描画可能です。

gnuplot> load 'sic_primitive.unfold_plotexample'

目的に応じて、適宜編集をして使用して下さい。

gnuplot を用いることで、「sic_primitive.BANDDAT1」、「sic_primitive.unfold_totup」の描画を行うに は、以下のコマンドを使用して下さい。

gnuplot> set style data lines gnuplot> set zeroaxis gnuplot> set key below gnuplot> set ytics 1 gnuplot> set mytics 5 gnuplot> set xra [0.000000:1.708883] gnuplot> set yra [-10.0:6.0] gnuplot> set ylabel "eV" gnuplot> set xtics ("K" 0.000000, "G" 0.722258, "M" 1.347753, "K" 1.708882) gnuplot> p "sic_primitive.BANDDAT1","sic_primitive.unfold_totup" u 1:2:(\$3*0.02) w circle

上記のコマンドにより、図 61 (a) と同様の図を描くことができます。実線は「sic_primitive.BANDDAT1」 を、丸印は「sic_primitive.unfold_totup」を表しています。丸印の大きさはスペクトルの重みを反映しま すが、今回はオリジナルセルのブリルアンゾーンにて得られたバンドを解析したため、全て同じ大きさ となっています。

次に、軌道分解されたスペクトルの重み「sic_primitive.unfold_orbup」を見てみましょう。上記と同様に、以下のコマンドで描画することが可能です。

gnuplot> p "sic_primitive.BANDDAT1","sic_primitive.unfold_orbup" u 1:2:((\$3+\$4+\$5+\$6)*0.05) w circle, "sic_primitive.unfold_orbup" u 1:2:(\$7*0.05) w circle このコマンドにより、図 61 (b)を得ることができます。この例では、炭素原子のs、 p_x 、 p_y 軌道のスペクトルの重みの総和を緑の丸印で、炭素原子の p_z 軌道のスペクトルの重みを紫の丸印で描画しています。本解析を行うことで、 σ バンドと π バンドを明確に区別することが可能となります。「sic_primitive.unfold_orbup」の形式については、上述の説明をご参照下さい。

52.2 バンド構造のアンフォールディング

ここでは、スーパーセル法によって得られたバンド構造をどの様に参照単位胞のブリルアンゾーンにア ンフォールディングするか説明します。例として、ここでも不完全性のない2次元蜂の巣構造をもつSiC を考えます。ただし、計算セルを以下の様に(2×2)のスーパーセルに拡張したものを考えます。

Atoms.Number 12 Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit FRAC # Ang|AU <Atoms.SpeciesAndCoordinates 1 C 0.16666666 0.33333333 0.5000000 2 2 2 C 0.66666666 0.33333333 0.5000000 2 2 3 C 0.16666666 0.83333333 0.5000000 2 2 4 C 0.66666666 0.83333333 0.5000000 2 2 5 Si 0.33333333 0.16666666 0.5000000 2 2 6 Si 0.83333333 0.16666666 0.5000000 2 2 7 Si 0.33333333 0.66666666 0.5000000 2 2 8 Si 0.83333333 0.66666666 0.5000000 2 2 9 Te 0.0000000 0.0000000 0.5000000 0 0 10 Te 0.50000000 0.00000000 0.5000000 0 0 11 Te 0.00000000 0.5000000 0.5000000 0 0 12 Te 0.5000000 0.50000000 0.5000000 0 0

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

Atoms.UnitVectors.Unit <Atoms.UnitVectors 6.138 0.000000000 0.00 -3.069 5.3156639282 0.00 0.000 0.000000000 10.00 Atoms.UnitVectors>

2次元SiCのスーパーセルに対するSCF計算は以下の様に行います。

% mpirun -np 16 openmx SiC_C_NSP_P.dat > sic_c_nsp_p.std &

入力ファイル「SiC_C_NSP_P.dat」は「work/unfolding_example」に収められています。SCF 計算が終わると、以下のアンフォールディング計算に必要なファイルが生成されます。

Ang

Ang|AU

sic_c_nsp_p.unfold_totup
sic_c_nsp_p.unfold_orbup
sic_c_nsp_p.unfold_plotexample



Figure 62: (a) 2次元蜂の巣構造の SiC (2×2) スーパーセルのバンド構造。赤線はプリミティブセル に対する通常の計算により得られたバンド構造であり、緑の丸印はアンフォールディングにより得られ た全スペクトルの重みを表している。また、丸印の大きさは重みの強度を反映している。計算に用いた 「SiC_C_NSP_P.dat」は「work/unfolding_example」に収められている。(b) Si 欠陥を持つ 2次元蜂の巣 構造の SiC (2×2) スーパーセルのバンド構造。赤線はプリミティブセルに対する従来の計算により得 られたバンド構造であり、緑と青の丸印はアンフォールディング法で得られたアップスピン及びダウン スピンの全スペクトルの重みを表している。また、丸の大きさは重みの強度を反映している。計算に用 いた「SiC_C_SP_V.dat」は「work/unfolding_example」に収められている。

プリミティブセルで得られたバンド構造と重ねて「sic_c_nsp_p.unfold_totup」を描画することにより、図 62(a) と同様の図を得ることができます。スーパーセルからアンフォールディングされたバンドが、プリ ミティブセルのバンドを完全に再現していることが確認できます。

バンドのアンフォールディングを実施するためには、前節で示したキーワードの他に、以下のキー ワードを指定する必要があります。

<Unfolding.ReferenceVectors

3.0690 0.000000000 0.000 -1.5345 2.6578319641 0.000 0.0000 0.000000000 10.000 Unfolding.ReferenceVectors>

<Unfolding.Map

1 1

2 1

3 1

4 1

上記キーワードの指定に関して以下に説明します。

• Unfolding.ReferenceVectors

「Unfolding.ReferenceVectors」では、参考文献 [142] の式 (24) に従ってバンドアンフォールディング を行う際に参照する単位胞を定義します。上記の例では、プリミティブセルを参照セルとしています。 入力形式は「Atoms.UnitVectors」と同じであり、1行目、2行目、3行目に a-、 b-、 c-軸を記載して下 さい。参照セルの単位は、スーパーセルで用いたものと同じであり、「Atoms.UnitVectors.Unit」で指 定したものとなります。「バンド構造の解析」の節では、「Unfolding.ReferenceVectors」を設定しませ んでした。このような場合には、「Atoms.UnitVectors」が自動的に「Unfolding.ReferenceVectors」 として設定されます。

• Unfolding.Map

「Unfolding.Map」では、スーパーセル中の原子を参照セル内の原子にどの様にマッピングする かを指定します。1列目には「Atoms.SpeciesAndCoordinates」にて指定した原子の通し番号を記 述し、2列目には各原子が所属するグループの通し番号を記述します。上記の例では、原子1か ら4はグループ1に、原子5から8がグループ2に、原子9から12がグループ3に所属します。 「Unfolding.Map」にて与えられた情報に基づいて、参考文献[142]の式(17)に従って各原子の再 ラベリングを行います。グループの識別番号は、正の整数であれば「1」からスタートする必要は なく、昇順にする必要もありません。

ここでは、更なる例として、2次元蜂の巣構造の SiC (2×2) スーパーセルにおいて、Si 欠陥を導入 した場合を紹介します。まず、以下の様に SCF 計算を行います。

% mpirun -np 16 openmx SiC_C_SP_V.dat > sic_c_sp_v.std &

入力ファイル「SiC_C_SP_V.dat」は「work/unfolding_example」ディレクトリに収められています。(2×2) スーパーセルから Si 原子を取り除くと、入力ファイルは以下の様になります。

Atoms.Number 11

Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit FRAC # Ang|AU

<Atoms.SpeciesAndCoordinates

1	С	0.16666666	0.33333333	0.5000000	2.5 1.5
2	С	0.66666666	0.33333333	0.5000000	2.5 1.5
3	С	0.16666666	0.83333333	0.5000000	2.5 1.5
4	С	0.66666666	0.83333333	0.5000000	2.5 1.5

5	Si	0.33333333	0.16666666	0.5000000	2.5 1.5
6	Si	0.83333333	0.16666666	0.50000000	2.5 1.5
7	Si	0.33333333	0.66666666	0.5000000	2.5 1.5
8	Те	0.00000000	0.0000000	0.50000000	0.0 0.0
9	Те	0.5000000	0.0000000	0.5000000	0.0 0.0
10	Те	0.00000000	0.5000000	0.50000000	0.0 0.0
11	Те	0.5000000	0.5000000	0.50000000	0.0 0.0
	a				

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

スーパーセル内の原子を以下の様に参照セルにマッピングします。

<Unfolding.Map

- 1 1
- 2 1
- 3 1
- 4 1
- 52
- 6 2
- 72
- 83
- 93
- 10 3
- 11 3

Unfolding.Map>

SCF 計算が終わると、以下のアンフォールディング法に関連するファイルが生成されます。

sic_c_sp_v.unfold_totup sic_c_sp_v.unfold_totdn sic_c_sp_v.unfold_orbup sic_c_sp_v.unfold_orbdn sic_c_sp_v.unfold_plotexample

プリミティブセルで得られたバンド構造と併せて「sic_c_sp_v.unfold_totup」と「sic_c_sp_v.unfold_totdn」 を gnuplot によりプロットすることで、図 62(b) を得ることができます。アンフォールディングされたス ペクトルの重みを見ると、欠陥導入後も完全系における特徴を維持していることが分かります。さらに、 化学ポテンシャルが大きく高エネルギー側にシフトしていることや、炭素原子のダングリングボンドに よってスピン分極していることも見て取れます。これらの解析のとおり、不完全性の導入によって本来 のバンド構造が受ける影響をバンドアンフォールディング法を用いることで評価することができます。

欠陥ではなく不純物を導入した場合には、不純物の識別番号を指定するだけで計算が可能です。SiC (2×2) スーパーセルの 13 番目の原子として不純物を導入した場合には、再ラベリングのマッピングルールを以下の様に定義します。

<Unfolding.Map

1 1

2 1

Unfolding.Map>

複数の不純物が存在する場合にも、上記と同様にマッピングルールを定義することができます。

52.3 参照セルの原点

参考文献 [142] の式 (17) を見ると、再ラベリングには R から $R + r_0(M)$ と M から m'(M) の 2 つのマッ ピングルールが必要となっていることが分かります。ここで、Rと $r_0(M)$ はスーパーセルと参照セル の格子ベクトルであり、 $M \geq m'(M)$ は原子軌道のインデックスです。Mから m'(M)の再ラベリング については、すでに「Unfolding.Map」にてマッピングルールを定義しています。この節では、R から $R + r_0(M)$ の再ラベリングをどの様に行うかを説明します。 R から $R + r_0(M)$ の再ラベリングは、実 空間の原子座標に対して参照セルがどのように配置しているかに依存しており、これは参照セルの原点 の取り方に依存しているとも考えることができます。一方、M から m'(M)の再ラベリングのマッピン グルールは多くの場合に変わらないため、アンフォールディングの重みは参照セルの原点の取り方には 敏感ではありません。ただし、表面や大きく歪んだ系などにおいては原点の取り方によってマッピング ルールが変化する場合がありますので注意が必要です。OpenMXのデフォルトでは、以下の2つのルー ルに基づいて原点を推定します。1つ目のルールは、「Unfolding.Map」にて同じ識別番号を付与された 原子を各参照セルに可能な限り1つだけ割り当てられるように原点を選択するというものです。大きく 歪んだ構造では、同一の識別番号でラベルされた原子を各参照セルに多重に割り当ててしまうことが起 こりうるため、OpenMXの実装ではこのような状況を自動的に回避するような工夫がされています。2 つ目のルールは、再ラベリングによって割り当てられた原子の数がゼロではない参照セルの総数を最小 にするよう原点を決定するというものです。スーパーセル法で表現される表面系ではスラブ間に真空領 ・域を有するので、割り当てられた原子数がゼロではない参照セルの総数が、原点の取り方によって変化 する可能性があります。OpenMXの実装では自動的に割り当て原子数がゼロではない参照セルの総数を 最小にするよう工夫されています。これら2つのルールによって、多くのユーザーの要件を満たすこと ができますが、原点を自ら管理したい場合もあります。この目的のために、以下のキーワードが利用可 能です。

<Unfolding.ReferenceOrigin

0.1 0.2 0.3

Unfolding.ReferenceOrigin>

これらには「Atoms.UnitVectors.Unit」にて定義した単位を用います。

52.4 アンフォールディングされたスペクトル重みの強度マップ

アンフォールディングされたスペクトル重みは強度マップとして可視化できます。重み w は以下の様に Lorentian 関数によって滑らかにされます。

$$L(k, E) = \frac{w}{(k/\Delta_k)^2 + (E/\Delta_E)^2 + 1},$$

kは Bohr⁻¹単位の k-ベクトルの値であり、Eは eV単位のエネルギー、 Δ_k 及び Δ_E は滑らかにする度 合です。強度マップの絶対値には物理的な意味がないことにご注意下さい。強度マップの可視化は以下 の 3 ステップで実施可能です。

(1) intensity_map.c のコンパイル

「source」ディレクトリにおいて、以下の様に「intensity_map.c」をコンパイルして下さい。

gcc intensity_map.c -lm -o intensity_map

生成された実行形式ファイル「intensity_map」を作業ディレクトリにコピーして下さい。

(2) 強度マップの作成

アンフォールディング計算の終了後、強度マップを作成するために必要なメッシュデータが書き込まれた ファイルを生成することができます。ここでは、前節にて議論した Si 欠陥をもつ 2 次元蜂の巣構造の SiC (2×2) スーパーセルを例に説明します。アンフォールディング計算の入力ファイルは「SiC_C_SP_V.dat」 であり、メッシュデータファイル「sic-intmap.txt」を以下の様に生成します。

./intensity_map sic_c_sp_v.unfold_totup -c 3 -k 0.1 -e 0.1 -l -10 -u 6 > sic-intmap.txt

各引数の説明は以下となります。

- -c: 解析したいスペクトル重みが書かれた列番号
- -k : \mathbf{k} ベクトルでの Δ_k の値 (Bohr⁻¹)
- -e : Δ_E の値 (eV)
- -1:マップに描くバンドのエネルギー最小値 (eV)
- -u :マップに描くバンドのエネルギー最大値 (eV)

「System.Name.unfold_orbup(dn)」を解析する際には、「System.Name.out」の擬原子軌道の通し番号を 参考に、「-c」の列番号を設定して下さい。また、「-c」で指定された N_{col} は、「System.Name.out」の擬 原子軌道の通し番号 N_{seq} に関連していることに注意して下さい。両者の関係は「 $N_{col} = N_{seq} + 2$ 」です。

(3) 強度マップの描画

gnuplot を用いて強度マップを描画可能です。入力ファイル「SiC_C_SP_V.dat」を用いた計算では、以下の様に描画して下さい。



Figure 63: (a) アンフォールディングされた全スペクトル重み(アップスピン状態)の強度マップ。 系は Si 欠陥をもつ 2 次元蜂の巣構造の SiC (2 × 2) スーパーセル。SCF 計算は「SiC_C_SP_V.dat」に おいて「Unfolding.desired_totalnkpt」を 300 に設定し、 $\Delta_k = 0.1$ (Bohr⁻¹)、 $\Delta_E = 0.1$ (eV) とした。 (b) 構造揺らぎを持つ BCC 鉄のアンフォールディングされた全スペクトル重みの強度マップ。SCF 計算 は「BCC_Fe_N_SO_Disorder.dat」において「Unfolding.desired_totalnkpt」を 300 に設定し、 $\Delta_k = 0.1$ (Bohr⁻¹)、 $\Delta_E = 0.1$ (eV) とした。

```
gnuplot> set yrange [-10.000000:6.000000]
gnuplot> set ylabel 'Energy (eV)'
gnuplot> set xtics('K' 0.000000,'G' 0.722259,'M' 1.347753,'K' 1.708883)
gnuplot> set xrange [0:1.708883]
gnuplot> set arrow nohead from 0,0 to 1.708883,0
gnuplot> set arrow nohead from 0.722259,-10.000000 to 0.722259,6.000000
gnuplot> set arrow nohead from 1.347753,-10.000000 to 1.347753,6.000000
gnuplot> set pm3d map
gnuplot> sp 'sic-intmap.txt'
```

これらのコマンドにより、図 63(a) を得ることができます。

52.5 ノンコリニア DFT 計算の場合

アンフォールディングバンドの機能は、スピン軌道相互作用を含めたノンコリニア DFT 計算や plus U 法の計算をサポートしています。これらの機能との併用に際して、追加のキーワードはありません。

52.6 入力ファイルの例

6種類の計算例に対する入力ファイルが「work/unfolding_example」に収められています。

 \bullet SiC_Perfect.dat

不完全性のない2次元蜂の巣構造SiCのプリミティブセルについて、各バンドを構成する擬原子 軌道を解析する際の例です(コリニア、スピン分極なし)。

• SiC_C_NSP_P.dat

不完全性のない 2次元蜂の巣構造 SiC の (2×2) スーパーセルについて、アンフォールディングバンド法を用いる際の例です(コリニア、スピン分極なし)。

 \bullet SiC_C_SP_V.dat

Si 欠陥をもつ 2 次元蜂の巣構造 SiC の (2×2) スーパーセルについて、アンフォールディングバン ド法を用いる際の例です (コリニア、スピン分極あり)。

• SiC_NC_SO_P.dat

不完全性のない 2次元蜂の巣構造 SiC の (2×2) スーパーセルについて、アンフォールディングバンド法を用いる際の例です (ノンコリニア計算でスピン軌道相互作用を含む)。

 \bullet SiC_NC_SO_V.dat

Si 欠陥をもつ 2 次元蜂の巣構造 SiC の (2×2) スーパーセルについて、アンフォールディングバン ド法を用いる際の例です (ノンコリニア計算でスピン軌道相互作用を含む)。

 $\bullet~$ BCC_Fe_Perfect.dat

不完全性のない BCC 構造の Fe のプリミティブセルに対して、各バンドを構成する擬原子軌道を 解析する際の例です(コリニア、スピン分極あり)。

• BCC_Fe_C_SP_Perfect.dat

不完全性のない BCC 構造の Fe の立法セルに対して、アンフォールディングバンド法を用いる際の例です。(コリニア、スピン分極あり)

 \bullet BCC_Fe_N_SO_Disorder.dat

構造揺らぎをもつ BCC 構造の Fe の立法セルに対して、アンフォールディングバンド法を用いる 際の例です (ノンコリニア計算でスピン軌道相互作用を含む)。

53 k空間でのスピンテクスチャの解析

Rashba 効果等で見られるバンド構造のスピン分裂はスピン軌道相互作用の考慮で生じることがありま す。スピン分裂は各固有状態・波数ベクトルkに分解され、固有状態・kで分解されたスピン分裂は、逆 空間でのバンド分散関係におけるスピン構造であり、スピンテクスチャと呼ばれます。スピン軌道相互 作用を含めたノンコリニア計算に対して、ポストプロセスコード「kSpin」を用いてスピンテクスチャが 解析できます。固有状態・k で分解されたスピン密度行列は、以後はk空間スピン密度行列と呼ぶこと にします。このk空間スピン密度行列は二成分スピノルから計算され、2×2行列の形式をとります。ス ピンテクスチャはこの2×2行列から計算されます。ポストプロセスコード「kSpin」による解析では、 スピンテクスチャに加えて、Rashba効果などのスピン軌道相互作用により生じる現象の物理的な起源を 解析できるように k 空間スピン密度行列の情報も提供されます。固有状態・k への分解だけでなく、原 子・擬原子軌道で分解されたスピンテクスチャの解析機能も「kSpin」を提供します。この機能により、 スピン分裂においてどの原子・軌道が中心的役割を担うか、理解することができます。「kSpin」はラシュ バ効果のみならずトポロジカル絶縁体や非ラシュバ型のスピン分裂にも応用できることにも注意して下 さい。

以下に続く節では、計算例を示しながら、それらの解析に「kSpin」がどのように応用できるのか説 明します。「kSpin」はノンコリニア計算の場合のみに使用可能で、コリニア計算には対応していないこと に留意してください。ノンコリニア計算に関しては「ノンコリニア DFT」の章 34 を参照してください。

本機能を用いて発表を行う際には、文献 [78] を引用して頂けますと幸いです。また、本機能の実装に 関する技術ノートが http://www.openmx-square.org/tech_notes/note_kSpin-1_0.pdf にありますので、 参照して下さい。

53.1 概要

本節では Au(111) 表面の簡単なモデルを用いて、スピンテクスチャの計算方法を説明します。以下の 2 もしくは 3 ステップの手順により、スピンテクスチャ及び k 空間密度行列は解析されます。

1. SCF 計算

ディレクトリ「work」に収容された入力ファイル「Au111Surface_FL.dat」を用いて通常の SCF 計 算を実行してください。そして、以下のキーワード「scf.SpinPolarization」と「HS.fileout」を以下のよ うにそれぞれ「NC」と「ON」に設定して下さい。

scf.SpinPolarization	NC	#	On Off NC
HS.fileout	ON	#	on off, default=Off

また、スピンテクスチャを解析する場合にはキーワード「scf.SpinOrbit.Coupling」を「ON」に設定して下さい。

scf.SpinOrbit.Coupling ON # On|Off

正常に計算が完了すると、出力ファイル「Au111Surface.scfout」がディレクトリ「work」に生成されま す。またバンド図を作成するためのキーワードを設定することで、本モデルAu(111)表面のバンド構造 が得られます(図 64 を参照)。



Figure 64: Au(111) 表面での Rashba スピン分裂を示すバンド構造。この図はバンドファイル 「Au111Surface.Band」により得られました (バンド分散の 19 章を参照してください)。赤色の曲線 は Rashba バンドを示し、バンドインデックスの 55 と 56 に相当します。Rashba バンドの色付けは GNUBAND ファイル「Au111Surface.GNUBAND」を変更するか、OMXTool [146] を利用することで 実現できます。

2. スピンテクスチャと k 空間スピン密度行列の計算

ここでは図 64 に示すスピン分裂した Rashba バンドの解析を行います。ポストプロセスコード「kSpin」 により、スピンテクスチャと k 空間スピン密度行列が計算できます。まず、ディレクトリ「source」中で 以下のようにコンパイルすることで実行ファイルが得られます。

% make kSpin

コンパイルに成功すると、実行ファイル「kSpin」がディレクトリ「work」中に生成されます。次に、ディレクトリ「work」に移動し、以下のように実行してください。

% ./kSpin Au111Surface_FL.dat

入力ファイルにおいて「kSpin」への適切なキーワードを設定する必要があります。必要なキーワードに 関しては後ほど説明します。「kSpin」には k 空間スピン密度行列を計算するために四つの方法が実装さ れています。*FermiLoop*, *GridCalc*, *BandDispersion* そして *MulPOnly* です。この四つの方法の詳細は それぞれの節で説明されています。ここでの例「Au111Surface_FL.dat」は *FermiLoop* に対するもので あり、*FermiLoop* の 53.2 節にその解析手順が説明されています。 3. (オプショナル) k 空間スピン密度行列の解析

k 空間スピン密度行列及びその原子分解を行う解析機能が実装されています。原子分解から進んでさらに s, p, d, または f 軌道の成分にも分解可能です。原子・擬原子軌道に分解された k 空間スピン密度行列を解析するためにポストプロセスコード「MulPCalc」が利用できます。本解析機能に関しては MulPCalcの 53.6 節を参照して下さい。

53.2 FermiLoop: 一定エネルギー面での計算

ポストプロセスコード「kSpin」にはk空間スピン密度行列を計算する4つの方法があります。これはキー ワード「Calc.Type」で指定します。ここでは4つの方法のうち、*FermiLoop*を説明します。*FermiLoop* はスピンテクスチャとk空間スピン密度行列を一定エネルギー面上(例えばフェルミ面)で計算しま す。*FermiLoop*を用いたスピンテクスチャの解析例としてAu(111)表面のモデルをここで説明します。 *FermiLoop*は二つの段階でk点を探索します。第一段階では計算すべきバンドを探すために大域的な探 索を実施します。第二段階では三角メッシュを用いて一定エネルギー面上のk点を特定します。

前節で議論した「Au111Surface_FL.dat」を用いて OpenMX の SCF 計算を実行した後で「kSpin」 の計算を行います。「kSpin」の実行に関連するキーワードを以下に列挙します。これらのキーワードは入 カファイル「Au111Surface_FL.dat」中に記載されています。また入力ファイル「Au111Surface_FL.dat」 はディレクリ「work」中に収容されています。

kSpin に関連するキーワードの一覧

Filename.scfout	Au111Surface.scfou	ıt			
Filename.outdata	Au111Surface_FL				
Calc.Type	FermiLoop	<pre># FermiLoop, GridCalc,</pre>			
		BandDispersion, or MulPOnly			
		default: MulPOnly			
Energy.Range	0.0 0.0	# eV; default: 0.0 0.0			
Search.kCentral	0.0 0.0 0.0	# default: 0.0 0.0 0.0			
Calc.Type.3mesh	2	# default: 1			
kRange.3mesh	0.2 0.2	# default: 0.5 0.5			
k-plane.1stStep	21 21	# default: 2 2			
k-plane.2ndStep	3 3	# default: 3 3			
Eigen.Brent	On	# on off, default: On			
Trial.Brent	5	# default: 5			
Calc.Bandbyband	Off	<pre># on off, default: Off</pre>			
Calc.Band.Min	55				
Calc.Band.Max	56				
MulP.Vec.Scale	0.1 0.1 0.1	# default: 1.0 1.0 1.0			

キーワードの仕様

それぞれのキーワードの仕様を以下に説明します。

Filename.scfout

「kSpin」によって読み込まれる scfout ファイルの名前を指定します。

Filename.outdata

出力ファイルの名前を指定します。このキーワードは OpenMX 計算のキーワード「System.Name」に 相当します。

Calc.Type

FermiLoop, *GridCalc*, *BandDispersion*, もしくは *MulPOnly*のいずれかを選択します。デフォルトの設 定は *MulPOnly*です。ここでは *FermiLoop* を選択します。

Energy.Range

解析を実施するバンドを探索するためのエネルギー範囲を指定します。*FermiLoop* では上限値と下限値 に対して同一の値を指定します。単位は eV です。もし異なる値が設定されると、それらの平均値が使 用されます。デフォルト値は「-0.5 0.5」であり、これはフェルミ面に対応します。

Search.kCentral

ある中心 k 点の周辺で一定エネルギー値を持つ k 点の探索が実施されます。本キーワードによりこの中 心 k 点の指定を行います。一定エネルギー値はキーワード「Energy.Range」で指定します。k 点の指定 方法はキーワード「Band.kpath」に従います。デフォルト値は「0.0 0.0 0.0」(つまり Γ 点)です。

Calc.Type.3mesh

スピンテクスチャが計算される面を指定します。'1', '2', '3' の値はそれぞれ $k_a k_b, k_b k_c, k_c k_a$ 面に対応します。デフォルト値は 1 です。

kRange.3mesh

k 点が計算される逆空間の二次元領域を二つの値で指定します。例えば、キーワード「Calc.Type.3mesh」の値が $1(k_ak_b$ 面)の際には、値「0.2 0.3」は $-0.2 \le k_a \le 0.2, -0.3 \le k_b \le 0.3$ の領域を指定します。k 点の指定の表記はキーワード「Band.kpath」に従います。デフォルト値は「0.5 0.5」(つまり第一ブリルアンゾーンの全体)です。

k-plane.1stStep

キーワード「kRange.3mesh」で指定された領域を分割する格子点の数を与えます。これは第一段階の探索において用いられます。例えば、キーワード「Calc.Type.3mesh」の値が $1(k_ak_b$ 面)ならば、値23」は k_a 軸方向に2点の格子点、 k_b 軸方向に3点の格子点で分割することを意味します。もし、値が「11」でキーワード「Calc.Bandbyband」の値が「ON」の際には、*FermiLoop*は第一段階を省略します。これは多数の MPI プロセスを用いた大規模計算において有用です。これに関連して k-plane.2ndStep; Calc.Bandbyband; Calc.BandMin; Calc.BandMax も参照してください。デフォルト値は「222」です。

k-plane.2ndStep

第二段階の探索における格子点の数を指定します。これは第一段階で分割された領域のうち、計算に必要な領域を三角メッシュを用いてさらに細かく分割します。表記はキーワード「k-plane.1stStep」と同 一です。これに関連して「k-plane.1stStep」も参照してください。デフォルト値は「33」です。

Eigen.Brent

指定された一定エネルギー面上 (つまり、キーワード「Energy.Range」の値) の k 点を探索するため FermiLoop に Brent 法を用いるなら「ON」を、用いない場合には「OFF」を指定します。もし値が「OFF」 ならば、FermiLoop は線型補間法を用います。デフォルト値は「ON」です。これに関連して「Trial.Brent」 も参照してください。

Trial.Brent

Brent法(Eigen.Brentを参照してください)のステップ数の最大値を指定します。キーワード「Eigen.Brent」の値が「ON」の際にこのキーワードは有効となります。デフォルト値は5です。これに関連して「Eigen.Brent」 も参照してください。

Calc.Bandbyband

*FermiLoop*で与えられたバンドを計算させる場合は「ON」、さもなければ「OFF」を指定します (Calc.BandMin; Calc.BandMax を参照してください)。デフォルト値は「OFF」です。

Calc.BandMin

バンドインデックスを指定することで計算するバンドの下限値を指定します。キーワード「Calc.Bandbyband」 の値が ON の場合にこのキーワードは有効です (Calc.Bandbyband; Calc.BandMax を参照してくださ い)。バンドインデックスは OMXTool [146] を利用するか、または BandDispersion の機能(章 53.4)に より確認できます。

Calc.BandMax

バンドインデックスを指定することで計算するバンドの上限値を指定します。キーワード「Calc.Bandbyband」 の値が ON の場合にこのキーワードは有効です (Calc.Bandbyband; Calc.BandMax を参照してくださ い)。バンドインデックスは OMXTool [146] を利用するか、または *BandDispersion* の機能(53.4節)に より確認できます。

MulP.Vec.Scale

スピンテクスチャを表現するベクトルを描く際の縮尺を指定します。例えば、値「 $0.1 \ 0.2 \ 0.3$ 」はx軸 に0.1、y軸に0.2、z軸に0.3の縮尺を指定します。このキーワードは「XXXXX.Pxyz_YY」のみに影 響します。(XXXXX はキーワード「Filename.outdata」の値、YY はバンドインデックス)。デフォルト 値は「 $1.0 \ 1.0 \ 1.0$ 」です。

計算

ポストプロセスコード「kSpin」によりスピンテクスチャ及び k 空間スピン密度行列が計算されます。ここではポストプロセスコード「kSpin」はディレクトリ「work」にあると仮定して説明を行います。ディレクトリ「work」に移動して、計算を以下のとおり実行します。

% ./kSpin Au111Surface_FL.dat

または、MPI計算では、例えば、4MPIプロセスの場合は以下のとおり実行します。

% mpirun -np 4 ./kSpin Au111Surface_FL.dat

計算の進行に伴い、以下の標準出力が得られます。

****** kSpin: code for evaluating spin related properties in momentum space of solid state materials. Copyright (C), 2019, Hiroki Kotaka, Naoya Yamaguchi and Fumiyuki Ishii. This software includes the work that is distributed in version 3 of the GPL (GPLv3). Please cite the following article: H. Kotaka, F. Ishii, and M. Saito, Jpn. J. Appl. Phys. 52, 035204 (2013). DOI: 10.7567/JJAP.52.035204. Input filename is "Au111Surface.scfout" Start "FermiLoop" Calculation (5). ClaOrb_MAX[0]: 2 ClaOrb_MAX[1]: 8 Total Band (2*n): 124 Central (0.000000 0.000000 0.000000) The number of BANDs 2 (55-> 56) k-height : 0 0.000000 The number of BANDs 2 (55-> 56) l= 55, k_points: 139 (array: 277) l= 56, k_points: 115 (array: 229) Total MulP data: 254

上記のとおり計算が正常に完了すると、ディレクトリ「work」に以下の出力ファイルが生成されます。

Au111Surface_FL.FermiSurf_53 Au111Surface_FL.Pxyz_53 Au111Surface_FL.FermiSurf_54 Au111Surface_FL.Pxyz_54 Au111Surface_FL.FermiSurf_55 Au111Surface_FL.Pxyz_55 Au111Surface_FL.FermiSurf_56 Au111Surface_FL.Pxyz_56 Au111Surface_FL.AtomMulP Au111Surface_FL.MulP_s Au111Surface_FL.MulP_p Au111Surface_FL.MulP_p1 Au111Surface_FL.MulP_p2 Au111Surface_FL.MulP_p3 Au111Surface_FL.MulP_d Au111Surface_FL.MulP_d1 Au111Surface_FL.MulP_d2 Au111Surface_FL.MulP_d3 Au111Surface_FL.MulP_d4 Au111Surface_FL.MulP_d5 Au111Surface_FL.plotexample Au111Surface_FL.atominfo temporal_12345.input

例として、以下のコマンドを実行すると、図 65 に示す Au(111) 表面の Rashba スピン分裂によるスピ ンテクスチャが得られます。これは典型的な Rashba 型のスピンテクスチャです。

% gnuplot Au111Surface_FL.plotexample



Figure 65: Au(111) 表面の Γ 点周りでの Rashba スピン分裂を示すスピンテクスチャ。外側と内側はバ ンドインデックス 55 と 56 に対応。ベクトルは Pxyz_YY ファイル「Au111Surface_FL.Pxyz_55」 と「Au111Surface_FL.Pxyz_56」に記録された各 k 点でのパウリ行列固有ベクトルによる σ_x , σ_y , σ_z の期待値。閉じた曲線は FermiSurf_YY ファイル「Au111Surface_FL.FermiSurf_55」と 「Au111Surface_FL.FermiSurf_56」のそれぞれに記録された一定エネルギー面。中心の十字点は Γ に対応。この図はプロット例のファイル「Au111Surface_FL.plotexample」より作成。

出力ファイル

各出力ファイルの内容を以下に説明します。

FermiSurf_YY ファイル

このファイルは指定された一定エネルギー面上で探索されたバンド(バンドインデックス YY)の k 点 データを記録します。第一、第二、第三列はそれぞれ k_x , k_y , k_z 成分に対応します。単位は Bohr⁻¹ で す。第四、第五列はそれぞれバンドインデックス、エネルギー (eV 単位) です。

Pxyz_YY ファイル

このファイルは FermiSurf_YY ファイルに記録された各 k 点でのパウリ行列ベクトルの期待値のデータ を記録します。第一、第二、第三列はそれぞれ k_x , k_y , k_z 成分に対応します。単位は Bohr⁻¹ です。第 四、第五列、第六列はそれぞれ σ_x , σ_y , σ_z の期待値です。単位は Bohr 磁子です。

AtomMulP ファイル

このファイルは *MulPCalc*(53.6節)により解析された原子寄与で分解された k 空間スピン密度行列の データを記録します。

MulP_xx ファイル

このファイルは原子寄与で分解された k 空間スピン密度行列の xx 成分のデータを記録します。このファ イルは MulPCalc53.6 で解析できます。

plotexample ファイル

このファイルは gnuplot スクリプトの例を提供します。

atominfo ファイル

このファイルは格子ベクトルと PAO の情報を提供します。

temporal_12345.input

このファイルは scfout ファイルに記録された入力ファイルのコピーです。

(オプショナル)k空間スピン密度行列の解析

*MulPCalc*を用いて AtomMulP ファイルまたは MulP_xx ファイルから k 空間スピン密度行列を解析す るためのデータが抽出できます。*MulPCalc*の入力ファイルの例が入力ファイル「Au111Surface_FL.dat」 の下部にあります。上記の計算後に k 空間スピン密度行列の解析を以下の手順で行います。

% ./MulPCalc Au111Surface_FL.dat

MulPCalc に関するさらなる情報は 53.6 節も参照してください。

その他の留意点

FermiLoop に対する適切なパラメーター設定を行うために、*GridCalc* が利用できます。*GridCalc* で は逆空間内のより広い領域の探索に基づきスピンテクスチャを描くため、その結果を踏まえて *FermiLoop* の適切なパラメーターが設定できます。またキーワード「Eigen.Brent」を「OFF」に設定すると計算 時間が短縮できます。その際には、細かいメッシュを用いて精度を向上させるためにキーワード「kplane.1stStep」または「k-plane.2ndStep」の値を増加させて下さい。

53.3 GridCalc: k 点格子での計算

ポストプロセスコード「kSpin」には k 空間スピン密度行列を計算する 4 つの方法があります。これはキー ワード「Calc.Type」で指定します。ここでは 4 つの方法のうち、*GridCalc*を説明します。*GridCalc*は 指定 k 点格子上で各バンドのスピンテクスチャと k 空間スピン密度行列を計算します。バンドはユーザー 指定のエネルギー範囲内で行われます。エネルギー範囲を指定する代わりに計算するバンドを指定する こともできます。*GridCalc*を用いたスピンテクスチャの解析例として Au(111) 表面のモデルをここで説 明します。まず、ディレクトリ「work」中に収容された入力ファイル「Au111Surface_GC.dat」を用いて OpenMX 計算を実行します。次にポストプロセスコード「kSpin」の計算を実行します。「kSpin」の実行 に関連するキーワードを以下に列挙します。これらのキーワードは入力ファイル「Au111Surface_GC.dat」 中に記載されています。また入力ファイル「Au111Surface_GC.dat」はディレクリ「work」中に収容さ れています。

kSpin に関連するキーワードの一覧

Filename.scfout	Au111Surf	ace.scfor	out
Filename.outdata	Au111Surf	ace_GL	
Calc.Type	GridCalc		<pre># FermiLoop, GridCalc,</pre>
			BandDispersion, or MulPOnly
			default: MulPOnly
Energy.Range	-1.0 1.0		# eV; default: 0.0 0.0
Search.kCentral	0.0 0.0	0.0	# default: 0.0 0.0 0.0
Calc.Type.3mesh	2		# default: 1
kRange.3mesh	0.5 0.5		# default: 0.5 0.5
k-plane.1stStep	14 14		# default: 2 2
Calc.Bandbyband	Off		# default: Off
Calc.Band.Min	55		
Calc.Band.Max	56		
MulP.Vec.Scale	0.1 0.1	0.1	# default: 1.0 1.0 1.0

キーワードの仕様

上記のキーワードは FermiLoop の場合と同一ですが、GridCalc の観点から各キーワードの仕様を以下 に説明します。キーワード「Enery.Range」の振る舞いは FermiLoop でのそれと異なることに注意して ください。

Filename.scfout

「kSpin」によって読み込まれる scfout ファイルの名前を指定します。

Filename.outdata

出力ファイルの名前を指定します。このキーワードは OpenMX 計算のキーワード「System.Name」に 相当します。

Calc.Type

FermiLoop, *GridCalc*, *BandDispersion*, もしくは *MulPOnly***のいずれかを選択します。デフォルトの**設 定は *MulPOnly*です。ここでは *GridCalc* を選択します。

Energy.Range

解析を実施するバンドを探索するためのエネルギー範囲を指定します。単位は eV です。キーワード 「Calc.Bandbyband」が「OFF」の場合、このキーワードが有効となります (Calc.Bandbyband を参照 してください)。デフォルト値は「-0.5 0.5」です。つまりエネルギーの下限値が-0.5 (eV)、上限値は 0.5 (eV) となります。

Search.kCentral

ある中心 k 点の周辺で「Energy.Range」で指定されたエネルギー範囲内にある k 点の探索が実施されま す。本キーワードによりこの中心 k 点の指定を行います。k 点の指定方法はキーワード「Band.kpath」 に従います。デフォルト値は「0.0 0.0 0.0」(つまり Γ 点)です。

Calc.Type.3mesh

スピンテクスチャが計算される面を指定します。'1', '2', '3' の値はそれぞれ $k_a k_b$, $k_b k_c$, $k_c k_a$ 面に対応します。デフォルト値は 1 です。

kRange.3mesh

k 点が計算される逆空間の二次元領域を二つの値で指定します。例えば、キーワード「Calc.Type.3mesh」の値が $1(k_ak_b$ 面)の際には、値「0.2 0.3」は $-0.2 \le k_a \le 0.2, -0.3 \le k_b \le 0.3$ の領域を指定します。k 点の指定の表記はキーワード「Band.kpath」に従います。デフォルト値は「0.5 0.5」(つまり第一ブリルアンゾーンの全体)です。

k-plane.1stStep

キーワード「kRange.3mesh」で指定された領域を分割する格子点の数を与えます。これは第一段階の探索において用いられます。例えば、キーワード「Calc.Type.3mesh」の値が1 (k_ak_b 面) ならば、値「23」は k_a 軸方向に2点の格子点、 k_b 軸方向に3点の格子点で分割することを意味します。デフォルト値は「22」です。

Calc.Bandbyband

*GridCalc*に与えられたバンドを計算させるなら「ON」、さもなければ「OFF」を指定します (Calc.BandMin; Calc.BandMax も参照してください)。デフォルト値は「OFF」です。

Calc.BandMin

バンドインデックスを指定することで計算するバンドの範囲の下限値を指定します。キーワード「Calc.Bandbyband」 の値が ON の場合にこのキーワードは有効です (Calc.Bandbyband; Calc.BandMax を参照してくださ い)。バンドインデックスは OMXTool [146] を利用するか、または BandDispersion の機能(章 53.4)に より確認できます。

Calc.BandMax

バンドインデックスを指定することで計算するバンドの範囲の上限値を指定します。キーワード「Calc.Bandbyband」 の値が ON の場合にこのキーワードは有効です (Calc.Bandbyband; Calc.BandMax を参照してくださ い)。バンドインデックスは OMXTool [146] を利用するか、または BandDispersionの機能(章 53.4)に より確認できます。

MulP.Vec.Scale

スピンテクスチャを表現するベクトルを描く際の縮尺を指定します。例えば、値「 $0.1 \ 0.2 \ 0.3$ 」はx軸 に 0.1、y軸に 0.2、z軸に 0.3の縮尺を指定します。このキーワードは「XXXXX.Pxyz_YY」のみに影 響します。(XXXXX はキーワード「Filename.outdata」の値、YY はバンドインデックス)。デフォルト 値は「 $1.0 \ 1.0 \ 1.0$ 」です。

計算

ポストプロセスコード「kSpin」によりスピンテクスチャ及び k 空間スピン密度行列が計算されます。ここではポストプロセスコード「kSpin」はディレクトリ「work」にあると仮定して説明を行います。ディレクトリ「work」に移動して、計算を以下のとおり実行します。

% ./kSpin Au111Surface_GC.dat

または、MPI計算では、例えば、4MPIプロセスの場合は以下のとおり実施します。

% mpirun -np 4 ./kSpin Au111Surface_GC.dat

計算の進行に伴い、以下の標準出力が得られます。

Input filename is "Au111Surface.scfout"

Start "GridCalc" Calculation (4).

上記のとおり計算が正常に完了すると、ディレクトリ「work」に以下の出力ファイルが生成されます。

Au111Surface_GC.EigenMap_49 Au111Surface_GC.Pxyz_49 Au111Surface_GC.plotexample_49 Au111Surface_GC.EigenMap_50 Au111Surface_GC.Pxyz_50 Au111Surface_GC.plotexample_50 Au111Surface_GC.EigenMap_51 Au111Surface_GC.Pxyz_51 Au111Surface_GC.plotexample_51 Au111Surface_GC.EigenMap_52 Au111Surface_GC.Pxyz_52 Au111Surface_GC.plotexample_52 Au111Surface_GC.EigenMap_53 Au111Surface_GC.Pxyz_53 Au111Surface_GC.plotexample_53 Au111Surface_GC.EigenMap_54 Au111Surface_GC.Pxyz_54 Au111Surface_GC.plotexample_54 Au111Surface_GC.EigenMap_55 Au111Surface_GC.Pxyz_55 Au111Surface_GC.plotexample_55 Au111Surface_GC.EigenMap_56 Au111Surface_GC.Pxyz_56 Au111Surface_GC.plotexample_56 Au111Surface_GC.AtomMulP Au111Surface_GC.MulP_s Au111Surface_GC.MulP_p Au111Surface_GC.MulP_p1 Au111Surface_GC.MulP_p2 Au111Surface_GC.MulP_p3 Au111Surface_GC.MulP_d Au111Surface_GC.MulP_d1 Au111Surface_GC.MulP_d2 Au111Surface_GC.MulP_d3 Au111Surface_GC.MulP_d4 Au111Surface_GC.MulP_d5

Au111Surface_GC.atominfo temporal_12345.input

例として、以下のコマンドを実行すると、図 66(a) と (b) に示す Au(111) 表面のラシュバスピン分裂の スピンテクスチャが得られます。これは典型的な Rashba 型のスピンテクスチャです。

% gnuplot Au111Surface_GC.plotexample_55

% gnuplot Au111Surface_GC.plotexample_56



Figure 66: Au(111) 表面の Γ 点周りでのラシュバスピン分裂を示すスピンテクスチャ。 (a) バンドインデックス 55 に対応。(b) バンドインデックス 56 に対応。ベクトルは Pxyz_YY ファイル「Au111Surface_GC.Pxyz_55」と「Au111Surface_GC.Pxyz_56」に記録された各 k 点での パウリ行列固有ベクトルによる σ_x , σ_y , σ_z の期待値。カラーマップは EigenMap_YY ファイ ル「Au111Surface_GC.EigenMap_55」と「Au111Surface_GC.EigenMap_56」のそれぞれに記録され た k 点でのエネルギーでの高さ。中心の十字点は Γ に対応。この図はプロット例のファイル 「Au111Surface_GC.plotexample_55」と「Au111Surface_GC.plotexample_56」により作成。

出力ファイル

各出力ファイルの内容を以下に説明します。

EigenMap_YY ファイル

このファイルはバンド (バンドインデックス YY)の k 点データを記録します。第一、第二、第三列は それぞれ k_x , k_y , k_z 成分に対応します。単位は Bohr⁻¹ です。第四列はエネルギー (eV 単位) です。

Pxyz_YY ファイル このファイルは EigenMap_YY ファイルに記録された各 k 点でのパウリ行列ベクトルの期待値のデータ を記録します。第一、第二、第三列はそれぞれ k_x , k_y , k_z 成分に対応します。単位は Bohr⁻¹ です。第四、第五列、第六列はそれぞれ σ_x , σ_y , σ_z の期待値です。単位は Bohr 磁子です。

AtomMulP ファイル このファイルは MulPCalc (53.6節)により解析された原子寄与で分解された k 空間スピン密度行列の データを記録します。

MulP_xx ファイル

このファイルは原子寄与で分解された k 空間スピン密度行列の xx 成分のデータを記録します。このファ イルは MulPCalc53.6 で解析できます。

plotexample ファイル

このファイルは gnuplot スクリプトの例を提供します。

atominfo ファイル

このファイルは格子ベクトルと PAO の情報を提供します。

 $temporal_{12345.input}$

このファイルは scfout ファイルに記録された入力ファイルのコピーです。

(オプショナル)k空間スピン密度行列の解析

*MulPCalc*を用いて AtomMulP ファイルまたは MulP_xx ファイルから k 空間スピン密度行列を解析す るためのデータが抽出できます。*MulPCalc*の入力ファイルの例が入力ファイル「Au111Surface_GC.dat」 の下部にあります。上記の計算後に k 空間スピン密度行列の解析を以下の手順で行います。

% ./MulPCalc Au111Surface_GC.dat

MulPCalc に関するさらなる情報は 53.6 節も参照してください。

53.4 BandDispersion: バンド分散関係の計算

ポストプロセスコード「kSpin」には k 空間スピン密度行列を計算する4つの方法があります。これは キーワード「Calc.Type」で指定します。ここでは4つの方法のうち、*BandDispersion*を説明します。 *BandDispersion*の機能を用いて、バンド分散関係上で各原子に分解された k 空間スピン密度行列をユー ザー指定のエネルギー範囲内で計算できます。*BandDispersion*を用いたスピンテクスチャの解析例と して Au(111) 表面のモデルをここで説明します。まず、ディレクトリ「work」中に収容された入力ファ イル「Au111Surface_BD.dat」を用いて OpenMX 計算を実行します。次に、*MulPCalc*53.6の機能を用 いてスピンテクスチャを計算できます。「kSpin」の実行に関連するキーワードを以下に列挙します。こ れらのキーワードは入力ファイル「Au111Surface_BD.dat」中に記載されています。また入力ファイル 「Au111Surface_BD.dat」はディレクリ「work」中に収容されています。

kSpin に関連するキーワードの一覧

Filename.scfout	Au111Surface.scfout
Filename.outdata	Au111Surface_BD

Calc.Type	Calc.Type BandDispersion		# FermiLoo	p, GridCal	с,	
				BandDisp	ersion, or	MulPOnly
				default:	MulPOnly	
Energy.Ran	ge -	-1.0 1.0		<pre># eV; defa</pre>	ult: 0.0	0.0
Band.Nkpat	h	2				
<band.kpat< td=""><td>h</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></band.kpat<>	h					
135 0.0	0.500000	0.000000	0.0	0.000000	0.000000	M G
135 0.0	0.000000	0.000000	0.0	-0.500000	0.000000	G -M
Band.kpath	>					

キーワードの仕様

それぞれのキーワードの仕様を以下に説明します。

Filename.scfout

「kSpin」によって読み込まれる scfout ファイルの名前を指定します。

Filename.outdata

出力ファイルの名前を指定します。このキーワードは OpenMX 計算のキーワード「System.Name」に 相当します。

Calc.Type

FermiLoop, *GridCalc*, *BandDispersion*, もしくは *MulPOnly*のいずれかを選択します。デフォルトの設定は *MulPOnly*です。ここでは *BandDispersion*を選択します。

Energy.Range

解析を実施するバンドを探索するためのエネルギー範囲を指定します。単位は eV です。デフォルト値 は「-0.5 0.5」です。つまりエネルギーの下限値が-0.5 (eV)、上限値は 0.5 (eV) となります。

Band.Nkpath

バンド分散を計算する k 点のパスの数を指定します。この表記は通常の OpenMX の計算と同一です。

Band.kpath

バンド分散を計算する k 点のパスを指定します。この表記は通常の OpenMX 計算と同一です。

計算

ポストプロセスコード「kSpin」により原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列が計算されます。ここではポストプロセスコード「kSpin」はディレクトリ「work」にあると仮定して説明を行います。ディレクトリ「work」に移動して、計算を以下のとおり実行します。

% ./kSpin Au111Surface_BD.dat

または、MPI計算では、例えば、4MPIプロセスの場合は以下のとおり実行します。

% mpirun -np 4 ./kSpin Au111Surface_BD.dat

計算の進行に伴い、以下の標準出力が得られます。

```
kSpin:
code for evaluating spin related properties
in momentum space of solid state materials.
Copyright (C), 2019,
Hiroki Kotaka, Naoya Yamaguchi and Fumiyuki Ishii.
This software includes the work that is distributed
in version 3 of the GPL (GPLv3).
Please cite the following article:
H. Kotaka, F. Ishii, and M. Saito,
Jpn. J. Appl. Phys. 52, 035204 (2013).
DOI: 10.7567/JJAP.52.035204.
Input filename is "Au111Surface.scfout"
Start "BandDispersion" Calculation (3).
line_Nk[1]: 0.665829
(0.000000, 0.500000, 0.000000) -> (0.000000, 0.000000, 0.000000)
line_Nk[2]: 1.331658
(0.000000, 0.000000, 0.000000) -> (0.000000, -0.500000, 0.000000)
ClaOrb_MAX[0]:
            2
ClaOrb_MAX[1]:
            8
Total Band (2*n): 124
Band.Nkpath: 2
135 (0.000000, 0.500000, 0.000000) >>> (0.000000, 0.000000, 0.000000) M G
135 ( 0.000000, 0.000000, 0.000000 ) >>> ( 0.000000, -0.500000, 0.000000 ) G -M
l_min: 49
         l_max: 56 l_cal:
                         8
Au111Surface_BD.Band49_1
Au111Surface_BD.Band50_1
Au111Surface_BD.Band51_1
Au111Surface_BD.Band52_1
Au111Surface_BD.Band53_1
Au111Surface_BD.Band54_1
```

```
Au111Surface_BD.Band55_1
Au111Surface_BD.Band56_1
l_min: 49
         1_max: 56
                  l_cal:
                         8
Au111Surface_BD.Band49_2
Au111Surface_BD.Band50_2
Au111Surface_BD.Band51_2
Au111Surface_BD.Band52_2
Au111Surface_BD.Band53_2
Au111Surface_BD.Band54_2
Au111Surface_BD.Band55_2
Au111Surface_BD.Band56_2
Total MulP data:2176
Total Calculation Time: 4.772406 (s)
```

上記のとおり計算が正常に完了すると、ディレクトリ「work」に以下の出力ファイルが生成されます。

Au111Surface_BD.BAND Au111Surface_BD.Band49_1 Au111Surface_BD.Band50_1 Au111Surface_BD.Band51_1 Au111Surface_BD.Band52_1 Au111Surface_BD.Band53_1 Au111Surface_BD.Band54_1 Au111Surface_BD.Band55_1 Au111Surface_BD.Band56_1 Au111Surface_BD.Band49_2 Au111Surface_BD.Band50_2 Au111Surface_BD.Band51_2 Au111Surface_BD.Band52_2 Au111Surface_BD.Band53_2 Au111Surface_BD.Band54_2 Au111Surface_BD.Band55_2 Au111Surface_BD.Band56_2 Au111Surface_BD.AMulPBand Au111Surface_BD.AMulPBand_s Au111Surface_BD.AMulPBand_p Au111Surface_BD.AMulPBand_p1 Au111Surface_BD.AMulPBand_p2 Au111Surface_BD.AMulPBand_p3 Au111Surface_BD.AMulPBand_d

```
Au111Surface_BD.AMulPBand_d1
Au111Surface_BD.AMulPBand_d2
Au111Surface_BD.AMulPBand_d3
Au111Surface_BD.AMulPBand_d4
Au111Surface_BD.AMulPBand_d5
Au111Surface_BD.plotexample
Au111Surface_BD.atominfo
temporal_12345.input
```

例として、以下のコマンドを実行すると、図 67(a) に示す Au(111) 表面のラシュバスピン分裂のスピン テクスチャが得られます。

% gnuplot Au111Surface_BD.plotexample



バンド分散でのスピンテクスチャの情報を得るため、次のように解析を実行します。53.6 MulPCalc.

Figure 67: (a) Au(111) 表面のラシュバスピン分裂を示すバンド分散。この図はバンドファイル「Au111Surface_BD.BAND」とプロット例ファイル「Au111Surface_BD.plotexample」 により作成。(b) Au(111) 表面の各原子に分解された k 空間スピン密度行列。この図は MulPop ファイル「Au111Surface_BD_MC.MulPop」により作成。円は各 k 点での α と β のスピンの電子数の差を表す。半径と色はそれぞれその大きさと符合を反映。この図はプロット例のファイル「Au111Surface_BD_MC.plotexample」により作成。

出力ファイル

各出力ファイルの内容を以下に説明します。

BAND ファイル

このファイルはバンド分散のデータを記録します。第一、第二列は k パス上の k 点間の距離 (単位は $Bohr^{-1}$) と固有エネルギー (単位は eV) に相当します。

Band_YY_Z ファイル

このファイルは各ブランチ (バンドインデックス YY、k パスインデックス Z)のバンド分散のデータを 記録します。このファイルの内容の表記は BAND ファイルと同一です。

AMulPBand ファイル

このファイルは原子ごとに分解されたk空間スピン密度行列のデータを記録します。そして、MulPCalc53.6 で解析できます。

AMulPBand_xx ファイル

このファイルは原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列の xx 成分のデータを記録します。このファ イルは MulPCalc53.6 で解析できます。

plotexample ファイル

このファイルは gnuplot スクリプトの例を提供します。

atominfo ファイル

このファイルは格子ベクトルと PAO の情報を提供します。

temporal_12345.input

このファイルは scfout ファイルに記録された入力ファイルのコピーです。

(オプショナル)原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列の解析

MulPCalcを用いて AtomMulP ファイルまたは AMulPBand_xx ファイルから原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列を解析するためのデータが抽出できます。ディレクトリ「source」中で以下のよう にコンパイルし、実行ファイルを作成して下さい。

% make MulPCalc

コンパイルが成功すると、実行ファイル「MulPCalc」がディレクトリ「work」に生成します。一例として、Au(111) 表面の Rashba スピン分裂のバンド分散に着目し、原子寄与に分解された k 空間スピン 密度行列を解析します。最初に、以下のキーワードを入力ファイル「Au111Surface_BD.dat」に追加します。

Filename.atomMulP Au	u111Surface_BD.AMulPBand	#	default:	default	
Filename.xyzdata A	Au111Surface_BD_MC	#	default:	default	
Num.of.Extract.Atom	3	#	default:	1	
Extract.Atom	1 2 3	#	default:	1 2	(Num.of.Extract.Atom)

ポストプロセスコード「kSpin」による計算後に、原子寄与に分解された k 空間スピン密度行列を以下のように解析できます。

% ./MulPCalc Au111Surface_BD.dat

加えて、以下のキーワードを設定することで、図の見た目を調整することができます。

MulP.Vec.Scale	0.1	0.1	0.1	#	default:	1.0	1.0	1.0
Data.Reduction		1		#	default:	1		

*MulPCalc*を実行後に、ディレクトリ「work」に以下の出力ファイルが得られます。

Au111Surface_BD_MC.MulPop Au111Surface_BD_MC.MulPop49 Au111Surface_BD_MC.MulPop50 Au111Surface_BD_MC.MulPop51 Au111Surface_BD_MC.MulPop52 Au111Surface_BD_MC.MulPop53 Au111Surface_BD_MC.MulPop54 Au111Surface_BD_MC.MulPop55 Au111Surface_BD_MC.MulPop56 Au111Surface_BD_MC.plotexample

例として、以下のコマンドを実行すると、図 67(b) が得られます。これは原子寄与に分解された k 空間 スピン密度行列の情報を Au(111) 表面の Rashba スピン分裂バンド上に加味して表示したものです。

% gnuplot Au111Surface_BD_MC.plotexample

MulPCalc に関するさらなる情報は 53.6 節も参照してください。

53.5 MulPOnly: 利用者指定の k 点での計算

ポストプロセスコード「kSpin」には k 空間スピン密度行列を計算する4つの方法があります。これはキー ワード「Calc.Type」で指定します。ここでは4つの方法のうち、*MulPOnly*を説明します。*MulPOnly* の機能を用いて指定する k 点とバンドに対して k 空間スピン密度行列を計算できます。*MulPOnly* と *MulPCalc*を用いたスピンテクスチャの解析例として Au(111) 表面のモデルをここで説明します。まず、 ディレクトリ「work」中に収容された入力ファイル「Au111Surface_MO.dat」を用いて OpenMX 計算 を実行します。次に、*MulPOnly*の機能を用いてスピンテクスチャを計算できます。「kSpin」の実行に 関連するキーワードを以下に列挙します。これらのキーワードは入力ファイル「Au111Surface_MO.dat」 中に記載されています。また入力ファイル「Au111Surface_MO.dat」はディレクリ「work」中に収容さ れています。

kSpin に関連するキーワードの一覧

Filename.scfout	Au111Surface.scfout	
Filename.outdata	Au111Surface_MO	
Calc.Type	MulPOnly	<pre># FermiLoop, GridCalc,</pre>
		BandDispersion, or MulPOnly
		default: MulPOnly

Filename.kpointdata kpoint.in

加えて、キーワード「Filename.kpointdata」で指定される名前のもう一つの入力ファイルが必要です。 このファイルには k 空間スピン密度行列を計算する k 点を記述します。設定ファイルの例として、ディ レクトリ「work」中にファイル「kpoint.in」が収容されています。そのフォーマットは以下の規則に従 います。第一行に k 空間スピン密度行列を計算する k 点の数を指定します。次に、k 点 (第一、第二、第 三列がそれぞれ k_x , k_y , k_z に対応) とそのバンドインデックス (第四列)を指定します。逆空間の Γ 点を 中心とする円周上の k 点で k 空間スピン密度行列を計算する場合には、以下のコマンドを実行すること で「kpoint.in」を生成できます。
rm -f kpoint.in && awk '{for (i=0; i<\$1; i++){printf "%17.14f %17.14f %17.14f %d\n", 0, \$2*cos(2*atan2(0, -1)/\$1*i), \$2*sin(2*atan2(0, -1)/\$1*i), \$3 >> "buffer"}; sum*=\$1; if (!\$1) {print sum; exit}}' - > N.in && cat N.in buffer >> kpoint.in && rm N.in buffer

その後で、次の値を入力して下さい。

40 0.18 55	<- # of k-points; radius; band index
40 0.15 56	<- # of k-points; radius; band index
0	<- exit

この手続きが正常に終了すると「kpoint.in」が生成されます。「kpoint.in」には以下の情報が保存されていますので、確認して下さい。

キーワードの仕様

. .

それぞれのキーワードの仕様を以下に説明します。

Filename.scfout

「kSpin」によって読み込まれる scfout ファイルの名前を指定します。

Filename.outdata

出力ファイルの名前を指定します。このキーワードは OpenMX 計算のキーワード「System.Name」に 相当します。

Calc.Type

FermiLoop, *GridCalc*, *BandDispersion*, もしくは *MulPOnly*のいずれかを選択します。デフォルトの設定は *MulPOnly*です。ここでは *MulPOnly*を選択します。

Filename.kpointdata

k 点とバンドインデックスのデータファイルの名前を指定します。

計算

ポストプロセスコード「kSpin」により原子ごとに分解されたk空間スピン密度行列が計算されます。ディレクトリ「work」に移動して、計算を以下のとおり実行します。

% ./kSpin Au111Surface_MO.dat

または、MPI計算では、例えば、4MPIプロセスの場合は以下のとおり実行します。

% mpirun -np 4 ./kSpin Au111Surface_MO.dat

計算の進行に伴い、以下の標準出力が得られます。

Input filename is "Au111Surface.scfout"

Start "MulPOnly" Calculation (6).

 上記のとおり計算が正常に完了すると、ディレクトリ「work」に以下の出力ファイルが生成されます。

Au111Surface_MO.AtomMulP Au111Surface_MO.MulP_s Au111Surface_MO.MulP_p Au111Surface_MO.MulP_p1 Au111Surface_MO.MulP_p2 Au111Surface_MO.MulP_p3 Au111Surface_MO.MulP_d1 Au111Surface_MO.MulP_d1 Au111Surface_MO.MulP_d2 Au111Surface_MO.MulP_d3 Au111Surface_MO.MulP_d3 Au111Surface_MO.MulP_d4 Au111Surface_MO.MulP_d5 Au111Surface_MO.atominfo temporal_12345.input

<u>出力ファイル</u>

各出力ファイルの内容を以下に説明します。

AtomMulP ファイル このファイルは原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列のデータを記録します。MulPCalc53.6の機能により解析できます。

MulP_xx ファイル

このファイルは原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列の xx 成分のデータを記録します。*MulP-Calc*53.6の機能により解析できます。

atominfo ファイル このファイルは格子ベクトルと PAO の情報を提供します。

temporal_12345.input このファイルは scfout ファイルに記録された入力ファイルのコピーです。

原子ごとに分解された k 空間スピン密度行列の解析

*MulPCalc*を用いて AtomMulPBand ファイルまたは AMulPBand_xx ファイルから原子ごとに分解 された k 空間スピン密度行列を解析するためのデータが抽出できます。ディレクトリ「source」中で以 下のようにコンパイルし、実行ファイルを作成して下さい。 % make MulPCalc

コンパイルが成功すると、実行ファイル「MulPCalc」がディレクトリ「work」に生成します。一例として、Au(111) 表面の Rashba スピン分裂のバンド分散に着目し、原子寄与に分解された k 空間スピン 密度行列を解析します。最初に、以下のキーワードを入力ファイル「Au111Surface_MO.dat」に追加します。

Filename.atomMulP Au111Surface_MO.AMulPBand# default: defaultFilename.xyzdataAu111Surface_MO_MC# default: defaultNum.of.Extract.Atom3# default: 1Extract.Atom1 2 3# default: 1 2 ... (Num.of.Extract.Atom)Calc.Type.3mesh2# default: 1

ポストプロセスコード「kSpin」による計算後に、原子寄与に分解されたk空間スピン密度行列を以下のように解析できます。

% ./MulPCalc Au111Surface_MO.dat

加えて、以下のキーワードを設定することで、図の見た目を調整することができます。

MulP.Vec.Scale	0.1	0.1	0.1	#	default:	1.0	1.0	1.0
Data.Reduction		1		#	default:	1		

*MulPCalc*を実行後に、ディレクトリ「work」に以下の出力ファイルが得られます。

Au111Surface_MO_MC.MulPop Au111Surface_MO_MC.MulPop55 Au111Surface_MO_MC.MulPop56 Au111Surface_MO_MC.plotexample

例として、以下のコマンドを実行すると、図 68 が得られます。これは Au(111) 表面のラシュバスピン 分裂のスピンテクスチャを表示したものです。

% gnuplot Au111Surface_MO_MC.plotexample

MulPCalc に関するさらなる情報は 53.6 節も参照してください。

53.6 MulPCalc: 原子ごとに分割された k 空間スピン密度行列

*MulPCalc*は「kSpin」で得られた AtomMulP ファイル、MulP_xx ファイル、AMulPBand ファイル、または AMulPBand_xx ファイルからマリケン密度を解析するためのデータを抽出します。まず、ディレクトリ「source」においてコンパイルを行い、実行ファイルを生成して下さい。

% make MulPCalc

コンパイルに成功すると、実行ファイル「MulPCalc」がディレクトリ「work」に生成されます。最初 に、ディレクトリ「work」中に収容された入力ファイル「SiC_Primitive_BD.dat」を用いて OpenMX 計 算を実行します。SCF 計算の後に以下のキーワードを設定し、*BandDispersion* 計算をポストプロセス コード「kSpin」を用いて実行します。



Figure 68: Au(111) 表面の Rashba 分裂に対する Γ 点周辺のスピンテクスチャ。外側と内 側のスピンテクスチャはそれぞれ 55 番と 56 番のバンドに対応。ベクトルは MulPop ファイル 「Au111Surface_MO_MC.MulPop」に記録された各 k 点でのパウリ行列固有ベクトルによる σ_x , σ_y , σ_z の期待値。この図はプロット例のファイル「Au111Surface_MO_MC.plotexample」より作成。

Filename.scfout	<pre>sic_primitive.scfout</pre>	#	default: default
Filename.outdata	<pre>sic_primitive_BD</pre>	#	default: default
Calc.Type	BandDispersion	#	default: MulPOnly
Energy.Range	-10.0 6.0	#	eV; default: 0.0 0.0

次に、*MulPCalc*を以下のように実行します。

% ./MulPCalc SiC_Primitive_BD.dat

炭素原子の pz 軌道のデータを抽出するために以下の設定を用います。

Filename.atomMulP	sic_primitive_BD.AMulPBand	_p3 # default:	default
Filename.xyzdata	sic_primitive_BD_MC_C_p3	<pre># default:</pre>	default
Num.of.Extract.Ato	m 1	# default: 1	
Extract.Atom	1	# default: 1 2	2 (Num.of.Extract.Atom)

加えて、以下のキーワードを設定することで、図の見た目を調整することができます。

MulP.Vec.Scale	0.1	0.1	0.1	# (default:	1.0	1.0	1.0
Data.Reduction		2		# (default:	1		

図 69 は *MulPCalc*を数回同様に実行し、MulPop ファイルの第 11、第 4、第 5 列を gnuplot の円スタイ ルを用いてプロットすることで得ることができます。



Figure 69: SiC プリミティブセル (不完全さの無い二次元八二カム構造)の原子分割された k 空間 スピン密度行列。この系はバンドアンフォールディング法 52 章、バンド構造の解析 52.1 節で説明 されたものである。緑色と紫色の円はそれぞれ炭素原子の s, p_x , p_y 軌道を占有する電子数と p_z 軌 道を占有する電子数を表す。半径は電子数の大きさを反映。本データは AMulPBand_xx ファイルの sic_primitive_BD.AMulPBand_s, sic_primitive_BD.AMulPBand_p1, sic_primitive_BD.AMulPBand_p2, または sic_primitive_BD.AMulPBand_p3 または sic_primitive_BD.AMulPBand_p から *MulPCalc* を用 いて抽出された。

もう一つの入力ファイル例「Au111Surface23_FL.dat」がディレクトリ「work」に収容されていま す。これは清浄なAu(111) 表面のスラブモデルの計算を行うものです。この計算は他の計算例よりも多 くの計算時間を要すことに注意して下さい。SCF 計算と後続の *FermiLoop* 計算によって、バンド分散と スピンテクスチャが得られます。図 70(a) と 70(b) にその計算結果を図示します。ここで、二つの組の Rashba バンドが現れています。スラブモデルにおける上下の表面での表面状態が縮退しているためで す。*MulPCalc* を用いれば片側の表面原子の寄与のみを解析することが可能となります。片側の表面か らのスピンテクスチャの寄与を図 70(c) に示します。この結果は *MulPCalc* の機能を用いて得られたも のです。

それぞれのキーワードの仕様を以下に説明します。

MulPCalc に関連するキーワードの一覧 (全 Calc.Type 共通)

Filename.atomMulP

AtomMulP ファイル、MulP_xx ファイル、AMulPBand ファイル、または AMulPBand_xx ファイルの 名前を指定します。

Filename.xyzdata

出力ファイルの名前を指定します。キーワード「System.Name」に相当します。

Num.of.Extract.Atom

MulPCalc が抽出すべきマリケン密度のデータの原子の数を指定します。デフォルト値は1です。

Extract.Atom

MulPCalc が抽出すべきマリケン密度のデータの原子を指定します。デフォルト値は「12… キーワード「Num.of.Extract.Atom」の値」です。

Data.Reduction

MulPCalc が抽出すべきマリケン密度のデータの k 点の数を指定します。このキーワードは k 点の間引き、あるいはデータサイズの縮小に有用です。

MulP.Vec.Scale

スピンテクスチャを表現するベクトルを描く縮尺を指定します。例えば、値「0.1 0.2 0.3」は *x* 軸に 0.1、 *y* 軸に 0.2、*z* 軸に 0.3 の縮尺を指定します。

Filename.outdata

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

Calc.Type

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

MulPCalc に関連するキーワードの一覧 (Calc.Type = FermiLoop or GridCalc)

Search.kCentral

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

Calc.Type.3mesh

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

Energy.Range

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

MulPCalc に関連するキーワードの一覧 (Calc.Type = BandDispersion)

Energy.Range

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

Band.Nkpath

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

Band.kpath

「kSpin」の計算と同一の設定として下さい。

MulPCalc に関連するキーワードの一覧 (Calc.Type = MulPOnly)

Calc.Type.3mesh

計算する面を指定します。1, 2, 3の値はそれぞれ $k_a k_b, k_b k_c, k_c k_a$ 面に対応しています。デフォルト値は 1 です。

出力ファイル

「MulPCal」による計算が正常に完了すると、以下の出力ファイルが作業ディレクトリに生成されます。

MulPop ファイル

このファイルは各 k 点に対するデータを記録します。第1、第2、第3列はそれぞれ k 点のÅ⁻¹ 単位での k_x, k_y, k_z 成分に対応します。第4列は eV 単位でのエネルギーに対応し、第5、第6、第7列はそれぞ れ電子の総数、 α スピンの数、 β スピンの数に対応します。第8、第9、第10列はそれぞれ Bohr 磁子単 位での $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z$ の期待値に対応します。もし、キーワード「Calc.Type」の設定が「BandDispersion」 ならば第11列は Bohr⁻¹ 単位で k パスに沿った k 点の距離に対応します。

MulPop_YY ファイル

このファイルはバンドインデックス YY の各 k 点のデータを記録します。このファイルの内容の表記は MulPop ファイルと同一です。

plotexample ファイル

もしキーワード「Calc.Type」の値が「GridCalc」ならば、このファイルは gnuplot スクリプトとして活用できます。

plotexample_YY ファイル

もしキーワード「Calc.Type」の値が「GridCalc」ならば、このファイルはバンドインデックス YYの バンドの gnuplot スクリプトとして活用できます。

53.7 kSpinのMPI 並列計算

ポストプロセスコード「kSpin」は MPI 並列計算が実行可能です。詳細を以下に説明します。

FermiLoop

k 点メッシュ上の k 点に対して MPI 並列化されていますが、第一段階の探索でメッシュ分割された領域において第二段階の探索が行われます。第二段階の探索は、第一段階の探索で計算に必要な領域に対して逐次的に行われるので、適切な MPI プロセスの数の最大値はキーワード「k-plane.2ndStep」の第 ーと第二の値の積です。計算の大部分は第二段階の探索に費やされることに注意してください。

GridCalc

k 点メッシュ上の k 点に対して MPI 並列化されているので、適切な MPI プロセスの数の最大値はキー ワード「k-plane.1stStep」の第一と第二の値の積です。

BandDispersion

各 k 点経路上の k 点に対して MPI 並列化されているので、適切な MPI プロセスの数の最大値は各 k 点経路上で設定された k 点数の最大値です。

MulPOnly

k 点に対して MPI 並列化されているので、適切な MPI プロセスの数の最大値は指定された k 点の数です。



(a) Au(111) 表面のラシュバスピン分裂のバンド分散。バンドファイル Figure 70: 「Au111Surface23.Band」をプロット。BandDispersion 53.4 節を参照のこと。赤色の曲線は Rashba バンドを表し、バンドインデックス 413, 414, 415, 416 に対応。色付けは GNUBAND ファイ ル「Au111Surface23.GNUBAND」を変更するか、OMXTool [146] を利用することで再現できま す。 Γ 点まわりでの Rashba スピン分裂のスピンテクスチャ。(b) Au(111) の両表面の寄与、(c) Au(111)の片表面の寄与。ベクトルは各 k 点でのパウリ行列のベクトルの期待値を表し、以下の Pxyz_YY ファイルにそれぞれ記録: Au111Surface23_FL.Pxyz_413, Au111Surface23_FL.Pxyz_414, Au111Surface23_FL.Pxyz_415, Au111Surface23_FL.Pxyz_416, Au111Surface23_FL_MC.Pxyz_413, Au111Surface23_FL_MC.Pxyz_414, Au111Surface23_FL_MC.Pxyz_415 Au111Surface23_FL_MC.Pxyz_416。閉曲線は一定エネルギー面を表し、以下の FermiSurf_YY ファイルにそれぞれ記録: Au111Surface23_FL.FermiSurf_413, Au111Surface23_FL.FermiSurf_414, Au111Surface23_FL.FermiSurf_416, Au111Surface23_FL.FermiSurf_415, Au111Surface23_FL_MC.FermiSurf_413, Au111Surface23_FL_MC.FermiSurf_414, Au111Surface23_FL_MC.FermiSurf_415, Au111Surface23_FL_MC.FermiSurf_416。中心の十字 点は Γ に対応。これらの図はそれぞれプロット例ファイル Au111Surface23_FL.plotexample と Au111Surface23_FL_MC.plotexample により作成。

54 スピン螺旋計算

ノンコリニア DFT 法の枠組みにおいて(ただしスピン軌道相互作用なし)、スピン螺旋構造を持つ磁性 体の計算が可能です。スピン螺旋計算は一般化ブロッホの定理[79,80,86,87]に基づいています。スピン軌道相互作用は一般化ブロッホ定理で課される螺旋対称性を壊してしまうため、スピン軌道相互作用 を含めたスピン螺旋計算はサポートされていないことに留意して下さい。本機能を用いて発表を行う際 には、文献[79,80]を引用して頂けますと幸いです。

本計算を実行する際には、以下のキーワードを設定してください。

scf.SpinPolarization	NC	#	On Off M	IC
scf.Generalized.Bloch	on	#	On Off,	default=off
scf.SpinOrbit.Coupling	off	#	On Off.	default=off

スピン螺旋構造を指定するため、二つのパラメータを与える必要があります。第一のパラメータは円錐 角です。2 種類の螺旋構造が考えられ、一つは円錐螺旋 ($0 < \theta < 90$)、他方は平坦螺旋 ($\theta = 90$)です。 ここで θ は円錐角度で、 θ は磁性原子に対して指定しなければなりません。図 71(a) に示されるように、 OpenMX ではスピン磁気モーメントの方位を用いて円錐 (オイラー)角 θ が指定されます。円錐 (オイ ラー)角を指定する方法に関しては「ノンコリニア DFT」に関する 34 章に記載されています。例えば円 錐 (オイラー)角は以下のように指定できます。

<Atoms.SpeciesAndCoordinates
1 Fe 0.0 0.0 0.0 10.0 6.0 90.0 0.0 0.0 1 off
Atoms.SpeciesAndCoordinates>

上記の例では、8 列目で $\theta = 90$ 度と指定することで、平坦螺旋構造を与えています。加えて、9 列目で φ の初期角度を指定することもできます。円錐角を固定するためには、「ノンコリニアスピン方位に対す る制約条件付き DFT に関する」38 章の拘束法も利用可能です。



Figure 71: (a) 磁性原子の円錐 (オイラー) 角の定義。(b) サイト *i* の原子の磁性モーメント $M_i = M_i \{ \cos(\mathbf{q} \cdot \mathbf{R}_i + \varphi_0) \sin(\theta_i) + \sin(\mathbf{q} \cdot \mathbf{R}_i + \varphi_0) \sin(\theta_i) + \cos(\theta_i) \}.$

スピン螺旋構造の第二のパラメータは螺旋ベクトル q であり、次のキーワードで指定されます。

Spin.Spiral.Vector 0.0 0.0 0.0 # q1 q2 q3

上記のフォーマットにおいて、螺旋ベクトルは逆格子ベクトルで張られた規格化座標で指定されます。 第1、第2、第3列により、逆格子ベクトル $\tilde{a}_1, \tilde{a}_2, \tilde{a}_3$ に対する螺旋ベクトルの成分を指定します。その際に、原子サイト*i*でのスピン角度は次式で与えられます。

$$M_i = M_i \{ \cos(\mathbf{q} \cdot \mathbf{R}_i + \varphi_0) \sin(\theta_i) + \sin(\mathbf{q} \cdot \mathbf{R}_i + \varphi_0)) \sin(\theta_i) + \cos(\theta_i) \}.$$

格子ベクトルの並進に伴い、各原子サイトのスピン角度はこの式に基づき回転します。スピン螺旋計算の例として、図 72 に FCC 構造の Fe の計算結果を示します。直交座標($2\pi/a$ の単位)で定義された (0, 0, 0.6) と (0.2, 0, 1) に安定な螺旋状態が出現します。スピン螺旋計算の信頼できる結果を得るためには適切なパラメータの設定が必要です。例えば k 点の数、軌道の数、カットオフ半径、そしてカットオフエネルギーなどの選択です。これらの議論が文献 [87] にありますので、参照して下さい。また、 キーワード「sef.Mixing.Type」により様々な電荷密度混合法が利用できますが、スピン螺旋計算には「RMM-DIISH」の使用を推奨します。一連のベンチマーク計算から、「RMM-DIISH」は他の混合法よりも速やかに収束することが分っています。詳細な説明は SCF 収束の 13 章を参照して下さい。



Figure 72: スピン螺旋計算によって得られた Fe (FCC 構造)の (a) 全エネルギーと (b) 磁気モーメント。q は直交座標で定義された螺旋ベクトル。計算に用いた入力ファイル「Fefcc-SpinSpiral.dat」はディレクトリ「work」に収容。

55 Fukui-Hatsugai-Suzukiの方法によるチャーン数とベリー曲率の計算

55.1 概要

ポストプロセスコード「calB」を用いてバンドのチャーン数とベリー曲率が計算できます。この計算は Fukui-Hatsugai-Suzukiの方法[81,85]に基づいており、隣接k点のKohn-Sham軌道間の重なり行列要 素を用いてチャーン数とベリー曲率が計算されます。本機能はノンコリニアDFT計算のみに対応して おり、コリニアDFT計算では利用可能でないことに注意して下さい。本機能を用いて発表を行う際に は、文献[84]を引用して頂けますと幸いです。

チャーン数は整数値のトポロジカル不変量であり、物質のバンドのトポロジーを特徴づけます。有限 のチャーン数 *C* をもつ系では、次式で定義される異常ホール伝導度が誘起されます。

$$\sigma_{xy} = -\frac{e^2}{h}C \ (C = 1, 2, 3, \cdots)$$

ベリー曲率 $\mathbf{F}_n = \nabla \times \mathbf{A}_n, \ \mathbf{A}_n = -i \langle u_{n\mathbf{k}} | \frac{\partial}{\partial \mathbf{k}} | u_{n\mathbf{k}} \rangle$ を用いて、チャーン数は次式で定義されます。

$$C = \frac{1}{2\pi} \sum_{n}^{\text{occ.}} \int F_{nz} dk^2$$

Fukui-Hatsugai-Suzuki の方法 [81] では、次式で定義される重なり行列 U を用います。

$$U_{\Delta \mathbf{k}}(\mathbf{k}) = \det \langle u_n(\mathbf{k}) | u_m(\mathbf{k} + \Delta \mathbf{k}) \rangle$$

この重なり行列 U が次式で定義されるベリー接続 $\mathbf{A}(\mathbf{k})$ とベリー曲率 $F(\mathbf{k})$ を計算するための中心的な 役割を担います。

$$\mathbf{A}(\mathbf{k}) = \operatorname{Im} \log U_{\Delta \mathbf{k}}(\mathbf{k}),$$

$$F(\mathbf{k}) = \operatorname{Im} \log U_{\Delta k_1}(\mathbf{k}) U_{\Delta k_2}(\mathbf{k} + \Delta k_1) U_{\Delta k_1}^{-1}(\mathbf{k} + \Delta k_2) U_{\Delta k_2}^{-1}(\mathbf{k})$$

図 73 に示す様に、ベリー曲率は第一ブリルアンゾーンに導入された等間隔格子上での各「プラケット」 において以下の公式で計算されます。ここで、プラケットはブリルアンゾーンのメッシュ状に切られた 領域を意味します。

 $F(\mathbf{k}) = \operatorname{Im} \log U_{12} U_{23} U_{34} U_{41}$

ベリー曲率の周回積分の全ての寄与を総和して、チャーン数が計算されます。

$$C = \frac{1}{2\pi} \sum_{\mathbf{k}}^{\mathrm{BZ}} F(\mathbf{k})$$

55.2 実例

例として、図 74 にグラフェンのベリー曲率を示します。ベリー曲率の大きさの絶対値はバンドギャップ の逆数の平方におおよそ比例するので、スピン軌道相互作用を考慮すれば重いディラック点が出現する K 点と K' 点の周辺に大きなベリー曲率が出現します。ディレクトリ「work」に収容された入力ファイ ル「Graphene-Chern.dat」を用いて、計算の手続きを以下に説明します。



Figure 73: ベリー曲率の計算法、各プラケットにおいて周回積分を実施。

SCF 計算

ディレクトリ「work」に収容された入力ファイル「Graphene-Chern.dat」を用いてグラフェンに対して SCF計算を実行します。キーワード「HS.fileout」を以下のように「on」に設定します。

HS.fileout on #on|off, default=off

SCF 計算が正常に終了すると、出力ファイル「Graphene-Chern.scfout」が得られます。

チャーン数とベリー曲率の計算

次に、ポストプロセスコード「calB」を用いてチャーン数とベリー曲率の計算に進みます。ディレクト リ「source」に移動し、コード「calB」のコンパイルを以下の様に実行します。

% make calB

コンパイルが正常に完了するとディレクトリ「work」内に実行ファイル「calB」が生成されます。次に、 ディレクトリ「work」に移動して、以下のように「calB」を実行します。

% ./calB graphene.scfout

or

% ./calB graphene.scfout < calB.in > calB.out

or

% mpirun -np 4 ./calB graphene.scfout < calB.in > calB.out

calB のパラメタ

以下の内容を持つ入力ファイル「calB.in」を用意します。

1 0

0 0 1

100 100

各パラメータの意味を以下に説明します。

- 第一行に、すべてのバンドのベリー曲率の総和を計算するか、それとも分離したバンドについて ベリー曲率を計算するか指定します。前者なら1を、後者なら0を設定します。後者の設定はバン ドの集合が完全に他バンドから分離している場合のみに有効です。
- 第二行に、計算に考慮するバンドの数を指定します。バンド数は下端のバンドから数えます。0の 指定ですべての価電子バンドが考慮されます。
- 第三行に、逆空間で計算される平面を指定します。例えば、「001」は k₃ = 0 平面の指定に相当 します。
- 第四行に、メッシュの数を指定します。グラフェンの例では第三行で指定された $k_3 = 0$ 平面が 100×100 のメッシュで分割されます。

出力ファイル

「calB」の計算の後に以下のファイルが生成されます。

• BerryC*.dat

計算で得られたベリー曲率とチャーン数がこのファイルに記録します。ここでファイル名の BerryC の前の「*」は含まれるバンドの数です。グラフェンの例では「*」は「8」です。ベリー曲率の単位はÅ⁻² です。グラフェンの例における「BerryC8.dat」の一部を以下に示します。

```
#Mesh Number:100*100
#Band Number:8
#ChernNumber = 0.000000
#k1 k2 F (ang-2)
0.005000 0.005000 -1.59799534e-05
0.015000 0.005000 1.94455630e-05
0.025000 0.005000 3.58476883e-05
....
```

以下のように Gnuplot を用いてデータを可視化できます。

% splot "BerryC8.dat" w l

図 74 は $k_3 = 0$ 平面でのベリー曲率を示します。

• temporal_12345.input

このファイルは入力ファイルのコピーです。これは SCF 計算に用いられたもので、scfout ファイルから再構築されました。



Figure 74: グラフェンのバンドのベリー曲率

56 Fukui-Hatsugaiの方法による Z₂ 不変量の計算

56.1 概要

ポストプロセスコード「Z2FH」を用いて系の Z₂ 不変量が計算できます。Fukui と Hatsugai によって 提案されたベリー位相に基づく方法 [81, 82] で系の Z₂ 不変量が計算されます。本機能はノンコリニア DFT 計算のみに対応しており、コリニア DFT 計算では利用可能でないことに注意して下さい。また、 磁性系は現状の実装では扱うことが出来ません。本機能を用いて発表を行う際には、文献 [84] を引用し て頂けますと幸いです。

 Z_2 不変量は0または1の値となるトポロジカル不変量で、時間反転対称性がある非磁性な系で定義 されます。 $Z_2 = 1$ と $Z_2 = 0$ はそれぞれトポロジカル絶縁体と自明な絶縁体に相当します。 Z_2 不変量 は次式で定義されます。

$$Z_2 = \frac{1}{2\pi} \sum_{n=1}^{\text{occ.}} \left(\int_{\partial B} \mathbf{A}_n \cdot d\mathbf{k} - \int_B F_{nz} dk^2 \right) \pmod{2}$$

ここで $\mathbf{A}_n = -i\langle u_{n\mathbf{k}} | \frac{\partial}{\partial \mathbf{k}} | u_{n\mathbf{k}} \rangle$ はベリー接続と呼ばれ、そして、 $\mathbf{F}_n = \nabla \times \mathbf{A}_n$ はベリー曲率と呼ばれます。 積分範囲 $B = [-\frac{\mathbf{G}_1}{2}, \frac{\mathbf{G}_1}{2}] \otimes [0, \frac{\mathbf{G}_2}{2}]$ はブリルアンゾーンの半分だけで十分です。系が時間反転対称性を持つ ため、トポロジカル不変量がプリルアンゾーンの半分で定義されるためです。積分を実行するため、重な り行列 U を用います。これは Fukui, Hatsugai, Suzuki によって提案され $U_{\Delta \mathbf{k}} = \det \langle u_n(\mathbf{k}) | u_m(\mathbf{k} + \Delta \mathbf{k}) \rangle$ と定義されます [81, 82]。ベリー接続とベリー曲率は各「プラケット」において以下のように計算され ます。ここで、プラケットはプリルアンゾーンのメッシュ状に切られた領域を意味します。

$$A_{ab} = \operatorname{Im} \log U_{ab},$$

$$F = \operatorname{Im} \log U_{12} U_{23} U_{34} U_{41}$$

そして、各プラケットの上での整数値の場 $n(=0,\pm1)$ が以下の公式から計算できます。

$$n(\mathbf{k}) = \frac{1}{2\pi} (A_{12} + A_{23} + A_{31} + A_{41} - F)$$

ブリルアンゾーンの半分での全ての n を総和し、合計値の剰余 2 を考慮して、 Z_2 を得ます。 Z_2 不変量 がゲージ非依存であることに注意しなければなりません。しかし、各 n の値はゲージ依存で、これは計 算機環境、コンパイラの最適化レベル、電子構造のわずかな差異によって変化します。A と F の計算の 詳細は「Fukui-Hatsugai-Suzuki の方法によるチャーン数とベリー曲率の計算」の章を参照して下さい。 Z_2 不変量の計算はブリルアンゾーンの半分での周回積分で実行されるので、これは波動関数のゲージの 任意性に依存します。それゆえ、ブリルアンゾーンの半分の境界でゲージを補正しなければなりません。 図 75 に示すように、境界で以下の 3 種類のゲージ補正を考えます。

並進対称性(赤色の部分)

$$|u_n(\mathbf{k} + \frac{\mathbf{G}_1}{2})\rangle = e^{i\mathbf{G}_1 \cdot \mathbf{r}} |u_n(\mathbf{k} - \frac{\mathbf{G}_1}{2})\rangle$$

時間反転対称性(青色の部分)

$$|u_n(\mathbf{k})\rangle = \Theta |u_n(-\mathbf{k})\rangle = |u_n^{*\beta}(-\mathbf{k})\rangle |\alpha\rangle - |u_n^{*\alpha}(-\mathbf{k})\rangle |\beta\rangle$$

$$|u_{2n}(\mathbf{k})\rangle = \Theta |u_{2n-1}(-\mathbf{k})\rangle$$

この計算では積分区間の半分で固有値問題を解きます。言い換えると、図 75 に示したようにブリルア ンゾーンの四分の一です。



Figure 75: ブリルアンゾーンの半分でゲージを修正。波動関数のゲージを補正。赤色の部分では並進 対称性を満たすようにゲージを補正、青色の部分では時間反転対称性を満たすようにゲージを補正、黄 色の部分ではクラマース縮退を満たすようにゲージを補正。

他の領域での積分を実行する際には対称性的に対応するプラケットの波動関数のゲージを固定して波動 関数を生成し、積分を実施します。

三次元系では、ブリルアンゾーンは $k_n = 0, k_n = \frac{G_n}{2}(n = 1, 2, 3)$ の 6 面の時間反転不変な平面を持ちます。よって、図 76 に示すように 6 個の Z_2 不変量 $(x_0, x_\pi, y_0, y_\pi, z_0, z_\pi)$ が定義できます。これらの不変量が以下の方程式を満たすことに注意してください。

$$x_0 + x_\pi = y_0 + y_\pi = z_0 + z_\pi \pmod{2}$$

それゆえ、4個の不変量だけが独立なパラメタとなります。この事実に基づき、三次元系の Z_2 不変量は次式で定義されます。

$$Z_2 = (\nu_0, \nu_1, \nu_2, \nu_3) = (x_0 + x_\pi, x_\pi, y_\pi, z_\pi)$$

特に、 $\nu_0 = 1$ となる系は強いトポロジカル絶縁体と呼ばれます。なぜなら $Z_2 = 1$ の状態がブリルアン ゾーンのすべての方向に現れるからです。

56.2 実例

例として、三次元トポロジカル絶縁体の Bi_2Se_3 の Z_2 不変量を計算します [83]。



Figure 76: 三次元の逆格子空間で定義された 6 個の Z_2 不変量。これらの不変量は $x_0 + x_{\pi} = y_0 + y_{\pi} = z_0 + z_{\pi} \pmod{2}$ を満たす。そして、4 個の不変量が独立なパラメータとして残る。

SCF 計算

ディレクトリ「work」に収容された「Bi2Se3-Z2.dat」を用いて、以下のキーワードを設定し、SCF計算を実行します。

HS.fileout on #on|off, default=off

SCF 計算が正常に終了すると、出力ファイル「Bi2Se3-Z2.scfout」が生成されます。

 Z_2 不変量の計算

ポストプロセスコード「Z2FH」を用いた Z₂ 不変量の計算の前に、ディレクトリ「source」にてコード を以下のようにコンパイルします。

% make Z2FH

コンパイルの後に、実行ファイル「Z2FH」がディレクトリ「work」に生成されます。そして、以下のように Z₂ 不変量の計算に進みます。

% ./Z2FH Bi2Se3-Z2.scfout

or

% ./Z2FH Bi2Se3-Z2.scfout < Z2FH.in > Z2FH.out

or

% mpirun -np 4 ./Z2FH Bi2Se3-Z2.scfout < Z2FH.in > Z2FH.out

```
ファイル「Z2FH.in」は以下のように「Z2FH」の計算に必要とされるパラメータを含んでいます。
```

```
5
  1
  1
上記の最初の実行例では、以下のようにプログラムから対話的に問われます。
   Z2FH:
   code for calculating the Z2 invariant of bulk systems
   by Fukui-Hatsugai method.
   Copyright (C), 2019, Hikaru Sawahata, Naoya Yamaguchi,
   Fumiyuki Ishii and Taisuke Ozaki
   This is free software, and you are welcome to
   redistribute it under the constitution of the GNU-GPL.
   Please cite the following article:
   H. Sawahata, N. Yamaguchi, H. Kotaka and F. Ishii,
   Jpn. J. Appl. Phys. 57, 030309 (2018).
   Mesh1 Number(Half Direction):5
  Calculate All plane?(0:No,1:Yes)1
  Restart?[1:x0,2:xpi,3:y0...]1
  Read the scfout file (Bi2Se3-Z2.scfout)
  ***
  The file format of the SCFOUT file: 3
  And it supports the following functions:
  - jx
  - polB
  - kSpin
  - Z2FH
  - calB
  ***
```

Z2FH のパラメタ

入力ファイル「Z2FH.in」のパラメータを以下に説明します。

 第一行には、積分区間の半分におけるメッシュの数を指定します。言い換えると、第一ブリルアン ゾーンの四分の一の空間です(図 75を参照してください)。5を指定すると、コードはブリルアン ゾーンの四分の一において 5×5のk点メッシュで形成された正方形のプラケットで積分を実施し ます。

- 第二行には、計算する Z₂ 不変量を Z₂ 不変量が定義される 6 個の k 平面の全てで実施するか否か 指定します。もし (ν₀, ν₁, ν₂, ν₃) に対する 4 個の平面でのみ計算したいなら、0 を指定します。反 対に 1 を指定すると、(x₀, x_π, y₀, y_π, z₀, z_π) に対する 6 個の平面のすべての計算に対応します。
- 第三行目には、計算をリスタートする k 面を指定します。数値 1, 2, 3, 4, 5, 6 はそれぞれ $k_1 = 0$, $k_1 = \frac{G_1}{2}, k_2 = 0, k_2 = \frac{G_2}{2}, k_3 = 0, k_3 = \frac{G_3}{2}$ 面に対応します。

出力ファイル

ポストプロセスコード「Z2FH」による計算の後、以下のファイルが生成されます。

• Z2.dat

このファイルは Z_2 不変量の計算結果を記録します。すべての k 面で計算する場合 (第二行で 1 を 指定した場合) は、以下のように 6 個の k 面での Z_2 不変量が第一行に並び、4 個の k 面での Z_2 不 変量が第二行に並びます。

Z2 invariant:(x0,xpi,y0,ypi,z0,zpi)=(1.000000,-0.000000,1.000000,-0.000000,1.000000,-0.000000)
Z2 invariant:(nu0,nu1,nu2,nu3):(1,0,0,0)

 \bullet LCNum*.dat

整数値の場 $n(\mathbf{k})$ のデータファイル。ここで LCNum の前の*は 1 から 6 まで走るインデックスで す。数値 (1,2,3,4,5,6) はそれぞれ $(x_0, x_\pi, y_0, y_\pi, z_0, z_\pi)$ に対応します。4 面のみを計算する場合は、 $(x_\pi, y_\pi, z_0, z_\pi)$ に対応する四つのファイル LCNum(2,4,5,6).dat が生成されます。

• LCNum*.pl

Gnuplot 用のスクリプトファイル。ここで LCNum の前の*は 1 から 6 まで走るインデックスで す。数値 (1,2,3,4,5,6) はそれぞれ ($x_0, x_\pi, y_0, y_\pi, z_0, z_\pi$) に対応します。4 面のみを計算する場合は、 (x_π, y_π, z_0, z_π) に対応する四つのファイル LCNum(2,4,5,6).pl が生成されます。整数値の場 $n(\mathbf{k})$ を 以下のように可視化できます。

% gnuplot LCNum1.pl

• temporal_12345.input

このファイルは入力ファイルのコピーです。これは SCF 計算に用いられたもので、scfout ファイ ルから再構築されました。

例として、 $k_1 = 0$ での整数値の場 $n(\mathbf{k})$ を図 77 に示します。これは上記で説明した手順で「gnuplot LCNum1.pl」として得られます。 $n(\mathbf{k})$ はゲージに依存する値なので、計算環境によっては異なる結果になるかもしれません。他方、 Z_2 不変量は再現されるはずです。

56.3 入力ファイル

参考のため、四つの入力ファイル例がディレクトリ「work」に収容されています。

- Bi2Se3-Z2.dat
 Bi₂Se₃の強いトポロジカル絶縁体の場合
- Bi2Se3_trivial-Z2.dat
 Bi2Se3の自明な絶縁体の場合
- Bi2Se3_weak-Z2.dat
 Bi₂Se₃の弱いトポロジカル絶縁体の場合
- Bi111-Z2.dat

Bi(111) スラブの二次元トポロジカル絶縁体の場合



Figure 77: 整数値の場 $n(\mathbf{k})$ の例。赤い丸は+1 を表し、青い丸は-1 を表し、空白は 0 を表す。 $n(\mathbf{k})$ は ゲージに依存する量なので、計算環境によっては異なる結果になるかもしれません。他方、 Z_2 不変量は 再現されるはずです。

57 内殻電子の絶対束縛エネルギー: XPSの内殻準位のエネルギー

57.1 概要

密度汎関数理論の枠内で金属及び絶縁体の内殻準位の絶対束縛エネルギーを計算できます。ペナルティ汎 関数と厳密クーロン遮蔽法に基づき、内殻準位の絶対束縛エネルギーを計算する一般的な方法が実装さ れています [88]。得られた絶対束縛エネルギーは光電子分光(X-ray Photoelectron Spectroscopy, XPS) 測定で得られた束縛エネルギーと直接に比較することが出来ます。この方法ではスーパーセル間の内殻 ホールによる偽の相互作用は厳密クーロンカットオフ法で回避されます。他方、変分ペナルティ汎関数 法により化学シフト、スピン軌道相互作用、交換相互作用による多重分裂を同等に扱うことを可能にし ます。金属、半導体、絶縁体の8つのケースの内殻電子の絶対束縛エネルギーの計算値は、実験値と比 較して平均絶対誤差が0.4 eV(平均相対誤差は0.16%)であり、汎用的な計算手法であることが実証さ れています [88]。

図 78 に模式的に示すように XPS 測定での励起過程におけるエネルギー保存則を考慮し、気体や固体の内殻準位の絶対束縛エネルギーはそれぞれ次式で与えられます [88]。

$$E_{\rm b}^{\rm (gas)} = E_{\rm f}^{(0)}(N-1) - E_{\rm i}^{(0)}(N), \qquad (12)$$

$$E_{\rm b}^{\rm (bulk)} = E_{\rm f}^{(0)}(N-1) - E_{\rm i}^{(0)}(N) + \mu_0, \qquad (13)$$

ここで、 $E_{i}^{(0)}(N) \ge E_{f}^{(0)}(N-1)$ はそれぞれ DFT で計算された (N-1) 電子系の始状態と N 電子系の終 状態の全エネルギーです。そして、 μ_{0} は始状態の計算から得られた化学ポテンシャルです。 $E_{f}^{(0)}(N-1)$ は文献 [88] で提案された方法で評価されます。他方、 $E_{i}^{(0)}(N)$ は通常のバンド計算から計算されます。 式 (13) はギャップのある系、金属系のNずれでも成り立つ一般的な式ですが、金属では式 (13) は Janak



Figure 78: XPS 測定での試料と分光計に対する模式的なエネルギーダイアグラム。気体系、固体系、 金属系での内殻準位の絶対束縛エネルギーの定義。 の定理 [89] を用いて以下のように変形できます。

$$E_{\rm b}^{\rm (metal)} = E_{\rm f}^{(0)}(N) - E_{\rm i}^{(0)}(N), \tag{14}$$

終状態の計算に対して (N-1) 電子系の代わりに N 電子系の全エネルギー計算に置き換え可能となりま す。この表式は金属系の直観的理解によく合致しています。つまり金属系では内殻ホールの生成後の終 状態を、完全な遮蔽が生じた状態として理解できることになります。

57.2 気体系

内殻準位の絶対束縛エネルギーの計算方法を計算事例を紹介しながら、以下に説明します。 まず C₂H₂ 分子の炭素原子の 1s 状態の束縛エネルギーの計算を実行します。 始状態計算は以下のように実行されます。

% mpirun -np 4 ./openmx C2H2.dat

ここで入力ファイル「C2H2.dat」はディレクトリ「work」中に収容されています。始状態計算では以下のキーワードを指定する必要があります。

scf.coulomb.cutoff	on			#	default	=	off
scf.SpinPolarization	on	or	nc	#	default	=	off

「scf.coulomb.cutoff=on」の場合、厳密クーロン遮蔽法 [91]を用いて a, b, c 軸の三つの方向のすべてに 沿ってスーパーセル間の古典的なクーロン相互作用がカットオフされます。始状態と終状態の計算のど ちらの計算においても、キーワード「scf.SpinPolarization」に「on」または「nc」を指定する必要があ ります。終状態計算では内殻ホールの生成の後に系はスピン分極するため、始状態と終状態の計算の両 方で同一のオプションを使用して下さい。内殻準位の絶対束縛エネルギーを計算するため内殻状態を含 む擬ポテンシャルを使用して下さい。入力ファイル「C2H2.dat」では以下の擬ポテンシャルが指定され ます。

<Definition.of.Atomic.Species

Η	H7.0-s3p2	H_PBE19					
С	C7.0_1s-s4p3d2	C_PBE19_1s					
C1	C7.0_1s_CH-s4p3d2	C_PBE19_1s					
Definition.of.Atomic.Species>							

擬ポテンシャルC_PBE19_1s.vps は1s, 2s, 2p 状態を価電子状態として含みます。C7.0_1s.pao と C7.0_1s_CH の基底セットをそれぞれ始状態と終状態の計算に用います。終状態の計算では内殻ホールによって動径 波動関数が内殻ホールが無い状態に比べて大幅に変形しています。収束した計算結果を得るためには内 殻ホールが存在した状態に対して最適化された基底セットを用いる必要があります。終状態計算の擬ポ テンシャルと基底セットは以下のウェブサイトで利用可能です。

```
https://t-ozaki.issp.u-tokyo.ac.jp/vps_pao_core2019/
```

本ウェブサイト上では現在七つの元素 B, C, N, O, Si, S, Ge, Pt のみのデータが利用可能です。近い将 来に他の元素の擬ポテンシャルと基底関数セットも公開する予定です。 始状態の計算では幾何学構造は以下のように指定されています。

Atoms.Number 4 Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit Ang # Ang|AU <Atoms.SpeciesAndCoordinates # Unit=Ang. 1 C 0.6005 0.000 0.000 3.0 3.0 2 C -0.6005 0.000 0.000 3.0 3.0 3 H 1.8015 0.000 0.000 0.5 0.5 4 H -1.8015 0.000 0.000 0.5 0.5 Atoms.SpeciesAndCoordinates>

原子1の元素種は「C」で、この原子に対して始状態では C7.0_1s.pao を基底セットに割り当てます。次 に説明する終状態の計算では、原子1に対して1s状態の内殻ホールを生成することになります。 終状態計算は以下のように実行します。

% mpirun -np 4 ./openmx C2H2-CH.dat

入力ファイル「C2H2-CH.dat」はディレクトリ「work」中に収容されています。終状態の計算では幾何 構造は以下のように指定されています。

Atoms.Number 4 Atoms.SpeciesAndCoordinates.Unit Ang # Ang|AU <Atoms.SpeciesAndCoordinates # Unit=Ang. 1 C1 0.6005 0.000 0.000 3.0 3.0 2 C -0.6005 0.000 0.000 3.0 3.0 3 H 1.8015 0.000 0.000 0.5 0.5 4 H -1.8015 0.000 0.000 0.5 0.5 Atoms.SpeciesAndCoordinates>

原子位置は始状態計算と厳密に同一です。これは励起過程の際での原子緩和は考慮されないことを意味します。原子1の元素種は「C1」で、この原子に対して終状態では基底関数セットとして「C7.0_1s_CH.pao」を割り当てていることに注意して下さい。終状態計算では以下のキーワードを指定する必要があります。

1.0	<pre># default=0.0</pre>
on	<pre># default = off</pre>
on	<pre># default = off</pre>
	1.0 on on

分子系の終状態が (*N* – 1) 電子系であることを考慮し、キーワード「scf.system.charge」で電子数を 1 つ減らします。次に、スーパーセル間の内殻ホール間の偽の相互作用を回避するため、キーワード 「scf.coulomb.cutoff」を用いて厳密クーロンカットオフ法 [91] を適用します。もし、厳密クーロンカット オフ法が適用されない場合には周期的な帯電系でのクーロン発散を避けるため、電荷補償のために反対 電荷を持つ一様な電荷が自動的に導入されます。この扱いでは偽の相互作用が生じるため、始状態と終 状態の間で全エネルギーの直接の比較ができなくなります。

コリニア								
の場合								
s	1: $s \uparrow$	2: $s \downarrow$						
p	1: $p_x \uparrow$	2: $p_y \uparrow$	3: $p_z \uparrow$	4: $p_x \downarrow$	5: $p_y \downarrow$	6: $p_z \downarrow$		
d	1:	2:	3:	4:	5:			
	$d_{3z^2-r^2}\uparrow$	$d_{x^2-y^2}\uparrow$	$d_{xy}\uparrow$	$d_{xz}\uparrow$	$d_{yz}\uparrow$			
	6:	7:	8:	9:	10:			
	$d_{3z^2-r^2}\downarrow$	$d_{x^2-y^2}\downarrow$	$d_{xy}\downarrow$	$d_{xz}\downarrow$	$d_{yz}\downarrow$			
f	1:	2:	3:	4:	5:	6:	7:	
	$f_{5z^2-3r^2}\uparrow$	$f_{5xz^2-xr^2}\uparrow$	$f_{5yz^2-yr^2}\uparrow$	$f_{zx^2-zy^2}\uparrow$	$f_{xyz}\uparrow$	$f_{x^3-3xy^2}\uparrow$	$f_{3yx^2-y^3}\uparrow$	
	8:	9:	10:	11:	12:	13:	14:	
	$f_{5z^2-3r^2}\downarrow$	$f_{5xz^2-xr^2}\downarrow$	$f_{5yz^2-yr^2}\downarrow$	$f_{zx^2-zy^2}\downarrow$	$f_{xyz}\downarrow$	$f_{x^3-3xy^2}\downarrow$	$f_{3yx^2-y^3}\downarrow$	
ノンコリ								
ニアの場								
合								
s	1:	2:						
	J = 1/2	J = 1/2						
	M = 1/2	M = -1/2						
p	1:	2:	3:	4:	5:	6:		
	J = 3/2	J = 3/2	J = 3/2	J = 3/2	J = 1/2	J = 1/2		
	M = 3/2	M = 1/2	M = -1/2	M = -3/2	M = 1/2	M = -1/2		
d	1:	2:	3:	4:	5:	6:		
	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2		
	M = 5/2	M = 3/2	M = 1/2	M = -1/2	M = -3/2	M = -5/2		
	7:	8:	9:	10:				
	J = 3/2	J = 3/2	J = 3/2	J = 3/2				
	M = 3/2	M = 1/2	M = -1/2	M = -3/2				
f	1:	2:	3:	4:	5:	6:	7:	8:
	J = 7/2	J = 7/2	J = 7/2	J = 7/2	J = 7/2	J = 7/2	J = 7/2	J = 7/2
	M = 7/2	M = 5/2	M = 3/2	M = 1/2	M = -1/2	M = -3/2	M = -5/2	M = -7/2
	9:	10:	11:	12:	13:	14:		
	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2	J = 5/2		
	M = 5/2	M = 3/2	M = 1/2	M = -1/2	M = -3/2	M = -5/2		

キーワード「core.hole.state」により内殻ホールの生成を行う内殻状態を指定します。最初の数はキー ワード「Atoms.SpeciesAndCoordinates」に指定される原子の通し番号です。二番目の記号は対象の *l* チャネルを指定し、「 s_{\perp} 、「 p_{\perp} 、「 d_{\perp} 、「 f_{\perp} を指定できます。最後の数字は軌道インデックスを指定し、1 から 4l + 1 までを指定できます。軌道インデックスと内殻状態の関係は表 12 に与えられています。内 殻ホールの生成を行う対象となる内殻状態は価電子状態として擬ポテンシャルに含まれた *l* チャネルの 最下位の状態であることに注意してください。C₂H₂分子の場合は、擬ポテンシャル C_PBE19_1s.vps は 1s 状態を価電状態として含みます。よって以下の指定は原子 1 の $|1s \uparrow\rangle$ の状態に対して内殻ホールの生 成を行う指定となります。

<core.hole.state 1 s 1 core.hole.state> *s* 状態が対象の状態に選ばれる場合は、「scf.SpinPolarization=on」もしくは「scf.SpinPolarization=nc」 が指定可能です。一方、*p*,*d*,*f* 状態を対象とする場合はスピン軌道相互作用を含めるため 「scf.SpinPolarization=nc」が指定されなければなりません。

始状態と終状態の計算が終わると、出力ファイルから以下の全エネルギーが得られます。

Initial state: -76.787732114928 (Hartree) Final state: -66.084858926233 (Hartree)

そして、式(12)を用いて、束縛エネルギーは以下のとおり計算できます。

$$\begin{split} E_{\rm b}^{\rm (gas)} &= E_{\rm f}^{(0)}(N-1) - E_{\rm i}^{(0)}(N), \\ &= -66.084858926233 - (-76.787732114928) = 10.702873188695 ({\rm Hartree}), \\ &\approx 291.24 ({\rm eV}). \end{split}$$

得られた 291.24 eV の値は実験値の 291.14 eV [90] と良く一致しています。計算の他の例題と計算に用 いた入力ファイルはウェブサイト https://t-ozaki.issp.u-tokyo.ac.jp/vps_pao_core2019/ で公開されてい ますので、参考にして下さい。

57.3 固体系

ここでは TiC 固体を例として、固体系における内殻準位の絶対束縛エネルギーの計算方法を説明します。 始状態の計算は以下のように実行します。

% mpirun -np 112 ./openmx TiC216.dat | tee TiC216.std

ここで、特別なキーワードは指定しませんが、「scf.SpinPolarization=on」としてスピン分極計算が実行 されます。ここでのスピン分極計算は終状態の計算と整合性を取るために実施されています。ただし計 算結果は非磁性となります。ここで用いた入力ファイル「TiC216.dat」はディレクトリ「work」に収容 されています。

終状態の計算は以下のように実行します。

% mpirun -np 112 ./openmx TiC216-CH3.dat | tee TiC216-CH3.std

ここで用いた入力ファイル「TiC216-CH3.dat」はディレクトリ「work」に収容されています。この入力 ファイル中で原子種は以下のように定義されています。

<Definition.of.Atomic.Species

- Ti Ti7.0-s3p2d2 Ti_PBE13
- C C6.0_1s-s3p2d1 C_PBE17_1s
- C1 C6.0_1s_CH-s3p2d1 C_PBE17_1s

Definition.of.Atomic.Species>

そして、以下のように原子種「C1」が原子5に割り当てられます。

Atoms	.Numbe	er 216			
Atoms	.Spec:	iesAndCoordinate	s.Unit Ang # A	ng AU	
<atom< td=""><td>s.Spe</td><td>ciesAndCoordinat</td><td>es</td><td></td><td></td></atom<>	s.Spe	ciesAndCoordinat	es		
1	Ti	0.00000000000	0.000000000000	0.000000000000	6.0 6.0
2	Ti	2.163500000000	2.163500000000	0.000000000000	6.0 6.0
3	Ti	0.00000000000	2.163500000000	2.163500000000	6.0 6.0
4	Ti	2.16350000000	0.000000000000	2.163500000000	6.0 6.0
5	C1	2.163500000000	0.000000000000	0.000000000000	3.0 3.0
6	С	0.00000000000	2.163500000000	0.000000000000	3.0 3.0
7	С	0.00000000000	0.000000000000	2.163500000000	3.0 3.0
8	С	2.16350000000	2.163500000000	2.163500000000	3.0 3.0
• •	• •				

Atoms.SpeciesAndCoordinates>

以下のキーワードを指定することで、原子5の1s状態に内殻ホールが生成されます。

scf.restart	on	
<pre>scf.restart.filename</pre>	TiC216	
<pre>scf.coulomb.cutoff</pre>	on	
<pre>scf.core.hole</pre>	on	
<pre>scf.system.charge</pre>	0.0	<pre># default=0.0</pre>

<core.hole.state 5 s 1

core.hole.state>

終状態の計算において Hartree ポテンシャル V_H は二つの寄与から成ります [88]。次式で定義される周期部分 $V_H^{(P)}$ と非周期部分 $V_H^{(NP)}$ です。

$$V_H(\mathbf{r}) = V_H^{(\mathrm{P})}(\mathbf{r}) + V_H^{(\mathrm{NP})}(\mathbf{r}), \qquad (15)$$

周期部分 $V_H^{(P)}$ は始状態計算で得られた電荷密度を用いて周期境界条件でポアソン方程式を介して計算 されます。キーワード「scf.restart」と「scf.restart.filename」により始状態計算で得られた電荷密度が 指定されます。非周期部分 $V_H^{(NP)}$ は差電荷密度 $\Delta\rho(\mathbf{r}) = \rho_f(\mathbf{r}) - \rho_i(\mathbf{r})$ に対して厳密クーロンカットオフ 法 [91] を用いて計算されます。ここで $\rho_f(\mathbf{r}) \ge \rho_i(\mathbf{r})$ はそれぞれ終状態と始状態の電荷密度です。クーロ ン相互作用のカットオフ半径は最も短い格子ベクトルの長さの半分に設定されます。厳密クーロンカッ トオフ法を有効にするにはキーワード「scf.coulomb.cutoff」を「on」に設定します。内殻ホールはキー ワード「scf.core.hole」と「core.hole.state」により生成されます。今回の場合では、原子 5 の 1s 状態に 内殻ホールが生成されます。TiC 固体は金属であるためキーワード「scf.system.charge」は「0.0」に設 定されていることに注意してください。エネルギーギャップのある系を扱う際には「scf.system.charge」 を「1」に設定しなければなりません。

始状態と終状態の計算を終えると、出力ファイルから全エネルギーが得られます。

Initial state: -10499.900104007471 (Hartree)



Figure 79: (a) ギャップのある系、(b) 半金属 (グラフェン) と金属での内殻ホール間の距離の関数として、最も収束した結果からの相対値として計算された結合エネルギー。(a) と (b) の基準の結合エネル ギーは各系の最大の単位胞に対して、それぞれ式 (13) と (14) から計算。図中で Eq. (B) と Eq. (M) は それぞれ式 (13) と式 (14) に対応。(c) シリコンでの 2p 状態での内殻ホールの生成により誘起された差 電荷密度。単位胞は 1000 原子を含み、内殻ホール間距離は 27.15 Å。

Final state: -10489.553360141708 (Hartree)

そして、式 (14)を用いて、束縛エネルギーが以下のとおり計算できます。

$$\begin{split} E_{\rm b}^{(\rm metal)} &= E_{\rm f}^{(0)}(N-1) - E_{\rm i}^{(0)}(N), \\ &= -10489.553360141708 - (-10499.900104007471) = 10.346743865763({\rm Hartree}), \\ &\approx 281.55({\rm eV}). \end{split}$$

得られた 281.55eV の値は実験値の 281.5eV [92] と比較して良く一致していることが分かります。

ギャップのある系の他の例として、固体シリコンの計算を説明します。始状態と終状態の計算を以下 のように実行します。

% mpirun -np 256 ./openmx Si-4-SOI.dat | tee Si-4-SOI.std % mpirun -np 256 ./openmx Si-4-CH-SOI1.dat | tee Si-4-CH-SOI1.std % mpirun -np 256 ./openmx Si-4-CH-SOI6.dat | tee Si-4-CH-SOI6.std

「Si-4-SOI.dat」は始状態計算に対する入力ファイル、また「Si-4-CH-SOI1.dat」と「Si-4-CH-SOI6.dat」 は終状態計算に対する入力ファイルで、それぞれ $2p_{3/2}(J = 3/2, M = 3/2)$ と $2p_{1/2}(J = 1/2, M = -1/2)$ で指定される内殻準位にホールを導入しています。Si 原子の 2p 状態のスピン軌道相互作用を考慮する ため、以下のキーワードを指定し、ノンコリニア計算を実行します。

<pre>scf.SpinPolarization</pre>	nc	# On Off NC
scf.SpinOrbit.Coupling	on	<pre># On Off, default=off</pre>

始状態と終状態の計算を終えると、出力ファイルから全エネルギーが得られます。

Initial state:				-34820.483255130872	(Hartree)
Final	state	for	SOI1:	-34816.628201335407	(Hartree)
Final	state	for	SOI6:	-34816.601864921540	(Hartree)

化学ポテンシャルは始状態計算から得られます。式 (13)を用いて、「Si-4-CH-SOI1.dat」と「Si-4-CH-SOI6.dat」の束縛エネルギーが以下のとおり計算できます。

For $2p_{3/2}$

$$\begin{split} E_{\rm b}^{\rm (bulk)} &= E_{\rm f}^{(0)}(N-1) - E_{\rm i}^{(0)}(N-1) + \mu_0, \\ &= -34816.628201335 - (-34820.483255131) - 0.201641583 = 3.65341221 ({\rm Hartree}), \\ &\approx 99.41 ({\rm eV}), \end{split}$$

For $2p_{1/2}$

$$\begin{split} E_{\rm b}^{(\rm bulk)} &= E_{\rm f}^{(0)}(N-1) - E_{\rm i}^{(0)}(N-1) + \mu_0, \\ &= -34816.601864922 - (-34820.483255131) - 0.201641583 = 3.6797486({\rm Hartree}), \\ &\approx 100.13({\rm eV}). \end{split}$$

 $2p_{3/2}$ と $2p_{1/2}$ に対する99.41と100.13 eVの束縛エネルギー値は実験値の99.2と99.8eV [92]と比較して良い一致が見られます。ここで、 $2p_{3/2}$ と $2p_{1/2}$ の縮重度は表12に記載されるようにそれぞれ4と2です。ギャップのある系では単位胞サイズに対する絶対束縛エネルギーの収束性は遅いです。図79(a)と(b)ではそれぞれギャップのある系と金属での相対束縛エネルギーを内殻ホール間距離の関数として示しています。ギャップのある系では収束が遅く、収束値を得るために大きなスーパーセルが必要であることを意味しています。一方、金属では小さな内殻ホール間距離において束縛エネルギーが速やかに収束していることが分かります。図79(c)に2p状態への内殻ホールの生成により誘起された固体シリコンでの差電荷密度を示します。内殻ホールにより生成されたポテンシャルを遮蔽するため、内殻ホールから約7Åの周辺まで電荷の再配置が発生します。ギャップのある系で見られた遅い収束は電荷の遠距離に渡る電荷の再配置が原因となっています。他方、金属では電荷の再配置は比較的、狭い範囲に限定され、このため図79(b)に示したように早い収束を達成されています。

計算の他の例題と計算に用いた入力ファイルはウェブサイト https://t-ozaki.issp.u-tokyo.ac.jp/vps_pao_core2019/ で公開されていますので、参考にして下さい。ま た、本手法の応用例(シリコン、ボロフェン、グラフェン上に分散されたプラチナ単原子)が文献[93,94,95] で議論されています。

57.4 入力ファイルの例

参考のため、三つの入力ファイル例がディレクトリ「work」に収容されています。

• C2H2.dat, C2H2-CH.dat

気体の C₂H₂ 分子の炭素原子の 1s 状態の絶対束縛エネルギーの計算

- TiC216.dat, TiC216-CH3.dat
 金属の TiC 固体(216 原子を含むスーパーセル)の炭素原子の1s状態の絶対束縛エネルギーの計算
- Si-4-SOI.dat, Si-4-CH-SOI1.dat, Si-4-CH-SOI6.dat
 シリコン固体のシリコン原子の 2p_{3/2} と 2p_{1/2} 状態の絶対束縛エネルギーの計算

本機能を用いた計算の他の例題と計算に用いた入力ファイルはウェブサイト https://t-ozaki.issp.u-tokyo.ac.jp/vps_pao_core2019/ にありますので参考にして下さい。

58 孤立系のイオン化ポテンシャルと電子親和力

デルタ SCF 法と厳密クーロンカットオフ法 [91] により、孤立系のイオン化エネルギーと電子親和力が計 算できます。厳密クーロンカットオフ法を用いると周期境界条件においても帯電した孤立系の計算が可 能となります。孤立系の基底状態とイオン化状態の二つの計算を実行し、その全エネルギー差からイオ ン化エネルギーと電子親和力を計算します。まず、孤立系のイオン化エネルギーの計算方法を説明しま す。最初の例は水分子です。孤立状態の計算を以下のように実行します。

% mpirun -np 3 ./openmx H2O+0.dat | tee h2o+0.std

入力ファイル「H2O+0.dat」はディレクトリ「work」中に収容されています。幾何構造は本計算の前に 同一の計算条件で最適化されました。スーパーセル間の偽の相互作用を回避するため、厳密クーロンカッ トオフ法 [91] が以下のキーワードで指定されています。

scf.coulomb.cutoff on # default=off, on off

厳密クーロンカットオフ法を用いてスーパーセル間の偽の相互作用を回避することは可能ですが、クー ロン相互作用のカットオフ半径は最も短い格子ベクトルの長さの半分に設定されるため、中心単位胞で のクーロン相互作用が正しく計算できるように単位胞の長さは十分に大きく設定して下さい。

イオン化状態の計算は以下のように実行します。

% mpirun -np 3 ./openmx H2O+1.dat | tee h2o+1.std

入力ファイル「H2O+1.dat」はディレクトリ「work」中に収容されています。「H2O+0.dat」と比較して、以下のキーワードが変更・追加されています。

<pre>scf.system.charge</pre>	1.0	<pre># default=0.0</pre>
scf.coulomb.cutoff	on	<pre># on off, default=off</pre>
scf.SpinPolarization	on	# On Off NC

キーワード「scf.system.charge」の設定により、孤立系は正に帯電します。「scf.coulomb.cutoff」を設定 し、厳密クーロンカットオフ法を用いることで帯電した系のクーロン発散が回避されます。またイオン 化することで系はスピン分極する可能性があるため、「scf.SpinPolarization」を「on」に設定します。二 つの計算を終えた後に、以下のように出力ファイルから全エネルギーが得られます。

Ground state: -17.477268421216 (Hartree) Charged state of +1: -17.010776518028 (Hartree)

そして、(+1 に帯電した全エネルギー) - (基底状態の全エネルギー) として定義されたイオン化ポテン シャル IP は以下のように計算されます。

> IP = -17.010776518028 - (-17.477268421216) = 0.466491903188 (Hartree), $\approx 12.69 (eV).$

得られた 12.69 eV の値は実験値の 12.65 eV [96] と良く一致しています。イオン化ポテンシャルと同じ ように、(基底状態の全エネルギー) - (-1 に帯電した全エネルギー) として定義された孤立系の電子親和 力も、以下の指定で計算できます。

```
scf.system.charge -1.0 # default=0.0
```

Table 13: 計算された孤立系のイオン化ポテンシャルと電子親和力。すべての幾何構造は計算の 前に同一の計算条件で最適化された。本計算に用いた全ての入力ファイルはディレクトリ「work」 中に収容されている。

イオン化ポテンシャル			
系	実験値 (eV)	計算値 (eV)	入力ファイル
H ₂ O	12.65 [96]	12.69	H2O+0.dat, H2O+1.dat
C_2H_2	11.43 [97]	11.47	C2H2+0.dat, C2H2+1.dat
C_2H_2	$10.55 \ [97]$	10.57	C2H4+0.dat, C2H4+1.dat
O_2	12.04 [97]	12.85	O2+0.dat, O2+1.dat
CO	$14.01 \ [97]$	13.85	CO+0.dat, CO+1.dat
電子親和力			
系	実験値 (eV)	計算値 (eV)	入力ファイル
ОН	1.81 [97]	1.82	OH-0.dat, OH-1.dat
O_2	$0.41 \ [97]$	-0.29	O2-0.dat, O2-1.dat
Cl_2	2.37 [97]	0.96	Cl2-0.dat, Cl2-1.dat
$_{\rm CN}$	3.88 [97]	3.51	CN-0.dat, CN-1.dat
SiH	1.27 [97]	1.17	SiH-0.dat, SiH-1.dat

「scf.system.charge=-1.0」を設定し、電子を一つ付加して負に帯電させます。

表 13 に孤立系のイオン化ポテンシャルと電子親和力のベンチマーク計算の結果を示します。イオン 化ポテンシャルの計算結果は実験値と比較して、全般的に良く一致していますが、電子親和力の計算値 に関しては実験値からの逸脱が見られます。特に O₂ と Cl₂ に対してその誤差が大きくなっています。

59 光伝導度と誘電関数

59.1 概要

OpenMX Ver. 3.9 では密度汎関数理論と Kubo-Greenwood 公式 [98] に基づき、光学伝導度と誘電関数 が計算できます。ボルン近似の範疇で光学伝導度と誘電関数の複素テンソルが電場への線形応答として 計算されます。これらの複素テンソルは周波数の依存性を持っています。吸収率、消滅率、透過率、反 射率、屈折率はすべて光学伝導度から導かれるため、これらの物理量もまた同時に計算されます。本機 能はコリニア計算のみに対応しています。ノンコリニア計算への拡張は近い将来に実装される予定です。 また多階層の並列化が実装されているため、超並列計算機を用いれば 1000 原子を含む大規模な系の計 算が可能です。

59.2 Si の場合

ディレクトリ「work」に収容された入力ファイル「Si2_k50x50x50.dat」を用いて計算を説明します。この入力ファイルは単位胞に 2 原子を含む Si バルクの計算のためのものであり、SCF 計算と伝導度の計算に対してそれぞれ $10 \times 10 \times 10$ k 点と $50 \times 50 \times 50$ k 点が使用されます。計算は以下のように実行します。

% mpirun -np 112 ./openmx Si2_k50x50x50.dat

SCF計算を正常に終えた後に光学伝導度の計算が始まります。その際、標準出力にはメーセッジ「<Optical calculation start>」が表示されます。

```
<Poisson> Poisson's equation using FFT...
<Set_Hamiltonian> Hamiltonian matrix for VNA+dVH+Vxc...
<Band> Solving the eigenvalue problem...
KGrids1: -0.45000 -0.35000 -0.25000 -0.15000 -0.05000 0.05000 0.15000 ....
KGrids2: -0.45000 -0.35000 -0.25000 -0.15000 -0.05000 0.05000
                                                               0.15000 ....
KGrids3: -0.45000 -0.35000 -0.25000 -0.15000 -0.05000
                                                      0.05000 0.15000 ....
<Band_DFT> Eigen, time=0.028573
<Band_DFT> DM, time=0.024604
   1 Si MulP 2.0000 2.0000 sum 4.0000
   2 Si MulP 2.0000 2.0000 sum 4.0000
Sum of MulP: up =
                     4.00000 down
                                              4.00000
                     8.00000 ideal(neutral)=
                                               8.00000
            total=
<DFT> Total Spin Moment (muB) = 0.00000000000
<DFT> Mixing_weight= 0.02000000000
<DFT> Uele = -2.418066179485 dUele = 0.00000000118
<DFT> NormRD = 0.00000000011 Criterion = 0.000000001000
<Optical calculation start>
CDDF.KGrids1: -0.49000 -0.47000 -0.45000 -0.43000 -0.41000 -0.39000 -0.37000 ....
CDDF.KGrids2: -0.49000 -0.47000 -0.45000 -0.43000 -0.41000 -0.39000 -0.37000 ....
CDDF.KGrids3: -0.49000 -0.47000 -0.45000 -0.43000 -0.41000 -0.39000 -0.37000 ....
<Optical calculations end, time=24.31524 (s)>
<MD= 1> Force calculation
 Force calculation #1
 Force calculation #2
```

```
Force calculation #3
Force calculation #4
Force calculation #5
<MD= 1> Total Energy
Force calculation #6
....
```

標準出力から光学伝導度の計算に要した経過時間は約 24 秒であることが分かります。計算が終わった後に、以下の関連する出力ファイルが得られます。

Si2_k50x50x50.cd_re	real part of optical conductivity tensor
Si2_k50x50x50.cd_im	imaginary part of optical conductivity tensor
Si2_k50x50x50.df_re	real part of dielectric function tensor
Si2_k50x50x50.df_im	imaginary part of dielectric function tensor
Si2_k50x50x50.absorption	absorption tensor
Si2_k50x50x50.extinction	extinction tensor
Si2_k50x50x50.transmission	transmission tensor
Si2_k50x50x50.reflection	reflection tensor
Si2_k50x50x50.refractive_index	refractive index tensor

各ファイルの形式はファイルのヘッダー部で分かります。そこに各物理量の単位も記されています。例 えば、「Si2_k50x50x50.cd_re」に保存された光学伝導度テンソル σ の実部は以下のとおりです。

conductivity tensor (real part) , unit = Siemens/meter = Mho/meter = 1/(Ohm*meter)

# index: energy-grid=1, xx=2, xy=3, xz=4, yx=5, yy=6, yz=7, zx=8, zy=9, zz=10, trace=11										
#energy-g	rid(eV) xx	xy	xz	yx	уу	yz	ZX	zy	ZZ	(xx+yy+zz)/3
0.00000	16877.3220211	-227.5621843	-227.5697597	-227.5625069	16877.3919038	-227.5042335	-227.5702078	-227.5041190	16877.3911375	16877.3683541
0.00100	16877.3325817	-227.5625199	-227.5700960	-227.5628426	16877.4024628	-227.5045682	-227.5705442	-227.5044537	16877.4016971	16877.3789139
0.00200	16877.3431423	-227.5628556	-227.5704323	-227.5631782	16877.4130218	-227.5049028	-227.5708805	-227.5047883	16877.4122567	16877.3894736
0.00300	16877.3602570	-227.5634100	-227.5709878	-227.5637327	16877.4301338	-227.5054554	-227.5714360	-227.5053409	16877.4293698	16877.4065869
0.00400	16877.3839257	-227.5641832	-227.5717624	-227.5645058	16877.4537989	-227.5062261	-227.5722106	-227.5061116	16877.4530363	16877.4302536

第一列はフォトンエネルギー (eV)、第二列から順に、 σ_{xx} 、 σ_{xy} などのテンソルの要素が記録されています。 最後の列は対角要素 σ_{xx} 、 σ_{yy} , σ_{zz} の平均値が与えられます。他の出力ファイルも Si2_k50x50x50.cd_re と同 一の形式に従います。Si2_k50x50x50.cd_re, Si2_k50x50x50.cd_im, Si2_k50x50x50.df_re, Si2_k50x50x50.df_im の第一列を横軸、第二列を縦軸としてプロットすると図 80 に示す光学伝導度 σ_{xx} と誘電関数 ε_{xx} が得 られます。

59.3 関連するキーワード

光学伝導度テンソルと誘電関数の計算に関連する各キーワードの仕様は以下のとおりです。

CDDF.start

光学伝導度テンソルと誘電関数の計算を実施する場合に「on」と設定します。デフォルト値は「off」で す。「off」の場合は伝導度テンソルと誘電関数の計算は行いません。

CDDF.start on # on|off, default=off



Figure 80: シリコンバルクの (a) 光学伝導度 σ_{xx} と (b) 誘電関数 ε_{xx} 。「Si2_k50x50x50.cd_re」, 「Si2_k50x50x50.cd_im」,「Si2_k50x50x50.df_re」,「Si2_k50x50x50.df_im」の各ファイルの第二列を 垂直軸とし、第一列の関数としてプロット。計算に用いた入力ファイル「Si2_k50x50x50.dat」はディレ クトリ「work」で利用可能。

CDDF.FWHM

光学伝導度と誘電関数の半値幅を設定します。デフォルト値は eV 単位で 0.2 です。本半値幅がローレン ツ関数に適用されます。

CDDF.FWHM 0.2 # default = 0.2 (eV)

CDDF.maximum_energy

光学伝導度と誘電関数を出力する最大エネルギー値を設定します。デフォルト値は eV 単位で 10.0 です。 エネルギーの範囲は 0.0 eV から開始します。

CDDF.maximum_energy 10.0 # default = 10.0 (eV)

 $CDDF.additional_maximum_energy$

計算する周波数領域を拡張するためのエネルギー範囲を設定します。光学伝導度と誘電関数の出力のエネルギー範囲は「CDDF.maximum_energy」で指定しますが、ローレンツ関数の広がりのためにエネル ギー範囲を超えた状態も寄与しうるため、「CDDF.additional_maximum_energy」を設定し、出力のエ ネルギー範囲を超えた状態を考慮します。例えば、「CDDF.maximum_energy」が10 eV で、


Figure 81: シリコン結晶の誘電関数 (2原子による最小セル)。異なる6種のk格子点を使用: 10×10×10, 20×20×20, 30×30×30, 50×50×50, 75×75×75, 100×100×100。青色と赤色の線はそれぞれ誘 電関数の実部と虚部。CDDF.FWHM=0.2 eV を使用。

「CDDF.additional_maximum_energy」が 1.0 eV と設定された場合、計算には 11.0 (10.0+1.0) eV の エネルギー範囲が考慮されることになります。デフォルト値は 0.0 eV です。

CDDF.additional_maximum_energy 1.0 # default = 0.0 eV

CDDF.frequency.grid.total_number

光学伝導度と誘電関数のエネルギーグリッド数を設定します。デフォルト値は 10000 です。またエネル ギー間隔は(Maximum energy - 0.0) / エネルギー格子の総数、つまり、(10.0 - 0.0)/10000 = 0.0010 (eV) と与えられます。

CDDF.frequency.grid.total_number 10000 # default = 10000

CDDF.Kgrid

第一ブリルアンゾーンの積分グリッド数を3つの数字の組 (n1,n2,n3) で指定します。このグリッドが光 学伝導度と誘電関数の計算に用いられます。逆格子ベクトルの \tilde{a} , \tilde{b} , \tilde{c} 軸がそれぞれn1、n2、n3分割さ れ、ブリルアンゾーンの積分が実行されます。「CDDF.Kgrid」はSCF計算で用いた「scf.Kgrid」と同 ーである必要はありません。計算コストの削減のため、SCF計算には粗いグリッドを用い、また光学伝 導度と誘電関数の計算には細かいグリットの使用が推奨されます。

# of Si atoms	Supercell	Diagonalization	k-Grid	Total time (s) (CPUs=128)	Total time (s) (CPUs=256)	Total time (s) (CPUs=512)	Total time (s) (CPUs=1024)	Total time (s) (CPUs=2048)
512 atoms	4x4x4	Cluster	1x1x1	3367.16826	1755.60797	919.21912	464.27761	253.32210
	4x4x4	ScaLAPACK	2x1x1	6819.30193	3499.51872	1838.64406	948.87978	513.79250
	4x4x4	Band	2x2x2	15300.58350	10217.17765	5953.19907	3518.84650	1747.20171
1000 atoms	5x5x5	Cluster	1x1x1			6900.35370	3511.85143	1778.33693
	5x5x5	ScaLAPACK	2x1x1			12994.17818	6817.43990	3460.76787
	5x5x5	Band	2x2x2			43676.20392	26055.12739	13318.14587

Table 14: シリコン結晶の伝導度と誘電関数の計算時間

Table 15: シリコン結晶 (512 原子、4×4×4 スーパーセル、1×1×1k 格子) の伝導度と誘電関数の計 算時間。128CPU に対する加速率を最後の列に記載。

# of CPUs	Total time of calculating	Ratio of				
	conductivity and dielectric function (c)	total time by $\#$ of CPUs				
	conductivity and dielectric function (s)	to total time by 128 CPUs				
128	3367.16826	1.000				
256	1755.60797	1.918				
512	919.21912	3.663				
1024	464.27761	7.252				
2048	253.32210	13.292				

59.4 ベンチマーク計算

いくつかのベンチマーク計算を以下に示します。

<u>Si</u>

シリコン固体の誘電関数の実部を図 81 に示します。k 点数に対する誘電関数の依存性を調べるために系統的にk 点数を変化させて計算を実施しました。k 点数を $10 \times 10 \times 10$ から $100 \times 100 \times 100$ まで増加 させるにつれ、誘電関数の実部が収束していきます。十分に収束した結果を得るには細かい k 点グリットが必要であることが分かります。また表 14 と表 15 にシリコン固体の光学伝導度と誘電関数の計算時間と並列化効率を示します。1000 CPU コアを利用できる場合には 1000 原子を含む系も計算可能である ことを示唆しています。

β -PVDF

 β -PVDF(ポリフッ化ビニリデン)の誘電関数の実部を図 82 に示します。k 点数に対する誘電関数の依存 性を調べるために系統的に k 点数を変化させて計算を実施しました。 収束解を得るために $6 \times 9 \times 21$ の k 点数が必要であることが分かります。表 16 と表 17 に β -PVDFの光学伝導度と誘電関数の計算時間と 並列化効率を示します。並列効率に良く、経過時間は 256 個の CPU コアを用いて 1 時間足らずであるこ とが確認されました。参考のため、図 82 に β -PVDFの誘電関数の実部の xx, yy, zz 成分を示します。

Table 16: $3 \times 3 \times 5$ のスーパーセルに相当する 540 原子で構成された β -PVDF(ポリフッ化ビニリデン) の光学伝導度と誘電関数の計算時間。

Disconsligation	le Crid	Total time (s)				
Diagonalization	K-Gria	(CPUs=128)	(CPUs=256)	(CPUs=512)	(CPUs=1024)	(CPUs=2048)
Cluster	1x1x1	4215.67238	2086.76841	1061.06835	565.92209	329.42010
ScaLAPACK	1x1x2	3330.66855	1711.98413	877.61705	599.73266	330.11080
Band	2x2x2	12854.63816	7244.26768	3591.33618	1866.03405	998.07756



Figure 83: β -PVDF(ポリフッ化ビニリデン)の誘電関数の実部の xx, yy, zz 成分 (6 原子、 $1 \times 1 \times 1$ セル)。

Table 17: $3 \times 3 \times 5$ のスーパーセルに相当する 540 原子で構成された β -PVDF(ポリフッ化ビニリデン)の伝導度と誘電関数の計算時間。 $1 \times 1 \times 1$ のk点を使用。128CPU コアの結果を基準とした加速率を最後の列に記載。



Figure 84: VO₂(R相)の誘電関数の実部と虚部 (6原子、 $1 \times 1 \times 1$ 単位胞)。k 点を系統的に変化させて計算。

 \mathbf{R} 相の \mathbf{VO}_2

 $VO_2(R相)$ の誘電関数の実部を図 84 に示します。k 点数に対する誘電関数の依存性を調べるために系 統的に k 点数を変化させて計算を実施しました。 収束解を得るために $16 \times 16 \times 16$ の k 点数が必要であ ることが分かります。表 18 と表 19 に $VO_2(R 相)$ の伝導度と誘電関数の計算時間と並列化効率を示し ます。並列効率は良く、1時間程度の経過時間で大規模系の計算が実現しています。

59.5 コード

光学伝導度と誘電関数の計算に関係するルーチンを以下に記載します。

Band_DFT_Col_Optical.c	Band_DFT_Col_Optical_ScaLAPACK.c
Band_DFT_NonCol_Optical.c	Calc_optical.c
Cluster_DFT_Optical.c	Cluster_DFT_Optical_ScaLAPACK.c
DFT.c	Get_Cnt_dOrbitals.c
Get_dOrbitals.c	Input_std.c

Table 18: R 相の VO₂ の伝導度と誘電関数の計算時間 (R 相、384 原子、4×4×4 スーパーセル)

Diamonolization	le Cuid	Total time (s)				
Diagonalization	K-Gria	(CPUs=128)	(CPUs=256)	(CPUs=512)	(CPUs=1024)	(CPUs=2048)
Cluster	1x1x1	5328.56778	2719.77511	1382.56556	704.32679	360.64294
ScaLAPACK	1x1x2	5276.74287	2755.58509	1395.48266	718.42770	368.24621
Band	2x2x2	21031.96431	10686.37446	5586.12815	2781.05698	1431.91243

Table 19: R相の VO_2 の伝導度と誘電関数の計算時間 (R相、384 原子、 $4 \times 4 \times 4$ スーパーセル、 $1 \times 1 \times 1k$ 格子) 128CPU コアの結果を基準とした加速率を最後の列に記載。

# of CPUs	Total time of calculating conductivity and dielectric function (s)	Ratio of total time by $\#$ of CPUs to total time by 128 CPUs
128	5328.56778	1.000
256	2719.77511	1.959
512	1382.56556	3.854
1024	704.32679	7.565
2048	360.64294	14.775

NabraMatrixElements.c Set_dOrbitals_Grid.c

59.6 実例

参考のため、五つの入力ファイル例がディレクトリ「work/cddf_examples」に収容されています。

- Febcc-Col_k30x30x30.dat 鉄(BCC構造)の光学伝導度と誘電関数の計算。30×30×30 k 点。
- Mn12.dat

Mn12 分子磁石の光学伝導度と誘電関数の計算。1×1×1 k 点。

• Si2_k10x10x10.dat

シリコン固体の光学伝導度と誘電関数の計算。10×10×10 k 点。

- Si2_k1xk1xk1.dat シリコン固体の伝導度と誘電関数の計算。1×1×1k点。
- VO2R-k16xk16x16.dat

VO₂(R相)の光学伝導度と誘電関数の計算。16×16×16k点。

59.7 自動動作テスト

光学伝導度と誘電関数の計算の機能が正しくインストールされた否かを検査するため、自動動作テスト を以下のように実施できます。

MPI 並列での動作

% mpirun -np 112 ./openmx -runtestCDDF

MPI/OpenMP 並列での動作

% mpirun -np 56 ./openmx -runtestCDDF -nt 2

OpenMX は五つのテストケースを実行し、work/cddf_example に収容された参照結果と計算結果を比較 します。比較 (誘電関数の差の絶対値) はディレクトリ「work」中の「runtestCDDF.result」に記録され ます。参照結果は Xeon クラスター計算機を用いて計算されたものです。差が 0.1 以下ならば、インス トールは正常と考えられます。

60 BoltzTraP とのインターフェース

OpenMX Ver. 3.9 は BoltzTraP とのインターフェースを提供します。BoltzTraP [99] は Kohn-Sham 方 程式のエネルギー固有値の波数依存性から、ボルツマンの理論に基づき電子輸送係数を計算するプログ ラムです。このインターフェース [100] を利用することで、ゼーベック係数、電子伝導度、電子熱伝導 度、ホール係数などの物理量の計算が可能になります。この機能はコリニア計算のみならずノンコリニ ア計算にも対応しています。本機能を用いて発表を行う際には、文献 [100] を引用して頂けますと幸い です。BoltzTraP2 とのインターフェースは将来のリリースで公開予定です。

OpenMX と BoltzTraP を橋渡しするインターフェースを利用するには、ディレクトリ「source」に 収容された MX_TRAP.sh をディレクトリ「work」にコピーして下さい。例として、非ドープ型シリコン 固体の計算を紹介します。ディレクトリ「work」中の入力ファイル「Si_BoltzTraP.dat」を用いて、SCF 計算を以下のとおり実行します。

% mpirun -np 28 ./openmx Si_BoltzTraP

SCF計算が正常に終了した後に、出力ファイル「Si_BoltzTraP.out」が得られます。その後で、MX_TRAP.sh を以下のように実行します。

% sh MX_TRAP.sh

すると、現在のディレクトリにある out ファイルの名前が以下のように一覧で表示されます。

Please enter the outputfile name ; Outputfile name =

「Outputfile name = 」の後に、out ファイルのファイル名を入力し、Enter キーを押して下さい。計算例 である「Si_BoltzTraP.out」を以下のように入力してください。

Please enter the output file name: Outputfile name = Si_BoltzTraP.out

Enter キーを押すと、以下のメッセージが表示されます。

```
...
....
Nospin::kloop kx ky kz:1681/1686
Nospin::kloop kx ky kz:1682/1686
Nospin::kloop kx ky kz:1683/1686
Nospin::kloop kx ky kz:1684/1686
Nospin::kloop kx ky kz:1685/1686
Nospin::kloop kx ky kz:1686/1686
.energy file for BoltzTraP has been generated.
.struct file for BoltzTraP has been generated.
```

Calculations with OpenMX+BoltzTraP	
(1) Calculation of <i>E-k</i> relation with OpenMX	
"***.out" file is obtained.	
(2) Generating the input file of BoltzTraP using "MX_TRAP.sh" script	
Type "sh MX_TRAP.sh". ↓ Enter the name of "***.out" file. ↓ Directory named "***" is generated. After that, ".energy", ".struct", ".intrans" file are generated in the "***" director ↓ Changes current directory to the "***" directory.	у.
(3) Electron transport calculation with BoltzTraP	
Type "…/boltztrap-1.2.5/src/x_trans BoltzTraP -option" in the "***" directory. ↓ Result of electron transport calculation are generated.	



.intrans file for BoltzTraP has been generated.

Conversion has been finished.

Directory is Si_BoltzTraP

上記のメッセージが表示された後に、「Si_BoltzTraP」と名付けられたディレクトリが生成されます。以下のように四つのファイル「Si_BoltzTraP.out」、「Si_BoltzTraP.energy」、「Si_BoltzTraP.intrans」、「Si_BoltzTraP.struct」がディレクトリ「Si_BoltzTraP」中に保存されます。

```
% cd Si_BoltzTraP
% ls
Si_BoltzTraP.out Si_BoltzTraP.energy Si_BoltzTraP.struct Si_BoltzTraP.intrans
```

「.out」ファイルは変換で得られた出力ファイルのコピーです。「.energy」ファイルはエネルギー固有値の ファイルです。もし「.out」ファイルでのキーワード「scf.SpinPolarization」が「ON」ならば、「.energyup」と「.energydn」の二つのファイルが出力されます。他方、「.out」ファイルでのキーワード「scf. SpinPolarization」が「NC」ならば、「.energyso」のファイルが出力されます。「.struct」のファイルは 単位格子ベクトルのファイルです。単位は自動的に原子単位系に変換されます。「.intrans」のファイル は電子輸送計算に必要な入力パラメタを記述します。詳しくは、BoltzTraP パッケージに付属の PDF マ ニュアルを参照してください。このファイルの第三行の第一項の数値の値は OpenMX で計算された化 学ポテンシャル μ です (単位は Ryd)。第五行にある 10 の値はバンドのフーリエ補間の係数で、既定で



Figure 86: OpenMX と BoltzTraP によって計算されたダイアモンド構造の非ドープ型シリコン固体の (a) ゼーベック係数 S, (b) 電子伝導率 $\sigma \tau_{el}^{-1}$ 。横軸は化学ポテンシャル。温度は 300K で、フーリエ補間 の係数は 25 に設定。計算に用いた入力ファイル「Si_BoltzTraP.dat」はディレクトリ「work」中に収容。

は 10 に設定されます。第八行の数値の値はフェルミ分布の電子温度です。第一項は最大温度です。第二 項は温度依存性を計算する際の温度間隔です。もし温度依存性を計算したい場合には、第一項と同一の 値を入力してください。既定では、「.out」ファイルの「scf.ElectronicTemperature」で指定された温度 が入力されています。もし「scf.ElectronicTemperature」が指定された場合は、T = 300Kが割り当て られます。

次に、ディレクトリ「Si_BoltzTraP」に移動して、以下のとおり BoltzTraP とタイプしてください。 これ以降の手順は通常の BoltzTraP 計算と同一です。それゆえ、詳細は BoltzTraP パッケージに付属 の PDF マニュアルを参照してください。

% cd Si_BoltzTraP

% 'path to BoltzTrap'/boltztrap-1.2.5/sr/x_trans BoltzTraP

エネルギー固有値を保存されたファイルが「.energyup」,「.energydn」,「.energyso」の際には x_trans BoltzTraP の後にそれぞれ「-up」,「'-dn」,「-so」をオプションとして付加して実行して下さい。オプ ションで指定されたエネルギー固有値ファイルに対して電子輸送計算が実施されます。計算が正常に完 了すると、以下のメッセージが表示されます。

x, y, z軸上での電子輸送特性の平均値が「Si_BoltzTraP.trace」に記録されます。他方、x, y, z軸の電 子輸送特性は「Si_BoltzTraP.condtens」に記録されます。図 85 に OpenMX と BoltzTraP による電子 輸送計算の計算手順を記載します。図 86 は非ドープ型シリコン固体のゼーベック係数 S と電子伝導度 $\sigma\tau_{\rm el}^{-1}$ の化学ポテンシャル μ 依存性を示します。計算に用いた入力ファイル「Si_BoltzTraP.dat」はディ レクトリ「work」中に収容されています。参考文献 [100]の補足資料には本機能を用いた大規模なベン チマーク計算の結果が記載されています。このベンチマーク計算に含まれている GaCuS₂ 固体の計算結 果を図 87 に示します。この計算ではスピン軌道相互作用を考慮し、ノンコリニア計算を実行しました。



Figure 87: OpenMX と BoltzTraP によって計算された GaCuS₂ 固体の (a) ゼーベック係数 S, (b) 電子伝導率 $\sigma \tau_{el}^{-1}$ 。横軸は化学ポテンシャル。温度は 300K で、フーリエ補間の係数は 10 に設定。計算に用いた入力ファイル「GaCuS2_mp-5238_symmetrized_SOC.dat」はディレクトリ「work」中に収容。

本計算に用いた入力ファイル「GaCuS2_mp-5238_symmetrized_SOC.dat」はディレクトリ「work」中に 収容されています。

61 "格子定数 vs. エネルギー"曲線の計算

61.1 "格子定数 vs. エネルギー"曲線

次のキーワードを設定するにより"格子定数 vs. エネルギー"曲線を計算することができます。

MD.Type	EvsLC	#
MD.EvsLC.Step	0.4	# default=0.4%
MD.maxIter	32	# default=1
MD.EvsLC.flag	1 1 1	# default=1 1 1
		# (0: fixed, 1:expansion, -1:contraction)

キーワード「MD.Type」を「EvsLC」に設定すると、単位胞ベクトル a、b、c を逐次的に変化させな がら全エネルギーを計算することができます。単位胞ベクトルの変更は「MD.EvsLC.Step」で指定さ れる一定比率で初期ベクトルを一様に拡大・収縮させることで実施されます。計算ステップ数はキーワード 「MD.maxIter」で指定します。もし格子ベクトルの一部を固定したい場合にはキーワード「MD.EvsLC.flag」 を使用します。既定の設定は「111」であり、a、b、c 軸のそれぞれの軸で一様に拡大・収縮を実施しま す。このフラグを「0」に設定すると、対応する軸は初期値に固定されます。また「-1」に設定した場合 には一様な収縮を意味します。計算が正常に終了すると、ファイル「System.Name.EvsLC」が生成され ます 。計算途上でもファイル「System.Name.EvsLC」には途中までの計算結果が出力されます。ここ



Figure 88: キーワード「EvsLC」によって計算された fcc 構造の Mn 固体の "格子定数 vs. エネルギー"曲線。 使用した入力ファイルはディレクトリ「work」中の「Mnfcc-EvsLC.dat」。図中の平衡格子定数と体積弾性率は、 ウェブサイト [148] で提供されている「murn.f」コードを用い、Murnaghan 状態方程式にデータをフィッティング することによって評価。

で「System.Name」は「System.Name」です。「System.Name.EvsLC」中の列は、Å単位での a_x 、 a_y 、 a_z 、 b_x 、 b_y 、 b_z 、 c_x 、 c_y 、 c_z および全エネルギー (Hartree 単位)の順に配列されます。ここで、 $a(b,c)_x$ 、 $a(b,c)_y$ 、 $a(b,c)_z$ はベクトル a(b,c)の x、y、z 成分です。例として、fcc 構造の Mn 固体の "格子定数 vs. エネルギー"曲線の計算結果を図 88 に示します。ここで、平衡格子定数と体積弾性率はウェブサイト [148] で提供されている「murn.f」コードを用いて Murnaghan 状態方程式にデータをフィッティング することによって評価されました。

61.2 デルタ因子

「EvsLC」と類似する機能が「DF」として利用可能です。

MD.Type DF

このキーワードにより、OpenMX は自動的に入力ファイルで与えられる初期構造を基準として、-6、-4、-2、 0、2、4、6%の体積を持つ系の全エネルギーを計算します。体積の調節は、単純に格子ベクトルa、b、c 軸 を一様に変化させることで行います。体積とそれに対応する全エネルギーはファイル「*System.Name*.DF」 に出力されます。ここで「*System.Name*」は「System.Name」です。このデータは文献 [40] で提案され ているデルタ因子の計算に利用できます。

62 フェルミ面

XCrySDen [105] や FermiSurfer [143, 144] を用いてフェルミ面を可視化できます。 まず、次のキーワー ドを設定して状態密度の計算を実行して下さい。

Dos.fileout	on	<pre># on off, default=off</pre>
Dos.Erange	-20.0 20.0	# default = -20 20
Dos.Kgrid	61 61 61	<pre># default = Kgrid1 Kgrid2 Kgrid3</pre>
FermiSurfer.fileout	on	<pre># default = off, on/off</pre>

計算が正常に終了すると、ファイル「System.Name.FermiSurf0.bxsf」が得られます。このファイルは XCrySDen[105]で読み込み可能です。ファイル「System.Name.FermiSurf_s0_aA.frmsf」はFermiSurfer [143, 144]で読み込み可能です。ここで、「System.Name」は「System.Name」であり、Aは原子のシリ アル番号です。FermiSurferに対応するファイルを得るにはキーワード「FermiSurfer.fileout」を「on」 に設定して下さい。「Dos.Fileout」と同様に、この目的にために「DosGauss.fileout」も使用可能ですが、 FermiSurferに対応するファイルは「DosGauss.fileout」の場合には生成されませんので注意して下さい。

スピン分極計算の場合には、「System.Name.FermiSurf0.bxs」と「System.Name.FermiSurf1.bxs」が 生成され、それぞれupスピンとdownスピンに対応しています。また FermiSurferを用いて各原子の寄与 を解析するために、「System.Name.FermiSurf_s0_aA.frmsf」と「'System.Name.FermiSurf_s1_aA.frmsf」 が生成され、それぞれupスピンとdownスピンに対応しています。これらのファイルを FermiSurferを 用いて解析することで、各原子からの寄与を色分けしてプロットできます。例えば、原子1の原子軌道 の特性をプロットするにはファイル「System.Name.FermiSurf_s0_a1.frmsf」を読み込みます。ノンコリ ニア計算の場合、ファイル「System.Name.FermiSurf.bxs」と「System.Name.FermiSurf_aA.frmsf」が 生成されます。また滑かなフェルミ面を描画するには、多数のk点が必要になることに注意して下さい。 例として、fcc構造のCa固体のフェルミ面を図 89 に示します。この計算に使用された入力ファイルは、 ディレクトリ「work」中の「Cafcc_FS.dat」です。



Figure 89: XCrySDen[105] で可視化した fcc 構造の Ca 固体のフェルミ面。2 種類のバンドがフェルミエネルギー (化学ポテンシャル)を横切るため、2 種類のフェルミ面を (a) と (b) に表示。(c) FermiSurfer [143, 144] で可視化さ れたフェルミ速度の色分けプロット。計算に使用された入力ファイルはディレクトリ「work」中の「Cafec_FS.dat」。

63 2つの Gaussian Cube ファイルの差の解析

ユーティリティツールによって、2つの Gaussian cube ファイルの差を解析することができます。構造 変化やスピン磁気モーメント方位の変化に伴い、どのように全電子密度、スピン密度、ポテンシャルが 変化しているのか解析することが可能です。

(1) diff_gcube.c のコンパイル

ディレクトリ「source」内に、「diff_gcube.c」という名のファイルが保存されています。このファイルを 次のコマンドでコンパイルします。

% gcc diff_gcube.c -lm -o diff_gcube

コンパイルが正常に終了すると、ディレクトリ「source」内に、実行可能なファイル「diff_gcube」が生成されます。この実行可能ファイルをディレクトリ「work」にコピーして下さい。

(2) 差の計算

「input1.cube」と「input2.cube」という名前の2つのGaussian cubeファイルの差を求め、さらにその結果をファイル「output.cube」に出力したい場合、「diff_gcube」を次のように実行します。

% ./diff_gcube input1.cube input2.cube output.cube

差は Gaussian cube 形式で「output.cube」という名前のファイルに出力されます。「output.cube」は、 XCrySDen [105]、VESTA[103] や Molekel [104] 等の可視化ソフトウエアを用いて、容易に解析できま す。実際に、「電場」の章の図 28 はこの方法で作成されました。

64 2つの幾何構造の差の解析

ユーティリティツールによって、3次元座標(デカルト座標)を保存している2つの*xyz*ファイルの差 を解析することができます。電場や置換基の影響により、どのように構造が変化しているのか解析する ことが可能です。幾何構造の差の解析には以下で説明する3種類の解析方法が利用できます。

2つの幾何構造間の標準偏差(RMSD)は次式で定義されます。

$$\text{RMSD} = \sqrt{\frac{\sum_{i}^{N_{\text{atom}}} (R_i - R_i^0)^2}{N_{\text{atom}}}}.$$

2つの幾何構造間の平均偏差(MD)は次式で定義されます。

$$\mathrm{MD} = \frac{\sum_{i}^{N_{\mathrm{atom}}} |R_i - R_i^0|}{N_{\mathrm{atom}}}$$

2つの幾何構造間の結合距離の平均偏差(MDBL)は次式で定義されます。

$$\text{MDBL} = \frac{\sum_{i}^{N_{\text{bond}}} |BL_i - BL_i^0|}{N_{\text{bond}}}$$

ここで、 $N_{\text{atom}} \ge N_{\text{bond}}$ は、それぞれ原子数、カットオフ半径内の結合長(BL)を持つ結合数です。また、それぞれの原子の xyz 座標間の偏差ベクトルは、XCrySDen 形式で「dgeo_vec.xsf」という名前の xsf ファイルに出力されますので、2つの構造間の差を可視化できます。

以下に解析の手順を説明します。

(1) diff_gcube.c のコンパイル

ディレクトリ「source」内にファイル「diff_geo.c」があります。このファイルを次のコマンドでコンパ イルします。

% gcc diff_geo.c -lm -o diff_geo

コンパイルが正常に終了すると、ディレクトリ「source」内に実行ファイル「diff_geo.c」が生成します。 この実行ファイルをディレクトリ「work」にコピーして下さい。

(2) 2 つの幾何構造間の差の計算

diff_geo.cのヘッダー部分に次のような「使用法 (usage)」が記載されています。

usage:

./diff_geo file1.xyz file2.xyz -d rmsd

option

-d rmsd	a root mean square of deviation
-d md	a mean deviation
-d mdbl 2.2	a mean deviation between bond lengths,
	2.2 (Ang) means a cutoff bond length which
	can be taken into account in the calculation



Figure 90: (a) 最適化構造間の原子座標の差に対応するベクトル。中性グリシン分子と電子を1個付加したグリシン分子の構造最適化をそれぞれ行い、最適化構造間の比較を実施。(b) 2 つの系の全電子密度の差。青色と赤色は、それぞれ全電荷密度の減少と増加を示す。図は XCrySDen を使って可視化。

2つの幾何構造間の RMSD を知りたければ、次のように実行します。

% ./diff_geo file1.xyz file2.xyz -d rmsd

計算結果は標準出力に表示されます。また XCrySDen のベクトル形式で、各原子の3次元座標の差が ファイル「dgeo_vec.xsf」に保存されます。このファイルは XCrySDen 中の「Display→Forces」を使用 して、可視化できます。MDBLを計算する場合には、カットオフ結合距離(Å)を与えて下さい。RMSD 計算ではカットオフ半径内にある結合距離が考慮されます。図90(a)に最適化構造間の原子座標の差に 対応するベクトルを示します。この計算では中性グリシン分子と電子を1個付加したグリシン分子の構 造最適化をそれぞれ行い、最適化構造間の比較を行いました。また図90(b)に2つの系の全電子密度の 差を示します。大きな電荷の変化に伴って、大きな構造変化が生じていることが分かります。この例か ら、電荷のドーピングや静電場によって構造変化がどのように起こるのかを知るために、このツールが 有用であることが分かります。

65 相互作用によって引き起こされる電荷密度の差の解析

2つの系AとBの間の相互作用によって引き起こされる(スピン)電子密度の再配分は、次の手順によって解析できます。

(i) AとBから成る複合系の計算

A と B から成る複合系に対して、通常の計算を行い、(スピン)電子密度のための cube ファイルを生成 します。このファイルを「AB.cube」とします。また標準出力から「Grid_Origin」の情報を取得します。 これは一様グリッドを生成する際の原点の x、y、z 成分となります。

Grid_Origin xxx yyy zzz

この値は次の(ii)と(iii)で議論する計算において使用します。

(ii) 系 A の計算

A のみを含んだ系の通常の計算を行います。ただし (i) の計算と同一の単位胞を使用して下さい。また計 算条件も同一に設定する必要があります。また系 A の幾何構造は、計算 (i) の場合と同一でなければな りません。一様グリッドを生成する際の原点の x、y、z成分も (i) と同一に設定するために、入力ファイ ル中に次のキーワードを加えて下さい。

scf.fixed.grid xxx yyy zzz

ここで、「xxx yyy zzz」は (i) の「Grid_Origin」から取得した座標です。このようにして、系 A に対する cube ファイルが得られます。これを「A.cube」とします。

(iii) 系 B の計算

(ii)の計算と同様にして、系Bのみの計算もAとBから成る複合系の場合と同じ単位胞を使用し、また同一の計算条件で実行する必要があります。また、系Bの幾何構造は(i)の場合と同一でなければなりません。一様グリッドを生成する際の原点のx、y、z成分も(i)と同一に設定するために、入力ファイル中に次のキーワードを加えて下さい。

scf.fixed.grid xxx yyy zzz

ここで、「xxx yyy zzz」は (i) の「Grid_Origin」から取得した座標です。このようにして、系 B に対する cube ファイルが得られます。これを「B.cube」とします。

(iv) 2 つのコードをコンパイルする

2つのコードを次のようにしてコンパイルします。

% gcc diff_gcube.c -lm -o diff_gcube % gcc add_gcube.c -lm -o add_gcube (v) (スピン)電子密度の差を解析するための cube ファイルの作成

まず、次のコマンドで、系 A と B の 2 つの (スピン)電子密度の重ねあわせの cube ファイルを作成します。

% ./add_gcube A.cube B.cube A_B.cube

ファイル「A_B.cube」は2個の孤立系の(スピン)電子密度の重ねあわせの cube ファイルです。次に、 相互作用によって引き起こされる(スピン)電子密度の差の cube ファイルを、次のようにして作成し ます。

% ./diff_gcube AB.cube A_B.cube dAB.cube

ファイル「dAB.cube」は、相互作用によって引き起こされる(スピン)電子密度の差の cube ファイル であり、ここで「差」は(AB - A_B)を意味します。 OpenMX では Poission 方程式の解法は FFT を使用しています。そのため、孤立系を計算する場合でも 周期境界条件のためにコピーされたイメージが周期的に配置されることになります。孤立系であること を保証するためには最低限、中心セルと隣接セル内の基底関数が重ならないようにスーパーセルを設定 することが必要です。この条件の下、スーパーセルを設定すればバンド構造においてバンド分散は生じ ません。ただし古典的なクーロン相互作用は上記の条件下でスーパーセルを設定したとしても残ってい ることに注意して下さい。適切なスーパーセルはユーザー自身で設定する必要がありますが、スーパー セルの設定を自動で行うことも可能です。自動設定では、基底関数のカットオフ半径を考慮して、最小 のセルサイズが決定されます。自動設定を行う場合には、キーワード「Atoms.UnitVectors」を入力ファ イル中でコメントアウトして下さい。この場合、OpenMX は中心セルの基底関数と隣接セル内の基底 関数が重ならないように、適切なセルサイズを自動的に決定し、また要求されるカットオフエネルギー を実現します。決定されたセルベクトルは、次のように標準出力に表示されます。この値を参考にユー ザー自身でスーパーセルを設定仕直すことも可能でしょう。

```
<Set_Cluster_UnitCell> automatically determined UnitCell(Ang.)
<Set_Cluster_UnitCell> from atomic positions and Rc of PAOs (margin= 10.00%)
<Set_Cluster_UnitCell> 6.614718 0.000000 0.000000
<Set_Cluster_UnitCell> 0.000000 6.041246 0.000000
<Set_Cluster_UnitCell> 0.000000 0.000000 6.614718
```

widened unit cell to fit energy cutoff (Ang.)
A = 6.744142 0.000000 0.000000 (48)
B = 0.000000 6.322633 0.000000 (45)
C = 0.000000 0.000000 6.744142 (48)

67 開発者のためのインターフェース

開発者のためのインターフェースが用意されています。SCF 計算から得られた情報(ハミルトニアンの 行列要素、重なり行列、密度行列、位置演算子、運動量演算子)はファイル「System.Name.scfout」に 保存されます。このファイルに保存されたデータを開発者のポストプロセスコードから参照することが できます。OpenMX Ver. 3.9 からは「System.Name.scfout」のデータ形式が変更されました。これに関 連し、'SCF2File.c', 'read_scfout.c', 'read_scfout.h', 'analysis_example.c' が改変されています。そのた め、OpenMX の旧版で生成された scfout ファイルは Ver. 3.9 では解析できないことに注意して下さい。

ファイル「System.Name.scfout」に保存されたデータは以下の手順で利用可能です。

1. 'HS.fileout' の生成

入力ファイルにキーワード「HS.fileout」を設定します。

HS.fileout on # on|off, default=off

通常の OpenMX 計算を実行すると、データがファイル「*System.Name.*scfout」に出力されます。 ここで「*System.Name*」は入力ファイルで指定された系の名前「System.Name」です。

2. analysis_example の作成

ディレクトリ「source」内で、次のコマンドを実行します。

% make analysis_example

コンパイルが正常終了すると、ディレクトリ「work」内に実行ファイル「analysis_example」が生成されます。

3. ./analysis_example System.Name.scfout

ディレクトリ「work」に移動して、次のようにしてプログラムを実行します。

% ./analysis_example System.Name.scfout もしくは % ./analysis_example System.Name.scfout > HS.out

ハミルトニアン、重なり行列、密度行列等の要素が「HS.out」に書き出されます。

4. analysis_example の説明

ファイル「analysis_example」には、これらのデータについての詳しい説明があります。その一部 を以下に示します。

1. Define your main routine as follows:

int main(int argc, char *argv[])

2. Include a header file, "read_scfout.h", in your main routine (if you want, also in other routines) as follows:

#include "read_scfout.h"

3. Call a function, read_scfout(), in the main routine as follows:

'polB', 'jx', 及び'kSpin'はポストプロセスコードとしての本機能を利用して開発されました。

68 自動フォース・テスター

OpenMX には多くの機能が実装されていますので、それらが正しく実装されているのか保証することが 必要です。実装の信頼性を確認する効果的な方法は、解析的に求めた力と数値計算によって求めた力を 比較することです。プログラムに何らかのバグがあれば、それらは互いに異なるでしょう。これを実行 するために、次のようにして自動テスターが利用可能です。

逐次計算

% ./openmx -forcetest 0

並列計算

% ./openmx -forcetest 0 "mpirun -np 4 openmx"

ここで「0」は、力の整合性を調べる際のエネルギー項のフラグです。フラグの種類は以下に示す8種類 があり、各数字は次の項目に対応します。

flag	0	1	2	3	4	5	6	7	8
Kinetic	1	0	1	0	0	0	0	0	0
Non-local	1	0	0	1	0	0	0	0	0
Neutral atom	1	0	0	0	1	0	0	0	0
diff Hartree	1	0	0	0	0	1	0	0	0
Ex-Corr	1	0	0	0	0	0	1	0	0
E. Field	1	0	0	0	0	0	0	1	0
Hubbard U	1	0	0	0	0	0	0	0	1

ここで、「1」は力の整合性のチェックに含めるという意味です。ディレクトリ「work/force_example」内 には、力の整合性のチェックに使われる 36 個の入力ファイルが保存されています。テスト計算が終了す ると、ディレクトリ「work」内にファイル「forcetest.result」が生成されます。比較結果の一部を以下 に転載します。

```
force_example/C2_LDA.dat
flag= 0
Numerical force= -(Utot(s+ds)-Utot(s-ds))/(2*ds)
.....
....
```

69 自動メモリーリーク・テスター

OpenMX の実行時、使用メモリは必要に応じて動的に割り当てられています。動的メモリー割り当て (dynamic memory allocation)では、メモリリークが発生する場合があり、MD ステップの増大ととも に使用メモリが浪費され、最終的には異常終了する可能性が生じます。

OpenMX を次のように実行することで、メモリリークをチェックすることが可能です。

逐次計算

% ./openmx -mltest

並列計算

% ./openmx -mltest "mpirun -np 4 openmx"

ディレクトリ「work/ml_example」に保存されている 14 個のテスト用入力ファイルを用いて、メモリ リークが監視されます。この際に、プログラムコード「openmx」中の同じモニターポイントで実際に使 用された VSZ および RSS を監視します。計算終了後、ファイル「mltest.result」が生成します。監視さ れた VSZ と RSS は MD ステップの関数として、ファイル「mltest.result」中に次のように出力されま すので、メモリリークが生じているのかどうか確認できます。

1 ml_example/DIA8.dat

		CPU (%)	VSZ (kbyte)	RSS (kbyte)
MD_iter=	1	68.300	397396	123076
MD_iter=	2	96.400	436264	131916
MD_iter=	3	99.000	436264	131916
MD_iter=	4	97.900	436264	131916
MD_iter=	5	98.800	436264	131916
MD_iter=	6	99.300	436264	131916
MD_iter=	7	98.800	436264	131916
MD_iter=	8	99.200	436264	131916
MD_iter=	9	99.500	436264	131916
MD_iter=	10	99.100	436264	131916
MD_iter=	11	99.400	436264	131916
MD_iter=	12	99.500	436264	131916
MD_iter=	13	99.300	436260	131916
MD_iter=	14	99.500	436264	131916
MD_iter=	15	99.300	436264	131916
MD_iter=	16	99.500	436260	131916
MD_iter=	17	99.600	436264	131916
MD_iter=	18	99.400	436264	131916
MD_iter=	19	99.600	436264	133848

MD_iter=	20	99.400	436264	133848
MD_iter=	21	99.500	436264	133848
MD_iter=	22	99.600	436264	133848
MD_iter=	23	99.500	436264	133848
MD_iter=	24	99.500	436264	133848
MD_iter=	25	99.700	436264	133848
MD_iter=	26	99.500	436264	133848
MD_iter=	27	99.600	436264	133848
MD_iter=	28	99.500	436264	133848
MD_iter=	29	99.600	436264	133848
MD_iter=	30	99.600	436264	133848

2 ml_example/DIA8_DC.dat

		CPU (%)	VSZ (kbyte)	RSS (kbyte)
MD_iter=	1	101.000	412508	136448
MD_iter=	2	100.000	516940	210312
MD_iter=	3	98.200	517016	210440
MD_iter=	4	98.900	517016	210440
MD_iter=	5	99.300	517016	210440
MD_iter=	6	99.500	517016	210440

. . . .

70 メモリ使用量の解析

「*.memory0」、「*.memory1」、……「*.memory#」のファイルを解析することによってメモリの使用状況が分かります。ここで、「*」はキーワード「System.Name」で指定されるファイル名であり、ファイル拡張子の最後の数(#)は、MPI並列化におけるプロセス ID です。これらのファイルは、キーワード「memory.usage.fileout」を次のように設定することで出力されます。

memory.usage.fileout on # default=off, on|off

例として、「met.memory0」を下記に示します。

Memory:	SetPara_DFT: Spe_PAO_XV	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_PAO_RV	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_Atomic_Den	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_PAO_RWF	0.57 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_RF_Bessel	1.03 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_VPS_XV	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_VPS_RV	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_Vna	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_VH_Atom	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_Atomic_PCC	0.01 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_VNL	0.11 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_VNLE	0.00 MBytes
Memory:	SetPara_DFT: Spe_VPS_List	0.00 MBytes
• • • •		
•••		
Memory:	Poisson: arrayO	4.00 MBytes
Memory:	Poisson: array1	4.00 MBytes
Memory:	Poisson: request_send	0.00 MBytes
Memory:	Poisson: stat_send	0.00 MBytes
Memory:	Poisson: request_recv	0.00 MBytes
Memory:	Poisson: stat_recv	0.00 MBytes
Memory:	Force: Hx	0.00 MBytes
Memory:	Force: Hy	0.00 MBytes
Memory:	Force: Hz	0.00 MBytes
Memory:	Force: CDM0	0.00 MBytes
Memory:	Data_Grid_Copy_B2C_1: Work_Array_Snd_Grid_B2C	0.72 MBytes
Memory:	Data_Grid_Copy_B2C_1: Work_Array_Rcv_Grid_B2C	0.72 MBytes
Memory:	total	256.99 MBytes

上記のファイルは、入力ファイル「Methane.dat」でキーワード「memory.usage.fileout」を設定、シン グルプロセスで実行し、得られたものです。大部分の配列のメモリ使用量は、このファイルに記録され ますが、リストは完全ではないことに注意して下さい。

71 大規模ファイルのバイナリ形式での出力

大規模計算では、大規模テキスト形式ファイル (例えば、cube ファイル) が生成されます。このような ファイルを出力する際の IO アクセスは、IO アクセスが高速でない計算機上では、長時間を要します。 そのような場合には、大規模ファイルをバイナリ形式で出力することをお勧めします。バイナリ形式で の出力はキーワード「OutData.bin.flag」を指定することで実行可能です。

OutData.bin.flag on # default=off, on|off

これにより、大規模ファイルは全てバイナリ形式で出力されます。デフォルトは「off」です。

出力されたバイナリファイルは、ディレクトリ「source」内のプログラム「bin2txt.c」を使用して変換されます。このプログラムは次のようにして、コンパイルできます。

gcc bin2txt.c -lm -o bin2txt

後処理として、以下のように実行すればバイナリ形式からテキスト形式に変換されます。

./bin2txt *.bin

この機能は IO アクセスが高速でない計算機では有用でしょう。

72 Gaussian cube 形式から周期的 XSF 形式への変換

VESTA の現行バージョン(2015/8版)では、Gaussian cube 形式のファイルを周期的に拡張して描画 できません。周期的に拡張した構造を描画するためには周期的 XSF 形式への変換が必要です。

OpenMX は Gaussian cube 形式で電荷/スピン密度や Kohn-Sham 軌道、固有チャネルなどを出力可 能であり、「cube2xsf」を用いることで、Gaussian cube 形式から周期的 XSF 形式への変換が可能です。

「cube2xsf」は以下の様に使用して下さい。

\$ cube2xsf a.cube

- \$ cube2xsf b.cube.bin
- \$ cube2xsf a.cube b.cube.bin
- \$ cube2xsf *.cube.bin

これらのコマンドにより拡張子「.xsf」を持つファイルが生成されます。

73 入力ファイルの例

参考のために、本マニュアル中の計算例に関する入力ファイルがディレクトリ「work」内に保存されて います。入力ファイルの一覧を以下に示します。

Molecules or clusters				
C60.dat	SCF calc. of a C60 molecule			
C60_DC.dat	DC calc. of a C60 molecule			
CG15c_DC.dat	DC calc. of DNA			
Cr2_CNC.dat	Constrained DFT calc. of a Cr2 dimer			
Doped_NT.dat	SCF calc. of doped carbon nanotube			
Fe2.dat	SCF calc. of a Fe2 dimer			
Gly_NH.dat	Nose-Hoover MD of a glycine molecule			
Gly_VS.dat	Velocity scaling MD of a glycine molecule			
H2O.dat	Geometry opt. of a water molecule			
MCCN.dat	DC calc. of a a multiply connected carbon nanotube			
Methane2.dat	Geometry opt. of a distorted methane molecule			
Methane.dat	SCF calc. of a methane molecule			
Methane_00.dat	Orbital optimization of a methane molecule			
Methane_ED.dat	Total energy decomposition of a methane molecule			
Mn12.dat	SCF calc. of a single molecular magnet, Mn12			
Mol_MnO_NC.dat	Non-collinear SCF calc. of a MnO molecule			
Nitro_Benzene.dat	SCF calc. of a nitro benzene molecule under E-field			
Pt13.dat	SCF calc. of a Pt13 cluster			
Pt63.dat	SCF calc. of a Pt63 cluster			
SialicAcid.dat	SCF calc. of a sialic acid molecule			
Valorphin_DC.dat	DC calc. of valorphin molecule			
Valorphin_MO.dat	Molecular obital calculations			
C2H4_NEB.dat	NEB calc. of C2H4 dimer			
C60_L0.dat	Low-order scaling calc. of a C60 molecule			
Fe_Cluster_jx.dat	jx calculation of a Fe dimer			
H20+0.dat	SCF calc. of a neutral water molecule			
H20+1.dat	SCF calc. of a plus 1 water molecule			
C2H2.dat	Initial state calculation of C2H2 for XPS			
C2H2-CH.dat	Final state calculation of C2H2 for XPS			
Bulk				
Cdia.dat	SCF calc. of bulk diamond			
MnO_NC.dat	Non-collinear SCF calc. of bulk MnO			
FeO_NC.dat	Non-collinear SCF calc. of bulk FeO			
CoO_NC.dat	Non-collinear SCF calc. of bulk CoO			
NiO_NC.dat	Non-collinear SCF calc. of bulk NiO			
Crys-NiO.dat	SCF calc. of bulk NiO			
NiO-cFLL.dat	LDA+U calc. of NiO by the cFLL scheme			
NiO-sFLL.dat	LDA+U calc. of NiO by the sdcFLL scheme			
NiO-Yukawa.dat	LDA+U calc. of NiO to estimate J and F^4/F^2			
DIA64_Band.dat	SCF calc. of bulk diamond including 64 atoms			
DIA8_DC.dat	DC calc. of bulk diamond including 8 atoms			
DIA64_DC.dat	DC calc. of bulk diamond including 64 atoms			
DIA216_DC.dat	DC calc. of bulk diamond including 216 atoms			
DIA512_DC.dat	DC calc. of bulk diamond including 512 atoms			
DIA512-1.dat	Krylov ${\rm O}({\rm N})$ calc. of bulk diamond including 512 atoms			
Febcc2.dat	SCF calc. of bcc Fe			

Fefcc-SpinSpiral.dat SCF calc. of fcc Fe for spin spiral calculation Non-collinear calc. of bulk gallium arsenide GaAs.dat NaCl.dat SCF calc. of bulk NaCl NaCl_FC.dat SCF calc. of bulk NaCl with a Cl-site vacancy Geometry opt. of distorted Si bulk Si8.dat Si8-pV.datEnthalpy opt. of Si bulk under 10 GPaSi8-LNO.datO(N) DC-LNO calc. of silicon crystal including 8 atomNdCo5_4f.datE vs. lattice constant calc. of NcCo4 bulk including the 4f states NdCo5_4f+U.dat E vs. lattice constant calc. of NcCo4 bulk including the 4f states with plus U NdCo5_OC.dat E vs. lattice constant calc. of NcCo4 bulk with a Nd open core pseudopotential Al-Si111_ESM.dat ESM calc. of Al-Si interface Cafcc_FS.dat Fermi surface calc. of the fcc Ca bulk Graphite_STM.dat STM image of graphene Mnfcc-EvsLC.dat E vs. lattice constant calc. of the fcc Mn bulk Si8_NEB.dat NEB calc. for hydrogen in Si DIA8-VA.dat Virtual atom SCF calc. of diamond crystal FePt.dat SCF calc. of L10-FePt within collinear DFT FePt-NC-SCF.dat SCF calc. of L10-FePt within non-collinear DFT FePt-NC.dat One-shot diagonalization of L10-FePt with SOI Fe_Bulk_jx.dat jx calculation of bcc Fe GaCuS2_mp-5238_symmetrized_SOC.dat SCF calculation for BoltzTrap calculation Si_BoltzTraP.dat SCF calculation of Si bulk for BoltzTrap calculation Si2_k50x50x50.dat Optical conductivity for Si bulk TiC216.dat Initial state calculation of TiC for XPS TiC216-CH3.dat Final state calculation of TiC for XPS Si-4-SOI.dat Initial state calculation of Si for XPS Si-4-CH-SOI1.dat Final state (j=3/2) calculation of Si for XPS Si-4-CH-SOI6.dat Final state (j=1/2) calculation of Si for XPS Au111Surface_FL.dat spin texture analysis of Au111 by the FermiLoop scheme Au111Surface_GC.dat spin texture analysis of Au111 by the GridCalc scheme Au111Surface_BD.dat spin texture analysis of Au111 by the BandDispersion scheme Au111Surface_MO.dat spin texture analysis of Au111 by the MulPOnly scheme SiC_Primitive_BD.dat spin texture analysis of SiC by the BandDispersion scheme

74 知られている問題点

基底関数の過完備性

fcc、hcp、bccなどの結晶構造をもつ高密度のバルク系において、多くの基底関数を割り当てた場合には、基底関数が過完備になる可能性があります。そのような場合には、数値不安定性のために誤った固有値が生じる可能性が高まります。この過完備性を避けるために、最適化された少数の基底関数を使用することが推奨されます。またこの問題を避ける別の方法として、キーワード「scf.ProExpn.VNA」を「off」に設定することも有効です。

scf.ProExpn.VNA off # on|off, default = on

この場合、実空間の数値グリッドに対するカットオフエネルギをキーワード「scf.energycutoff」に よって大き目に設定する必要があるかもしれません。

SCFの収束が困難なこと

複雑な(ノンコリニア)磁気的構造、金属的な電子構造、その両者を合わせ持つ場合、またそれ らの特徴を持った大規模系では、SCFの収束を得ることがかなり困難です。そのような場合には、 電子密度を非常にゆっくりと混合せねばならず、それは残念ながら、収束解を得るために多くの SCF ステップが必要となることを意味します。

• 構造最適化が困難なこと

分子系のように、相互作用が弱い系では、完全に最適化された構造を得ることは容易でなく、多数の反復ステップが必要となります。構造最適化のデフォルトの収束条件は最大 10^{-4} Hartree/Bohrですが、そのような場合には、妥協案として収束条件を 10^{-4} から 5×10^{-4} に設定仕直すことも 1 つの方法です。

75 OpenMX フォーラム

OpenMX と ADPACK の技術的問題に関する議論のために、フォーラムが用意されています (http://www.openmx-square.org/forum/patio.cgi)。このフォーラムは OpenMX 利用上のヒントをユー ザー間で共有することと、プログラムコード発展のための情報交換の場となることを期待して開設され ています。フォーラムの利用上の注意点に関しては、http://www.openmx-square.org/forum/note.html を参照して下さい。

76 OpenMX に関するその他の情報源

いくつかのウェブサイトが OpenMX に関連する情報を提供しています。以下にその一覧を示します。

- Lecture materials at Oregon State University. http://physics.oregonstate.edu/ tatej/COURSES/ph575/doku.php?id=openmx
- Lecture materials at Tokyo Institute of Technology https://www.slideshare.net/cms_initiative/open-mx-lecture
- Lecture materials at Kanazawa University http://f-ishii.w3.kanazawa-u.ac.jp/ja/index.cgi?page=%B7%D7%BB%BB%CA%AA%C0%AD%B2%CA%B3%D82018
- Tutorial by HPCI http://www.hpci-office.jp/pages/appli_openmx
- Tutorial by Dr. Toyoda https://sites.google.com/site/mtoyodacmp/openmx-memo
- Tutorial by Dr. Ito http://www-fps.nifs.ac.jp/ito/memo/openmx04.html
- Information by MateriApps https://ma.issp.u-tokyo.ac.jp/app/594
- Information by Dr. Inukai https://www5.hp-ez.com/hp/calculations/page114
- Tutorial material by Prof. Kato https://www.slideshare.net/cms_initiative/materiapps-openmx
- Benchmark by Dr. Larsson
 https://www.nsc.liu.se/ pla/blog/2014/06/11/openmx/
- Benchmark by HPC Technologies https://www.hpc-technologies.co.jp/openmx-benchmarks

77 他ツールへのリンク

他ツールへのリンクを本章にまとめます。

• トライアルユース

OpenMX をすばやく試してみたい場合には、以下のツールをお使いいただけます。

- MateriApps LIVE!:

http://ma.cms-initiative.jp/en/whats-materiapps/try_apps/about-materiapps-live?set_language=en MateriApps LIVE!は、ノートパソコンなどで計算材料科学に関するシミュレーションを無償 でお試しいただける環境です。MateriApps アプリケーション、OS(Debian GNU / Linux) エディタ、ビジュアライゼーションツールなど、チュートリアルを開始するために必要なすべ ての環境が、USB メモリスティックで提供されています。OpenMX は "MateriApps LIVE!" のシミュレーションツールの1つとして利用可能ですので、"MateriApps LIVE!"をOpenMX の試用環境として使用することができます。

• バイナリ配布

以下から、LINUX 環境向けの OpenMX バイナリを入手可能です。

- Debian: https://packages.debian.org/search?keywords=openmx
- Ubuntu: https://launchpad.net/ubuntu/+source/openmx
- グラフィカルユーザーインターフェス (GUI) とジョブ管理環境

OpenMX 計算のための複数の GUI とジョブスケジュール環境が以下から利用できます。

- ASE: https://wiki.fysik.dtu.dk/ase/ase/calculators/openmx.html
- $\ sisl: \ http://zerothi.github.io/sisl/docs/latest/api-generated/sisl.io.html$
- OMXTool: https://github.com/Ncmexp2717/OMXTool
- $Winmostar: \ https://winmostar.com/jp/manual_jp/V9/html/winmos/solid/winmos_openmx.html$
- 一般的な可視化ツール

OpenMX では cube、md、xyz、xsf、axsf、cif 形式のファイルを出力されます。これらのファイル は下記に列挙する多くのソフトウェアで可視化できます。

- OpenMX Viewer: http://www.openmx-square.org/viewer/
- XCrySDen: http://www.xcrysden.org/
- VESTA: http://jp-minerals.org/vesta/en/
- Molekel: http://www.cscs.ch/molekel/
- フェルミ面の可視化
 - フェルミ面は FermiSurfer で可視化できます。
 - FermiSurfer: http://fermisurfer.osdn.jp/

分子動力学計算結果の解析

以下のツールを用いて、OpenMXの分子動力学シミュレーションによって生成されたトラジェクトリーを解析できます。

- ASAP: http://www.mch.rwth-aachen.de/

• OpenMX の Kohn-Sham ハミルトニアンの読込演算ツール

OpenMX の Kohn-Sham ハミルトニアンを読込み、演算するためのツールが Artem Pulkin 博士 によって公開されています。以下のウェブサイトをご参照下さい。

- openmx-hks: https://github.com/pulkin/openmx-hks
- Tight Binding Studio

OpenMX コードを含む第一原理計算と連携してタイトバインディングモデルを構築するソフトウェアパッケージ。

- Tight Binding Studio: https://tight-binding.com/

• 熱電特性

OpenMX の計算結果を利用し、熱電特性が計算する外部ツールが以下で公開されています。

- BoltzTraP: https://doi.org/10.1016/j.cpc.2006.03.007
- QTWARE: http://www.rs.tus.ac.jp/takahiro/QTWare.html
- Jx: 磁気相互作用を計算するオープンソースソフトウェア。OpenMX コードとのインターフェー スを持つ。

OpenMX コード本体を用いても同様の計算が実行可能ですが、Jx コードは KAIST の M.J. Han 教授のグループによって開発されているポストプロセスコードであり、独立に開発・公開されてい ます。

- Jx: https://doi.org/10.1016/j.cpc.2019.106927
- ワニエ関数を用いた物性解析

最局在ワニエ関数を用いることで、様々な物性を効率的かつ正確に計算することができます。OpenMX は、ポストプロセスコード「Wannier90」とのインターフェースを提供しています。

– Wannier90: http://wannier.org/

Wannier90 では、第一原理 SCF 計算の結果を用いて最局在ワニエ関数を構築し、ワニエ射影 DOS 及びバンド構造、フェルミ面、ベリー位相関連特性(異常ホール伝導度、光伝導率、軌 道磁化)及び熱電特性の計算が可能です。詳細は「Wannier90 とのインターフェース」の章 をご参照下さい。

フォノン関連特性

フォノン分散や熱伝導率などのフォノン関連特性を計算するため OpenMX は以下のウェブサイト で解説される ALAMODE と連携できます。 - ALAMODE: https://alamode.readthedocs.io/en/latest/tutorial.html

- DCore: DFT コードとのインターフェースを持つ DMFT ソルバー 動的平均場理論 (DMFT) に基づく DCore と OpenMX のインターフェース。詳細は以下のウェブ サイトをご参照下さい。
 - $DCore: \ https://issp-center-dev.github.io/DCore/master/tutorial/srvo3_openmx/openmx.html \# \\$
78 その他

プログラム

本プログラムパッケージは C 言語と F90 言語で記述されたルーチン、1 つの makefile で構成されています。

makefile,

また34個のヘッダーファイルが含まれます。

BandDispersion.h Circular_Search.h EigenValue_Problem.h Eigen_HH.h GetOrbital.h Inputtools.h Tools_BandCalc.h Tools_Search.h exx.h exx_debug.h exx_def_openmx.h exx_file_eri.h exx_file_overlap.h exx_index.h exx_interface_openmx.h exx_log.h exx_rhox.h exx_step1.h exx_step2.h exx_vector.h exx_xc.h f77func.h jx.h jx_LNO.h jx_config.h jx_quicksort.h jx_tools.h jx_total_mem.h lapack_prototypes.h mimic_sse.h openmx_common.h read_scfout.h tran_prototypes.h tran_variables.h

全部で350個のプログラムルーティンから構成されており、その内訳を以下に記載します。

ADIIS_Mixing_DM.c ADenBand.c Allocate_Arrays.c AngularF.c BandDispersion.c Band_DFT_Col.c Band_DFT_Col_NEGF.c Band_DFT_Col_Optical_ScaLAPACK.c Band_DFT_Dosout.c Band_DFT_MO.c Band_DFT_NonCol.c Band_DFT_NonCol_GB.c Band_DFT_NonCol_Optical.c Band_DFT_kpath.c Band_DFT_kpath_LNO.c Band_Dispersion.c Bench_MatMul.c BentNT.c BroadCast_ComplexMatrix.c BroadCast_ReMatrix.c Calc_optical.c Circular_Search.c Cluster_DFT_Col.c Cluster_DFT_Dosout.c Cluster_DFT_LNO.c Cluster_DFT_NonCol.c Cluster_DFT_ON2.c Cluster_DFT_OptOrb.c Cluster_DFT_Optical.c Cluster_DFT_Optical_ScaLAPACK.c Cluster_DFT_ScaLAPACK.c Cont_MatrixO.c Cont_Matrix1.c Cont_Matrix2.c Cont_Matrix3.c Cont_Matrix4.c Contract_Hamiltonian.c Contract_iHNL.c Coulomb_Interaction.c Cutoff.c DFT.c DFTD3vdW_init.c DFTDvdW_init.c DIIS_Mixing_DM.c DIIS_Mixing_Rhok.c Divide_Conquer.c Divide_Conquer_Dosout.c Divide_Conquer_LNO.c DosMain.c Dr_KumoF.c Dr_RadialF.c Dr_VH_AtomF.c Dr_VNAF.c EGAC_DFT.c Eff_Hub_Pot.c EigenBand_lapack.c EigenValue_Problem.c Eigen_HH.c Eigen_PHH.c Eigen_PReHH.c Eigen_lapack.c Eigen_lapack2.c Eigen_lapack3.c Embedded_GFM.c EulerAngle_Spin.c FT_NLP.c FT_PAO.c FT_ProExpn_VNA.c FT_ProductPAO.c FT_VNA.c FermiLoop.c File_CntCoes.c Find_CGrids.c Force.c Force_test.c Free_Arrays.c Fuzzy_Weight.c GR_Pulay_DM.c Gaunt.c Gauss_Legendre.c Generate_Wannier.c Generating_MP_Special_Kpt.c GetOrbital.c Get_Cnt_Orbitals.c Get_Cnt_dOrbitals.c Get_OneD_HS_Col.c Get_Orbitals.c Get_dOrbitals.c GridCalc.c Hamiltonian_Band.c Hamiltonian_Band_NC.c Hamiltonian_Band_NC_Hs2.c Hamiltonian_Cluster.c Hamiltonian_Cluster_Hs.c Hamiltonian_Cluster_NC.c Hamiltonian_Cluster_NC_Hs2.c Hamiltonian_Cluster_S0.c Hamiltonian_NC_Hs2.c Init_List_YOUSO.c Initial_CntCoes.c Initial_CntCoes2.c Input_std.c Inputtools.c Inputtools_kSpin.c Kerker_Mixing_Rhok.c Krylov.c KumoF.c LNO.c LU_inverse.c Lapack_LU_inverse.c MD_pac.c MTRAN_EigenChannel.c Make_Comm_Worlds.c Make_FracCoord.c Make_InputFile_with_FinalCoord.c Maketest.c Matrix_Band_LNO.c Memory_Leak_test.c Merge_LogFile.c Mio_tester.c Mio_tester2.c Mixing_DM.c Mixing_H.c Mixing_V.c MulPCalc.c MulPOnly.c Mulliken_Charge.c NBO_Cluster.c NBO_Krylov.c NabraMatrixElements.c Nonlocal_Basis.c Nonlocal_RadialF.c Occupation_Number_LDA_U.c Opt_Contraction.c OpticalConductivityMain.c Orbital_Moment.c OutData.c OutData_Binary.c Output_CompTime.c Output_Energy_Decomposition.c Overlap_Band.c Overlap_Band_NC_Ss2.c Overlap_Cluster.c Overlap_Cluster_LNO.c Overlap_Cluster_NC_Ss2.c Overlap_Cluster_Ss.c PhiF.c

Poisson.c Poisson_ESM.c Population_Analysis_Wannier.c Population_Analysis_Wannier2.c Pot_NeutralAtom.c PrintMemory.c PrintMemory_Fix.c QuickSort.c RF_BesselF.c RadialF.c ReLU_inverse.c RestartFileDFT.c Runtest.c SCF2File.c SetPara_DFT.c Set_Aden_Grid.c Set_Allocate_Atom2CPU.c Set_ContMat_Cluster_LNO.c Set_CoreHoleMatrix.c Set_Density_Grid.c Set_Hamiltonian.c Set_Initial_DM.c Set_Nonlocal.c Set_OLP_Kin.c Set_OLP_p.c Set_Orbitals_Grid.c Set_ProExpn_VNA.c Set_Vpot.c Set_XC_Grid.c Set_dOrbitals_Grid.c Show_DFT_DATA.c SigmaEK.c Simple_Mixing_DM.c Smoothing_Func.c Spherical_Bessel.c Stress.c Stress_test.c TRAN_Add_ADensity_Lead.c TRAN_Add_Density_Lead.c TRAN_Allocate.c TRAN_Allocate_NC.c TRAN_Apply_Bias2e.c TRAN_Band.c TRAN_Band_Col.c TRAN_CDen_Main.c TRAN_Calc_CentGreen.c TRAN_Calc_CentGreenLesser.c TRAN_Calc_CurrentDensity.c TRAN_Calc_GridBound.c TRAN_Calc_Hopping_G.c TRAN_Calc_OneTransmission.c TRAN_Calc_SelfEnergy.c TRAN_Calc_SurfGreen.c TRAN_Calc_SurfGreen_Sanvito.c TRAN_Channel_Functions.c TRAN_Channel_Output.c TRAN_Check_Input.c TRAN_Check_Region.c TRAN_Check_Region_Lead.c TRAN_Credit.c TRAN_DFT.c TRAN_DFT_Dosout.c TRAN_DFT_NC.c TRAN_Deallocate_Electrode_Grid.c TRAN_Deallocate_RestartFile.c TRAN_Distribute_Node.c TRAN_Input_std.c TRAN_Input_std_Atoms.c TRAN_Input_std_Atoms0.c TRAN_Input_std_Atoms2.c TRAN_Main_Analysis.c TRAN_Main_Analysis_NC.c TRAN_Output_HKS.c TRAN_Output_HKS_Write_Grid.c TRAN_Output_Trans_HS.c TRAN_Poisson.c TRAN_Print.c TRAN_Print_Grid.c TRAN_Read.c TRAN_RestartFile.c TRAN_Set_CentOverlap.c TRAN_Set_CentOverlap_NC.c TRAN_Set_Electrode_Grid.c TRAN_Set_IntegPath.c TRAN_Set_MP.c TRAN_Set_SurfOverlap.c TRAN_Set_SurfOverlap_NC.c TRAN_Set_Value.c TRAN_adjust_Ngrid.c Tetrahedron_Blochl.c Timetool.c Tools_BandCalc.c Tools_Search.c Total_Energy.c Unfolding_Bands.c VH_AtomF.c VNAF.c Voronoi_Charge.c Voronoi_Orbital_Moment.c XANESO.c XC_CA_LSDA.c XC_Ceperly_Alder.c XC_EX.c XC_PBE.c XC_PW92C.c Z2FH.c add_gcube.c analysis_example.c bandgnu13.c bin2txt.c calB.c check_lead.c cube2xsf.c dampingF.c deri_dampingF.c diff_gcube.c diff_geo.c dtime.c esp.c example_mpi_spawn.c expao.c exx.c exx_debug.c exx_file_eri.c exx_file_overlap.c exx_index.c exx_interface_openmx.c exx_log.c exx_rhox.c exx_step1.c exx_step2.c exx_vector.c exx_xc.c find_Emin.c find_Emin0.c find_Emin2.c find_Emin_withS.c frac2xyz.c gcube2oned.c gen_defile.c init.c init_alloc_first.c intensity_map.c io_tester.c iterout.c iterout_md.c jx.c jx_LNO.c jx_band_indiv.c jx_band_psum.c jx_cluster.c jx_config.c jx_quicksort.c jx_tools.c kSpin.c lapack_dstedc1.c lapack_dstedc2.c lapack_dstedc3.c lapack_dstegr1.c lapack_dstegr2.c lapack_dstegr3.c lapack_dsteqr1.c lapack_dstevx1.c lapack_dstevx2.c lapack_dstevx3.c lapack_dstevx4.c lapack_dstevx5.c malloc_multidimarray.c md2axsf.c mimic_sse.c mpao.c mpi_multi_world.c mpi_multi_world2.c mpi_non_blocking.c neb.c neb_check.c neb_run.c openmx.c openmx_common.c outputfile1.c pdb2pao.c polB.c read_scfout.c readfile.c rmmpi.c rot.c test_mpi.c test_mpi2.c test_mpi3.c test_mpi4.c test_openmp.c test_openmp2.c test_openmp3.c tp.c truncation.c unit2xyz.c xyz2spherical.c zero_cfrac.c zero_fermi.c elpa1.f90 get_elpa_row_col_comms.f90 solve_evp_complex.f90 solve_evp_real.f90

さらに、次のライブラリーパッケージがリンクされています。

lapack, blas, fftw, MPICH2 or OpenMP

プログラムパッケージの版権

このプログラムパッケージの配布は、GNU General Public License version 3 (GPLv3)[102]の規約に 従っています。またオリジナルプログラムの作者である尾崎泰助がこのプログラムパッケージのオリジ ナルバージョンの版権を所有しています。我々はこのプログラムパッケージのユーザーの利用に関して、 いかなる保証もできません。しかしプログラムのバグを報告して頂ければ、問題解決に向けて可能な限 り、利用者と共に協力して作業を行う所存です。

謝辞

本プログラムの作成にあたり、有益な示唆とコメントをいただいた JRCAT、RICS-AIST、JAIST、そして ISSP の皆様に感謝いたします (T.O.)。また、次の国家プロジェクトによって支援を受けました。

- NEDO のナノ機能合成技術プロジェクト (SYNAF-NEDO) [154]
- 科学技術振興機構の計算科学技術活用型特定研究開発推進事業 (ACT-JST) [155]
- 文部科学省の最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用プロジェクト (NAREGI) [156]
- 科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業 (CREST-JST) [157]
- 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究」コンピューティクスによる物質デザイン [158]
- ・ 文部科学省「HPCI 戦略プログラム (SPIRE)」分野 2i新物質・エネルギー創成;計算物質科学イニシアティブ (CMSI) [159]
- NEDO の超先端材料超高速開発基盤技術プロジェクト [160]
- ・ 文部科学省「ポスト京重点課題 7・次世代の産業を支える新機能デバイス・高性能材料の創成」プロジェクト [161]

ご協力に深く感謝申し上げます。

References

- P. Hohenberg and W. Kohn, Phys. Rev. 136, B864 (1964); W. Kohn and L. J. Sham, Phys. Rev. 140, A1133 (1965).
- [2] D. M. Ceperley and B. J. Alder, Phys. Rev. Lett., 45, 566(1980); J. P. Perdew and A. Zunger, Phys. Rev. B 23, 5048 (1981).
- [3] J. P. Perdew and A. Zunger, Phys. Rev. B 23, 5048 (1981).
- [4] J. P. Perdew and Y. Wang, Phys.Rev.B 45, 13244 (1992).
- [5] J. P. Perdew, K. Burke, and M. Ernzerhof, Phys. Rev. Lett. 77, 3865 (1996).
- [6] A.E. Reed, L.A. Curtiss, and F. Weinhold, Chem. Rev. 88, 899 (1988); E. D. Glendening, C. R. Landis, and F. Weinhold, WIREs Comput. Mol. Sci. 2, 1 (2012).
- [7] T. Ohwaki, M. Otani, and T. Ozaki, J. Chem. Phys. 140, 244105 (2014).
- [8] U. Von. Barth and L. Hedin, J. Phys. C: Solid State Phys. 5, 1629 (1972).
- [9] J. Kübler, K-H. Höck, J. Sticht, and A. R. Williams, J. Phys. F: Met. Phys. 18, 469 (1988).

- [10] J. Sticht, K-H. Höck, and J. Kübler, J. Phys.: Condens. Matter 1, 8155 (1989).
- [11] T. Oda, A. Pasquarello, and R.Car, Phys. Rev. Lett. 80, 3622 (1998).
- [12] A. H. MacDonald and S. H. Vosko, J. Phys. C: Solid State Phys. 12, 2977 (1979).
- [13] Ph. Kurz, F. Forster, L. Nordstrom, G, Bihlmayer, and S. Blugel, Phys. Rev. B 69, 024415 (2004).
- [14] J. Harris, Phys. Rev. B **31**, 1770 (1985).
- [15] R. D. King-Smith and D. Vanderbilt, Phys. Rev. B 47, 1651 (1993).
- [16] G. Theurich and N. A. Hill, Phys. Rev. B 64, 073106 (2001).
- [17] A. I. Liechtenstein, M. I. Katsnelson, V. P. Antropov, and V. A. Gubanov, J. Mag. Mag. Mat. 67, 65 (1987).
- [18] M. J. Han, T. Ozaki, and J. Yu, Phys. Rev. B 70, 184421 (2004).
- [19] A. Terasawa, M. Matsumoto, T. Ozaki, and Y. Gohda, J. Phys. Soc. Jpn. 88, 114706 (2019).
- [20] M. J. Han, T. Ozaki, and J. Yu, Phys. Rev. B 74, 045110 (2006).
- [21] S. Ryee and M.J. Han, J. Phys:Condens. Matter **30**, 275802 (2018).
- [22] S. Ryee and M.J. Han, Scientific Reports 8, 9559 (2018).
- [23] http://www.openmx-square.org/tech_notes/tech6-1_0.pdf
- [24] http://www.openmx-square.org/tech_notes/DFTU_notes_OpenMX.pdf
- [25] S.L. Dudarev, G.A. Botton, S.Y. Savrasov, C.J. Humphreys, and A.P. Sutton, Phys. Rev. B 57, 1505 (1998).
- [26] A.I. Liechtenstein, V.I. Anisimov, and J. Zaanen, Phys. Rev. B 52, R5467 (1995).
- [27] A. N. Yaresko, V. N. Antonov, and P. Fulde, Phys. Rev. B 67, 155103 (2003).
- [28] L. Vaugier, H. Jiang, and S. Biermann, Phys. Rev. B 86, 165105 (2012).
- [29] F. Bultmark, F. Cricchio, O. Grånäs, and L. Nordström, Phys. Rev. B 80, 035121 (2009).
- [30] L. V. Woodcock, Chem. Phys. Lett. **10** ,257 (1971).
- [31] S. Nose, J. Chem. Phys. 81, 511 (1984); S. Nose, Mol. Phys. 52, 255 (1984); G. H. Hoover, Phys. Rev. A 31, 1695 (1985)).
- [32] G. B. Bachelet, D. R. Hamann, and M. Schluter, Phys. Rev. B 26, 4199 (1982).
- [33] N. Troullier and J. L. Martine, Phys. Rev. B 43, 1993 (1991).
- [34] L. Kleinman and D. M. Bylander, Phys. Rev. Lett. 48, 1425 (1982).
- [35] P. E. Blochl, Phys. Rev. B **41**, 5414 (1990).

- [36] I. Morrison, D.M. Bylander, L. Kleinman, Phys. Rev. B 47, 6728 (1993).
- [37] D. Vanderbilt, Phys. Rev. B 41, 7892 (1990).
- [38] H.J. Monkhorst and J.D. Pack, Phys. Rev. B 13, 5188 (1976).
- [39] T. Auckenthaler, V. Blum, H.-J. Bungartz, T. Huckle, R. Johanni, L. Kraemer, B. Lang, and H. Lederer, P. R. Willems, Parallel Computing 27, 783 (2011).
- [40] K. Lejaeghere, V. Van Speybroeck, G. Van Oost, and S. Cottenier, Critical Reviews in Solid State and Materials Sciences 39, 1 (2014); K. Lejaeghere et al., Science 351, aad3000 (2016).
- [41] T. Ozaki, Phys. Rev. B. 67, 155108, (2003); T. Ozaki and H. Kino, Phys. Rev. B 69, 195113 (2004).
- [42] T. Ozaki and H. Kino, Phys. Rev. B 72, 045121 (2005).
- [43] T. Ozaki, Phys. Rev. B **74**, 245101 (2006).
- [44] T.V.T. Duy and T. Ozaki, Comput. Phys. Commun. 185, 777 (2014).
- [45] T.V.T. Duy and T. Ozaki, Comput. Phys. Commun. 185, 153 (2014).
- [46] S.F. Boys and F. Bernardi, Mol. Phys. **19**, 553 (1970).
- [47] S. Simon, M. Duran, and J.J. Dannenberg, J. Chem. Phys. **105**, 11024 (1996).
- [48] M. C. Payne, M. P. Teter, D. C. Allan, T. A. Arias and J. Joannopoulos, Rev. Mod. Phys. 64, 1045 (1992) and references therein.
- [49] O. F. Sankey and D. J. Niklewski, Phys. Rev. B. 40, 3979 (1989)
- [50] W. Yang, Phys.Rev.Lett. 66, 1438 (1991)
- [51] T. Ozaki, M. Fukuda, G. Jiang, Phys. Rev. B 98, 245137 (2018).
- [52] J. Behler and M. Parrinello, Phys. Rev. Lett. **98**, 146401 (2007).
- [53] V. Recoules and J.-P. Crocombette, Phys. Rev. B 72, 104202 (2005).
- [54] J. A. Anta and P. A. Madden, J. Phys.: Condens. Matter 11, 6099 (1999).
- [55] M. Kim, K. H. Khoo, and J. R. Chelikowsky, Phys. Rev. B 86, 054104 (2012).
- [56] P. Ordejon, E. Artacho, and J. M. Soler, Phys. Rev. B. 53, 10441 (1996)
- [57] D. R. Bowler and M. J. Gillan, Chem. Phys. Lett. **325**, 475 (2000).
- [58] G. Kresse and J. Furthmeuller, Phys. Rev. B. 54, 11169 (1996)
- [59] G. P. Kerker, Phys. Rev. B 23, 3082 (1981).
- [60] T. A. Arias, M. C. Payne, and J. D. Joannopoulos, Phys. Rev. B 45, 1538 (1992).

- [61] D. Alfe, Comp. Phys. Commun. **118**, 32 (1999).
- [62] P. Csaszar and P. Pulay, J. Mol. Struct. (Theochem) 114, 31 (1984).
- [63] J. Baker, J. Comput. Chem. 7, 385 (1986)
- [64] A. Banerjee, N. Adams, J. Simons, R. Shepard, J. Phys. Chem. 89, 52 (1985)
- [65] C. G. Broyden, J. Inst. Math. Appl. 6, 76 (1970); R. Fletcher, Comput. J. 13, 317 (1970); D. Goldrarb, Math. Comp. 24, 23 (1970); D. F. Shanno, Math. Comp. 24, 647 (1970).
- [66] H.B. Schlegel, Theoret. Chim. Acta (Berl.) 66, 333 (1984); J.M. Wittbrodt and H.B. Schlegel, J. Mol. Struc. (Theochem) 398-399, 55 (1997).
- [67] P. E. Blochl, O. Jepsen and O. K. Andersen, Phys. Rev. B 49, 16223 (1994).
- [68] The details of the implementation will be published elsewhere.
- [69] A. D. Becke and R. M. Dickson, J. Chem. Phys. 89, 2993 (1988).
- [70] A. Svane and O. Gunnarsson, Phys. Rev. Lett. 65, 1148 (1990).
- [71] J. Tersoff and D. R. Hamann, Phys. Rev. B **31**, 805 (1985).
- [72] G. Henkelman and H. Jonsson, J. Chem. Phys. **113**, 9978 (2000).
- [73] T. Ozaki, K. Nishio, and H. Kino, Phys. Rev. 81, 035116 (2010).
- [74] T. Ozaki, Phys. Rev. B **75**, 035123 (2007).
- [75] M. Brandbyge, J.-L. Mozos, P. Ordejon, J. Taylor, and K. Stokbro, Phys. Rev. B 65, 165401 (2002)
- [76] G. C. Liang, A. W. Ghosh, M. Paulsson, and S. Datta, Phys. Rev. B. 69, 115302 (2004).
- [77] H. Weng, T. Ozaki, and K. Terakura, Phys. Rev. B 79, 235118 (2009).
- [78] H. Kotaka, F. Ishii, and M. Saito, Jpn. J. Appl. Phys. 52, 035204 (2013).; N. Yamaguchi and F. Ishii, Appl. Phys. Express 10 123003 (2017).
- [79] T.B. Prayitno and F. Ishii, J. Phys. Soc. Jpn. 87, 114709 (2018).
- [80] T.B. Prayitno and F. Ishii, J. Phys. Soc. Jpn. 88, 054701 (2019).
- [81] T. Fukui, Y. Hatsugai and H. Suzuki J. Phys. Soc. Jpn. J. Phys. Soc. Jpn. 74, 1674 (2005).
- [82] W. Feng, J. Wen, J. Zhou, D. Xiao, and Y. Yao, Comput. Phys. Commun. 183, 1849 (2012).
- [83] T. Kato, H. Kotaka, and F. Ishii, JPS Conf. Proc. 5, 011022 (2015).
- [84] H. Sawahata, N. Yamaguchi, H. Kotaka, and F. Ishii, Jpn. J. Appl. Phys. 57, 030309 (2018).
- [85] https://t-ozaki.issp.u-tokyo.ac.jp/meeting16/OMX-Sawahata-2016Nov.pdf

- [86] L.M. Sandratskii, Adv. Phys. <u>47</u>, 91 (1998).
- [87] V.M. García-Suárez, C.M. Newman, C.J. Lambert, J.M. Pruneda, and J. Ferrer, J. Phys.: Condens. Matter 16, 5453 (2004).
- [88] T. Ozaki and C.C. Lee, Phys. Rev. Lett. **118**, 026401 (2017).
- [89] J.F. Janak, Phys. Rev. B 18, 7165 (1978).
- [90] W.L. Jolly, K.D. Bomben, C.J. Eyermann, At. Data Nul. Data Tables **31**, 433 (1984).
- [91] M. R. Jarvis, I. D. White, R. W. Godby, and M. C. Payne, Phys. Rev. B 56, 14972 (1997).
- [92] C. D. Wagner, W. M. Riggs, L. E. Davis, J. F. Moulder, and G. E. Mullenberg, Handbook of X-Ray Photoelectron Spectroscopy (Perkin-Elmer, Minnesota, 1979).
- [93] C.-C. Lee, J. Yoshinobu, K. Mukai, S. Yoshimoto, H. Ueda, R. Friedlein, A. Fleurence, Y. Yamada-Takamura, and T. Ozaki, Phys. Rev. B 95, 115437 (2017).
- [94] C.-C Lee, B. Feng, M. D'angelo, R. Yukawa, R-Y Liu, T. Kondo, H. Kumigashira, I. Matsuda, and T. Ozaki, Phys. Rev. B 97, 075430 (2018).
- [95] K. Yamazaki, Y. Maehara, C-C Lee, J. Yoshinobu, T. Ozaki, and K. Gohara, J. Phys. Chem. C 122, 27292 (2018).
- [96] K.B.Snow and T.F. Thomas, Int. J. Mass Spectrom. Ion Processes 96, 49 (1990).
- [97] M. Ernzerhof and G.E. Scuseria, J. Chem. Phys. **110**, 5029 (1999).
- [98] http://www.openmx-square.org/tech_notes/Dielectric_Function_YTL.pdf
- [99] G.K.H. Madsen and D.J. Singh, Comput. Phys. Commun. 175, 67 (2006).
- [100] M. Miyata, T. Ozaki, T. Takeuchi, S. Nishino, M. Inukai, and M. Koyano, J. Elec. Mater.47, 3254 (2017).
- [101] https://www.imc.tuwien.ac.at//forschungsbereich_theoretische_chemie/forschungsgruppen /prof_dr_gkh_madsen_theoretical_materials_chemistry/boltztrap/
- [102] http://www.gnu.org/
- [103] http://jp-minerals.org/vesta/en/
- [104] http://www.cscs.ch/molekel/
- [105] http://www.xcrysden.org/
- [106] T. Lis, Acta Crystallogra. B **36**, 2042 (1980).
- [107] T. P. Davis T. J. Gillespie, F. Porreca, Peptides 10, 747 (1989).
- [108] A. Goldstein, S. Tachibana, L. I. Lowney, M. Hunkapiller, and L. Hood, Proc. Natl. Acad. Sci. U. S. A. 76, 6666 (1979).

- [109] U. C. Singh and P. A. Kollman, J. Comp. Chem. 5, 129(1984).
- [110] L. E. Chirlian and M. M. Francl, J. Com. Chem. 8, 894(1987).
- [111] B. H. Besler, K. M. Merz Jr. and P. A. Kollman, J. Comp. Chem. 11, 431(1990).
- [112] http://www.webelements.com/
- [113] M. Cardona, N. E. Christensen, and G. Gasol, Phys. Rev. B 38, 1806 (1988).
- [114] G. Theurich and N. A. Hill, Phys. Rev. B 64, 073106 (2001).
- [115] Physics of Group IV Elements and III-V Compounds, edited by O.Madelung, M.Schulz, and H. Weiss, Landolt-Büornstein, New Series, Group 3, Vol. 17, Pt.a (Springer, Berlin, 1982).
- [116] T. Ono and K. Hirose, Phys. Rev. B **72**, 085105 (2005).
- [117] W. N. Mei, L. L. Boyer, M. J. Mehl, M. M. Ossowski, and H. T. Stokes, Phys. Rev. B 61, 11425 (2000).
- [118] I. V. Solovyev. A. I. Liechtenstein, K. Terakura, Phys. Rev. Lett. 80, 5758.
- [119] K. Knopfle, L. M. Sandratskii, and J. Kubler, J. Phys:Condens. Matter 9, 7095 (1997).
- [120] I. S. Dhillon and B. N. Parlett, SIAM J. Matrix Anal. Appl. 25, 858 (2004).
- [121] J. J. M. Cuppen, Numer. Math. 36, 177 (1981); M. Gu and S. C. Eisenstat, SIAM J. Mat. Anal. Appl. 16, 172 (1995).
- [122] N. Mazari and D. Vanderbilt, Phys. Rev. B 56, 12 847 (1997).
- [123] I. Souza, N. Marzari and D. Vanderbilt, Phys. Rev. B 65, 035109 (2001).
- [124] T. Ozaki, Phys. Rev. B 82, 075131 (2010).
- [125] M. Otani and O. Sugino, Phys. Rev. B 73, 115407 (2006).
- [126] O. Sugino, I. Hamada, M. Otani, Y. Morikawa, T. Ikeshoji, and Y. Okamoto, Surf. Sci. 601, 5237 (2007).
- [127] M. Otani, I. Hamada, O. Sugino, Y. Morioka, Y. Okamoto, and T. Ikeshoji, J. Phys. Soc. Jpn. 77, 024802 (2008).
- [128] T. Ohwaki, M. Otani, T. Ikeshoji, and T. Ozaki, J. Chem. Phys. 136, 134101 (2012).
- [129] R.M. Eastment and C.H.B. Mee, J. Phys. F: Metal Phys. 3, 1738 (1973).
- [130] P.O. Gartland, S. Berge, and B.J. Slagsvold, Phys. Rev. Lett. 28, 738 (1972).
- [131] M. Chelvayohan and C.H.B. Mee, J. Phys. C: Solid State Phys. 15, 2305 (1982).
- [132] G.V. Hansson and S.A. Flodström, Phys. Rev. B 18, 1572 (1978).

- [133] G.D. Kubiak, J. Vac. Sci. Technol. A 5, 731 (1987).
- [134] G. Henkelman and H. Jonsson, J. Chem. Phys. 113, 9978 (2000).
- [135] S. Grimme, J. Comput. Chem. 27, 1787 (2006).
- [136] S. Grimme, J. Antony, S. Ehrlich, and H. Krieg, J. Chem. Phys. 132, 154104 (2010).
- [137] S. Grimme, S. Ehrlich and L. Goerigk, J. Comput. Chem. 32, 1456 (2011).
- [138] J.G. Hill, J.A. Platts, and H.-J. Werner, Phys. Chem. Chem. Phys. 8, 4072 (2006).
- [139] C. Li, L. Wan, Y. Wei, and J. Wang, Nanotechnology 19, 155401 (2008).
- [140] L. Zhang, B. Wang, and J. Wang, Phys. Rev. B 84, 115412 (2011).
- [141] M. Paulsson and M. Brandbyge, Phys. Rev. B 76, 115117 (2007).
- [142] C.-C. Lee, Y. Yamada-Takamura, and T. Ozaki, J. Phys.: Condens. Matter 25, 345501 (2013).
- [143] M. Kawamura, Comp. Phys. Comm. 239, 197 (2019).
- [144] http://fermisurfer.osdn.jp/
- [145] http://www.wannier.org/
- [146] https://github.com/Ncmexp2717/OMXTool
- [147] H. Makino, I. H. Inoue, M. J. Rozenberg, I. Hase, Y. Aiura, and S. Onari, Phys. Rev. B 58, 4384 (1998).
- [148] http://www.fhi-berlin.mpg.de/th/fhi98md/Murn/readme_murn.html
- [149] http://www.openmx-square.org/
- [150] http://www.netlib.org/lapack/
- [151] http://www.openmx-square.org/viewer/
- [152] Y.-T Lee and T. Ozaki, Journal of Molecular Graphics and Modelling 89, 192 (2019).
- [153] http://www.nanotec.es/
- [154] http://www.nanoworld.jp/synaf/
- [155] http://act.jst.go.jp/
- [156] http://ccinfo.ims.ac.jp/nanogrid/
- [157] http://www.jst.go.jp/
- [158] http://computics-material.jp/index-e.html
- [159] http://www.cms-initiative.jp/ja

- [160] A project commissioned by the New Energy and Industrial Technology Development Organization of Japan (NEDO) Grant (P16010).
- [161] https://cdmsi.issp.u-tokyo.ac.jp/